
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 炎殺の邪眼師

コエンマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers～炎殺の邪眼師

【Zコード】

Z0197M

【作者名】

コヒンマ

【あらすじ】

数々の名勝負、激闘を繰り広げた第一回魔界統一戦から八年が過ぎた。魔界で日々を過ごしていた邪眼師、飛影は、暇つぶしに人間界へと赴こうとするが、歪んだ次元によって別の世界へと飛ばされてしまう。そして、自分の知る人間界とは違う世界で、飛影は二人の少女と出会うのだった・・・・・・。

『魔法少女リリカルなのはStrikers～炎殺の邪眼師』はじめます。

序章（前書き）

初めまして、ハーモニマです。この作品『魔法少女リリカルなのは Strikes ~炎殺の邪眼師』は私の処女作です。ていうか、サイト投稿するのも初めてであります。

なので原作崩壊、低文章力、矛盾、原作設定改変、ご都合主義、誤字脱字、キャラ違うつていうか別人だろ、などあるとおもいますが、それらを深い心で許容できる方のみご覧下さい。

それでは馴文ではありますが、『魔法少女リリカルなのは ~炎殺邪眼師』をよろしくお願ひ致します。

「ほおー、お前が自分からここに来るのは珍しいな」

オフィス机が並んだ部屋の一角、奥まった場所に存在する執務室から子供のような高い声が響いた。その周りでは喧騒がとどまることがなく、やれ書類がないだの、やれ管理担当がどうだのという怒号に近いものが満ちている。

怒鳴り散らす上司と小さくなる部下、飛び交う書類、頭を下げ続ける担当者、髪を搔き龜る平社員、引っ越し無しになる電話。声だけ聞くならそれはありふれた日常の一端、会社や企業などの組織における忙しくも平和な一風景であらう

働いている者達が赤やら青やら常人離れした肌の色に縞々の虎模様のパンツを履き、頭から角を生やしていることを除いては。「ほぎけ。貴様らが人間界に渡る際の決まりなどと勝手に決めたことだらうが。そうでなければこんな面倒な場所に誰が好き好んで来るものか。次の戦いで俺が勝つたら、こんな規定など白紙撤回させてやる」

部屋に響く声は一人分。一つは子供のような声で、もう一つは底冷えするよつたな低い男の声だ。

男のほつはひどく不機嫌な様子でそれを隠そうともしない。それに答えるよつに、青を基調とした服に身を包んだ低い背丈の少年が

諫めるよつに溜息を吐いた。

頭に被つた大きく縦に伸びた帽子にはでかでかと「戸」という字が綴らされている。そして何の冗談か、おしゃぶりを口に咥えていた。「お前も変わらんな。ま、一応人間界における安全面に気を使つての配慮だからな。面倒でもそこは承知しといてもらわんと困る。とりあえず体裁だけでも整えんといかんから、これを持つていけ。失くすなよ」

そう言つた少年が男に投げてよこしたのは紫色のコンパクトだつた。男は心底いらないといつよつた表情をしたが、少年に睨まれて舌打ちをしながらそれをポケットに仕舞つ。

「領土争いをしていた当事者の台詞とは思えんが……まあいい。ともかくオレは行く。これ以上ここにいるのも氣分が悪いからな」

白い布を鉢巻のようい巻いた額から続く眉間に皺が寄せられた。黒尽くめの服と白い眺めのマフラーを首元に巻いた男はうんざりとしたよつよつと、少年から踵を返した。

「オ、オイ、まだ手続きが……それに今は少し間が悪「そんなもの勝手にやつておけ。貴様らの間など知つたことか」ぬ……うつうつ、ええい、勝手にしろ!」

青い少年の言葉に反応することもなく男は既に背を向けていた。そのまま未練の欠片すら感じさせずに部屋を出て行く。少年はしばらく立ちすくんでいたが、今まで一番大きく溜息を吐いて社長椅子のよつよつ豪華な背もたれに身を沈めた。

そこへ入れ替わるようにして一人の女性が入ってきた。一人は黒髪に和服を着飾った落ち着いた雰囲気の女性、もう一人は長い青髪をポニーテールでまとめた快活な雰囲気をした明るい表情の女の子だ。

執務椅子に身を沈める少年に黒髪の女性がふうと息を吐いて顔を向けた。そして彼の去つていったほうを眺めながら怪訝そうに眉を寄せる。

「大丈夫なのですか？彼を知らないわけではありませんが、これでは……」

「いや、それは心配ないだろう。あ奴もあれで昔より大分丸くなつておるしな。自分から人間に危害を加えることはまずない」

俯きつつも断言する彼の様子に女性はほうと安堵の息を吐いた。しかし、その横にいた青髪の女性が首を傾げて言つた。

「でもコエンマ様、今人間界への次元扉は確か不安定だつたはずですけど……」

「ああ、そのせいでワシらは人間界にいかずに今は様子見をしつたんだが、無視して出て行きおつた。まあ、聞いたところで自重するような性格でもなし、どちらにしても結果は同じだつただろう。一応、保険はかけておいたが」

「保険？」と不思議そうな反応をする女性を一瞥して少年は目を閉じる。そして男が去つていったほうをもう一度見やつた。

（何も起こらなければいいんだが……面倒ことはワシの心労が増

えるばっかりだからな。ホント頼むぞ、『飛影』……（

物言わぬ扉に向かって、少年はただただ平和だけを願っていた。

やー、初めての小説投稿が終わって、最初に思ったことがあります。

字数少なっ！

これに尽きます。っていうか、話わかんねえんだけどって人が出でこないか心配です。幽白ファンなら大体の予想と、出でいる人は分かつたかと思います。というか、かなりメジャーな方々なので。ジヨルジュが出てこなかつたことは謝罪です。自分でも好きなキャラなんですが、如何せん扱いが難しくて・・・面白い文章が思いつかない自分の不甲斐なさに心がキリキリ痛みます。

一作品とも自分が好きな作品なので上手く書ければなーと思つてますが果たしてどうなることやら。

さて、次回はついに魔法少女との邂逅。話に出てきた青年は一体どんな形の出会いをするのでしょうか。といつも、前半は名前伏せてるのにモロバレですね・・・。

かなり心配ですが、なんとか書き上げます。頑張れ自分！

リアルでは現在やることが多すぎて（免許とか学校とか家業とかいろいろ）更新は遅いかもしれません、頑張っていきたいのでもろしくお願い致します！

第一話　出会い（前書き）

さて、ストックとして一つだけ残っていた第一話の掲載です。

鬼のようなリアルの都會上、自分のペースは崩せないので遅れ気味になるのは否めませんが、本編の一話も投稿せずに数日放置というのは流石にどうかと思い投稿します。

相も変わらずの駄文ですが、張り切っていきましょう！

それでは念願の第一話、テイクオフあります。

第一話 出会い

- Side two girls -

青い空が雲を引きつれて飛んでいく。太陽がだんだんと山の峰に近づいていき、大地をオレンジ色に照らす準備を始めていた。風は冬がまだ厳しいせいか、肌寒い。だが嫌いではなかつた。こうして日課のように外に出ると、少ない期間でも日々の経過を感じる。

当初は毎日のように降っていた雪も、一週間たつた今ではほとんど降らない。そういうえば、ニュースで今年の寒さは峠を越えたと言つていたような気がする。

「なのは、大丈夫？ まだリハビリ始めてあんまり経つてないんだから無理しないほうがいいよ？」

とある病院の屋上。

風に煽られる髪を押さえながら、金髪の少女が隣に座る少女に向けて声をかけた。傾きかけ始めた太陽に照らされたその髪は、まるで金で縫つた糸のようだった。

「大丈夫だよフェイトちゃん。それよりごめんね？ 今日だつて仕事が忙しいはずなのに私に会いに来てくれて・・・」

なのはと呼ばれた少女は軽くはにかみながら笑いかける。もう一人の少女、フェイトはそれに対してもう少しだけ頬を赤らめながら「ううん」と首を振つて自らも笑顔を見せた。

だが、その表情に影が差しているように見えるのは光の加減のせいなのだろうか？

「当たり前だよ。私たち、友達なんだから」

彼女の目を見つめながら、フェイトは彼女の手を握る。影の気配は一瞬にして霧散し、あつたかどうかさえ分からぬように笑顔の中へと消えた。

「えっと…リハビリはどう？ 少しは進んだ？」

「…」「うん、全然」

フェイトの質問に答えるのが顔を俯かせながら乾いた声で答えた。視線は下られ、長い前髪で隠れた顔からは何もうかがい知ることはできない。ただ、健全とは程遠い表情をしているだけのこととは誰が見ても伺い知れただろう。

「なんかね、手すりを掴んでもちつとも足が動かないの。どんなに力を込めても、ふにやつてなつちやつて前に進んでくれないんだ。アシスト使つてるのにダメダメだね、私。今日なんか、手まで痺れときちやつて床に倒れちゃつた。看護婦さんが来るまでそのままで、痛くて助けを呼ぶことも出来なかつたよ。一步先つてすぐ遠いんだね」

「なのは・・・」

空ひな田をしてただ零されていく彼女の言葉にフェイトは眉間に力を入れてぐつと息を飲み込む。歯を食いしばり、拳は強く膝の上で渦を巻いていた。そつしないところへいるものが溢れてしまいそうだったから。

「先生も看護婦さん達もね、みんなみんな良い人なんだ。だから、だから辛いの。とっても優しい人ばかりだから、もし私がもう一度と・・・」

「なのはっ！」

フェイトが叫ぶようにしてなのはの言葉を遮る。そして顔を上げた彼女の田を見て首を振った。

『その先は言わないで。言っちゃダメ』

涙が滲むのを堪え、悲しみが噴き出そうとするのを必死で抑えながら、フェイトは親友の中に映った自分から田を逸らさなかつた。なのははそんな親友の心に感謝する。

だがそれを見通してなお、空虚な笑みが消えることはなかつた。

「ありがとうフェイトちゃん。でもごめんね。私、自分でも嫌になるけど、この間からそんなことばかり考えているんだ。はやてちゅ

んがどんなに辛い思いをしてたか・・・シグナムさん達がどんな思いで助けようとしてたのか。いろんなことが今になつてわからちやつたから。だから自分がどれだけ身勝手だったのかつて、自分がこんなに弱かつたんだつて、次から次に浮かんできてどうしようもなくなるんだよ」

その瞳に涙はないが、それは涙として流せる感情がなくなつたわけではなく、その感情にすら反応しなくなるほどの絶望を受け続け、心が麻痺するまで陥つて『いる』といつ、ある種の到達点だ。

その先に待つものは想像するに難くない。フェイトには、数年前までの自分の姿と今の彼女が酷く似ていることを嫌でも認識せらる。

だが今のフェイトには、暗黒に沈んでいく親友に掛けるべき言葉を見つけることはできなかつた。

かつて自分が悲しみの淵にいたときも迷つていたときも、彼女はあきらめずに懸命に言葉をかけ、そして救い出してくれたというのに。あんなに一生懸命に、頑なだつた自分の心を開こうとしてくれたというのに。

だから彼女はとにかくそれは違うと言つたかった。大丈夫だと言つてあげたかった。

でもその後は？

今の自分は何を言えばいい？ 同情など誰も望みはしないし、どんな励ましの言葉も今のなのはには届かないだろう。一番の友達であるというのに何も出来ない自分が悔しくて、情けなかつた。

「・・・っ、なの・・・」

だが、それでもそんな彼女を見ていられず、フェイトが声を掛けようとした。その時だつた。

フェイトの背筋が薄ら寒いなにかの感覚を覚える。同時に全身に鳥肌が立ち、嫌な汗がつうつと頬を伝つた。出かけていた言葉を中断し、フェイトは瞬時に辺りを見渡して、

「キカカカカカッ！これはこれは、なんとも皿そつな娘があるではないか・・・」

コンクリートを力任せに打ちつけた音を引き連れた『そいつ』が屋上に姿を現していた。のつそりと起き上がりながら、その目はしつかりとフェイト、そしてなのはを捉えている。

「な・・・・！？」

それはこの世界ではありえない光景であつた。黄昏時を背にして立つそいは人では、ない。

ずんぐりとした毛玉のような体には黄色と黒の斑が走つていて、前面には十字のような大きな割れ目。体からは同じ模様をした足が左右に等間隔で四本ずつ伸びており、体上部の中心には真っ白な肌に複雑怪奇な文様が紫色で散りばめられた人間の上半身があつた。だが、その目は血のように赤い。

「キカカ・・・こいつは幸運じやのう。やられたときはどうしようかと思ったが、逃げ込んだホールの先で上質な上に食べじろのHサ

が一いつも転がつておるとは・・・

「つーーあなた何者！？どーから出て来た！？」

「フニ、フニイトちゃん・・・」

なのはを庇うように前に出たフニイトは未だ見ぬ相手を睨みつけながら叫ぶ。なのはは車椅子から手を伸ばし、親友の背中を掴んでいた。化け物はその反応に気を良くしたのか、嫌らしい笑みを浮かべながら言った。

「我は土蜘蛛。古来より生き続ける大妖怪にして人間の支配者たる存在じや・・・娘らよ、我に食されることを光栄に思うがいい」

氣味悪く笑う土蜘蛛に二人の全身が総毛立つ。二人は目の前にいる存在が危険だという認識すら甘いものであることを体全体で感じた。そのあからさまな敵意を受けて、フニイトは右手の甲、金色に輝く三角形に瞬時に手を伸ばした。

「バルデッシュ、セットアッ・・あつーー？」

「させると思つたかー！」

フニイトの展開より早く、土蜘蛛の背中から現れた一本の鞭がフニイトの手の甲からバルデッシュのエンブレムを弾き飛ばした。バルデッシュは音を立てて金網にぶつかり、階下へと消える。そして同時に弾き飛ばした鞭は返す刀でフニイトの肢体に巻きついた。そのまま唸りを上げて、体を締め上げる。

「ぐ、ううああつーー？」

「フヨ、フヨイトちや・・・あつつー・?」

親友の身を案じる間もなく、なのはもまた伸びてきたもう一本に触手に全身を絡め取られる。衝撃で車椅子が倒された音を下に聞きながら、なのはの体は親友が捕らえられている高さまで持ち上げられた。体を蹂躪する触手に一人はゾッとして言葉を失つ。

「アレが不思議な力を放つてていることは気づいていたから、警戒しておいて正解じゃつた。それにしても・・・・」

「は、離してー。」

「ぐ・・・腕が・・・・。」

数メートルの高さで一人を拘束しながら、土蜘蛛は捕らえられた獲物をしばらく興味深そうな仕草で観察する。しばらく一人を見ていた奴は、その口をニタアと半月状に曲げた。

「ふうむ。靈氣とも妖氣とも違つ感じたことがない波長、じやが、凄まじい力を宿しておるの。なんとも僥倖。この力を取り込んで子らに食わせれば、我はさらなる高みへとのじ上がる。どおれ・・・・」

「

土蜘蛛が無造作に鞭を振るつと、なのはとフヨイトの服が切り裂かれた。健康的な乙女の柔肌や、最近成長を始めた部位が外気に晒され、一人は顔を赤らめる。その反応に土蜘蛛はさらりと笑みを濃くしてニタリと笑う。

「うぐつ・・・」、なんもの・・・・サンド・・あぐうつーうああ

つ！」

フェイトは魔法を使おうとするが、そのたびに体を強く締め上げられ精神集中が満足にできない。それもデバイスがあれば可能だつただろうが、今は手元を離れ遙か下である。

「フェイトちゃん！ つ……魔法が、デバイスが使えれば……」

「無駄じや無駄じや、我の糸はそんなか細い腕ではビクともせんわ。分かつたなら抵抗するでない。そうじやな、一人は我自らが喰らうてやろう。もう一人は我が子らを膣に産みつける母体としてエサにしてやる。仲良くあの世へ逝けることに感謝せい、キカカカツ！」

その言葉と同時に土蜘蛛の前面がぐぱあつと割り開かれた。そこには鋭い歯が無数に並び、一際大きな四本の歯が獲物を歓待するように戸惑いを繰り返している。中心には真っ赤な内側にぽっかり開いた黒い穴が覗いていた。狭くなつたり広がつたりしているそれは、二人が生理的な嫌悪感を催すには十分すぎるほどの光景だった。

「貴様はどうやら身が不自由のようじやな。どうせなら生きのいいほつを頂くとするか」

視線がなのはからフェイトに向ぐのと同時、前面の口から緑の液体が滴り屋上のコンクリートに落ちていく。落ちるたびに響くジユウという音と、吐き気のするような臭いに一人は震え上がつた。そしてフェイトの体が引き寄せられ、その上へと持つてこられる。

「ひ……つ……！」

「フェイトちゃんつーダメ……お願い、やめて！」

「キカカカ・・・そうじや、その表情じやよ。恐怖と絶望で染まつた女子の顔が我は何より好みでな。ああ、たまらんのお・・・」

恍惚とした表情で体を振るわせる土蜘蛛に一人の顔から血の気が引いた。そしてほどなく、真っ青になつたフェイトがついに口の前にまで引き寄せられてしまう。ガアツと人間の体より遙かに大きな口と不気味に並んだ歯がキチキチと音を鳴らした。

「さりばじや。精々いい声で啼ぐがよいー。」

「い、いやあああああー！」

「やめてよ・・・やめてえええつーーー！」

フェイトの悲鳴となのはの絶叫が屋上に木靈する。そして、その口がフェイトの身体を無残に食いちぎる。まさにその瞬間、

「ギツー!? ガアアアアアアツー! ?」

不意に響いた風を切る音が、一人を捕らえていた触手をバラバラに切り裂いていた。ワイヤーを束ねたような強靱な触手が、さながら麵きり包丁を振るわれた蕎麦の「とく千切れ飛んで宙を舞う。突然縛りを解かれた彼女達に為す術などあろうはずもなく、重力の法則に従つて地面に落下した。

「痛つー!? あ、てててーーー！」

「・・・つ、一体何が・・・・」

痛みに顔を顰めながら体を起こす。不用意な体勢から受身もとれなまま落したため背中を強く打ち付けてしまったが、とりあえず死んではないらしい。そして一人が落ちた衝撃に呟きを零すのと同時に、彼らの前で何かが床に降り立つ音が響いた。

「フン、何かと思えば土蜘蛛か。いつ見てもその醜態には吐き気がするぜ」

同時に響く低い声にフェイトとなのはは視線を上げる。そして、夕暮れの光を浴びながら佇むその後姿に一人は目を奪われた。

冷たくなってきた風を受け、はためいているコートは黒一色。マントを着込んだようなその風体の上部、その首元には白いシルクのスカーフのようなものが巻かれている。そして二人が視線を上げたのと、『彼』が此方に振り向いたのは同時だった。

その瞬間を、なのはとフェイトは決して忘れないだろう。

厳しさを感じさせる端正な顔立ちをした彼の額はマフラーと同じ色の巻布で覆われ、炎のように尖った黒髪は天を突くように逆立っている。そしてなにより鋭さの中に不思議な何かを感じさせるような、フェイトと同じ澄んだ深紅の光を称える目に一人は吸い込まれそうな感覚を覚えていた。

それは一瞬、だが彼女らには無限とも呼べる感覚が終わりを告げ、時間が戻っていく。彼はポケットに手を突っ込んだまま此方を見据えたかと思うと、視線を土蜘蛛に戻して言った。

「下がっている。邪魔だ」

静かに、しかし強い自信に裏づけされた声色で彼は告げる。その言葉と助かつたという事実に泣きそうになるのを必死で堪えつつ、頷いた二人は離れるために互いに手を取る。

これが後に伝説として語られる最強の邪眼師と一人の魔法少女との出会いであった。

第一話　出会い（後書き）

二次創作とはいえ自分の作品を完成させることがこれほど難解だつたことに改めて思い知らされています。そして存外に時間が削られていく・・・嗚呼、明日の忙しさと数日後に控えた仮免許試験、卒論課題に加え果ては休日返上の労働を目の前にして、何故今年はこんなに忙しいんだ、去年は暇すぎて死にそうだったじゃないか！と世の不条理さに嘆く作者です。

・・・最近は〇〇ことでも表すんでしょうかね？

ともあれ、記念すべき第一話。上手くまとめられたか心配です。つていうかこれ出会つた内に入らへんやろという方にはとりあえず謝罪、嘆いてもこれが精一杯でした・・・。

さて次回は少し話が進んで、*Strikers*にいる為の下地としての回になります。まだ何も書いていないので遅れるかもしれません、一週間のうちに更新できると・・・思います、たぶん。

それでは次回、魔法少女リリカルなのは → 炎殺の邪眼師第二話、『差異と別れ』をよろしくお願ひ致します。

第一話 差異と別れ ～魔法少女（前書き）

四日ぶりの更新であります、コノンマです。

初見の方は初めてまして。待たせてしまった方はどうもすみません。

本当は昨日更新できるはずだったのですが、最近切り替えたルータと電話線との折り合いが最悪で、昨日は全くインターネットが使えませんでした。

言い訳ではありますんが、どうしてこんなに間が悪いのか。普段から功德を積むように心がける所存です。

それでは第一話、いつてみましょ。

ゲートを抜けた先で飛影はやれやれと肩を落としていた。いつもなら皿屋敷中学の近くにある幽助の家の前に開くゲートが何故か上空で開いてしまったのである。

それ故、重力に向けて落下していると馴染み深い気配と、未知の力を建物の屋上らしき場所から感じた。下方に至るその場所へと目を向ける。そして妖氣で力と速度を調整しつつ見ると、そこには雑魚妖怪である土蜘蛛とそれに捕らえられた二人の少女がいた。

そこで落下の勢いを殺しながら剣を振るつて、あわや食われそうになっていた二人を助け出して今に至っている。偶然とはいえ、人間界で妖怪が暴力をふるうのは珍しかった。靈界と締結した紳士協定により、悪事が発覚すれば間違いなくただでは済まないからである。

「お、お主、な、何奴じや！？ 一体どこから現れた！？」

「フン。雑魚に答える義理などないが、聞きたいなら特別に教えてやる。拝聴料は貴様の命だがな」

飛影は口の端を吊り上げながら告げる。当初は土蜘蛛のほうも突然の事態に動搖を隠せないようだったが、徐々に落ち着きを取り戻し、飛影から溢れる気配を感じ取つてその顔を愉悦に歪めた。

「せひ、これは奇遇じゃーまさかこんなとこりで餌と同時に仲間に
出くわすとは思わなんだわ」

心底愉快そうに土蜘蛛は声高らかにキカカカカ力と笑い声を上げていた。それとは逆に飛影に募つていて威圧感に土蜘蛛は気づいていないようで、触手で威嚇するようにしながら飛影を見やる。

「じゃが、せつかく手に入れた食事を横取りせんぐれんかのう？
こいづらは我の獲物じゃ。我は寛大であるからな、お主にはこの建
物内にいる人間をくれてやる。疾く失せよ」

「 そうだな。オレもこんな場所に貴様といるのは御免だ。さ
つと済ませてしまつとしよう」

仲間という言葉でなのは達に戦慄が走るなか、飛影は腰元に手を
差し入れる。対する土蜘蛛は笑みを濃くして、

「・・・ギツー？」

自分の腕が半ばから飛んでいることに遅すぎた悲鳴を上げた。ド
サツといつ音と共に、無残に切断された左腕がコンクリートの上に
落ちピクピクと痙攣を繰り返して、やがて止まる。いつの間にか、
その手に凄惨な光を覗かせる刃を携えた飛影がニヤリと笑つた。

「わ、我の腕が、ああツーさ、貴様何をするツーこのチビ猿があ
！」

激昂した土蜘蛛の背中から幾つもの触手が飛び出して、飛影に襲
い掛かった。叩きつけられた触手はコンクリートを粉碎し、手すり
を鉛細工のようにひん曲げる。だが、十数本に渡るその鞭の雨も飛

影には掠りもしなかつた。

それどころか、逆にその触手を左手で掴み取つたのだ。そしてサディスティックな笑みを浮かべた次の瞬間、触手は一瞬にして炎に包まれ、灰塵になつた。

それは抵抗すらも感じさせない一方的な消却。土蜘蛛が振るうのは桁違いの暴力であつた。

その圧倒的な力に後ろで見ていた二人は声も出なかつた。一瞬しか見えなかつたが、あの炎はシグナムの全力と同等、いやあるいは上回つているかもしだれない。そして悲鳴を上げる土蜘蛛を見やると、飛影は地を蹴つてその上部に向かつて跳んだ。

「こ、この炎……それに、隠した額に右手の呪帯……お、お主はまさか……『炎殺の邪眼師』かつ……？」

土蜘蛛の顔が驚愕と絶望の色に染まる。なのはやフェイトにはその意味が分からなかつたが、目の前の化け物の怯えようを見れば彼に逆らうことがどれだけ危ういことであるのかは分かつた。デバイスなしあは、自分たちを苦しめた敵がこれほどまでに恐れる相手。それがどれほどのものなのか、二人には皆目見当もつきはしない。

彼女たちを置き去りにして状況は変わつていく。もはやそれは戦いではない。背中をフェンスにぶつけた土蜘蛛は全身を震わせて必死に言い募つていた。

「ま、待つておくれ！」この一人はお主に渡す！ 我は他の場所で狩りをするから、だから命だけは助けておくれ……我らは、同族

じゅるりへ。

「うー。」

土蜘蛛の命乞いを聞こうとも苛立ちを隠さずともせず、飛影は空中で腰溜めに構えた刀を抜き放ち、頭から垂直に振り抜く。それは何の障害もなく土蜘蛛を左右に分断し、絶命させた。

「ふざけるな。貴様らなどと一括りになつた覚えはない」

おぞましい断末魔を上げながら、怪物がどうと倒れた。飛影はその光景に眉を寄せ、左手から炎を飛ばし跡形もなく焼き尽くす。それは一瞬で粉のようになり、風に紛れて飛んでいった。

それを見届けた飛影は剣を鞘に収める。そして呆然とする一人に一瞥して何事もなかつたかのようになに歩き出

「ま、待つてー。」

そうとした時、後ろから声がかかった。振り向くと、ボロボロの姿のフエイトとなのはが飛影を見つめていた。

「何だ」

「え、えと、あ、その・・・た、助けてくれてありがとう・・・

そう言って頭を下げる。フエイトに掴まつたままなのはも慌てて頭を下げているのを見て、飛影は視線を向けずに鼻を鳴らした。

「勘違いするんじゃない。オレが剣を振るつたのは、単に奴の言い

草が気に喰わなかつただけだ。貴様らが生きているのはただのオマケにすぎん」

「それでも、私達が助けられたことに変わりはないから……」

「ありがとう、ともう一度感謝を述べてきた。この反応は彼にしてみればどうにもやりにくい。助けたつもりもないし、もとより素直な相手は苦手なのだ。

だが何気なく視線を向けて、あることに今更の「」とく気づいた飛影は慌てて目を逸らした。自分を怖がっていることは分かっているから、様子見のつもりだったのだが如何せん間が悪い。その反応にフェイドとなのはは首をかしげた。

「どうしたの？」

「いや、その……ええい、くそつ！」

飛影は不機嫌そうに声を出し、来ていたコートとスカーフを半ばやけくそ気味に脱ぎ捨てて一人へと放り投げた。ノースリーブの黒服とズボンに腰から下げられた刀、それに身長とは対照的に鍛え抜かれた飛影の肉体を垣間見た二人は顔を赤らめる。

投げられて飛んできた服をフェイドが受け取り、服と飛影を不思議そうな顔で交互に見やつた。その表情はきょとんとしていて、手に持つた服にも意図が読み取れないのか「これは?」とでも言いたげだ。飛影はその反応にさらに苛立ちを募らせて声を荒げた。

「いいからさっさとそれを纏え! そんな格好でいつまでうろついている気だ! 貴様らはモラルという言葉を知らんのか!」

「？ そんな格好・・・はうつ！？」

「ああ！？」

若干赤くなつた顔を背けた飛影の言葉に視線をおろしたフェイト
となのはは自分達の姿を見て、体を丸めてしゃがみ込んだ。土蜘蛛
の恐怖と助けられた安堵、そして飛影の戦いに見入つていた二人は
自分達が半裸、いやほどんど全裸だということをすっかり忘れてい
たのである。

一人は飛影のコートを光速で掴み取ると、一人で包まって赤くなつた顔をその縁から出していた。だが、いくら隠しても彼には見えてしまつたのだろう。激変した反応がいい証拠である。

顔中を赤くしながら念話で会話する一人。唐突にいたたまれなさが襲来してきた。これ以上痴態をさらすのは流石に恥ずかしすぎる。そう思つてとにかく病室に戻ろうとしたとき、一人は重大なことに気づいてしまつた。

「あ、あのお願ひがあるんだけど・・・」

「何だ！？」

不機嫌オーラをガンガン出しながら飛影は睨むように答える。その気迫に少々気圧されつつも、顔を見合させて力なく笑つた。

「あ、あのね？安心したせいで、腰が抜けちゃったみたい・・・」

「わ、私も・・・／＼／＼／＼」

「・・・」

「いやはははと笑うのはと真つ赤な顔でモジモジしているフエイトを見て、飛影はこのところで一番の頭痛を感じたのだった。」

- change side in the medical room -

「「」、「めぐね。なにからなにまで・・・私達の仕事なのにみんな手伝わせちゃって・・・」

「全くだ。貴様らの不甲斐なさもさうだが、こんなことをしている自分自身に腹が立つ」

「あ、あははは・・・」

あの後他の人たちに見つからないように一人を病室にまで運んだ飛影は、全く足腰がたたない一人の代わりに着替えを取り出したり、屋上の後始末をしたりと動きっぱなしだったのである。

着替える時も全身黒死くめ（しかも帯刀のおまけつき）という胡

散臭を爆発の彼を廊下で待たせるわけにもいかず、部屋の中で背中合わせになっていたときなんかは気まずいなんてものではなかつた。

なのはが落としてしまつた下着を取つてくれと言つたときには流石に我慢できず、自分でやれと一喝したが。

ともあれ、紆余曲折はあつたものの作業は無事終了し、今は個室の中で三人でいる。とりあえずの自己紹介と、なのは達は魔法についての説明を終わらせていい。夕焼けも中盤から終盤にさしかかり、その色を強く主張していた。ちなみにレイジングハートは管理局のメンテナンスルームであり、バルディッシュは一応破損がないかどうか調べてもらつているため手元はない。

「まったく、貴様らがあの程度の妖怪に手こすりさえしなければこんなことをする必要などなかつたんだ。とんだ田に遭つたぜ」

「妖怪・・・やつきの大きい蜘蛛のおばけのことだよね・・・確かに蜘蛛とか言つてたけど」

「飛影は知つてゐみたいだけど、その・・・妖怪に詳しいの？」

フヨイトが飛影に水を向ける。窓枠の上に横向きで腰掛けっていた飛影は自嘲氣味に口の端を吊り上げた。

「詳しい、か・・・それはそうだらう、何せオレもそう呼ばれる者だからな。あんな雑魚と一緒にたにされるのは甚だ心外だが」

飛影の言葉に一人は田を見開いて硬直した。だがそれも詮無いことだらう。あれだけの恐怖を与えられた後で、それと同じだと言われば誰でも身がすくんでしまう。

「安心しな、オレにはヤツのよう人に人を喰らう趣味はない。もつともつい先刻のことだ、そう言つたところで大して変わらんだろうがな」

「そ、そんなことない！ 飛影くんは私達を助けてくれたもん！」

「そうだよ！ そんな悲しいこと・・・」

飛影はそれ対して薄く笑うのみ。一人にはそれが自嘲のよう見えて思わず声を上げたが、飛影は額こうとはしなかった。

「強がりはよせ。オレは貴様らよりも多くの時を生きている。普通の人間が俺達をどんな目で見ているかなど、それこそ腐るほど経験してきた。安っぽい同情は端から不要だ。それに、これを見てもまだそんなことが言えるか？」

そう言いながら飛影は頭へと手を伸ばし、その額を覆つている布を取り去った。しゅるりという音と共に彼の額が露になる。

「――？」

現れた彼の額を見た二人は息を飲んだ。その場所には一文字状に切れ込みがあり、それがゆつくりと開いていくではないか。そしてそこに見えたものは人間にも存在し、しかし額には決してないものだった。

「田・・・一？」

なのはの怯えた声に飛影は一ヤリと笑った。予想通りだと言わん

ばかりのその目に何かを感じ取つた一人ははつとする。だが、飛影は視線が固定されて動かせない彼女らを見据えたまま言つた。

「邪眼といつてな、普通の目よりもはるかに良く見える『眼』だ。オレのは後天的な手術によつて作られたものだが、機能としての差異はまったくない。オレが邪眼師と呼ばれる所以だ」

邪眼を求めたのは自分だ。その理由がどうであれ、そして生まれつきのものではないとはいえ、ただの人間が見るにはショックであろう。生気がなく、加えて無機質な瞳からは妖氣も溢れているから、力の波動は違うとはいえそれを感じ取れないほど無能ではあるまい。

飛影は再び額を布で覆い隠した。だが、二人はあまりのことに言葉も発せず固まっている。飛影はそれに一警すると窓から飛び降り、ベランダへと続く大きな掃きだし窓の前へと歩いていった。

「高町、それにテスター口ッサといったか。貴様らのいう魔法は、どうやらオレと似たような常識はずれの力のようだな。そしてかなりの器を有してもららしい。・・・まあ、高町のほうはそれどころではないようだが」

その言葉になのはがびくつと肩を震わせる。その反応とフェイドの表情を見る限り、飛影の言葉が肯定されていくことを示していた。

（おそらくあの時のオレと同じように、なんらかの事故で体の自由が利かなくなつてしまつたんだろう。体に流れる力が不安定な上に、体組織の修復で精一杯な肉体にも力を感じないからな。だが）

そこで飛影は再び忍び笑いを零した。

「うしくないとは思つ。自分としても自分の立場としても。

だが心のどこからか、自分をそうさせようとする何かがあることを感じていた。これもあるのバカどもと釣るんでいた影響なのだろうか。いやきっとやうなのだな。

「相当な苦痛を乗り越えねばならんが、治らないわけではなによつだな。フツ、運がいいのか悪いのか・・・」

「えつ・・・・?」

飛影の言葉にはとフュイトが同じタイミングで呆けたような声を出した。だが、目は先ほどまでのなかで一番大きく見開いたまま硬直している。そして、はつと気を取り戻すと大きく声を上げた。

「治る・・・? 私、また歩けるの・・・? また・・・また飛ぶことが出来るの・・・! ?」

ベッドの上で身を起こしたのは、信じられないと言わんばかりの表情をしていた。驚きと困惑が入り混じった表情で飛影に詰め寄るうとして、ベッドの上で転がつた彼女をフュイトが慌てて抱きとめている。うまく動くことができないもどかしさを表しながら見つめてくるなのは、飛影はクツと短く息を噛み殺した。

「確かに肉体は大きく損傷している。その体を巡る力の流れも不安定、今はまともに動くこともできんだろう。だがそれだけだな。そのどこにも致命的な断絶は見られんし、弱々しいとはいえその流れはいたつて正常だ。貴様が腐らん限りはいずれ元に戻る。もつとも、そのために耐えなければならんものは並み大抵ではないだろうがな」

「戻れる・・・やつぱり治るんだよなのは！ また一緒に飛べるんだ、また一緒にいられるんだよ！ よかつた・・・本当によかつた・・・！」

フュイトは呆然としているなのは抱きついて笑いながら涙を零した。なのはは自分の両手をまじまじと眺めて、そして飛影に視線を向ける。

「で、でも、リハビリとかぜんぜん進まなかつたのに・・・」

「たわけ、その程度で音を上げているなら問題外だ。確かに際立つた後遺症はないが、その体に刻まれた痕も決して浅くはない。貴様次第だと言つただろう。貴様の体の行く先も、出会つたばかりのオレの言葉を信じるかどうかもな」

彼女の弱音を一蹴し、飛影はベランダに出た。フュイトがなのはに車椅子へ移るよつに言つてそれを押しながら慌てて追いかけようとする。夕日はもうあとわずかだ。東の空には漆黒がその版図を大きく広げてきている。飛影はそのまま縁へと飛び乗り、コートを揺らす風をその身で受けながら佇んでいた。

「「飛影（くん）っ！」」

そこによつやく一人が追いついてきた。フュイトがなのはの乗つた車椅子を後ろから押している。なのはは痛みに顔を顰めながらも近づくことをやめず歯を食いしばつている。

二人は大きな寂寥感を感じながら飛影を見つめた。

「・・・行つちやうの？ 飛影・・・」

「当たり前なことを何を今更のように聞いている。それと分かっているのか？貴様らが引き止めているのは、ついたさつき殺されそうになつた妖怪なんだぜ？」

「うん・・・。そうだね。でも、飛影くんは飛影くんだよ。闘つてた時はちょっと怖かつたけど、私とフェイトちゃんを助けてくれた。挫けそうになつたところを元気づけてくれた。こんな私に生きる希望を与えてくれた。人じやないなんて関係ないよ。私からすればちよつと変わつた目を持つてるつてだけだし、ちゃんと言葉も通じるし。だけど言葉じやなきや分からぬこともあるから、私の正直な気持ちを言つね。飛影くんは、私の大事な・・・友達だよ」

「例え妖怪でも、飛影は優しかつたよ。だつて、そうじやなきやわざわざ私たちを助けたりしないもの。それに私ではできなかつたこと・・・なのはを救つてくれたから。だから、私は信じる。飛影がいぐら突き放したつて、誰がなんて言つたつて、胸を張つて言える。私は、うつん、私達はずつと飛影の味方だから」

満面の笑みを見せてなのはとフェイトが言つた。影もなにもない、久しく出来なかつた彼女たち本来の輝き。誰もがもう取り戻せないかもしれないと思つていていたその表情。その笑顔が妹と重なり、そして真つ直ぐに伝えられた感謝の気持ちに胸が疼いた。

（味方・・・仲間か・・・）

飛影は少し視線を落として目を閉じた。

思うのは今自分の胸に輝く一組の輝き。かつて失い、そして自分の人生一部と力を売り渡してもなお取り戻せず、そしてある時ひよ

つこりと自分の元へ戻ってきた一つ。そして、血を分けた最愛の存在から受け渡され、そのまま持つていてと言わされて結局返すことができなかつた一つ。

どちらも彼にとつて人生の半分、いや全てとも呼べるものだ。いや、呼べるものだつた。大切であることには変わらない。それだけの思いがこれらに込められている。

だが、だからこそ賭けてみてもいいのかもしれない。あいつ等や同じ妖怪以外でこんなオレを友だと、味方だと言ってくれた奴らに。

「また・・・会えるかな・・・？」

「さあな。貴様らがどうなるかな？オレの知つたことじやないが、ついさつき会つたばかりの、それも人間でない相手すら信じるほどお人好しな奴らだ。あつさりくたばつてしまつては流石にオレも寝覚めが悪い」 そらー。

飛影が振り向きざまに一人に何かを放つた。一人は慌てたが、それは見事なコントロールで各自の手のひらへと收まる。おそるおそる開いてみると手の中には紐で繋げられ、不思議な光を放つ丸い珠が淡く輝いていた。

「飛影くん、これ・・・」

「そいつは氷泪石と呼ばれる宝玉だ。雪女の涙から生まれる宝石で、強い浄化作用がある」

「これを私達に・・・？」

フロイトが手のひらに乗つた輝きを見つめた。

ビー玉より一回り小さく、一点の曇りも傷もない宝石。青色に光り輝き、幻想的な雰囲気を醸し出す氷泪石から二人は目が離せなかつた。

どうしてこれを、といつ疑問もある。それこそ彼が言つた通り、自分たちは会つたばかりなのだ、わざわざこんなものを渡す理由など彼にはないはず。

だが、彼の纏う雰囲気に一人はその疑問を押し留めた。

何も寄せ付けないような厳しさではなくどこか迷うような、それでいて強い思い。こんな気性の彼が理由もなくこんなものを渡すことはない、それだけは二人の中で既に確信となつていて。そして何より彼が言った以上のものがそれに込められていることを二人は感じた。

それが何なのかは分からぬ。けれど、温かさを感じることの思いで応えたい。それが一人の結論だつた。

思考の海から舞い戻り、これは彼が信頼してくれたことだと勝手だが納得をいく理由付ける。信頼してくれるなら、それを以上の物で返す。それが今までに学んだ一人の在り方。それが違えることはない彼女たちの真だつた。

そして時は動き始める。一人がなんとか視線を戻すと、飛影は再び背を向けていた。

「勘違いするんじゃない。しばらくの間貸してやるだけだ。レンタ

ル料はいざれたつぷりと熨斗をつけて返してもらうからな、それを持つてはいる限り死ぬことは許さん。それと、もし万が一失くしでもすればただではすまんと思え」

飛影はそう言つと今度こそ空に跳んだ。ビルや大きな木の上を飛んでいくその姿はどんどん小さくなつていき、やがて見えなくなつた。夕闇が満ち、夜の帳がおり始める。

消えていく彼の後姿を見ながら、二人は誓いを立てた。どんなことになるとも、どんな悲しみを背負おうとも、絶対に彼との約束を守つて見せると。

決意を新たに少女達は空を見上げる。

その手には闇の中でもくすむことはない、氷泪石の輝きが光つていた。

- Side change -

なのは達と別れた飛影は木々の上を飛びながら手に持つた靈界通信コンパクトを開いていた。言わずもがな、文句と嫌みを言うためである。開いた時にはわずかにノイズが走つていたが、流石は異次元を統括し、その壁すら越える靈界のアイテム、しばりくすると問題なく繋がつた。

そこに映つてこるのは悪の元凶にして靈界の長、コトノンマの姿。

その気など粒ほどにもない飛影だったが、場所が全く分からないと
いう事態について連絡を余儀なくされたのである。

説明を求めた飛影だったが、返ってきたコエンマの話は彼の予想
を遥かに超えるものだった。

人間界へ続く次元扉の状態がおかしかったこと、飛影がそこに発
生した歪みに偶然呑まれてしまったこと、そして自分がいる人間界
だと思っていた所が、今は元の世界や靈界と不干渉となっている多
重次元世界の一つであることを聞かされた。

もちろん飛影はすぐに呼び戻せと言ったが、次元が不安定であり
無事に戻つてこれる保証がないと言われたため、こうして無言の圧
力を掛けているのである。此方に入るぶんには問題ないそうだが、
戻るための安全度は心もとないらしく。それも時を置けば可能であ
るらしいが、今の時点では何とも言えないとのことだ。

しかも、突発的な次元エネルギーの解放で今いる時代は正常な時
の流れより八年ほど昔に遡つていいというのだ。今からそれを正常
な時空間へと戻してくれるそうだが、時空が完全安定するまでの間、
その正常時空間で調査などをしてもらいたいとコエンマが進言した
のである。原因は飛影が戦つた土蜘蛛がこの世界、つまり本来は不
干渉となつている世界に現れたことに原因があつた。

『そんなことは頻繁には起こらんと思つが、お前がそちらに行つ
しまつたせいで何らかの歪みが生じる恐れがある。そちらでの影響
や世界の推移を調査してくれ。この通りだ!』

「チツ・・・・気は進まんが思い当たる節はあるしな。ただ、何か分
かつたらすぐにおこなう。隠し事は懸命ではないと言つておく

凄みを利かせながら机に向かってPCに向かって顔を青くしながら頷いた。しばらく待つていると飛影の田の前に空間の裂け田からしきものが現れた。『うやうやしく飛び込めばいいよ』

『最善はござりぬ。チャンスがあればこちらも手は打つからな。それでは頼んだぞ』

『フン、貴様に端から期待などせん。余計なことを起させば承知せんからな』

田一杯の殺氣をコントローラにぶつけ、飛影はコンパクトを閉じた。そして躊躇なくスタスターと裂け田の中へと歩いていった。

第一話 差異と別れ ～魔法少女（後書き）

さて、一応重要フラグ立ては完了したところです。かなり「ご都合主義」が入っているところは作者の力量不足ゆえ、どうかお見じを
お願い致します。

そして原作ファンなら彼の行動に違和感を覚えた方が多数かと思う
ので、ここで補足を。

氷泪石を渡したのは、書いたとおり一人に死んでほしくなかつたか
らといふのと、預けるという形を取ることで歩み寄つてくれた彼女
たちを信じてみようとした彼なりの考えに基づいてのものという設
定にしてあります。

強引すぎだらう、という方にはすみませんとしか言えません。どう
もすみません。

と、あとがきっぽく書いてみましたが第一話はいかがでしたでしょ
うか？

まだまだ未熟で、更新頻度も安定していませんが、暇だつたら気に
してあげて下さい。

それではまた次回！

第三話 早める再会～待ちわびた存在（前書き）

第三話がやっと完成いたしました。

今回は結構早くできたせいか、若干短めであります。しかし他の方々を見ると私より文章量が多いのに、一日とか下手すると毎日更新している人も多く見かけるので、時間がかかりすぎだよなあと反省する今日この頃であります。

四回もかけてこの程度・・・お気に入りが増えないはずですよ・・・
とまあ、とりあえず愚痴ったといひでござりまつもあつませんので、
張り切っていきます。

それでは第三話、じつぞー。

「・・・やはり仕置きが必要だな」

強い風を頬に受けながら、飛影は呟いた。

眼前に見える空は快晴。気温もおそらく穏やかなものであろう。それだけみれば穏やかな日々の一片でしかないのであろうが、それなのに何故こんなにも暗鬱でイラついた心持ちになるのか。

その原因は凄まじい速度で『上』へと流れていく景色にあった。変わりにものすごい速度で眼下に迫つてくるのは深緑の大地。遙か下にいた鳥がやっと大きくなってきた。

回りくどい説明で大変恐縮であるが、要するに、飛影はただいま絶賛大落下中なのであった。それも先ほどよりも数段回バージョンアップし、雲が余裕で隣にあるような凄まじい高度、という尋常ならざる状態からである。人間ならば人生を十回ぐらに振り返ることになるのではなかろうか。

「何度も何度も、ふざけた真似をしやがって・・・

飛影のこめかみに青筋が浮き上がった。その怒りの矛先には間抜けな面をしたガキの姿ある。帰った際の彼の末路は推して知るべしだろう。

だがのんびり悪態をついてもいられないのも事実だ。大地がもう

目前にまで迫ってきていた。到達までもう何秒もないのは明白だった。このままではそう遠からずにしてクシャツと逝ってしまうだろう。

「チイツ・・・流石このままはまずいな。ハアツ！」

とりあえず煮えたぎる感情には蓋をして飛影は目を閉じた。体の内でかなりの妖氣を練り上げ、体に纏つてその密度を高めていく。そうして体と大地が激突する瞬間に一気に開放した。

「ドオオオオオオオン ッ！――！」

まるで流星が落下したかのような凄まじい衝撃に音速が壁を越えて爆発を起こした。その爆風は周りの木々をマツチ棒を折るがごとく容易くなぎ倒していく。そして風が収まった後には大地が割れ、大きさにして半径二十メートルほどの穴がぽつかりと空いていた。

木々のまろはもつと酷く、その倍以上が薙ぎ払われている。その中心、岩がまだ散乱する中からのつそりと飛影が起き上がった。通常ならば即死どころか確実に五体満足でいられないほどの衝撃だったにも関わらず、彼の体には傷どころか煤汚れのひとつさえ見受けられない。

「チツ。妖氣は抑えたが、限界があつたか・・・」

不機嫌そうに辺りを見渡すと、そこに映つたのはまるで爆撃を受

けたようになつてゐる森の姿であつた。大地は粉碎し、軽く火の手が上がつてゐる場所もある。

普通ならここまで被害はないのだろうが、おそらく鎧として纏つた妖氣で衝突時の衝撃を相殺させたせいだろう。妖氣を放出すれば空を飛べないということはなかつただろうが、最初の高度が高すぎたことと、落下スピードを殺すほうが骨が折れたため、やむなく此方の方法をとつたのだ。

が、ここまで被害が出るとは思わなかつたので、飛影がほんの少しばかり悔やんだのは蛇足だ。

そして、飛影はもう一つ大切なことについて再認識していた。悪いことはどうやら続いて起つるものらしい。

「やれやれ、落ちたとたんにまたこれか・・・」

周りの違和感を的確に感じ取つた飛影は溜息を吐いた。妖氣は感じないが、穏やかな雰囲気は霧散し、周りを囲まれていることを理解する。

見えはしないがその数はかなりのものだ。三十はゆうに超えているだろう。

ただ、その雰囲気は異質そのものだつた。そこには人間や妖怪など、有機物特有の生の鼓動が感じ取れなかつたのだ。ほとんど全てが等しく単調で、そこからは無機質な気配しか伝わつてこない。そしてその姿を捉えたとき、飛影は前に跳んだ。

刹那、先ほどまでいた場所に光が走り岩を貫通してゐるのが見え

た。同時にその姿が太陽光に照らされ、全容が浮かび上がる。

そこには人間の上半身ほどの大きさの延べ棒が宙に浮いていた。その中央部分にはレンズが搭載されており、無骨な作りをした奇怪さが寸分の違ひなく飛影を捉えている。どうやらあそこから先ほどの一レーザーを放つたようだ。

そしてそれを筆頭にしていたのか、ぞろぞろと暗闇から姿を現してきた。四方を囲んだ機械のレンズが陽気にそぐわぬ不気味な光を宿している。

「数ばかりわらわらと・・・鬱陶しい限りだな」

推測を少し誤つたようだ。その数はざつと見ただけで五十以上ある。隠れているのも加えれば、その数はさらに増すだろ。飛影はやれやれと息を吐きながら、腰の刀に手を掛けて引き抜き、口元にサディスティックな笑みを浮かべた。

「まあいい。少々気が立つていたのでな、憂さ晴らしを兼ねて軽く運動させてもらひや」

- Side Nanaoha Takamachi -

「郊外で中規模の次元震を観測！第六課局員は直ちに現場へと向かつてください」

シャーリーの緊急連絡を告げる声を聞きながら、私はヘリの中で休憩時間の撤回に嘆くスバルやそれを叱りつけるティアナを見て笑みを零していた。次元震が起きたのは機動六課本局の北東、市街から十キロの位置にある森だ。

「でも、次元震なんて珍しいですよね。見る限りでは何もないところだと思つんですけど・・・」

赤髪の少年、エリオがデバイスを握りながら呟いた。その視線は送られてきた地形図に注がれている。そこには山々が延々と連なるばかりで、研究所や建物といったものは見受けられなかつたからだ。

「そうだね、何があつたんだろう・・・？」

彼の隣に座る十歳の少女、キャラが少し不安そうに呟いた。次元震といえばかなりの大事なので、そのことが気にかかつているのだろう。

「安心して。今捜査官を先行させてるし、もし戦闘になつても今は私と現場に向かつてるフェイト隊長が出るから。みんなはヘリの中で待機だよ」

そう言つと、キャラはほつと安堵の息を吐いた。それに私は苦笑を零す。ずっとそれじゃ困るけど、心構えの時間くらい欲しいのは事実だからね。

と、そこにフェイトちゃんから通信が入つた。

『なのは、こつちも現場に向かつてる。あと十分くらいで着けそつだけど、状況はどう?』

その問い合わせ私は今ある情報を告げた。私の言葉にそう、と短く返し、必要な情報のやり取りをする。だが、分かっていることはほどんど同じような有様であった。原因は分からぬが、何かが起つていることは間違いない。

そんな感じで一人で唸つていると、操縦席にいるヴァイスくんが声を掛けてきた。表情には僅かな焦りが混じつている。

「なのはさん！先行してたヤツから今通信が入ったんですが、ちょっとヤバイことになつてるようですね。結構な数のガジェットが集まつてゐるらしいって話だ」

その言葉にフォワード陣の顔が一斉に強張った。気持ちを切り替えてモニターを見やると、フェイトちゃんにも通信が入ったのか顔つきが仕事というか戦闘モードに切り替わっている。

と、そこでもまたしてもヴァイスくんが、今度は先ほどより声を大きく荒げた。マイクに向かつて、確かなのかと何度も確認している。

「どうしたの、ヴァイスくん」

「あ、えっと、先行してた局員の到着報告と現場情報の追加です。拙いことに、民間人がガジェットと交戦中だそうですぜ。それも五十を超える数に対してたつた一人つてことらしい・・・」

「「「「」」」

ティアナたちの顔がさらに強張り、エリオとキャロの顔が目に見えて青くなつた。その反応も当然だといえる。ガジェットはまだ駆

け出しあとはいえ魔導師である自分達四人がかり、それも訓練で手こずつた相手だ。それを五十という大群相手にたつた一人など、生身の人間がどうこう以前の問題である。

この報告に私は少し焦りを抱いたが、それを表情には出さず努めて冷静を装いながら問い合わせた。

「それでその人は？ 無事なの？」

「いや、それなんですが・・・なんと言いましょうか・・・」

いつもざつくばらんな彼が珍しく言いよどんだ。最悪の事態が瞬頭をよぎったが、彼の反応はそれを否定している。なんだか現実を認めたくない子供のようだ。

『ヴァイス？』

いつもと違う彼の様子に通信を繋げてきたフェイトも首を傾げている。が、観念したように息を吐くと、車をはじめて見た御者のような顔をして口を開き、

「それが・・・その民間人、ガジエットを次々に落としてるって報告が来てるんでき・・・もう残りが半分にまで減ってるって・・・」

「・・・ええええええええええっ！？」

今度こそフォワード陣が驚愕の叫びを上げた。私も一瞬その報告に危うくフリーズしかける。フェイトちゃんも同じく、画面の向こうで固まっていた。というか、さっきの報告からまだ三分も経つてないのに半分つて・・・軽く副隊長クラスだ。

「す、すごい人がいるんですね・・・」

「規格外ってこと考慮すりや 同意見だなあ。なにせ聞いた限りじゃ
すげえ素早い上に、刀一本でガジェットを圧倒してるらしいぜ・・・
磁場が安定してなくて映像が見れないのが悔やまれるつてもんだ」

「ど、どんな人間よ、それ・・・」

スバルの賞賛に同意したヴァイス君の言葉にティアナが口元を引きつらせながら言った。他の二人もそれに抱く感情は違えど、みな同じ感想のようである。

だが私は違った。その得物と戦闘状況を聞いて、心に仕舞つていたあの時の記憶が蘇り、体を衝撃が駆け抜ける。そして、気づけばヴァイス君に詰め寄つていた。

「そ、それってどんな人！？背格好とか、性別とか・・・！」

「うおっ！？お、落ち着いて下さいなのはさん、それも今言いますから・・・えっと、性別はおそらく男性。背丈は低めで、着てるのは黒いコートに首元の白いスカーフ。髪は黒の立ち気味、額には白い巻布をつけていて・・・って、なのはさん？」

いきなり呆けた私をヴァイス君が心配そうに見つめて声を掛けてくるが、私には届いていなかつた。そしてモニターごしのフェイトちゃんも、今のヴァイス君の話を聞いて呆然としている。いつかの思い出の断片が蘇り、ヴァイス君の言葉がそれを確信に変えていく。

私は怪訝な顔をするヴァイス君から離れると、レイジングハート

を起動させてバリアジャケットを纏い、ヘリの扉を開けた。気が久々に高揚している。心は既に抑えきれていない。

「 ヴァイス君、ごめんね。私、先行して現場に急行するからみんなをお願い。進行ルートとヘリの安全は確保しておくから心配しないでね」

「え！？ ちょ、なのはさ 」

言い終わらない内に私は空に向かって身を躍らせる。彼とフォワードのみんなの戸惑いが感じられどよめきが聞こえたが、一度火がついた気持ちはもう止まらなかつた。飛行魔法を使用するために魔力を体に注ぎ込み、加速する。加減が上手く利いていいのか、体に付与された魔力量はいつもよりも多かつた。

『どうしたのですかマスター。今の行動は貴女らしくありませんが』

「あ、あはは、ごめんねレイジングハート。けど心配しないで。ちよつと気が逸つちゃつただけだから。でも、やつと会えるかもしれない。私が小さい頃から探してて、ずっとずっと会いたかった・・・大切な人に・・・」

言葉が時を刻んで零れ落ちる砂のようすとん心へと落ちてくる。レイジングハートは賢い子だ。その言葉だけで、私の行動を理解したようであつた。言葉が途切れ少しおの後、返答がくる。

『 なるほど、先ほどの話に出ていた彼はマスターの想い人なのですか。納得しました、それでは仕方ありませんね』

『え、えええつ！？ な、なに言つているのレイジングハート！ ひ、

飛影くんはそんなんじゃ・・・それにいくら似てるって言つても、本当に本人がどうかは分からぬし・・・って。いけない、急がな
くちゃ！」

長い付き合いである相棒の言葉に動搖しながらも、なのはは現場に向けた急いでいためにさらに加速した。レイジングハートに口があつたのならさぞ盛大な溜息を吐いていただろう。

（その反応で丸分かりですよ、マスター。はあ、ユーノはどうやら振られてしまったようですね・・・）

その横顔は共に長く時を過ごした彼女（？）すら見たことないほどの嬉しさで滲んでいた。久しく感情を強く出す主を眺めながら、レイジングハートは一人思うのだった。

- Side out -

「ハツ！」

目の前にいた機械、ガジェットを飛影は一刀の元に切り伏せた。切り裂いた断面がバチバチという音を立ててショートし、次の瞬間には火を噴いて吹き飛ぶ。僚機がやられたことによる閃光から一瞬遅れて他のガジェットが止まつた飛影をロックする。だが、レーザーが照射されたときには飛影は既にそこから消えており、代わりに二体のガジェットが爆散していた。

「遅い」

すれ違ひ様の一閃は的確に、またしてもガジェットを一撃で葬り去る。彼の動きに対しても既に標的はない。見当違いの方向に撃たれたレーザーは他の機体にぶち当たり同士討ちが発生していた。それを横目で捉えながら軽く無視して飛影は地を駆け、空を踊り、また数体の敵機を両断して鉄屑へと変えていく。

ガジェットに搭載されているAMFは魔法を打ち消す効果がある。魔導師には厄介すぎる相手であるし、ガジェット自体の強度もかなりあるため、一般人などの手に負える代物ではない。

だがデバイスすら用いず、彼が振るうのはただの鉄剣だというのに、数で勝つているガジェットは造作もなく撃破されていく。

斬撃を生み出すのは何の変哲もない鉄の刃。しかしその様子は竜巻に巻き込まれた蟻の大群だ。それほどまでに圧倒的な光景、いやそんな言葉すら陳腐に思えるほどの力の差が両者にはあった。

上からの五射を掻い潜り一閃。返す刀で真横の二体を叩き斬り、前後の両面から照射されたレーザーを避けるとお互いの装甲を打ち抜いて残りの一體が爆散した。その隙を見逃さんばかりにまた数機が追いすがつてくるが、所詮はプログラムされた反応だ、そんなものなど敵ですらない。刀を振つて一體を斬り捨て、遅すぎるその動きに舌打ちした時にはもう一體が四片へと姿を変えていた。

「ふ、下らん……」

そして最後の一體を真一文字に切り裂いて沈黙させると、ようや

く森に静寂と平穏が戻つてくる。飛影は刀を振ると、腰の鞘に収めた。

接敵してから即戦闘。そして50を超えるガジェット相手にたつた一人で立ち回り、完全殲滅完了までその間わずか五分足らず。管理局上位クラスの実力者でも至難の業だ。しかも特別な技も何も使わないただの剣技で、それも手を抜きに抜きまくつてこれなのだから、常識外れもいいところである。

「どうか、魔導師が泣く。

「（オレの相手とするには力不足も甚だしいが、気は紛れた。さて、これからどうす・・・）ぬ、今度は何だ・・・」

ガジェットの残骸の山に立っていた飛影は、新たな気配に眉を顰める。まあ幸いなのは先ほどの鉄塊とは明らかに違う、人間の気配だということだった。これ以上あんな物の相手をしていても仕がないと思つていた飛影は、まっすぐ此方に飛んでくる一つの気配の方を向いた。

差異はあるが、さほど変わらない方角から来たその影は瞬く間に大きくなり、轟音を響かせながら飛来してきた。それは突風も引き連れて、飛影の正面にほぼ同時に足を着ける。

やはり今度はちゃんとした人間であった。一人は茶色、もう一人は金色の、どちらも長髪を髪留めでツインテールに結んだ女性だ。手には各々の杖のような物を持っており、その体からは魔力をまだほとんど知らない飛影も感じ取れるほどの力が溢れている。だが、この状況下で飛影は違和感を覚えていた。

(「」の感じ、どこのかで……)

そして違和感の元凶たる一人が一步を踏み出す。その表情が何かを堪えるようなものであることが、飛影の中の揺らぎをいつそう濃くし、漣のよう^{さざなみ}に掻き立てる。

「飛影、くん……」

「嘘……じゃないよね? ホントに、飛影だよね……?」

一人が口々に自分の名を呼んだ。その事に僅かばかり動搖した飛影だったが、いつものポーカーフェイスで表情を覆い、二人を睨みつける。

「む 貴様ら、何故オレの名を知っている? 一体どこので……
いや待て……」の気配、それにその髪の色は、まさか……」

飛影の瞳が驚きを表すように徐々に見開かれていく。田の前にいる一人が一度目の扉を潜つたとき会つた少女達と瓜二つ、いや間違いなく本人だと悟つたからであった。

普段の鋭い彼ならばこんな失態はおかさない。だが、飛影にとつてみればつい先ほど別れたばかりの少女と田の前の一人が重ならず、認識に齟齬^{そご}が生じたのである。コエンマが言つたことを忘れていたわけではなかつたが、時を超えることでもたらされる差異をこんな形で体験するとは思わなかつた。

ともあれ、意識を切り替えた飛影は、先ほどの少女らの姿を新たに上書きした。そして現在の二人に目をやるとフツと口の端を吊り上げる。ついでに口をついたのは半分呆れを交えた声色だった。

「やれやれ。抜けた先で最初に会つたのがまた貴様らだつたとは分からんものだ。」ここまで来るともはや呪いの域だが、まあ覚えていたことは褒めておいてやる。それにしても、しぶとく生き残つていたようだな。高町、それにテスタロッサ」

飛影が皮肉たっぷりに言つと、一人の顔がぱあっと色づく。そしてそのまま飛影に向かつて走り、

「飛影くん つ……！」

「飛影 つ……！」

両側から思い切り飛びつかれ、抱きしめられていた。遠慮のない、真つ直ぐな感情表現だ。柔らかい感触が両手の腕、そして首元にまわりつき、動きが封じられる。

「なつ！？高町、貴様何を抱きついている！さつさと離れ……おい、テスタロッサ、貴様まで何をしているんだ！腕を掴むな、服に顔を押し付けるな！ええい、一人そろつてわけのわからんことを……いい加減にしろ貴様らあ！」

突然の抱擁に、珍しく動搖した飛影が怒りの声を上げる。しかし、どんなに怒鳴りつけても一人は石になつたようにがつしりと服を掴み、一向に離れようとしない。飛影のこめかみに青筋が走つた。

「ぐ、この……」

業を煮やした飛影が無理にでもと力を込めようとする。だが、そのとき彼は服に顔を押し付けた一人の肩が小刻みに震えていること

に気づいた。

表情を見せぬまま、彼女たちは飛影に縋り付いている。それはまるで小さな子供が親から離れまいとするような、しかしそれとは全く違うが近いものを感じさせた。

（チツ、やりにくいつたらないぜ・・・）

一人心の中で悪態をつく。相変わらず顔を上げない一人だが、その震えは徐々に治まつていいくよつな気がした。

穏やかな風が頬を撫ぜていく。飛影は少しの後呆れたよつに息を吐いて、行き場を失つた両手をポケットに突っ込むと仏頂面のまま空を見上げた。

出会いは突然、再会は片や一瞬、片や八年という別れの時間を経てここに実を結んだ。

だがどちらにも言えるのは、それが途方もなく壮大な、そして小さな救いであつたこと。

それは運命の歯車が噛み合つた瞬間に起つた、この物語を始まりを告げる最初の奇跡だった。

第三話 早すぎる再会～待ちわびた存在（後書き）

第三話でした。

とりあえずは眠い・・・サッカーで世紀の一戦を見て年甲斐もなく高揚していましたが、日常は絶えず続していくものなのですね。

流石に徹夜続きは堪えました。おかげで太陽がまぶしいです、雨だけど。

さて、念願のStriker's編に突入しました。タイトル的にはここからが本番といったところですが、もうこれを書いている時点で砂になりかけている作者です。ご都合主義も冴えまくっているし、大丈夫なのかなホント・・・

ともあれ、マイペースではありますが頑張つていいくつもりなので感想やら色々よろしくです。

それではまた次回！

第四話 六課 ～ 初見と疑惑（前書き）

驚きです。いつも通りの更新に間に合わせることができました。

そろそろ卒論の型入れ程度には入らないとと鬼気迫る作者ですが、どうにも気が乗ません。まあそれに関しては七月の頭から八月にかけて頑張りますので、この小説と並行して頑張っていきたいと思います。

それでは第四話をピリッパー！

で、連れてきてしもうたと。そう詰つわけかいな」

「……………はい……………」

機動六課本局。執務机が一つ並び、見晴らしの良さでは屋上を除けば一番であろう高さにある課長室で、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの二人は視線を落としたまま短く答えた。

二人に正面から相対しているのは、茶色がかつた髪をショートにまとめ、二人に匹敵するほど端正な顔立ちをした同年代の少女だった。名を八神はやてという。普段は人懐っこい笑みで飾られている彼女なのだが、今この場においては違っていた。

眉尻は吊り上がり、両手もその胸の前で組まれていて、田に至つてはじと一つとこう擬音がいまにもテロップをつけて背後に表示されそうなほどに細められている。まあ要するにだ、どこからどうみても、私今最高に不機嫌なんやわ、という感じをひしひしと感じさせる表情であつた。

「一等空尉に執務官ともあろう人間が立場を忘れて軽率やな。新設してそんなにたつとらんのに、機動六課の切り札が、任務そっちのけで、一人して、部隊長の私に、連絡すら、せずに」

二人は節を区切るたび、息をつくたびに徐々にトーンが下がつて、いくはやての声にさらに身を縮ませていく。その後姿はスバル達が見たらぶつたまげるほど小さくなっていた。

まずい。あれはかなり怒っている。八年といつ長きに渡り、二人が密かに捜し続けていた飛影に、それも不意打ち気味に出会えたことによる喜びですっかり吹き飛んでいたが、自分達は今このはやてが設立した機動六課において重要な立場にいるのである。

彼女の言つとおり、先に自分たちが取つたものはかなりの無茶を通した行動であることは確かであった。もともと作戦になかつた行動を独断で取つたのだから、状況が良からうがちゃんと安全確保をしていこうが、違反は違反だ。確實に始末書ものである。

「軽率でした。以後、気をつけます」

「申し訳ありませんでした。八神部隊長」

畏まつた言葉遣いでなのはとフェイトはもう一度深く頭を下げた。彼女とは親友であるが、組織の一員として非を詫びるということでは違う話だ。筋を通すのは当然だし、親しき仲にも礼儀ありというヤツである。

「・・・わかつたんならもうええ。だからこねからは」

「深く息を吸い込むと、はやはては今までで一番真剣な声色で一人に告げた。罰として与えられるものを感じ取り、二人に緊張が走る。

「これからは、ちゃんと飛影くんと一人の進展具合、報告してな」

「「はい、わかりま　　・・・え？」

素直に受諾しようとしたのは達が、聞き捨てならない文章を耳に通して頭を上げる。そこにはいたのは、上司としてのハ神はやでではなく、いつもの彼女・・・でもなかつた。

「で、彼と二人の関係は一体どないなん？もしかして、将来に結婚を約束し合つた幼馴染とかそういうパターンなんか？」

にやーり、と心底楽しそうな笑顔を向けたはやてがいた。

一人には分かる。口は二日丸のようになり、好奇心を抑えきれない彼女の性質の一端が顔を出していた。

それも近年稀に見る興奮具合だ。タヌキタヌキとナカジマ三佐は言つているが、この表情を見れば、六課のほぼ全員が納得できよう。

だが、なのはとフエイトはいきなりの展開についていけず、固まつたまま後方に取り残されていた。そしてしばらくの後はやての言葉をゆつくりと咀嚼し、そして普段の倍以上の遅さでもつて意図を整理し、その意味を理解する。

「コンマ数秒、二人は前もつて示し合わせていたかのようだ、ほぼ同時にボンッと音が鳴りそうな勢いで顔を沸騰させた。

「けつ、けけけ、結婚つ！？ち、違うよ、はやてちゃん！ひ、飛影くんとは昔ちょっと縁があつただけでーま、まだそんな特別な関係じや・・・」

「そ、そだよはやて！い、こきなりけ、結婚だなんて・・・」
心の準備が・・・あうう・・・

「ん~? なのははちゃんは『まだ』、フロイトちゃんも『心の準備』
かいな。なるほろなるほろ・・・それで一人とも、あないな告白の
嵐をばつさばつさ切捨てとったんやな。まあ、二人で腕組んで(つ
て)いうか連行されてきた(っぽいけど)飛影くんと歩いて来たから予
想通りではあるんやけど、とりあえず納得や。

せやけど・・・こないなビッグな話題に、私はなんでもつと早く
に気づかへんかったんや!くうう、今までの自分が憎い!」

バシバシと机を叩きながら本気で悔し涙を流すはやて。そこに部
隊長としての威厳などなく、ただ自分だけ知らなかつたという疎外
感に駄々をこねる子供のようである。

さつきの不機嫌もこれが原因のほとんどを占めていたのではなか
るーか、と親友を邪推してしまつ一人であつた。だが、それが強ち
間違つていなかつたことは、後にはやての右腕であるリインフォー
ス?が証言することとなる。

「ど、どりあえず、このままじゃダメだよね。ちゃんと話を交えて
説明しないと!」

「そ、そだねなのは!話し合ひは大事だもんね!?」

何となくマズイ展開が待つていて見えたので、二人は必要
以上の声量を張つた。ある種の必死さすら伝わつてくる勢いだ。そ
して、それでいながら着実に後ずさつていた。

ここ数年で身につけた危機回避スキルが、一人の中でもうんうんう

ん唸りを上げている。悪い予感は得てして当たるもの。それは共に駆け上がってきた二人の共通認識だった。

「じゃ、じゃあ……」

「アハハ」と、

「安全圏に退避すべく、一人がそそーつと部屋の扉へと足を伸ばす。撤退完了まで後一歩足らずだ。逃げに関しては最善の一手と言えよう。

だが、そうは問屋が卸さないところが世の常である。瞬間、ブツブツと机に向かって会話をしていたはやての日が理解したくない何かを宿し、ギュッペイイイイインシとあやしいひかりを放つた。

混乱はしないが、いやな予感が背中を撫でつけ、鼓動が跳ねて加速した。

「まさか一人とも、このままランナウオーできるなんて、思ひどるやあらへんやんな……？」

わらーつ、とはやてが立ち上がつた。そして素早い手捌きでリモコンを操作し、二人が向かっていたドアをロックしてしまつ。訓練用のAMFを開け、魔法すら封じる念の入れようであった。しまつたと思った時にはもう遅く、なのは達のこめかみからつりと冷や汗が流れしていく。

「ぬつふつふつふ・・・

振り向いた先にいたはやは無感情と激情の中間といつ、非常に形容しがたい雰囲気を出している。だがそれでいて鼻息は荒く、無表情なのに視線だけはギラギラとしていた。ぶつちやけると目がかなりのレベルで据わっている。

「ここに記さう。親友は今、確実にヤバイ。

かつてないはやはの気迫に、なのはとフロイトは若干表情を引きつらせながら、風雨の中に佇む案山子のような彼女から一步距離をとつた。体が未曾有の危機を感知したためだ。俗に言う防衛反応といつヤツである。

「は、はやはてちやん・・め、田が怖いよ・・・？」

「あ、落ち着いてはやはて。飛影のこととはまた今度にでも・・・」

なのはとフロイトが刺激しないよう恐る恐る言つが、その対応は一般的にもNG、逆効果の常套句である。再び机がドオオンと叩かれた音に身を竦めた一人の前には・・・修羅がいた。

「じゃあかしいーー」の期に及んで隠し事は許さへんでー今まで親友に黙つとつたバツや、ここで洗いざらり吐きいッー

「ふええええええ

つー？」

「あ、ひひひひひ

つー？」

新設された六課の部屋に一人分の悲鳴が響き渡った。

「と、言つわけで紹介するで！なのはちゃんとフェイトちゃんの運命の人にして流離いの剣士、飛影くんや！ハイ、みんな拍手！」

機動六課のブリーフィングルーム、フォワード陣と隊長陣を集めたはやはさつそく飛影の紹介を行つていた。その顔はほくほくした笑顔で一杯、頬もエステ帰りのごとくつやつやしていらっしゃる。いまだかつてないほど、彼女は御機嫌であった。

対して横にいるなのはとフェイトは、その隣ですーんと沈んでいた。なのはは「ふふふ・・・」と感情を感じさせない虚ろな瞳で笑みを浮かべており、フェイトに至つては俯きながらぶつぶつと言葉を連ね続けている。

もはや末期症状だ。その様相は徹夜でスケジュールをこなしたあと地獄の出社を余儀なくされた中年サラリーマンのようにやつれ、二人揃つてしまふんではいた。

隊長陣三人から溢れるテンションの高低差に、スバル達だけでなくシグナムやヴィータもぎょっとする。しかしそんな状況も何のその、はやは横にいる飛影に近づきながら全員を見渡した。

「聞くところによると彼は次元漂流者らしいんや。これから管理局の民間協力者として働くことになつたさかい、みんな仲良くなつてな」

次元漂流者、それが今のは飛影の大まかな位置づけだった。言葉にすると簡単だが、その立場は決して軽いものではなく、本部が何かといつてくる前にはやはては陣営に引き込むことにしたのである。

民間協力者となつたのは、そつちで勝手にやるのはいいが、誰であらうとも命令に従うのは御免だといつて飛影からの条件があつたためだつた。

初めはこの立場すら嫌がつていた飛影だが、驚くことになのはとフェイントの説得で降つていた。というか、彼女らの説得（『泣きそうな声 + 潤んだ目 + 上目遣い』×2×美少女補正の最強コンボ）という名の泣き落しを延々と聞かされでは、流石の彼とて渋々ながらも折れるしかなかつたのだ。

もちろん全てにおいて飛影が納得していないのは明白であつた。その詫問に、自己紹介が始まる前から子供とかお年寄りならショック死するほどの剣呑極まりない雰囲気を放出させ、初っ端から場の空気をチリチリと焦がしている。

「オイ貴様、何がと言うわけで、だ。一人で話を進めるな。それと、身に覚えのなさすぎる肩書きを勝手に追加するんじゃない」

「まあまあ、ええやないの。協力することはOKしたやないか。それになのはちやん達にあれだけ真撃にお願いされたんやし、男としてはむしろ役得やろ?」

「成程、今すぐ土に還りたいと見えるな。墓石には『化狸』に死す』とでも刻んでやろうか?」

「飛影の視線が細まり、威圧感が一気に増す。新人FW陣はその気迫にひいええと震え上がった。

しかしそれを真っ向から受けている彼女はどこ吹く風の「」とく、笑い顔を崩さない。だが、そんな彼の前にはやての守護騎士の一人、スターズ隊副隊長のヴィータが勢いよく飛び出した。

そのまま真っ向から飛影を睨みつける。その表情からは猜疑心と敵意、そして今にもデバイスを起動せんばかりの威圧感が迸つていた。

「テメー！もしさやてに何かしてみる、あたしがぶつ殺してやるー！」

「何だ貴様は。死にたいのか？望むなら一瞬で消してやるが？」

「上等だコラー！」

売り言葉に買い言葉、引くことを知らない二人によつて自己紹介な空気が一瞬にして殺伐としたものに変わつていく。瞬間湯沸かし器のようにヒートアップした空間に危機感を覚えたのか、いつの間にか復活していたなのはとフェイドが慌てて仲裁に入つた。

「ちょ、ヴィータちゃん、落ち着いて！ねつー？あれは飛影くんなりのジョークだから、あ、あは、あははははー！」

「もつつ、飛影もだよーあまりヴィータを煽らないで。喧嘩はよくないんだから・・・」

「やうやでヴィータ。これから一緒にやつてくんやから、そないな」とでどうするんや。飛影さんもあまりヴィータをからかわんとい

てな

はやでが子供を叱るよつにメツとする。主からの言葉に、ヴィーダは居心地悪そうに肩を竦める。フロイトに諭された飛影も、そっぽを向きながら雰囲気を収めた。

「・・・わかつたよ」

「チツ・・・」

しゅんとするヴィーダと面白くなれんかと思おもひつも退いてくれた飛影に、一回は安堵の溜息を零す。と、セイド今まで黙っていたシグナムが声を上げた。

「主はやで、僭越ながら私に提案があるのでが」

「うん? なんやシグナム」

声に反応してはやでが首を傾げる。なのほとフロイトは今までの経験から嫌な予感が過ぎたが、それに口出しをする前にシグナムがスッと居住まいを正して言った。

「主やテスター・サ達を疑うわけではありますんが、ヴィーダの気持ちも最もと言えます。ですからこゝは彼の力と性質を計る意味合いも込めて、模擬戦をしてみてはいかがでしょうか?」

「あ、あたしもそれに賛成! (キツー)」

(もうひとつ)

烈火の将の提案に隊長の一人は頭を抱えた。ヴィータは大賛成といふ感じで諸手を挙げながら飛影を睨んでいるし、シグナムもバルマニアの血が騒ぐのか少し気が高ぶっているようだつた。だが普段の彼女と違うのは、その表情がいつになく硬いことだ。

「やうやなあ、ガジェットを倒したゆつても私らはその場面を見ておらんかったのやし、模擬戦なら危険も低いしな・・・飛影くん、いいやろか？」

はやてが手を顎に当てて唸つたあと、飛影へと視線を移した。彼女を一睨みし、飛影が全員に目をやつた。

「フン。オレを計るといつのは氣に喰わんが、こここの戦力がどの程度のものか少し興味もある。それに、オレもあんな肩鉄相手ばかりで退屈していたところだ。

提案には乗つてやう。ただし、一つ条件があるが

「条件だと？ 一体何だ？」

シグナムが怪訝そうに尋ねる。同時に条件と言われた一同に軽い緊張が走つた。

実はこういう例がないわけではない。以前にもフェイトやなのは、そしてはやて相手に『勝つたら付き合つてもらひ』『勝つたら貰つていく』系の条件をつけて挑んでくる男は少なからずいたからだ。その数は層々たるもので、山を築けば結構な規模になるだろ。

言わずもがな、そんな男たちを彼女らは残らず完全撃破してきたのだが、つまりは飛影も模擬戦に何らかの報酬を求めていることを感じて全員が身構える。無論その類の提案なら、なのはとフェイト

が拒むことはない、といふか諸手で万々歳だが、彼の提案は彼女達の予想の遥か斜め上を行くものだつた。

「フツ、簡単だ。一対一ではすぐに終わつてしまつてつまらんからな。今の二人とそこの女、そしてその犬か、貴様らまとめてなら相手をしてやろう。何、死なない程度に加減はしてやる」

「…………ええええつ！？」

飛影の提案にFW陣だけでなくなのはにフェイト、それにはやてまでが驚きの声を上げた。指名されたのはシグナムとヴィータの二人とシャマル、そしてザファイーラの四人という守護騎士フルメンバー、六課どころか管理局内でも指折りの実力者だつたからだ。

指名された四人はしばし呆気に取られていたが、数秒の後自分たちの扱いを理解したのか、空気を一気に凍りつかせた。四人がかりに加え、手加減という完全な上から目線。相手にされていないどころの話ではない。

「テメヒ……舐めてんのか……！」

「流石にその言葉は聞き捨てならんな。我らも、随分と見ぐびられたものだ……」

「自信があるのはいいが、仮にも六課の副隊長陣相手に少し言い過ぎだ。報いは受けてもらつぞ」

「……」

怒りを露にするヴィータ、体から霸氣を滲ませるシグナムとザフ

イーラ、そして飛影をじつと見つめたまま考え込むシャマルに視線が集中した。だが彼はその表情を崩すことなく、むしろ挑発するよう口元の端を吊り上げた。

「貴様らは『同じ』ようだからな、実力も纏まつていてちょうどいい。それにこの場にいる全員と言わないだけ譲歩してやつているんだ。まさか、今更取りやめるなどとは言わんだろうな？」

「……良いだろ？ だが覚えておけ。ベルカの騎士を侮ったこと、戦いのなかで後悔させてやる？ 飛影、お前にこの六課はふさわしくない」

「シ、シグナム……そこまで言わなくとも……」

シグナムは感情を排した顔でそう告げると、弁護しようとしたフレイトを置いて踵を返して部屋から出て行く。一見さんには分からぬが、あれは飛影の煽りで怒りを通り越してしまっている状態だ。誰が言わざとも、手加減などしないだろ？

「くらミッターをかけているとはい、ランクオーバーと一アラランクの本気だ。下手をすれば大怪我どころでは済まない。

だが、どうにか空気をよくしようとわたわたするメンバーに対して、状況は止まらなかつた。出て行こうとした四人の先頭、部屋の出口で立ち止まつたシグナムが一度振り返る。そして、その目に殺意すら滾らせながら口をついた言葉は、幼い少年と少女たちにとつて衝撃的なものだつた。

「貴様は気に入らん。その態度もそなだが・・・貴様からは血の匂いがする・・・それも幾重にも渡つて浴び続けられた、濃密で危険

な返り血の香りがな

『一?』

「ほう、少しばは鼻が利くようだな。ただの木偶の棒じやなかつたか」

シグナムの言葉に、はやて達は飛影を見つめながら言葉を失う。対する飛影は少し感心したように息を吐いた。そこには罪悪感など微塵も無い。シグナムから溢れるものが露骨な敵意に変わった。

「認めるのだな? やはり貴様は害悪だ」

「フツ・・偉そうに説教した上、勝手に害虫よばわりとは隨分といい身分らしい。だが、貴様らも他人のことを言えた立場か?」

その『人の型をした』身体に染み付いた、人間を呪い殺せるほどの憎悪と怨嗟を含んだ血の痕は、いくら正義面しようがもはや消せまい。それとも血が染み込み過ぎて今更に嫌悪でもしたか? なら筋違いもいいところだ。オレをわざわざ引き合いで出すより、鏡を見たほうがよほど手っ取り早い

「貴様ツ・・・くつ、時間は今から一十分後、場所は演習場の中で行つ。そこで完膚なきまでに貴様を叩きのめしてくれる・・・!」

シグナムは飛影の言葉に動搖と怒りを内包させながら、足音荒く部屋を出て行つた。沈黙があたりを支配するなか、はやてが飛影に向かつてため息をつく。その表情には若干の怒りが浮かんでいた。

「勝手に決めてしもうて・・・どないするんや飛影くん、シグナム達たぶん本氣やで?」

自分の守護騎士全員相手といつにには、流石の彼女も予想外だつたのか、声には飛影を慮る色が混じつてゐる。警戒も滲ませてゐるが、その言葉は本物なのだろう。

彼女の言葉の意味は理解できているであろうに、わざわざ御苦労なことだ。新人四人は青くなつており、フェイトやなのはの二人も「大丈夫?」といつよつに見ていた。

だが飛影はそれを「余計な世話だ」といつよつに鼻で笑い、一蹴する。そして口の端を心底楽しそうに吊り上げた。

「フン、当然だ。それぐらいしなければオレがわざわざ戦う意味がない。そもそも死に物狂いでこなれば勝負にすらならんだろうからな。それに頭に血が上つて冷静に戦えない奴らなら、端から試そうなどとは思わん。そこまでのバカなら死んだほうがいい」

暴言一色の言葉にはやては唖然となる。そして硬直してゐる全員を捨て置いて、飛影は訓練場へと向かつた。

第四話 六課～初見と疑惑（後書き）

何故でしょ、書いていくつかにどんどんと最初の原稿とかけ離れていき、最後のは少し重たいオチになってしましました。

ほのぼので終わらせるつもりが、飛影の性格なり「うだうなー、とこう感じで書いていたらいつの間にかこんな形に・・・

ですが、氣を落としても仕方ありません！「都合主義と割り切つているので問題なし！」（オイ）

ところでの第四話でしたけれど、いかがでしたでしょうか？

次回はついに飛影と魔法との初戦です。たしかに、どうなるやらいまだ白紙状態の作者には見当もつきません。けれど、何となる、かな？

と、ともかく頑張つていきますのでどうかご観覧に。

それではまた次回！

第五話 模擬戦～剣と炎と呪われし眼（前書き）

第五話完成です。

初めての対人戦、しかも複数なので書くのは結構大変でした。

これでいいのかなと思いますが、これ以上は書けません・・・おもに作者の力量的な問題で（涙）。

・・・まあ形にはなっている、かな・・・?

といつわけ（脈絡ないですが）、第五話です！

作者的には苦心の末書いたので、どうぞご覧あれーー！（ヤケクソ）

あ、あと終わりにちょっとした報告がありますので、そちらもどうぞ。

第五話 模擬戦～剣と炎と呪われし眼

飛影と別れて十数分後の演習場。シグナム達四人の騎士は、街中に設定されたシミュレーターが投影するビル群の一角、崩れそうな廃ビルの上で作戦を練っていた。

「くっあああああっ！あんのヤロー、あたし達をとことんバカにしやがって！絶対ぶちのめして、気が済むまで謝らせてやる！」

槌型のデバイスを高らかに掲げながら、ゴスロリ服のヴィータが吼えた。喧嘩つ早く血の気が多い彼女だが、今日ははいつにない気の高ぶりようだ。年齢不相応な威圧感がにじみ出ている。

どうやら先ほど紹介された六課の新しい民間協力者、飛影にコケにされたことが相当頭に来ているらしい。先ほどから大声で怒鳴つてばかりだ。だが、声を上げこそしないものの、それはシグナムやザフィーラも同様だった。

「少し落ち着け、と言いたい所だが気持ちは私も同じだ。非殺傷設定ではあるが、今回は全力でいく。二人もいいな？」

「もちろんだ。主はやての守護騎士と守護獣の力、とくと見せてく れよう」

シグナムの言葉に深く頷きながら、闘気を漲らせたザフィーラは鋭く低いうなり声を上げた。シグナムも自身のアームドデバイス、

レヴァンティンを一振りし、気持ちを切り替えていたようだ。だがそんななか、シャマルだけが一言も発さず黙り込んでいた。

「？　どうしたシャマル、どこか悪いのか？」

「・・・えつ？　あ、ううん。なんでもないわ」

「なんでもないということはないだろう。先ほどからずっとその調子だぞ。これから戦闘に入るにあたって、何か思うところがあるのか？」

シグナムとザフィーラがいつもと違うシャマルの様子に眉を寄せた。なんだか自分でもよくわかつていないうことを話すような煮え切らない態度の仲間に、シグナムたちは怪訝な表情になる。シャマルは首を振つて「私は大丈夫だけど」と前置きをしたあとで、少し真剣な顔になりながら口を開いた。

「あのね、これから戦闘についてなんだけど、十分に気をつけてほしいの。飛影さんがどんな力を持つてるかまだわからないし、本格的に仕掛けるのはそれを見極めてからでも遅くないわ」

「確かにそうだけど・・・どうしたんだよ？　やけに弱気じやんか。そりやあ、ただの魔導師つて感じじゃないし自信はあるみたいだけど、一人じやフォーメーションも組めないぜ？　それにアイツには魔力がないんだろ？　シグナムが言つたこともそうだし、あたし達のことを見抜いた辺り、相当場慣れしてると感はあるけどさ」

シャマルに対して、ヴィータが声を上げる。試合前のスキャンで分かつたことだが、それは彼女たちの想定を超えていた。なんと、飛影は魔法を扱う為には絶対に必要となるリンクカーコアを持っておら

ず、デバイスすら所持していなかつたのだ。

ミッドチルダの常識からいえば、今の彼の立場は魔法を扱えない一般人、つまりは魔導師ランクすらつけようがないということになる。

これには、流石のシグナムやヴィータも呆れてしまつた。あれだけの自信だ、それがハッタリでないかどうか一応警戒し、どれほどのものかと調査してみればこの有様。拍子抜けもいいところである。

確かにスピードと剣技では優れており、それが複数のガジェットを倒すほどのものという報告は受けている。だが、高々そんなものでは魔法を扱う自分たちには何の脅威にもなりえない、というのがヴィータ達の見解だつた。魔力に関しては新人四人にも遙かに劣るどころか、魔法では戦いようがないのだから。

だが、結界あるいは察知など、補助魔法に長けているシャマルは彼から何かを感じていたのだ。それが何なのかは分からぬが、漠然とした不安だけが強く焼き立てられるような、そんな得体の知れないものが彼から溢れている気がする。

だが、それは他の三人は気付かなかつたようだ。ザフィーラは首をかしげていて、ヴィータも考えすぎじゃねーの?というふうな表情をしている。

「私は何も感じなかつたが……だが、シャマルが言うなら留めておこう。それに元より油断などしないさ。そして必ず勝つて見せる。ベルカの騎士、烈火の将シグナムの名にかけてな」

シグナムが不敵にそう言った時、ブザーが鳴り響いた。同時に向

かいのビルにスタッフといつ音を立てて飛影が姿を現す。黒いコートに手を突っ込んだまま悠然と此方を見下ろし、その口元には笑みさえ浮かんでいた。そこで空中に大きなスクリーンに映つたはやてが登場し、確認するよつて言ひや。

『じゃあ始めるで。試合は守護騎士の四人対飛影くん一人。勝敗は相手が気絶あるいは降参したら負け、それ以外にも戦闘続行不可能と判定次第、試合終了とする。武器は非殺傷に限るなら制限なしや。それでは はじめつー!』

はやての号令が訓練場に響き渡る。先に動いたのは守護騎士達だった。シグナムが一度田配せをした後、仲間達に念話を飛ばす。

（前衛は私とヴィータ、後衛にシャマル、アシストと遊撃はザフィーラに任せる。それでは行くぞー!）

（おひつー!）

（承知した!）

（皆、気をつけたね）

一瞬の念話を打ち切り、全員が役割を全うするために動き出す。最初に飛影に飛び掛つていったのはやはりヴィータだった。

「おりあああつー!」

「フ、遊んでやるとするか」

真正面から迫るヴィータのハンマーを飛影は後ろに跳んでかわし

た。同時にその間を縫うようにして、シグナムの剣が斬り込んでくる。

「ハツ！」

すれ違つよつにシグナムが接近していく。至近から繰り出された横の一閃を飛んで避けると、その先にはヴィータが槌を振りかぶつていた。

「おりやあつ！」

捻つた体の真横を、轟音を立ててハンマーが通り過ぎる。次いで追いすがるようにしてシグナムの剣が斜め上から迫るが、反動の勢いを足を蹴り上げることで加速させ、紙一重で避けた。

「今のを避けるか、なかなかやる！」

「くそ、ちょこちょこ逃げんな！」

だが暴風と疾風が途切れるのではない。嵐のような連続攻撃が飛影を捕らえんと襲い掛かる。それらは飛影に届くまであと少しといったところで空を切っていたが、飛影が避けた先には建物から突き出た壁が存在していた。どうやら最初からここに追い込むつもりだったらしい。

「はああつ！」

シグナムとヴィータが違う角度から得物を振り上げて迫つた。飛影の背後は壁だ。つまり逃げ場がない。前はヴィータとシグナムが固め、背後の壁が動きを制限している今、どちらの攻撃を先に避け

ようと防ぐつともう片方が飛影の体を貫くだろう。

「もうつたあ！」

ヴィータが必殺の間合いに勝利を宣言する。だが、飛影の体まであと少しどうところで彼の口元がニヤリと吊り上がり、

「なあつ！？」

「何つ！？」

その姿が一瞬にして焼き消えていた。二人の得物は虚しく空を切る。勢いを殺しきれず、ヴィータの槌は床を打ち碎き、シグナムの剣は壁を切り裂いていた。

そして二人の目標たる飛影の姿は、

「残像だ」

「なつ！？」

「うわつ！？」

彼女達二人の真後ろで、ポケットに手を突っ込んだまま立っていた。二人はあるか、遠くで隙を窺っていたザフィーラや状況を分析していたシャマルも目を見開く。ありえないものを見たかのようにその表情は強張っていた。

片方を避けねば片方に貫かれる。その状況下で飛影が取った行動、それは二つの攻撃を同時に避けるというものだった。その尋常なら

ざるスピードを以て。

言つだけなら簡単だが、普通の神経ならまず実行には移さない。それは失敗したときのリスクが大きすぎるからだ。体はどちらに対しても防御がとれず、取り得る間は極小、そしてタイミングはコンマ数秒などという生易しいものではない。最悪、両方の攻撃が直撃する恐れもある。

だが、そんな神業じみた動きを飛影は躊躇すらせずに行い、そして造作もなく成功させたのだ。それは途方もない時を戦い続けてきた、歴戦の戦士である彼らを上回るほどの修羅場を飛影が搔い潜つてきたこと、そしてリミッターを施しているとはいえ、ヴォルケンリッターのほぼ全力で振りぬかれた一撃を彼が完全に見切ついたことを意味する。

しかし、飛影にとつてはこの程度息をするほどに容易い。相手の驚き様に溜息を吐くと、背中側の腰元に右手をやり、一振りの剣を鞘から引き抜いた。

それはデバイスでもなんでもない、何の装飾も機能も施されていない片刃の鉄剣。無骨な刃が陽光を受けて、その刀身に凄惨な煌めきを宿す。そして剣をシグナム達に向けると、飛影は皮肉げな笑みを見せ、真正面から突っ込んでいった。

「ううわあ・・・めっちゃ速いなあ、飛影くん・・・」

はやてちゃんが画面に釘付けになりながら言った。新人のスバル達も、呆気に取られたように模擬戦の様子を見ている。私はその様子に少しだけ優越感を抱いた。そして同じことを考えていただろうフェイトちゃんと目が合つて、ふふっと笑う。

飛影くんは確かにすごかつた。飛影くんの戦いを見たのは一度だけだったけど、あの時より動きにさらに鋭さが増している。剣筋のキレもシグナムさんを上回っているみたいだ。それでも本気の彼には程遠いである「う」とは私たちだけが知つていて。

「す、すごいです！シグナムとヴィータちゃんを相手に魔法なしでここまでやるなんて、こんなすごい人と一人はお知り合いだったのですね！」

「つたく、単純な動きでカメラが捉えきれんつてビリーッ速度や・・・・フェイトちゃんともいい勝負できるんやあらへん？」

「あはは・・・そう言つてもらえるのは嬉しいけど、私じゃ飛影には勝てないよ。たぶん私となのはの一人でも、ね」

興奮したリンと若干呆れの混ざったはやてちゃんの言葉に苦笑しながら、フェイトちゃんが言葉を返す。その台詞に一人はさらに驚き、後ろで見ていたFW陣の四人が身を乗り出した。

「ええつー・?フェイトさんとなのはさんが一人がかりでも勝てないつて・・・じょ、冗談、ですよね・・・？」

スバルが信じられないといったふうに恐る恐るたずねてくる。だ

が、私達の表情からそれが冗談でもなんでもないことを理解したスバルとフォワード陣は、驚きのあまり硬直してしまったようだ。それを少し可笑しく思い、私はもう一度スクリーンに視線を移した。

- Side out -

「今度はこっちから行つてやる。相當に加減はするが、本気で受けんとすぐに終わつてしまつぞ？」

言つが早いが、飛影の姿が再び消えた。それに対して背筋に冷たいものが走つたシグナムは、ヴィータを突き飛ばして剣を正面に掲げる。瞬間、金属がかちあう鈍い音が響いた。

「ぐうつ！？」

「ほつ、今のを受けるとはな」

至近から目を合わせてしているのは言わずもがなの飛影である。それは正面からのただの袈裟がけの切り下ろしだつたが、速さが尋常ではない。そして、続くように剣が踊りかかってきた。

「ぬ、ううつ！？」

シグナムはほとんど本能的にレヴァンティンを動かして、剣の連撃を防ぐ。強くしなやか、そして的確に、刃が死角から繰り出される。彼が振るう剣はヴォルケンリッター中最強、烈火の将と呼ば

れるシグナムですら、なんとか線が見える程度という凄まじい速度の剣筋だった。

後退と防戦を余儀なくされる。直撃だけはもらわないようにはうとするシグナムだが、弾かれたその剣先さえ彼女には揺らいで見えた。そして速いだけでなく、一撃一撃が想像以上に重く、それでいて鋭い。それに対して長く持つはずもなく、強い一撃にシグナムは体ごと吹き飛ばされた。

「くあっ！？」

「シグナム！くそ、速えつ！」

ヴィーダが止まつた飛影に打ちかかるが、目標が一定していかなかつたため簡単に受けきられてしまう。そして打ちかかられた剣との鎧迫り合いを押し切つて、ヴィータが距離を空けると、対する飛影はニヤリと笑つた。

「どうした、もう終わりか」

「ハッ、『冗談言うんじゃねえ！アイゼン、カートリッジロード！』

『Exposition - Schwalbe file geon!』

ヴィータが叫ぶと、グラーフアイゼンがそれに答えて連動し、排出機構から薬莢が飛び出した。同時に三角形のオレンジ色をした魔法陣が出現する。

（力が上昇した・・？成る程、外部から力を取り込んで瞬間強化をかけているわけか）

興味深そうに田を開いた飛影に、ヴィータは鉄の弾を四つ構え、力任せにそれを撃ちだした。赤く発光した四つの弾が変則的な動きで迫るのを、飛影は横のビルに飛び移ってかわす。だが、鉄球はそのまま向きを変え、再び接近してきた。どうやら追跡能力もあるようだ。

それを四片に切り捨て爆炎に変える。だが爆発から身を引いた所で、飛影に影が迫った。

「気を取られているところ悪いが、私の存在も忘れるな！」

「同じくな！」

「・・・チイツ！」

上から振り下ろされた剣と横合いからの牙を、後ろに飛んで避ける。ザフィーラのほうはそのままこちらに攻撃を仕掛け、シグナムは空中で剣を掲げた。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

『Expo-10sion.』

ヴィータのときと同様に峰の機構が薬莢を吐き出すと、シグナムの剣が炎に包まれた。魔力が充填され、その刀身から熱風が迸る。

（ツ、アレも同型か！）

「はあああああっ！」

ザファイーラと入れ替わるようにシグナムが間合いに斬り込む。飛影はシグナムのレヴァンティンを衝撃を殺しながら捌くが、存外に斬撃が重く圧し掛かつてきた。

アームドデバイスであるシグナムの剣は、魔法技術を結集させたものである。それ故、飛影のものとは比較にならないほどの性能と強度を持ち、彼女のアシストも担つていて。魔法を扱う目的として彼女専用にカスタマイズされたものだ。

そして彼女自身の剣士としての強さも手伝つてか、その威力はまさに一撃必殺。こんな鉄剣でそんなものをまとめて受け続ければ、いくら妖気で強化しているとはいえ、遠からず木つ端微塵にされるであろうことは田に見えていた。

不利を悟り、飛影は一旦後ろへと大きく跳ぶ。だが、着地した瞬間足元から妙な力が放出された。間一髪で直撃は避けるが、両足が鎖のようなもので絡め取られてしまう。

「戒めの鎖です。かなりの魔力と時間をかけて練り上げましたから、ちょっとやそつとじゃ外れませんよ。完全に不意を突いたのに、下半身しか掛けられなかつたのはちょっと悔しいですけど」

「くっ・・・」

横のビルの陰から、シャマルが厳かに姿を現した。シャマルは飛影の素早さを脅威に思い、足を止めるために気配を極力隠しながらずっと魔力を練っていたのだ。おかげで支援は最低限しか出来なかつたが、動きを止めたことによる影響は大きい。

「ほんじゃ、止めだ！アイゼン！」

『Explorion-Raketenform!』

ヴィータが叫ぶと、ハンマーの形状に変化が生じた。片側に岩盤を打ち抜くときに使うような杭が現れ、もう片方にはロケットブースターのような突起が装着される。そしてブースターから凄まじい力が吹き出してそれを推力としたヴィータが飛影に回転を繰り返し、速度を上げながら肉薄してきた。

飛影は足を捕らえられたままそれを見上げた。そして、近づくヴィータに向けたその目が、『初めて』攻撃的な光を帯びながら細まる。握った刀の柄がミシ、と音を立てた。

「オレを…………」

ヴィータは手加減していない。非殺傷の設定が組まれているからといって、アレをまともに受ければ無事ではすまないだろう。

だがそんなことはどうでもいい。少しは報いた奴らに、見せてやる。

自分の持つ、力の一端を。

「いけえええ！」

「舐めるなあツー！」

飛影の怒声と同時に、額を覆っていた巻き布が焼き切れ、紙屑のようく吹き飛んだ。瞬間、凄まじい力の波動が暴風となつて周囲に進る。

そして、額にある彼本来の力が眼を覚ました。それは腰だめに構えた飛影の左拳に集まっていき、一瞬で黒と赤を交えた獄炎と化す。熱が空気を侵食し、空間を陽炎のように揺らめかせた。

第三の眼が迫りくるヴィータを捉える。刹那、威圧感と力を伴い、強烈な光が噴出した。

「邪王炎殺

・・・

「なつー？」

「額に、目だと・・・！？」

「つー・ヴィータちゃん、離れて！」

シグナム達が飛影の額に驚き、そこからあふれ出す力の大きさに気づいたシャマルが、ヴィータに向かつて叫んだ。だが、最高速まで高まつていた速度を殺すのは不可能と考えたヴィータは、ありつけの魔力をデバイスに注ぎ込んで特攻する。

「くっ、ぶちぬけええええッ！」

「 煉獄焦ツー！」

炎を纏つた飛影の拳とヴィータ会心の一撃が真っ向からぶつかる。目もくらむような光が二人を中心にして走った。力のぶつかり合い、接触点からは稻妻が迸り、屋上のフェンスがなぎ払われる。だが、まともに拮抗していたのは数秒足らずだった。

『・・・Sorry, Master.』

謝罪の言葉がグラーフアイゼンから紡がれ、

バキン。

「な・・・」

ヴィータ自慢の相棒は、持ち手の中間から先が飛ばされていた。衝撃に耐え切れず、柄の部分が粉碎してしまったのだ。飛んでいったグラーフアイゼンは隣にあつたビルに激突して消える。

「うわああああつー？」

そして、ヴィータもまた、勢いをそのままに向かいのビルに突っ込んだ。どちらも心配はないだろうが、状況は変わった。飛影はまだ炎が灯る手を伸ばして無言で足に伸びる鎖を掴むと、それをなん

の造作もなく引きちぎりました。

「そんな！？」

シャマルが叫ぶと同時に、飛影は彼女の背後に移動していた。そして手刀を模した形でシャマルの首元を一閃し、その意識を刈り取る。飛影は崩れ落ちた彼女を受け止め、屋上に横たえた。

「シャマル！ 貴つ様あ！」

ザフィーラが飛影に接近し、怒りにまかせた一撃を叩きつけた。だが飛影の姿は再び焼き消え、彼の牙と拘束魔法は屋上の床を粉碎したのみで飛影を掠りもしない。ザフィーラの上方から失望したような声が響いた。

「ただ突っ込んでくるだけとは・・・無策にもほどがある」

「何ッ・・・がつ、ああああつー？」

ザフィーラが声に気づいたとき、飛影は彼の真上にいた。その僅かな硬直の隙にアイゼンを碎いた一撃が落とされ、体が一瞬にして流れ消える。そして気付いた時には、屋上から床をぶち抜いて一階まで叩きつけられていた。

「あ、ぐ・・・」

ザフィーラは、そこではじめて自分が殴られていたことを悟った。体を起こうとするも、打つけられた身は言つことを聞かない。まるで心と分離してしまったかのようだ。そして彼の意識は瞬く間に遠くなり、そのまま闇に沈んでいった。

「ザファイーラー」のつ・・・アイゼン、リカバリー・カートリッジ
ロード、ギガントフォーム！」

『Explosion - Giga nt Form!』

リカバリーによって修復されたアイゼンが新たな薬莢を二つ吐き出した。すると、またその形状が変化し、今度は巨大なハンマーの形を取る。

『Explosion - Komet fliegen!』

さらに薬莢が三つ排出され、ヴィータの手元に彼女の体躯と同じ、いやそれよりも巨大な鉄の弾が現れた。

古代ベルカ式中距離射撃魔法、コメットフリーゲン。シュワルベフリーゲンの発展強化型で、ヴィータの持つ攻撃魔法のなかでも指折りの破壊力を誇った魔法だ。本来なら巨大といえど規格はもう少し小さい玉なのだが、ヴィータはほぼ全力でそれに魔力を注ぎ込んだため、規模が増していた。

ヴィータは飛影をその目で見据える。そして、宙に浮いた鉄塊を巨大化したアイゼンで力任せに叩きつけた。

「ぶつと・・・べえ！」

ヴィータが弾を打ち据えると、赤く発光した鉄塊が飛影に向かって飛来していく。それに込められたパワーはかなりのものだ。それこそ、ビル一個など吹き飛ばして余りある威力を持っているだろう。加えて、それを避けたとしても迎撃したとしても、爆風と鉄片まで

は防げまい。

（当たれば瞬殺、避けねば上空で待機してゐるシグナムが一撃入れて仕舞いだ！）

必殺の一撃に勝機を見出し、力づく、ヴィータ。だが、飛影は迫り来る鉄球を一瞥すると避けよつとせずに左手を掲げ、

「フン・・・・」

受け止めたと同時に一瞬で消し飛ばした。ヴィータが渾身の力を込めて放つた鉄弾は赤い光となつて放射状に飛び散り、空のなかに消えていく。残つたのは焼け爛れた空気だけだつた。

「なつ・・・・！？」

「舐められたものだな。碌な力も通つていない鉄屑が、このオレに通用するとでも思つていたのか？」

切り札として放つた鉄球があつけなく消されてしまつたことに、ヴィータは茫然自失してしまつ。だが、それは大きすぎるどころではない隙だつた。

「仕舞いか？ なら終わるまでここで寝ていろ」

「あ・・・・」

悲鳴を上げる暇なく、その小さな体が風を切つた。衝撃をまともに受けた体は慣性に従つてあっけなく吹き飛ばされ、ヴィータは意識を手放す。飛影はその姿が先ほど突つ込んだビルの中へ消えてい

くのを見届けると、空中で構えをとつたまま固まっているシグナムを見やつた。

- Side Fate Testarossa Harlaw

「す、じ、い、・、・、・、」

飛影がヴィータの大鉄球を消したのを見て私は感嘆の声を上げた。飛影の力は知っていたけど、シグナムたち四人をたつた一人で圧倒するなんて私やなのは、さらには主であるシランクのはやてでも厳しい状況だらう。

そしてそこまでのことをしている彼は決して本気ではない。本当、格が違うとは彼のためにあるような言葉だ。わかつていたつもりだつたけど、その差のあまりの大きさに少し落ち込んだ。

「信じられません・、・、・、」

そこでデータを取つていたシャーリーが呆然とした様子でキーボードから手を離すのが見えた。表情は理解することを拒んでいるかのように歪んでいる。

「なんや？ 今のどうやつたかわかつたんか？」

「ええ・、・、今の場面での飛影さんの周囲に発生した推定熱量を割

り出してみたんですけど・・・」「

シャーリーはデータを読み込んで画面に表示させる。そこに記載されていた数値を見て、はやてと私は目を剥いた。スバルはそれを見ても首を傾げているが、遅れて覗き込んだティアナからは血の気が引いていく。

「推定瞬間出力、温度換算・・・約1万2000度・・・!?」

「は！？」

「ええ、と・・・ティア、それってどれぐらい?」

「このバカスバル、少しは自分で考えなさいよ！いい！？ヴィータ副隊長の鉄球は熱で・・・」

「ええ・・・おそれらく熱で蒸発させられたんですね・・・」

えええええええー！？」

ライトニング隊の一人とスバルが目を見開いて驚いた。それはそうだろうと思う。いくらなんでも、アレだけの質量の魔導鉄球を溶解という工程をすっ飛ばして一瞬で蒸発させるなんて反則すぎだ。もはや強いとかそういう次元を軽く超えている。

「あ、あの大きいつきい鉄球を、もんじゃ焼きみたいに溶かしちゃうな
んて・・・」

「ス、スバル、その例えはどうかと思つけど（ちょっと際どいし、
とかなんでもんじゃ焼き知つてゐの……？）……でも、そ

の意見には概ね同意かな・・・

彼の力を良く知るなのはも口元が引きつっていた。なのはや四人に苦笑しながら、私は視線をモニターに返す。

（・・・まだ、追いつけてないんだね・・・）

飛影がヴィータを吹き飛ばしたのを見ながら、あの時見た彼の背中がまだ遠いことに僅かな寂寥を感じる。憧れであつても、目標であつても、私の何もかもから遠すぎる存在である彼を、そもそも追いつけるかも分からぬ彼を追い続けるのは少し辛い。

だが八年経つた今でも変わらないことがあった。それは私が彼を信じ続けているということ。ヴィータを相手にした飛影が取った行動を見て、私は自分が間違つていなかつたことを改めて感じ、胸元に今も光る氷泪石をそつと握った。

- Side out -

「残るは貴様だけだ。どうする？ 降参するか？」

燃え盛る炎を左手に纏い、飛影は挑発するように誘つた。額の邪眼が鈍い光を放ちながら、真っ直ぐにシグナムを捉える。シグナムは一度目を閉じ、剣を正眼に構えて笑みを零した。

「・・・愚問だな。一度勝負を挑まれた以上、そしてそれを一度受

けた以上、ベルカの騎士が引くことはありえん！例え

横に難いだ剣からまた薬莢が飛び出した。落ちていつた薬莢が飛影がいるビルの屋上に落ち、甲高い音を立てる。同時にその刀身から今まで最大級の炎が燃え上がった。

「 例え、最後の一人となろうともな！」

「フン、いい心がけだ。ひとつ教えてやろう。オレは確かに殺しながら山ほどしたことがあるが、人間をこの手にかけたことはない」

飛影は淡々として言う。もつとも靈界から指名手配を受けていた時には悪事も働いたし、魔界の穴での戦いの際は一人切り捨てたのもいたが、急所は外していたから死んではいないだろう。かなりいい加減だが飛影は自分の中でそう結論づけた。

シグナムは飛影の言葉に一瞬呆気に取られた。が、剣の柄を握りなおして彼を正面で見据える。

「 そう、か・・・私も非礼をわびよう。自分のことを棚上げするとは騎士失格だな・・・」

数メートルの距離を空けたまま一人は剣を手に対峙する。だがお互いにわだかまりがなくなつたせいか、その表情は晴れやかだつた。左手の炎を搔き消した飛影は、刀を腰溜めに構えながらシグナムを誘う。対するシグナムは顔から陰を取り除き、剣を両手で構えて目を閉じた。

緊迫した空気があたりに満ちる。風が流れ、雲が揺らめき、海から来る匂いが一人を包み込んだ。

そして、決着の時がくる。

「ヴォルケンリッターが一の騎士。烈火の将シグナム、参る・・・
はああああっ！！」

凄まじい速度でシグナムは間を詰めた。体の魔力は一点のみに注がれ、刀身の炎は猛りを上げて刃を巻き込む。

きっとそれは彼女にとつて、今までで最高の一撃だつた。それを迎え撃つ飛影はその姿に笑みを深くする。シグナムもその一瞬だけは心から笑っていたのかもしれない。

「紫電　　・　・　・　妖剣　　・　・　・」

心が肉薄する。極限にまで高められ、圧縮された剣気が爆発した。

「一閃ツ！！／十六夜！！」

鋼が打ち合う音のあと、訓練場に静寂が落ちる。一人は低く姿勢を取り、振り抜いた得物を携えて止まっていた。と、数秒の時を置いて飛影がすつと立ち上がり、剣の露を払うように真横に振る。すると、それに重なるようにして飛影の背後で鉄音が響きわたつた。

「一閃ツを撫でつけるように、海風が薙いでいく。飛影が剣を收めて振り返ると、剣を握ったまま気を失つて倒れているシグナムの姿があつた。

『や、そこまでやー勝者、飛影くん！』

慌てた声色で終了が宣言される。号令と同時に飛んでくるなのは、達を横目で捉えながら、飛影はいつもの自信に満ちた笑みを浮かべ、空を見上げた。

第五話 模擬戦～剣と炎と呪われし眼（後書き）

第五話でした。

戦闘シーンが上手く書けたかどうかすごくぶる不安な今日この頃であります。

さて、まえがきにもあつた、本当にちょっととした報告を。

今日確認してみましたところ、なんとアバゲ五万（四捨五入で六万）に達していました！

し、信じられません。システムが一回遅れになつていらぬやうですが、これほどたくさんの方々に回を通してもらえるとはー。

読んで下さる皆様、本当にありがとうございます！

今後もより一層の努力と文章力向上を図りますので、応援と感じ想をよろしくです！

感想は質問でもなんでもいいので、気軽にどうぞ。

それでは次回にまたお会いしましょうー。

第六話 存在定義～過去の片鱗（前書き）

奇跡です・・・三日で小説を仕上げる「」ことができましたよー。

少し会話文が多いせいもあるんですが、とにかく形になつたので投稿することに致しました。

少し短めですが、はりきつていきましょー。それでは第六話です！

六課のブリーフィングルームは重い空氣で満ちていた。明るく潑刺とした雰囲気が六課の美点だが、今はそれを求めるることはできない。その原因是先ほどの模擬戦を勝利で飾り、今はソファに体を沈みこませていい一人の男にあつた。

「説明は・・・してくれるんやよね？飛影くん」

「・・・」

いつもおちやらけた雰囲気は成りを潜め、機動六課部隊長の顔になつているはやてが飛影に詰問する。部屋にはFWの新人四人と先ほど飛影にやられたヴォルケンリッターの四人、そして分析担当のシャーリー・ヘリ操縦士のヴァイスもいた。そしてなのはとフェイドは彼を庇うように両側に控えている。

「聞きたいことは山ほどあるんやけど、まずはこっちちゃん重要なのは聞くで。飛影くん、君は一体何者なんや？」

その質問に飛影の横にいた二人がびくつと震えた。はやは一人の反応を横目で見ながら言葉を続ける。

「なのはちゃんとフェイドちゃんからは危ない所、具体的なことは知らんのやけど、そこを助けてもらつたって聞いてる。一人が君のことを信頼に足る人物やつて思つてるんもわかつとるつもりや。せ

やかて、私もはいそうですかって納得はできへん。私らみたいにバイクスを使わいで出したあの炎、人間離れしとるそのスピード、それにより・・・

そこで言葉を切り、はやては一同を見据えた。顔を伏せるなのはとフロイト以外、その心情は同じようだつた。

「何より、あの『田』や。あれは流石にスルーできへん。話していくへんか、飛影くん？」

飛影に視線が集中した。そこには猜疑心、あるいは敵意に近いものもある。それを感じとつてフロイトが慌てて間に入つた。

「は、はやて、飛影にだつて事情があるんだから無理やりは『事情つてなんや？それは私らには話せないことなんか？』え、えつと・・・それは、その・・・」

はやてに遮られ、フロイトは尻すぼみに言葉を小さくしていく。その横でなにも俯いていた。はやての目が確信の光を帯びる。

「フロイトちやんは知つとるみたいやな。あとなのはちやんもそうやろ。けど、六課を執りまとめる者として私は見過ごすわけにはいかん。そんなもんを抱えたまんまじや、こつから活動に支障がでてまうかもしれんしな」

仕事の顔をしたはやてがぱつたりと切つて捨てる。取り付く島もなかつた。嫌な沈黙が部屋の中に降りていぐ。だが、それはあつけなく破られた。

「フン。聞かせてやる義理はないが、いざれわかることだ。いいだ

るつ、先ほどの条件を飲んだ礼だ、話してやる。別に秘密にしておくつもりもなかつたからな」

「つー飛影くん・・・・」

「飛影・・・・」

心配そうにするのはとフュイトにフツと笑い、飛影はソファに身を沈める。そしてその姿勢のまま、まるで酒の肴にするような軽い口調で語り始めた。

自分は人間とは根本的に違う妖怪と呼ばれた種族で、物心ついた時にはもう親はおらず、ある時まで盜賊を生業とし、一人で生きてきたということ。

スピードは自前だが先ほどの炎は妖気と呼ばれる力を使ったものであり、自分が特別な炎を扱う火炎術者だということ。

この額にある瞳は邪眼と呼ばれ、かつてある目的のために手術で手に入れたものだということ。今は自力で取り戻したが、その際全ての力と人生の一部を代金として差し出したこと。

そして、人間の仲間たちに会つために魔界から靈界を通して人間界へと行こうとしていたとき、次元の狭間に巻き込まれてこの世界に來てしまい、そこで同じように次元を通つて來た妖怪に襲われて

いたなのは達を助けて出合つたことなどを話した。

飛影の話が終わったとき、誰も言葉を発することは出来なかつた。彼はなんでもないよう話すが、その隔たりが事情を知るなはたちには辛く、知らないはやて達も自分たちを寄せ付けないようにしていることがありありと分かつたからだ。

「こんなところか。やでどうする？ こんな危険なヤツを人間たちの中へ置いておいていいのか？ オレを放り出すのなら今のうちだぞ。機動六課部隊長、八神はやで」

声色を変えることもなく、不敵な笑みで飛影ははやてを見据えた。はやては先ほど話が重すぎたためなのか、居心地が悪そうに目を伏せる。だが、なのはとフェイトはそれ強く否定した。

「危険じゃないよ！ 飛影くんは、確かに厳しいところとか口が悪いところとか意地悪なところとかあるけど、酷いことは絶対にしない！ 私は飛影くんに救われたし、飛影くんがいたからここまで来れたんだよ？だから、そんなこと言わないで……」

「飛影はこんだからみんな誤解しちゃうかもしれないけど、とっても優しい人だよ。私達が今生きていられるのも、こうしてみんなと会えたのも、なのはと笑つてられるのも、全部飛影がいたからできた。私はそんな飛影にずっと感謝してるし、それはこれからも変わらない。妖怪とかそんなのは関係ないんだ。私はずっと飛影の味方でいるつて、あの時そう決めたから。だから……」

優しく、しかし強い信念を感じさせる声と言葉で一人は自分の思

いを紡いでいく。六課のメンバーはそれを黙つて聞いていた。敵意は今までかなり薄れたが、代わりにかなりの戸惑いが部屋に満ちている。

誰もがこの状況に肩身を狭くする。だが、それを破つたのは意外な人物だった。

「いいんじゃねーか？別にここに置いても」

声の主を全員が捉える。それは説得がもつとも難航するだろうと思つていたスターズ隊の副隊長、先ほどの模擬戦で飛影に敗れたヴィータだった。

なのはやフェイトもそこから賛同を得られるとは思つていなかつたのか、きょとんとした顔でヴィータを見つめている。飛影も少し驚いているようで、その鋭い目を丸くしていた。

全員から視線を向けられた当の本人は「な、なんだよ」と顔を若干赤くしながら視線を横に流す。

「なのは達の言つてることは嘘とか虚偽目ぢやないつて思う。だってそいつ、あたしを倒す時に寸止めしてたんだよ。アレだけ喧嘩売つたんだ、本気でぶつとばされてもおかしくなかつたのにさ」

歯切れが悪そうにヴィータは呟いた。寸止めで吹つ飛ばされるのもすごいが、それが意味するのは飛影にはヴィータを潰すつもりが

なかつたといつことだ。ヴィータに同意するよつにシグナムも続く。

「確かに、な。斬り合つていた時も最後の一撃も、ヤツの剣は全て峰だつた。お前達二人も撃墜されてはいるが、急所は外してあるようだからな。後に響いてはいなうだろ?」

シグナムの言葉に思うところがあつたのか、シャマルとザフイラも考え込むようにして視線を下げた。そして一度全員を見渡してから、飛影を見つめ「それに」とシグナムは続けた。

「こやつの剣には一滴の濁みもなかつた。芯から精錬されたような邪氣のないものだ。あれほど澄んだ太刀筋を持つ者が根っからの悪人だとは、私にはとても思えん」

以上だ、と言つてシグナムは着席する。最後のはバトルマニアの勘に近いが、少なくとも飛影が排除すべき者だという認識はないらしかつた。するとシグナムを皮切りに次々と声が上がつた。

「あ、あたしは賛成ですよ。そんなに悪い人には見えないし・・・

「このバカスバル! 根拠のないことを簡単に言わないでつ・・・と言いたいところだけど、私にも彼が取り締まるべき犯罪者には見えませんね」

「えつと、僕も賛成です。そ、それにあんなに強いんですから!」

「わ、私も・・・なのはさん達の友達が悪い人のわけがないですし、なんだか、えつとその・・・んみたいだし・・・」

と、次々に賛同の声が上がつてゐた。そこに至つて、決定権を持

つはやてに視線が戻つてくる。はやては苦笑しながら溜息を吐いた。

「まったく、ここのでダメなんて言つたら私だけが悪者みたいやないか・・・なんて冗談や。私も飛影くんが悪人だなんて思つてへんよ。ただ六課のリーダーとして、納得のいく理由が欲しかつただけやらな」

はやてがそういうと、なのはとフュイトを中心として六課に笑顔が戻つてくる。一人がよかつたねと口々に零すなか、飛影は呆れたように溜息を吐いた。

「やれやれ。こいつら一人も救えないようなお人好しだと思つていつが、オレの勘違いだつたようだな。どうやらどうしようもなく突き抜けたバカ集団の一員だつたらしい」

「なんだとお！？ テメエもう一つぺん言つてみろ！ 今度こそぶちのめ「だが」あ？」

ヴィータがさつそく飛影の毒に噛み付く。だが飛影はそれをスルーして遮りながら、

「そんなバカは手が掛かるが・・・退屈はせんな」

力が抜けた笑みを見せた。その表情に全員があっけにとられる。そしてしばらくすると、我に帰つた数人が顔を赤らめた。

(フュ、フュイトちゃん・・・飛影くん、い、今笑つたよね)

(う、うん・・・いつもの飛影もすゞくカツコいいけど、今のは不意打ちだつた・・・か、顔が熱いよ・・・)

(あひやー、あかんなあ。いつや、なのはひやんとヒイトひやん
がコロッともりあれてまつわけや。ま、私はもつと優しいんが好みや
けどなー。)

(ふ・・・いけ好かんと思つていたが、認識を改める必要がありそ
うだな・・・)

(あ、う・・・い、今のドキッは氣のせいだー。)

(な、何かしぃ・・・背中にジグクつて来たのは・・・)

(貴奴にもあんな表情が出来るのか。これなら大丈夫だな)

(な、なんだろこれ。私、どうしたんだろう・・・)

(はあ、こりゃ大変ね。飛影さんも・・・)

(クールでカッコいいなあ・・・)

(飛影さんかあ・・・やつぱり、お んみたい・・・)

(みなさん大変ですね・・・)

（でも仲がいいのはいいことなのです…ゴーヴンもしてみたいですねー！）

飛影は自分のギャップに少女たちが当たられていることなど露ほども知らず、ぽわーっとなるメンバーを不審そうに眺めていた。蛇足ではあるが、後に飛影が笑うことにはほとんどなかつた。が、これは飛影を意識し始めた少女達の脳内で永久保存されている。

そして数十分後。とりあえず六課への居住が許された飛影は、スバルやヴィータ、シグナムから模擬戦のことについて質問攻めに遭うこととなつた。そのほとんどがヴィータやリイン、そしてスバルなどである。

「なあ飛影。さつきあたしらと打ち合つてた剣だけど、アレつて本当にただの剣なのか？」

「次から次へと騒々しい奴らめ・・・貴様らのデバイスとやらの材質は知らんが、相当な強度と見たのでな。オレの妖氣を通して構成を強化しただけだ」

「ああ、だから互角に打合えたんですねー、納得です！でもそんなことも出来るんですかー、妖氣つてすごいです！」

途絶えることのない質問の嵐に飛影は渋りながらも答えていく。当初は無視していたのだが、どれほど蚊帳の外に置こうと破つてしまつてくるので答えたほうが楽なのであつた。だが、リインとヴィータが納得する横でシグナムとシャーリーが唸つていた。何事かとみんなが集まつてくる。

「どうしたんや？」

「あ、いえ。私がやられた時、飛影が一体何をしたのだろうかと調べていたんですが……」

「ああ、最後のシーンだね」

そこには画面の中で対峙するシグナムと飛影の姿があつた。そこまではいいのだが、動いて交差した瞬間だけでは、とてもシグナムがやられるような一撃を受けているふうには見えなかつたのである。横にいるシャーリーもいろいろな計測器やグラフを出して唸つていた。

「特殊な術か何かだと思ったんですけど、どうにも分からなくて……・隠蔽性の高い攻撃でしょうか……？」

「私みたいな打撃攻撃じゃないだろ？」「ティアみたいな幻影系かな？」

「うーん、分からぬけどたぶん違うんじゃない？」「だから攻撃したとか出でないから」

意見を交わしながらも、シャーリーは納得はできていよいよだつた。分析を得意とする彼女もお手上げのようである。そんな二人の周りに集まつていたなかから顔を出し、フロイトが飛影に尋ねた。

「ねえ飛影、あそこで一体どんな魔法……じゃなかつた、技を使つたの？」

「あ、それ私も聞きたいな。確か、こぞよこつて言つてたよね？」

ストレートに尋ねるフロイトになのはが援護射撃をかける。皆も興味津々であるよつてそこかしこで聞き耳を立てていた。

「別に技でもなんでもない。ただ連續で斬つただけだ。名前も、知り合ひが勝手につけたにすぎん」

口調はいつもどおりだが、飛影は少し優しい目をしながら特徴的な青緑の髪を思い出した。これにはもともと名前などなく飛影の剣の凄さを知つた『彼女』がつけてきたのだが、まんざらでもなさそうではある。少なくとも彼の周りはそのよひに感じた。

「まつ？ ちなみに何回斬つたのだ？」

シグナムが興味によるものか語尾を強めながらつと飛影に顔を寄せる。バトルマニアとして、そして剣士としての血が騒ぐのだろうが、それを見たなのはとフロイト、そしてヴィータやシャマル、さらにはスバルまでがむつとしているのには一人ともまったく気づかなかつた。

そして、彼は彼で大して興味もなさそつな口ぶりで、

「十六回だ」

『……はい？』

全員が思わずハモッてしまつほど見事な爆弾を落とした。新人たちやはやはもちろん、なのはやフェイト、そして実際に戦つて彼の強さを知るヴォルケンリッターの四人ですら完全に固まっていた。

「つ、嘘やろ？十六回つて・・・シャーリー！」

「は、はい！映像をウルトラスープースローにしてみます！」

サー・モグラフィーやら魔力視化プログラムやらを落として、シャーリーがさきほど映像を持つてくる。そして出来うる限り最高の遅さで件のシーンを再生しなおす。するとシグナムがゆっくりと一閃するまでの間に、まるでそこだけ時間が違っているかのように太刀を振るう飛影が映つた。

例えるなら、乳母車を押していた横をF-1カーが最高速でぶつちぎつて行つたぐらいの違いだ。パネルを操作していたシャーリーやはやは、ブリキのような動きで首を動かし、飛影に向かつてありえないものを見るような視線をよこした。完全に呆気にとられている。

「なんつー出鱈田な・・・あたしの鉄球を蒸発させたつて聞いた時も思つたけどわ・・・」

「もつ、驚く氣力も湧かんな・・・」

「す、すすす、すつごーい！ねえねえティア、どんな訓練をすれば私もあんなふうに動けるようになるのかな！？」

「はあ・・・いつもながら、アンタのポジティブさは時々呆れを超

えていくわね・・・」「

「す、す、（僕も、この人みたいになりたいな・・・）」

「ほわー・・・（尊敬の眼差し）」

ヴィータとシグナムは疲れたように肩を落とし、スバルは目を輝かせながら隣にいるティアナに呆れられていた。エリオとキャロも、飛影に向かつて憧れの人を見るような視線を送っている。なのはやシヤマルは皆と飛影を交互に見比べながら、顔を付き合わせて苦笑いしていた。

そんな中、不意にフェイトが近寄ってきた。少し緊張した様子で飛影の隣に座る。

「ね、ねえ飛影。も、もし・・・もしだよ？飛影がよかつたらなんだけど・・・私もスピードタイプだし、剣を使つたりもするから・・・今後のために、あの、その・・・わ、私に稽古をつけてくれないかな？」

「――――――」

両手の人差し指をつき合わせ、頬を若干赤くしながらフェイトは尋ねた。場が水を打つたように静まり返る。飛影は彼女の態度に怪訝そうに眉を寄せたが、少しの間をおいて小さな溜息を吐いた。

「・・・オレは早朝に訓練する。勘が鈍らんように剣もその時に使うからな、付いてくるなら勝手にしろ。だが試合相手としてないが、邪魔は許さん。それにお前から頼んできたことだ、オレに手加減など期待するなよ」

「あ、ハ、ハハー！ ありがと、飛影！」

そつけなく言う彼の言葉を聞いて、フェイトの顔に赤い笑顔が咲く。飛影がそれにやりにくそうな表情をしてくると、フェイトの後ろからなのはがひょいと顔を出した。

「や、それなら私も！ 早朝訓練前なら時間とれぬし、フェイトちやんと飛影くんが一緒に暮らす」（くためになるしつ）（飛影くんを独り占めするのはずる）よ、フェイトちやん？」

「な、ならあたしも、時々ならいいぞ！ ま、負けっぱなしなのは、気に喰わねえからな！（あ、あたしだつて強くなりたいからな。それだけだぞ！？）」

「ふ、騎士は引かぬ。私も参加させても、（抜け駆けは卑怯ではないが、テスタークッサ？自分だけ強くならうなどと）」

「け、怪我は任せてくれださこいつ（ま、まあ実際必要だものね……）」

「

「私もやります！（なんかざわつくのはよくわからないけど、なのはせんもやるんだし、とりあえず参加しなきゃっ！）」

「キ、キヤロ。僕たちは基本見学にして、じつかり学ばせてもらおうよ・・・（み、みんなすう）」（氣迫だ・・・）

「うそり（飛影さんと特訓かあ・・・）」

なのはを筆頭に、次々と飛影との教練に参加を表明する機動六課

のメンバーたち。予想外だつたのか、飛影は少し面喰らつてゐる。そしてはやてとティアナ、そしてシャーリーにリインフォースは部屋の隅で溜息を吐いた。

「はあー、はつきり自覚しとるんはなのはちやんとフロイトちゃんだけかいな。でも飛影くんはわかつてないみたいやし、これから面白くなりそうやなあ。クシシシシシ・・・」

「はやてさん、笑みが邪悪ですよ・・・」

「わくわくするわー。いろんなデータが取れそうね、リイン」

「はいですーそれに私も飛影さんがいてくれて楽しいですー」

離れた場所で和やかに談笑する四人を飛影は殺意を漂わせる目で睨んだが、四人が即座に目を逸らしたので舌打ちする。その間にも順番がどうたらじつたら、内容があーだこーだと、付き合わされる自分そっちのけで言い合いを続いているのは達に、飛影は頭痛をこらえるように頭に手を置いた。

結局一田田の田程は決まらず、翌田大勢で押しかけたのは達から飛影は当然のように逃げ出した。その後に偶然会ったエリオとキヤロに稽古をつけることになり、一人が本気で羨ましがられたのは余談である。

それからしばらくして、逃亡する相手を捕らえるといつ訓練ミッションが追加されたが、それが飛影の行動を契機としているかどうかは定かではない。

第六話 存在定義～過去の片鱗（後書き）

二次創作小説を書いていて思つこと。それはキャラが魅力的であればあるほど扱いが難しいということあります。

飛影は普段の孤高なツンデレさがいいんですが、対して人とわかりあおうとする描写は困難を極め、それでいて話の筋に沿わせなくてはならないので、ひどく頭を悩ませる結果となつてしましました。

しかも今回はテレの回です。極力飛影っぽくまとめたつもりですが、なんだか別人のような氣も・・・彼を表現する難しさを今一度認識した作者であります。

ていうか、笑つただけでフラグ立てまくりとか我ながらかなり強引すぎでした・・・勢いでやつてしまつたことですが、基本がご都合主義かつハーレムコンセプトなので後悔はしていません。倫理的にいいのかは別として・・・

さて、現在六話まで執筆しましたこの小説ですが、いろいろ悩んだ末について先日感想のユーザー制限をとつぱらいました。これで誰でも感想を書き込めるはずなので、少しでも作品に対する意見や質問がありましたら、作品評価の方と並んでどうぞ。

次回、といふか今週は自動車の卒検の準備とかがあるので、もしか

したら更新時期が伸びてしまうかもしませんが、なるだけ皆様をお待たせしないよう努力するつもりであります。

ではでは、皆様とまたお会いできるのことを願つて今回はこれにて。
再見！！

第七話　日常と邂逅～予兆の先兵（前編）

第七話の投下です。

昨日の夜が唐突に空いたので、なんとか間に合わせることができました。おかげで読者様を待たせることにならずに幸いであります。

さて、今回は日常編、そしてこれから始まる戦いの日々の前置き回となります。

この回は作者とじつも転機になる回なので、張り切って行きましょう。

それでは第七話です、じいぞー！

時空管理局機動六課に所属する隊員の朝は早い。まず六時台に起床のベルが各自の部屋で鳴り、身だしなみと服装を整える時間を終えたらすぐに朝の教練の開始である。

「ほりーー、皆もっと頑張って！」

機動六課の訓練スペース、陸戦用空間ショミレーターの中で声を上げるのは高町なのは教導官。この訓練は彼女の完全指導でもって成り立っている。本当はライティング隊隊長のフェイトもこれに携わっているのだが、執務官といつ立場上そう簡単に両立するのは難しい。

なのはの教練は厳しいが、それを苦だとは思つても嫌だと思つものは少ない。魔導師として最低限実戦に耐えつる実力がなければ、自分でなく仲間も危険に晒すことになる。そのような任務を受けることも多々ある管理局において、有望な若手を順調に育てている彼女の教えには定評があった。

そういうつじで、早朝訓練の最後、四対一でのショートイベースジョンが終了する。肩で息をしているスバル達を眺めながら、なのはが空中から降りてきた。

「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよう！」

「「「「はいっー」「」「」

四人はへとへとになりながらも整列し、ようやく教練が終了する。なのははバリアジャケットを解くと、降り立つた先で教練を眺めていた飛影に声をかけた。

「ねえ飛影くん。飛影くんから見てどうかな、スバル達は」

一同に軽い緊張が走った。彼が機動六課に来てから早いものでもう一週間が過ぎ、彼は民間協力者として訓練に立ち会っている。直接指導は今のところしていないが、なのはの補佐のような形に收まり的確に指導してくれる彼を四人は尊敬していた。

あの四対一の模擬戦の後、彼の力を計測した六課のメンバー達はかつてないほどに驚かされていた。魔力はないが、現時点で判明しているだけの戦闘力から換算したところ彼の実力はSSランク以上、つまりリミッターをかけていないのはやフュイトより上であったのだ。あれで加減していたという事実は、はやすらびっくり仰天させている。

それが判明したときにはリインやシャーリー、そしてスバル達も開いた口が塞がらないようであったが、なのは達はそれほどでもなかつた。彼女らはかつて飛影の戦いを一度見ていたため、飛影が自分たちを軽く捻るほどの実力者だと確信していたからである。寧ろ、低評価なのではないかとの声も上がっていた。

そんな理由からか、もはや六課で飛影の名を知らぬものはいない。キヤロやエリオなども積極的に飛影と接しているし、時には彼から教授を受けたりもしている。

ヒリオに至つては既にフュイトと並んで大きな目標になっている
ようで、訓練にもより一層の力を入れていた。ヴァイスやシャーリー、
ルキノなども彼の持つ力に並々ならぬ関心を寄せている。

そして意外なことに、ヴォルケンリッターの騎士達やはやても彼の
力を認め、信頼を置き始めていた。

特にヴィータやシャマルは何かと彼に関わろうとするし、シグナ
ムに至つてはスピードを除けば自分と同じタイプである飛影に並々
ならぬ対抗心を燃やしていた。そして、六課きつてのスピードタイ
プであるフュイトに何度も戦いを挑んでは、日々その腕を磨いてい
るらしい。

なんでも彼女曰く、

「炎でも剣でも負けていたら、烈火の将の名が泣く」

とのこと。だが今のところの戦績は43戦中0勝43敗で、一太
刀たりとも彼の体には届いていないという涙ぐましい有様であつた。
この間など、どこまでこの記録が伸びるのかと賭けをしていたヴァ
イスら青年将校をとつ捕まえて憂き晴らしをしている。

たつた一週間。されど彼の存在は六課で大きくなり始めていた。

だが、彼女たちは知らない。今でさえ凄まじい戦闘力を持つ飛影
自身も、なほはやフュイトらと同じく忌呪帶法と呼ばれるもので独
自に相当なりミッターを掛けていること、そしてその上からさらに
かなりの力を抑えており、それが彼女たちとは根底から違つほどの
ものであることを。

その驚愕の事実を六課のメンバーが知るのはもう少し後になる。

「フン。始めたころの千鳥足よりは少しマシになつたようだが、連携に穴が多くさだ。

ナカジマは直線的すぎ、ランスターは保守的すぎる。どちらも機を読むことを忘れるな。モンテュアルはもう少し考えてから動くことだ。いぐりスピードがあつても、バカ正直に真正面から突っ込むだけでは芸にもならんからな。攻撃と同時に回避を想定し、方向を広げて機動を柔軟にしろ。ルシエはまず間合いの確保と術の効率化を図ることだけを考えて、相手との距離をいつも頭に留めておけ。動けないアシストなど、ただの的だ」

飛影の厳しい言葉に全員が引きつった顔をした。彼の言葉に甘さは一切ない。ただ思つたことと気づいたこと、そして事實を淡々と述べているだけ。しかしだからこそ、その指摘は的確だと言えた。

厳しい言葉の裏に嘘はない。飾つても仕方がないことを彼は知っているのだ。そして、マシになつたということは成長しているという搖るがない事實を指していた。

「お？みんなよかつたね。相変わらずの辛口だけど、ちゃんと伸びてるつていう飛影くんのお墨付きを貰えたよーそんなところで、早朝訓練は終了です。お疲れ様」

はあああ、と全員が脱力した。それを見てなのは苦笑する。慣れ始めてきてはいるが、メニューは過酷だ。この反応も仕方のないことだらう。と、そこで焦げ臭い匂いが辺りに漂つた。ティアナがはつとして指さすと、スバルのローラーブレードが火花と煙を上げていた。

「うわっ、やばっー無茶をせちやつたあ～・・・」

しまつたという表情で愛機のローラーを持ち上げるスバル。なのはが整備に回そうと言つたが、誰が見てもかなりガタがキてているのは目に見えていた。聞くところによるとティアナの銃も同じような有様のようである。なのはが首をかしげながら考え込んだ。

「う～ん、皆も慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに・・・あれ? 何の音?」

意味深長な台詞を口にしていたなのはは、突如響いた電子音に四人を見た。だが、四人とも心当たりがないよう首をかしげている。すると飛影が嫌そうな顔でポケットを探り、深紫のコンパクトを取り出した。

全員が不思議そうに見守るが、飛影はそれを開こうとしない。しばらくそのままでしたが、いきなり音が鳴り止むと飛影がよつやくそれを仕舞う。しかしそれも束の間、なのは達の疑問を吹き飛ばす勢いで、今度は上方から怒鳴り声が響いた。

『まったく、持つてあるなら早く出んか! 何のために通信機を持たせたと思っておるのだ!』

「「「「え・・・えええつー?」」」

全員が上を見た瞬間、驚きの声を上げる。そこにはいつもの空で

はなく、スクリーンに映したような透けた体の大きな人間がいたからだ。いや、大きく見える子供と……おしゃぶり？

「何の用だコロソマ。またくだらん茶々を入れにきたのか？」

なのは達が皿をまん丸にして固まっているなか、飛影は愛想の欠片もなさそうに返答する。コロソマと呼ばれた少年は呆れたよじり、いや諦めたように溜息を吐いた。

『お前は本つ当に相変わらずだな。そつちでも上手くやつてこのかどうか、じうして気を遣つたとこに』。定期に連絡はしろといつたはずだろ？それにぼたんから報告、といつか苦情が上がつてきている。あれでもお前たち浦飯グループの一員で紅一点だ。あまり無視してやるな、ベソをかいてたぞ？』

「フン、見当違ひのことばかり聞いてくる方が悪い。昨日など今日はそつちで何を食べたか、どんな料理があるかなぞと聞いてきやがつた。その場にいれば、オレが奴を釜茹でにしているといふんだ」

『……済まなかつたな。それについては後でみつちり説教していく。地獄の一丁目辺りに括り付けとけば少しはマシになるだら

く。コロソマがバツが悪そうに眉を寄せた。スバル達は、本氣で不機嫌になつている飛影と不穏な台詞に冷や汗を搔いている。そこにはがおぞるおぞる声を上げた。

「あ、あの……貴方は……？」

『ん？おお、そつちでの協力者か。いや、すまんすまん。ワシは靈界で長をやつとる閻魔大王の息子、コロソマだ。今は一応靈界の最

高責任者つてことになつとる。ユートリムはもうコーンマではないのだ
がな』

「れ、靈界つ！？靈界つて、飛影さんが言つてた人の死後を裁いて
逝き先を決めるつていう、あの世の世界……そ、それに閻魔大王
さまの息子つて、あわわわ……！」

スバルがコーンマの自己紹介を聞いて青くなる。他のメンバーの
反応も似たようなものであつたが、飛影はフンと鼻を鳴らすのみ。
あの世の支配者に対しても変わらない態度にタメ口、改めて飛影の
凄さを垣間見たスバル達だつた。

「それで、一体何をしに来た。まさか暇を潰すために来たんじゃな
いだろ？」「

『おお、やうじやつた。お前さんに渡すものがあつてな。役に立つ
かどうかは分からんが、なによりはマシだらうと思つて見繕つた。
今そつちに転送する』

コーンマがそう言ひ乍ら、飛影の前に一つの頭陀袋が落ちてきた。
そんなに大きくないそれを手にとつて中を覗き込んだ飛影は、しば
らべの後ため息を吐く。

「こんなガラクタを送ってきて、オレにビビりじりと言つんだ

『仕方なかろうし…あまり高位の靈具は送れんし、こつちだつて手を
借りたいほど忙しいのだ！それに靈界探偵の必須アイテムだから、
持つておいて損はないはずだぞ？お前用にカスタマイズしといたか
ら、妖氣でも問題ないはずだ。後々使う機会もあるだ』

やうにうつと、心底いらないといつぶつな表情をしている飛影を無視して「Hンマはなのは達に向き直った。彼に見られ、全員に緊張が走る。」Hンマはそのまま全員を見渡し、

『そちらの世界の方々、惜しみない協力まことに感謝している。飛影は少し扱いづらいうるがあるかもしかんが、これからも支えてやつて欲しい』

大きすぎる帽子を引っさげて頭を下げた。これは流石に予想外だつたよううで、なのはたちは慌ててしまった。

「ええつー？そ、そんな、頭を上げてくださいー。」Hンマさんにそんなことされたら、私たちどうしていいか・・・それに飛影くんを頼つているのは私たちも一緒にすかうー。」

「や、そうですよー。飛影さんには教えられる」とばかりで・・・とてもありがたく思つてこます！」

「Hンマの行動にぎよつとしたなのはやスバルをはじめ、皆がローハンマの言葉を零す。その様子を見て、懐かしむよつてHンマはふつと笑つた。

『そちらがもとい仲間を持つたようだな、飛影』

「・・・フン」

「Hンマの言葉にそつぱんを向いて飛影はつまらなそつこす。やじでHンマはポンと手を叩いた。

『おお、やうだ。もう一つ言つておつた。実はな、ワシが

で、そ と つ人 ・・・』

何かを言おうとしたコエンマの声に突如ノイズが入り始めた。それは映像にも伝わり、次第に薄れしていく。飛影はわずかに目を開いていたが、しばらくすると「ふつ」という音が響いて完全に消えてしまった。キャロが心配そうに飛影に尋ねてくる。

「口、コエンマさん大丈夫なんでしょうか？ いきなり切れてしまいましたけど・・・」

「心配など不要だ。前にもあつたが、単に次元が不安定になつてしまつた影響で通信が途絶えただけだからな。しばらくは使えんだろうが何か影響があるわけじゃない」

飛影はそう言つと落ちてきた頭陀袋を肩に担ぎ、面倒そつな様子で歩いていつてしまつ。なのは達は顔を見合せると少し楽しそうにしていた彼の顔を思い出し、ふふっと笑つた。

- Side subaru Nakazima -

「はー、気持ちいいー」

あたしはシャワーから流れ出る雨を顔一杯に受け止めながら思わず言葉を零していた。訓練は辛いけれど、終わつた後に浴びるこのシャワーの心地よさはちょっと言い表しがたい。

「スバル。気持ちは分かるけど、ほつたらかしにされてるキャロのことも考えなさい。頭に泡つけられたまま自分のことをやるんじゃ、いい気分しないわよ」

「あはは、『めんティア。つい・・・』

もはや条件反射となつたようにあたしは頭を下げた。謝るならキャロに対しぶしなさい、といつもながら厳しいお言葉を受け、キャロに改めて謝罪する。キャロは氣にしていませんから、と笑顔で見上げてきた。ふわあ、やっぱり癒されるなあ。

「訓練にもやつと慣れてきました。まだまだだけど、強くなつてるつて感じが出てきて嬉しいです。これもなのはさんや飛影さんのおかげですね」

キャロの台詞のなかに含まれていた言葉に、あたしは胸がざわつとなつてしまつた。

飛影さん

。

なのはさんとフロイトさんの命の恩人にして、人間でなく、なんと妖怪だという青年。おどろおどろしかつた妖怪のイメージは彼との出会いでかなり変わつたが、彼の話によるとやつた妖怪の方が多いとのことだ。何事も聞いてみるものである。

そんな彼だが、年齢を聞いてみるとなのはさん達より年上の二十五、六歳ほどだということがわかつた。あの背でその歳は少し驚いたというのが本音だ。怖いから言わないけど。

そして何より強い。あのシグナム副隊長達をたつた一人で倒した

ところのだから、もはや新人である自分ではお手上げだ。

その彼の教導は受けたことがないけど、試しに受けたらしいフェイトさんが大層お疲れの様子で帰ってきて、早々にぶつ倒れたことから、あたしを含めた全員が青い顔で拒否した。彼をあの強さへと押し上げる教練には大いに興味があるが、こちら花も恥らう若き身空だ。まだ死にたくない。

「そうね、彼の言葉には気遣いとかは全くない。けどだからこそ言つていいことは的確だし、ちゃんとその先の教示もしてくれるから助かるわ」

「はい。おかげで動きが分かつてきました。なのはさんは魔法とフォーメーション、飛影さんは個人の動きや役割をよく教えてくれますから」

ティアナとキャロが飛影さんの話題で盛り上がる。初めは警戒していたティアナや、なかなか話せなかつたキャロも今では普通に彼と会話をしている。もつとも彼自身無口だからか、話しかけても「そうか」とか「フン」とか短い返事しか返してくれないことも多いが。

（なのはさん達の想い人か・・・）

私は顔面にシャワーを浴びながらあの二人の顔を思い出す。ヴァイス陸曹に飛影さんの話を聞いた時のなのはさんは、あたしが見たことのない顔をしていた。

いつもの頼りがいのある顔じゃなくて、すごく強い感情を感じさせる顔。そしてそんな彼女の表情は見とれるほど綺麗だった。あの

ときは驚いたが、知つてみればなるほど「うう」とかと思つ。

少し前のことになるが、あたしはなのはさんが男性局員に告白されていた場面に出くわしたことがあつた。相手の男性はあたしから見てもかなりのイケメンで、その上性格がいいと管理局でも評判になつていた人だ。

だが、彼女は躊躇なくそれを振つてしまつた。相手の人は残念だなど苦笑して去つていつたが、あたしはどうしても聞きたくなり、気づけばなのはさんに駆け寄つて尋ねていた。

なんで断つちゃつたんですか、と。

今考えればかなり不羨な質問だつたと思つ。が、彼女は一度苦笑して優しい笑みを見せながら、

『私ね、もう決めてるの。その人はとっても気難しくて、子供の頃一度会つた以来ずっと会えてないんだけど、ずっとずっとと考えちゃうの。だからどんな人がいても私はダメ。無意識にその人と比べちゃつてるから。あはは、我ながらサイテーだけね』

あたしにそう言つて笑うなのはさんは、でも言つたことを後悔しているようには見えなかつた。むしろそれを誇りに思うみたいに胸を張つている姿を見て、彼女ほどの人にそこまで想われる男性つて一体どんな人なんだろう、と考えたのも一度や二度ではない。

だから、会つた時はなんでつて思つた。確かに顔は整つていてるけど田つきは悪いし、態度は刺々しい。姿も性格もまるで悪党だつた。見るからに協調性の欠片もなさそうな彼を私はいぶかしんだが、なのはさんだけでなくフェイトさんまでが彼を慕つていることを知

つたときは、常識が覆りそうなほど心の底から驚いたものだ。

でも、それがひどい勘違いだったことはもう分かっている。普段の彼はそつけなくて、その上他人への対応も粗雑かつ威圧的だけど、内面はあたしたち以上に人として成熟しているし、その力は本物だ。

過去の片鱗を聞いただけであたしは涙が出そうになってしまったけれど、彼はそれを事実として受け止められる強さを持つていた。『人』とは違うにもかかわらず、それを『人』である者達に曝け出せる強さを。

その時初めて、二人がなぜ彼を慕っているのか、そのことが少しだけ分かつたような気がした。ほんの、少しだけ。

そして同時に羨ましかった。『自分』のことを話せる『強さ』が。それからだらうか。憧れに似た感情に急かされ、自然と彼の姿を目で追うようになったのは。

いや、憧れとはどこかが違う、もっと強い……

「スバル！このバカ！いつまでシャワー浴びてるのよ！」

「ひゃわっ！？」

いきなり響いた怒声にあたしは我に返った。見ると、ティアが目の前に仁王立ちで腕を組んでいる。その目はいつになく厳しい。

「あんた、堂々と水の無駄遣いしてんじゃ……げつ！？ちょっとスバル、それ！」

「え？ それってな・・・って、うわわっ、キャロ！？」

「ふうええええ～？」

ティアが指した所、シャワーを流したまま考えに耽っていた私のすぐ側で、キャロが真っ赤な顔から湯気を上げて目を回していた。倒れなかつただけ立派なものだが、全開でお湯を浴び続けていたあたりの横にいたためにのぼせてしまつたらしい。

「あわわっ、こういう時つてどうすればいいんだっけ！？ とりあえず水をかければいいのかな！？」

「そんなわけないでしょ このバカスバル！ 早くキャロをそこから出して脱衣所に運んで！ それとミネラルウォーターと水で冷やしたタオルを何枚か持つてきなさい！」

ティアの言葉に分かつたと言つてキャロを抱きなおす。シャマルさんにも一応連絡しておかなきやと零す親友の言葉を耳に流しながら、あたしは言われたとおりに動き始めた。それで、ついさっきまで考えていたことはさつぱり頭から飛んでしまつたのだった。

- Side out -

- Side ? ? ? ? -

「つたぐ、」の森はどじまで続いてんだよ・・・

「聞いた話ではもうそろそろのはずなんだけど・・・」

二人の人間が森の中を搔き分けながら会話をしていた。一人は高い背丈にノースリーブの青みがかつたTシャツ、それに青いジーンズと同色のブルゾンという出で立ち、そしてもう一人は薄い赤色の半袖の上にベージュのジャケット、そして同じ色のデニムパンツをすらりと着こなした青年の二人組だった。

ジーンズの青年が、飛んでくるカナブンやらなんやらを他所に放り投げながら先導して、後ろをもう一人の青年がついていく。と、しばらくして開けたところに出た。

どうやら自分たちは崖の上にいるようだ。下の方には人工的な舗装も見える。

「おお、やつと出たな。ん、こりゃ線路か?」

「そのようだ。」のを通る列車に乗つて一時間ほどかかると街までいけるらしい」

ジャケットの青年は手に持つた木の葉を親指で撫ぜながら、「どんだけ離れてんだよ」と愚痴るジーンズの青年に苦笑を零す。すると遠くの方から一つの影が見えてきた。フォルムと走っている場所からして、間違いなく列車だ。

「おっしゃ、タイミングバツチリだな」

ジーンズの青年が拳を振り上げるが、後ろにいたジャケットの青年は黙つて列車を見ていた。その目が少し細められ、やれやれと肩が竦められる。「どうした」と眉を寄せながら呟く相方にふつと笑いかけた。

「どうやらゆうくりと景色を堪能、ってわけにはいかないみたいだ。少し手荒にいく必要があるかもね」

「さつそく、ってか？上等だぜ、いっちょ腕慣らしといくか！」

二人は目を合わせ、不敵な笑みを浮かべる。そして高速で接近する列車に近づくために、一人は断崖絶壁から身を躍らせた。

第七話　日常と邂逅～予兆の先兵（後書き）

第七話でした。

原作にはないオリジナルな展開を用意してみたわけですが、いかがでしたでしょうか？

強くなつていく六課のメンバー、近づく戦いの気配、そしてまだ知りえぬ第三者たちの介入、と意外と様々な要素が盛り込まれた今回でしたが、勘の良い、というか半分近くの方は予想がついたかと思います。

さて、JJKで近況報告を少しづかり。

なんとこの小説のPVが10万を突破、ユニークは1万3000に達しておりました！

し、信じられません！未熟な作者の立場からして、なんとも嬉しい限りであります。これからも頑張っていきますので、よろしければ完結までお付き合いいただければ幸いです。

もうすぐ夏休み、皆様も悔いのない夏を過ごされますよ♪。では、また次回です！

第八話 ファーストアラート～再会（前書き）

第八話あがりましたー。

今日は夕方まで外せない用事（卒論関係）がありますので、予約投稿にさせてもらいました。

暑さも小説の進行もだんだんと苦しくなってきたこの頃ですが、とにかく暇を見つけては書いています。卒論と並んで順調にいけば嬉しいんですが・・・。

ま、まあ私情と愚痴はさておき、第八話です。今回はついにあの一人の登場！

かたれて、どうなるやら心配ですが、とりあえずどうぞーー！

機動六課の主な任務は、ロストロギアと呼ばれる古代遺失物の管理とその保護である。古代の遺産はその力の凄まじさと希少性から、邪な盗掘者に狙われることも多い。事実過去にはそうして盗み出されたものも多く、またそれが原因で悲惨な事故などが起きたことも少くないのだ。

だからそのような事態に遭遇すれば、彼らに出動要請が回つてくるのも当然である。そして今日、機動六課にスバル達新人フォワードが所属開始から一週間にして、記念すべき初仕事が舞い込んできた。

仕事内容は、レリックと呼ばれる高エネルギー貯蔵のロストロギアを運搬していた貨物列車がガジエットに占拠されたことへの対応である。管理局でもその処遇が懸念されていたレリックが狙われたのは想定されていたものの、ここまで早く起こることは思わなかつたというのが後に部隊長が零した言葉だ。

ともあれ可及的速やかに現場に赴き、ガジエットの殲滅及びレリックの回収、その後の護送が下された機動六課は、移動用ヘリに乗つて現場へと急いでいたのだが、

「何故わざわざオレが出なければならん」

待機命令中のフォワード四人が初陣に身体を緊張させるなか、剣

呑な雰囲気を隠さずともせず、怒りと不満を滲ませた声が響いた。

声の主は言わずもがなの飛影である。彼は民間協力者であるが、誰かに命令されて動くことには承諾していないため、この事態に苛立っていた。はやてなどは下手からお願いしたのにもかかわらず、飛影の威圧をモロに受け、半泣きでシャマルに縋りついていたぐらいだ。

「ひ、飛影くん。気持ちは分かるけど、飛影くんは次元漂流者なんだし・・・それに一応は民間協力者って立場もあるから、私としても波風立てないようになつてやつて欲しいなあなんて「黙れ」ひやうつ、ごめんなさい！？」

新人四人の教導官であり、機動六課所属の一等空尉である高町なのはが諭すように言うが、鋭い三白眼で睨まれ悲鳴を上げて後ずさつた。

スバル達は涙目で「なんとかして」と訴えてくる彼女を見て、少し顔を引きつらせながら笑つて一人残らず目を逸らす。彼女を敵に回すのは怖いが、この場合ではそれ以外の選択肢は取れないのは暗黙の了解であった。好き好んで火中の栗となる趣味はない。四人の内心を見抜いてか、なのははうつと恨み声を上げた。

そんな彼女にいつもの鬼教官たる威厳はない。というか、飛影の放つ威圧感が凄まじすぎるため、彼女を以つてしても震んでしまうと言つたほうが正しいだろう。一等空尉憐れである。

飛影はしばらく無言でなのはを睨んでいたが、涙まじりの彼女の視線に僅かに汗を搔き、ばつが悪そうに舌打ちした後に顔を背けた。

「・・・次はない。やつと終わりやるわ！」

「一、ありがと、飛影くん！」

「ぬあつ！？だから、すぐ人に抱きつくその癖をやめないと言つたらうがー何度言つたら分かるんだ貴様はーガキか！」

言つが早いが、彼に飛びついてその腕をかき抱きながら満面の笑みを零すなのはに對して、飛影はいつものように怒号を上げる。が、身體を振り払つたりはせず、扱いに困つていてるといった風に無理やり渋面で覆つていた。その表情はかつての彼を知るものが見たら驚くに違いない。

「よかつたですね、なのはさん

「うん、ありがとエリオ」

「高町つ、貴様は笑つていないのでやつと離れろ！いい加減にせんと前言を撤回するぞ！」

眉の角度と目の吊り上り具合がすごいことになり始めた飛影に流石にマズイと思つたのか、謝罪を述べながらなのはは残念そうに体を離した。

乱れた服装と髪を心底不機嫌そうな顔で整える飛影。彼の性格的には正しいのだが、何かがいろいろと間違つてている気がする。どうか、抱きつかれているのがほぼ自分に限定されていることに気づいていない彼も彼であつた。

「はあ・・・ま、緊張は少し解れたかな。これなら今日の任務は大

丈……スバル、あんたビ「う」したの？

「……えつ？ なにが……？」

「いや、何がつて……なんでそんな崩れつ面してんのよ」

こつものやり取りに少し緊張が解けたティアナが、横にいたスバルを見て怪訝そうに眉を寄せた。

尋ねられた当の本人はその瞬間に表情をリセットし、きょとんとした顔で首をかしげて考えている。どうやら本当に分かつていないので、ティアナはなんでもないわよと手を振ると、不機嫌そうに佇む飛影の方を向いた。

（まさかスバルまでとか……？まあ、コイツの事情からすれば飛影さんの在り方は相当に眩しく見えるんじょうけど）

ティアナがふうと息を吐くと、ヴァイスさんが振り返りながら現場に到着したと報告してきた。ヘリの中に緊張が走り、メインハッチが轟音を立てて開く。なのはが全員を見渡しながら言った。

「じゃ、ちゅうと出でへるけど、笛もがんばってズバッときつつけやおひー。」

「「「ハイツー。」」

スバルとティアナ、そしてエリオが気合を入れるように返事をするなか、キヤロだけが俯いたまま座っていた。その身体は縮こまり、肩は僅かに震えている。

だが、なのはがそんな彼女に気づいて近づこうとするより先に、
キヤロの身体に影が落ちた。キヤロがハツとして顔を上げると、い
つも難しい表情を崩さない民間協力者、飛影が立っていた。

「要らん心配をするな。空は高町とテスタロッサが抑えるだろ?」
近くにはこいつら三人がいる。それに不本意だがオレも出でやるん
だ、あんな雑魚相手に臆する必要はない。ルシエ、お前はただ自分
のできることをしろ」

そう言つと、飛影はコートを翻して視線を外す。ぞんざいな言い
方ではあつたが、声を介した彼の優しさはキヤロの内側へとするり
と入り込んでいた。しばらくぼけつとしていたキヤロだつたが、
堅くなつていた体からいつの間にか緊張が抜けていたことを知る。

背を向けた飛影の内面は、その表情と共につかがい知ることはで
きない。だが自分に向けられた言葉は心の中で反響し、いまだ残つ
ている気がした。胸がほんわかと温かくなる。堅くなつていた表情
が崩れ、キヤロはへりに乗つて初めてとなる笑みを零した。

「は、はい、ありがとうございます。お兄ちゃん

『・・・は?』

キヤロが笑顔で放つた言葉に場の空気が固まつた。なのはやスバルなども驚きのあまり呆然とした顔を見せており、飛影に至つては
目を見開いて硬直している。

キヤロは少しの間何が起つたのかわからない顔をしていたが、
しばらくして自分の失言に気づいたのか、あつと叫んでその顔を真
っ赤に染めた。

「あ、あのキヤロ……飛影さんがお兄さん、ヒコのせ一體……？」

空中に漂っていたリインがいち早く硬直から解け、恐る恐るといったふうにキヤロに尋ねてくる。本人は服の袖で口元を隠しながら、赤い顔でふるふると震えながら言った。

「え、えっと、あの……初めて会った時から思つたことなんですかけど、飛影さんってなんだか頼りがいのある兄つて感じがして……。いえ、私が勝手に思つていたことなので特に深い意味はないんです！ わつきのさちよつと、うつかりそう呼んじゃつただけで！ だから、その……うつ……迷惑でしたよね……。」

そこまで言つて、キヤロは深くフードを被つてしまつた。自分のせいで飛影に不快な思いをさせてしまつたと思つているのかも知れない。しゅんとしてしまつたキヤロにどうしたものかとスバル達が考えていると、問題の中心が口を開いた。

「迷惑かどうか以前にオレはお前の兄貴じゃない。お前に対して兄弟紛いなどなどできんし、するつもつもない。理想の兄とやらを押し付けられるのもじめんだ」

厳しさを含んだ言葉にキヤロがビクッと震える。それに対して飛影は横目で彼女しばらく見据えたあと、何かを振り切るよつに続けて言つた。

「だが……それでもかまわんといつのなら呼び方など好きにしや。オレは兄になどなるつもりはないが……お前のことだ、そうせんと勝手に負い目を持つだろ。それに、こつまでもグジグジと悩ま

れでもすれば、後々まで面倒なことになるからな」

予想外の言葉にキャロは驚いて顔を上げた。飛影はそっぽを向いており、視線を此方に合わせようとしない。だが、彼が自分に対して応えてくれたことにキャロの胸はいっぱいになつた。

「はい・・・ありがと」やれこれす飛影や、お兄ちゃん

「・・・フンッ」

先ほどの雰囲気など露ほども感じさせない満面の笑みを見せたキャロに、飛影は背を向けて不機嫌そうに息を吐いた。

「あ、お兄ちゃん、私のことはキャロって呼んでください。いつもでもルシエじゃなんだか他人行儀だし、私も落ち着かないのでも・・・あつ、もひひんお兄ちゃんがよければ、ですけど・・・」

「気が向けばな」

キャロと田を合わせぬまま、飛影はぶつきらぼうに告げた。だが、キャロは顔に笑みをたたえたまま、はいと短く頷いた。

飛影がそれを拒絶するつもりであれば、はつきりと口にしていただろうと思ったからだ。しかし言及はしない。言えばダメと言われるかもしれないから。

一人を中心にして穏やかな、そして優しい時間が流れた。エリオも少し思つところがあつたのか、キャロと飛影を交互に見ている。しかし、巣戻と云うのはさうの世界でも得てして碌なことにならない。

「そ、それなら私もなのはつて呼んで！ホラ、高町つて言つより呼びやすいし！？」

「わ、私もお願ひします！ナカジマつて呼ばれるのはお父さんとかと同じだからややつこじいし、何よりムズムズしちゃうんで！」

焦りが混ざつた声色で一人が詰め寄つた。なのはとスバルの凄まじい食いつきに、飛影は若干引きながらキャロに答えたのと同じ返答を返す。

後にこのことがフォイトにも伝わり、同じようだに迫られるに至るのだが、その時には既に興味もなく、飛影は呼び方程度に一々こだわりすぎだと呆れていたという。

ちなみにエリオはこの一件以来彼を兄さんと呼んでいる。理由はキャロと同じらしい。

「つ、列車捕捉！距離約250だ！」

和やかな雰囲気になりつつあつた空気をヴァイスの報告が搔き消した。だが、四人から既に堅さはなくなつていて、上がつてているのではなく適度な緊張が包み込む中、突如ヴァイスの表情が驚愕に彩られた。

「な・・・列車に接近する人影を補足。ガジェットに向かつていつてる！？魔力値は・・・未検出！また一般人だあ！？」

「「「「ええつー？」」「」」

ハッチから飛び出ようとしていたなのはが驚いてたたらを踏む。

さしもの飛影も予想外だったのか、腕を組みながら横目でヴァイスを見つめていた。フォワード四人は以前と同様だ。

「人影は一人、今モニターに出力する！」

ヴァイスの言葉と同時に、スクリーンに列車の走行風景が映った。その周りを飛行タイプのガジェットが飛び交い、なのはより先についていたフェイドが迎撃に飛んでいる。

そして列車の上の崖から駆け下りているのは確かに一人の人間だつた。魔力を使っている様子はないが、二人は走行中の列車の上に難なく着地する。スバルが画面に身を乗り出した。

「誰、なんだろ？」

「少なくとも魔導師じゃないわね。魔法陣はないし、バリアジャケットも展開してないから」

「でも魔法を使わないであそこまでできるなんて、お兄ちゃんみたい。お兄ちゃんもあんな風に・・・お兄ちゃん？」

キヤロが同意を求めた飛影の様子に首をかしげた。その日は画面に釘付けとなつており、その口元には笑みが零れていた。

しかし、次の瞬間にはその笑みをいつものように焼き消し、飛影はいきなりハツチに向けて歩き出す。全員が動搖したように彼を見るなか、再び彼は愉快そうに口元を吊り上げて言つた。

「これはお前らの初陣なんだろ？早くせんと、『あいつら』が全部片付けてしまうぞ？」

画面を見ると、先ほどの一人がガジェットに対峙していた。なのはがハツとして四人を見回す。

「あつ、そ、そうだつた。スターズ隊とライトニング隊、出撃だよ！私はフェイトちゃんと空をやるから、みんなしつかりね！」

「　　「は、はいっ！」　　」

号令を受けた四人は作戦どおりティアナとスバル、エリオとキャロのチームに分かれて下降していく。それを見送ったあと、なのはは飛影に向かつて尋ねた。

「ねえ、もしかしてあの人たちって飛影くんの知り合い？」

飛影はそれに対してもし間を置いた後、

「ああ。腐れ縁の、な」

短く、しかし確かな信頼を感じさせる返答をして空に飛び出した。

- Side Teiana Runstar -

風を切りながら落下した身体が重力のまま列車へと着地する。そうしてローラーブーツを履いた相棒を横目で捉えながら私は走り出した。

片手には銃型のインテリジェンスデバイスである『クロスミラー・ジュー』、そして隊長たちと同じ規格の新装バリアジャケットは驚くほど私の身体にフィットしている。本当に専用装備として作ってくれたらしい。シャーリーさん達には感謝しなければ。

(つと、急がないとね)

感謝は改めて伝えることにして私は一車両前にいる男の人のところまで走った。銃を構えながら声をかける。

「大丈夫ですか！？」

銃を片手に構えて飛び交うガジェットを牽制しながら、私はその男性に近づいた。撃ち抜いたガジェットと対峙していた男の人人が振り返る。

「お？お嬢ちゃんがコエンマから聞いた魔導師つてやつか？」

服装は青みがかつた白系の無地Tシャツに青ジーンズ、そして同色のブルゾンというラフな格好。身長は高く、180後半はゆうにありそうだ。年は二十代中盤といったところだろうか。

だが注目すべきはそこではない。髪の色はオレンジがかつてあり、いまだかつて見たこともないほど立派なリーゼントで決まっていた。ここまでるものを見たことがなかつたので、私は思わずまじまじと見入ってしまう。

強面だが人懐っこいそうなその表情に少し安心する。デバイスも何も持たないので、一見すれば一般人だと思ったが、彼の口から出た

言葉に私は驚いた。

「え、コーンマさんのことを見つけてることは、飛影さんの知り合いでですか？」

「飛影を知つてんのか？来て早々いきなりヒットたあラッキーすぎな気もするが、探す手間が省けたし話が早くて助かるぜ。おーい、藏馬ア！」

リーゼントの青年がガジエットによつて破られた穴から列車の中を覗き込む。すると、なかにいたもう一人が飛び出すようにして出てきた。

「桑原くんですか、こちらの制圧は終わつたよ・・・って、おや？ そちらの女性の方々は？」

長い癖のある赤毛をなびかせた人物が私たちの前に現れる。赤い無地のTシャツにカジュアルなベージュのジャケットを着て、セットであるうのデニムパンツを見事に着こなしていた。

その人物は桑原と呼ばれたジーンズの青年を見たあと、私と横にいるスバルをとらえて少し驚いたようだが、彼が手短に事情を説明すると納得したように頷く。

一瞬女性に思えたが、会話を聞く限りではどうやら男性らしい。だが女の私が嫉妬を覚えるくらいの凄まじい美青年であった。現にスバルは見惚れ、「綺麗だなあ」と羨ましそうにしている。

「なるほど、飛影の協力者ですか。失礼、俺達は飛影を手伝うために靈界から遣わされた者、君たちの味方つてことで間違いないです

よ。まあ聞きたいこともいろいろあるかとは思いますが、それは後ほど。先にこの状況をなんとかしなければなりませんから」

「あ、はい。そうですね！」

赤毛の美青年の言葉に横にいたスバルが同意するようにうなうんと頷いた。ジーンズの青年もああと首肯の意を返していく。

私は内心で頭を抱えた。そう言つのは管理局である私たちの仕事のはずなのに、もうなにやつてんのよバカスバル！

と、そんなことをやつているとガジェットがこちらに向けて攻撃を加えるべく近づいてきた。私とスバルは一人に下がつて欲しい意を伝えるが、彼らはそれを聞かず前に出了た。

「心配してくれんのは嬉しいが、こちとら結構な修羅場潜つて来てんだ。テメエの危機ぐらいテメエで切り抜けられる。それに女の子に後任せくつろいでたんじや、漢が廢るつてもん・・つて、危ねえつ！」

言葉を遮るようにジーンズの青年が私の横を駆け抜けた。と同時にズバンという音が響く。慌てて振り返ると、そこにはいつの間にか出現していたガジェットがこちらにケーブルを延ばしていたのが見えた。が、そのケーブルはこちらに届く前に切断されており、廃線となつた残骸がいくつも散らばつている。

そして私に背を向ける彼の右手には、

「ひ、光の、剣……？」

金色とオレンジ色の中間のよつたな不思議な色をした剣が輝いていた。バチバチと音を立てるその剣はフェイトさんの魔力刃に似ている。

間髪入れずにはその剣でガジェットを真つ二つに両断した。魔力を制限するAMFが働いているのにも関わらず、である。そのまま彼はガジェットを破壊しながら列車の後方へと走つていった。

と、列車の中から大きな円形の形が顔を出した。私たちは足元をすくわれないように急いで後方に下がる。事前に渡された資料に見覚えのなかつたそいつにスバルが叫んだ。

「新型！？」

通常のガジェットの三倍はまつにありそつたな体躯と倍以上はありそつたな数のコードは氣味悪くうねうねと蠢いている。赤い長髪の青年は悪趣味だな、と吐き捨てるように言葉を零した。それには全力で同意する。

と、そのうちの何本かが私たちを捕らえるべく迫つてきた。

「はあああっ！」

スバルが触手のように蠢くケーブルをかわしながらガジェットに肉薄し、渾身の一撃を叩き込んだ。だが、普通のガジェットより耐久性も上がつてゐるようだ、お返しにと鞭のよつにしなつたケーブルに弾かれた。

「くつ、こいつ堅い・・・！」

瞬時に体制を立て直したためダメージは受けいないようだが、それは相手も同じ。一撃必殺の彼女の拳も装甲を僅かに凹ませただけである。AMFやシールドも巨大化した分だけ強力になっているようだ、この距離では対ファイアード魔力弾も生成できない。

「えつ！？」

有効射撃を決めるため後ろに下がろうとしたとき、私は驚きに声を上げた。あのガジェットに向かい、あるうことか赤毛の青年が丸腰のまま前に出て行くではないか。

「あ、危ないですよつ！」

スバルが焦つたように彼に向かって叫ぶが、青年は大丈夫、と短い笑みで答えるとさらに歩みを進めていく。そうして敵の射程ギリギリのところまで自分の髪へと手を伸ばし、何かを取り出した。

「「はつ！？」」

その取り出された物を見て、私とスバルは素つ頓狂な声を上げた。なぜかと問われれば答えは一つしかない。彼が取り出したものはおよそ闘いの場には相応しくない代物、一輪のバラだったからだ。

（（なんでバラ・・・！？））

それを優しく添えるように持ちながら、彼はガジェットと対峙する。敵と認識したのか、ガジェットが唸りをあげて彼に迫った。

そして目の前に来た彼へガジェットのケーブルが餌を絡め取るよう伸ばした、その瞬間。

「ローズ・ウィップ
薔薇棘鞭刀！！」

彼を取り囲んでいたケーブルが全て宙に舞っていた。驚くほどの長さと強靭さを誇ったそれらがまるで紙切れのように細分に寸断され、ガジェットはただの丸い塊となる。

そしてそれを成した彼の手には先ほどまでのバラはなく、代わりに緑色の鞭が握られていた。あれでガジェットを切り裂いたのだろうが、私には全く見えなかつた。なんという早業だろうか。

「終わりだよ」

そして彼が再びそれを振るつた瞬間、丸いオブジェは少なくとも十数個の破片に分断され、爆発した。同時に周囲に集まつていたガジェットもまとめて。

スバルが渾身の力を込めても僅かな傷しか残せなかつたガジェットが、何の造作もなく破壊されてしまつたことに私も、その硬さを知る本人も声が出なかつた。それを知つてか知らずか、彼は鞭を消すと私たちに向き直る。

「敵は掃討し終えましたよ。桑原くんのほうもどうやら無事に終わつたみたいですね」

見るとこちらに手を振るジーンズの青年桑原と、龍の召喚に成功したらしいキヤロがエリオと大きめのスースケースを抱えて巨大化したフリードに跨つっていた。その下には煙を上げたガジェットの残骸が一体あるが、他は全て原型を留めぬまでに破壊されている。

「やつてきて早々」苦労なことだ。仕事癖がついているんじゃない
か藏馬？」

そこで最近馴染み始めた声が聞こえた。振り向くと、飛影さんがポケットに手を突っ込んだまま口の端を吊り上げて笑っている。その表情はいつもの仏頂面ではなく、どことなく嬉しそうな色を滲ませていた。赤毛の青年にも微笑みが灯る。

「君も変わらないな、飛影。次元の狭間に吸い込まれたって聞いたときは驚いたけど、無事で安心したよ。まあ、君がその程度でどうにかなるとは思えなかつたけれどね」

「フン、コーンマが云々云々としていたのはこのことだつたか。余分なのもついてきたようだが、奴にしては粋な計らいだ」

藏馬と呼ばれた赤毛の青年に飛影はいつもの皮肉で返した。そこに先ほどのジーンズリーゼントの青年が肩を怒らせてやつてくる。

「『K』飛影テメエ！浦飯チームの大戦力を捕まえて余分たあなんだ！？それに、元はと言えばテメエがコーンマの忠告を無視して穴に落つこちたのが原因らししいじゃねえか！」

「ほう、そいつは初耳だ。戻つたら奴と改めて話しえつ必要がありそうだな、ククク……」

その『話しえつ』といつ響きに我らが教導官のと回じものを感じてスバルたちは冷や汗を搔く。そのとき、空で戦っていたなのはとフェイトから通信が入った。

『作戦は成功。あとはレリックを護送担当部隊に引き継いで任務は

完了だよ。みんな、もう一息頑張ろ!』

『ええと、そつちにいるお二人にはあとで事情聴取をさせてもらつのでそのつもりでいて下さい。あ、事情聴取といつても飛影の知り合いみたいですから、形式だけなので構える必要はないです』

一人の声が聞こえ、全員に笑みが宿る。こつして数奇な運命のめぐり合わせで、私たちは飛影さんの『戦友』に出会つたのでした。

- Side out -

- Side Jeil Skaliet y -

「刻印N.O.・9護送体制に入りました。追撃戦力を送りますか?」

止まつた列車から護送されていくキャリーケースを見ながら、私の片腕ウーノが画面越しに問いかけてきた。その顔に悔しさはない。ただ命じられる内容を待つてはいるといった様子の彼女に対して、私は苦笑しながら口を開いた。

「いや、止めておひづ」

未練を感じさせない私の声に彼女は分かりました、とだけ告げる。私は目の前に広がる大画面横のパネルを操作し、列車の上を駆け回

る一人と龍にまたがつた一人、そして空を縦横無尽に駆ける一人を順番に映し出した。中でも金髪の少女と赤髪の少年に注目しながら、此方を見つめるウーノに苦笑する。

「レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけで十分さ。プロジェクトFに関してもこの子達個人にしても私の研究にとつて興味深い素材ばかり、これだけでも損はない。それに・・・」

パネルを操作し、リアルタイムで映し出されている映像から対象を切り替える。

「予期せぬ大収穫もあつたことだしね・・・」

そこにはオレンジリーゼントと赤髪の青年、そして黒髪の少年の三人が映っていた。先の二人は機動六課の少女たちと言葉を交わしており、少し離れた場所で列車の縁に腰掛けるようにして黒服の少年が座っている。

ウーノの報告によれば、彼は最近六課に保護された次元漂流者で名を飛影と言づらしい。おそらくあの一人は彼の仲間だろう。私は燐つていた探究心が湧きあがつてくるのを感じた。

「彼らは私のガジェットをいとも簡単に破壊してしまった。それも魔法とも戦闘機人とも違う、圧倒的かつ不可思議な、未知の力で・・・ぐぐくくく、以前彼を初めて見たときにも思つたが、全く心躍らされるばかりだよ！ああ、早く彼らを研究したいねえ！」

「・・・ドクター、また悪い癖が・・・彼らの力は得体が知れません、用心してかかるべきです」

「わかつているさ。けど君とその姉妹たちがいれば、計画は遂行できる。協力者もいることだし、いろいろ楽しめそうだ」

ウーノが顔を顰めた。私の言葉によるものではない。『彼』を個人的に好きになれないと言つていたからそのせいだろう。気持ちは分かるが、私としては仲良くして欲しいんだけどね。

「さて、調査はここからでいいだらう。ウーノ、あとはこれを数値として算出したあとでデータとしてまとめてお・・・・!？」

ウーノに指示を飛ばし、画面を消そうとした手が止まつた。いや止めざるを得なかつた。視線は画面に吸い寄せられ、目が離せない。画面に映し出された少年、黒服を身に纏つた飛影が『こちり』を見据えていた。単に空を見上げるといった感じではない。明らかにこっちを『観察』みていた。そしてその瞳は少年のものではなく、画面越しにでも分かるほど鋭利な光を帶びている。

その口元が微かに動いた。眉は寄せられ、ひどく不愉快な様子で睨むような視線が私を射抜く。だが私がそう認識したときには、彼は既に背を向けて歩き出していた。口元の動きが音を伴つて脳を揺さぶる。

消えろ、目障りだ。

「く、くくく・・・あーっはははははー」

「ド、ドクター……？」

ウーノが僅かに目を開きながら問い合わせてくるが、私は目の前のことでいっぱいだった。その時は去っていく彼の背中とその先にいる一人の青年に向けられている。

（どうやつてウーノと私のステルスを看破したのかは分からぬが、我らの知りうる力でないことは確かだ。ふふふ、俄然興味が湧いてきたねえ。全く・・・本当に夢中になつてしまいそうだよ、飛影くん・・・）

猶も怪訝そうに尋ねてくるウーノに適当に返しながら、私は戦闘記録をリスタートした。

もちろん、彼ら三人を中心に細かくデータをリークしながら。

第八話 ファーストアラート～再会（後書き）

第八話でした。ついに悪の組織の総大将ジェイル・スカリエッティ、そして念願の幽白キャラの登場です。それと終りのほうは少し、ほんの少しだけオリジナルにしてみましたが、いかがでしたか？

アニメで一人のキャラを結構研究してから書いたんですが、違和感は・・・ありますよね、やっぱり・・・。ですが、そこはどうかお許しを。何度も書き直してもこれが限界でした（涙）。

この物語もだんだんと原作に沿ってきました。ですが、やはり読者様方はオリジナルの展開のほうが好きなのでしょうか？

確かに、ここはどちらかと云はば原作や数多ある過去の二次創作などとかなりかぶっているのでなんとも言えませんが、自分としては『原作に沿うほうがいいと思った』ことは忠実に原作』を、『オリジナルのところはとことんオリジナル』を目指しています。

とはいっても構成からすべてを一から作るというのは正直難しいです。時間的に余裕があれば是非ともやりたいのですが。

オリジナルの話はいくつかもう案自体はできていて、どれもほのぼのかギヤグ満載にするつもりです。中には飛影のキャラが壊れているものも・・・そんなのも含め、出でつかどうじょつか正直迷っています。

と、一応の説明と作者の状況を述べてみましたが、原則的には原作に沿う形で物語を進めるつもりです。オリジナル展開をご希望の方はまことに申し訳ありません！

原作ストーリーを逸脱した完全オリジナルにしてしまうと、かかる時間と労力が今の数倍ではきかなくななりそうですが、アニメ補正や補足がないため、文章力の低さからここでは何を言っているのかわからないとか、場面が思い浮かべにくいとかいうことになりかねないので・・・ただ、オリジナル要素や話は随所に加えていきたいと思っています。

ですが原作にはない、というかかなり強引かつストーリー軸というか原作物語設定を傾ける案もいくつか考えているので、もしそれが考えた末に脳内選考を通して、見事実現した暁には少しばかりでも喜んで下さると・・・そう願っています。

それでは、また次回にて！

第九話　日常～ある日の訓練風景（前書き）

第九話の完成です。

今回は日常編。原作に沿つた形ですが、幽白サイドに関わる会話なども盛り込みました。

蔵馬と桑原、この二人は一体どのよつた立場なのでしょうか。

それでは第九話、はじまりはじまり～。

第九話　日常　～ある日の訓練風景～

機動六課には優秀な戦闘技術教官がいる。

筆頭の一人は言わずと知れた高町なのは。そしてもう一人は執務官でもあるフェイト・T・ハラオウンである。他にもヴォルケンリッターの騎士ヴィータやシグナムなどによつてその教導は厳しいことで有名であるが、彼女らの教導を受けた魔導師は実力も相応にかけてくると評判は高い。

機動六課に所属する彼女たちは、今日もまた六課の新たな力となりし少年と少女たちを鍛えんと訓練に励んでいた。だがいつもと違うのは、

「オラオラ、スピードが落ちてんぞ！エリオ、男ならもつと根性入れて気張れイ！」

「は、はい！」

「何をやっているんだ、彼は・・・」

森の中に展開されたブロックツリーの周りで、回避訓練をしているエリオとキャロに怒号を飛ばしている男がいた。エリオに関してはスバルタ、そしてキャロに関しては、

「キャロちゃんはへばらない程度にしつかりな～」

「は、はい～！」

マイペースでやるように指導している。なんとも偏った指導内容であった。フェイトはオロオロしながら、シグナムは呆れたように腕を組んでその様子を見つめている。

「あ、あの和真・・・エリオだけに厳しくするのは・・・」

「何言つてんだフェイトちゃん！男なんてのは女を守れて何ばなんだぜ？好きな女ぐらい守れる力があつたほうがいいからな。エリオ、お前もそう思うだろ？」

「ええつ！？す、好きな女つて・・・キヤ、キヤロとはそんなんじや・・・た、確かに彼女はとても大切な仲間ですけど・・・」

顔を赤くしてじぶんもじぶんになるエリオに、男のなんたるかを熱く語るこの男の名は桑原和真。

かつてからの飛影や蔵馬の戦友であり、また魔界でも人間中最強という異名を持つ霊能力者である。

現在は齢二十五にしてボディガードの会社を立ち上げ、表では要人から一般人までの護衛を幅広く手がける一方、近年人間界に観光などで入り込むことが多くなった妖怪たちのトラブル対処を霊界をバックアップとして置きながらこなしている。前大会である第三回魔界統一戦にも参加し、人間とは思えない戦績を残した実力者だ。

そして新たな人物が、もう一人。

「桑原くん、君の言つ」とも分かるけど、彼女もござといつ時に動けないと困ると思うよ。もう少しペースを落として、二人地道にやつたほうが効率がいいんじゃないかな」

「う・・・まあ、蔵馬のいうことももつともか。よしエリオ、少しペース落としてキャロちゃんに会わせる。一人とも、お互のフォロー忘れんじゃねえぞ！」

「「はいっ！」」

赤毛の青年、蔵馬の言葉に方針を変更して和真は再び指示を飛ばした。フェイトはそれに安堵の息を吐いて、訓練を続ける一人を見つめる。その様子に蔵馬は苦笑を零した。

蔵馬、またの名を南野秀一。かつて魔界で極悪盗賊として名を馳せた伝説の妖狐その人である。

二十五年ほど前に靈界特防隊によつて手ひどい怪我を負わされた際、逃げ込んだ人間界で胎児だった人間と合体し、以来南野秀一として生きてきた。だが飛影や桑原、そして幽助と出会い、数々の戦いが終わつた後もこうして行動を共にしている。現在は父の会社で働く傍ら、魔界と人間界を頻繁に出入りして双方の交流に尽力している最中だ。

さじどりしてこんなことになつてゐるかといつと、それは三日前、彼らと機動六課面々との出会いまで遡る・・・。

「おーっす！コホンマに頼まれてきた準霊界探偵にして人間界最強の男、桑原和真とは俺様のことだ！飛影を手伝うつてことだが、おめえらもよろしくな！」

「同じく飛影の手伝いに派遣された藏馬だ。仕事柄、いろいろ助けにはなれるとと思つ。よろしく」

レリックの護送受け渡しを完了した機動六課は、ブリーフィングルームにて新たな協力者と相対していた。簡単な事情聴取はしていつが、飛影の知り合いだというのを皆に説明するためこうして集まつてもらつたのである。

部屋には六課の主要メンバーが勢ぞろいしていた。なのはとフェイトの一人に部隊長であるハ神はやて、ヴォルケンリッターの騎士たちと新人フォワード四人に加え、シャーリー・ヤリィンフォース？、さらにはヴァイスやグリフィスもいる。

ヴァイスが恐る恐る、といつた感じで拳手した。

「んで、お二人さんが飛影の旦那の仲間なんだよな？やっぱ、その、妖怪つてやつなのか？」

ヴァイスの質問に部屋に少しの緊張感が満ちる。彼が妖怪だと知るのは一つの隊とはやて達情報員を除けば六課内でも極少だが、ヴァイスとグリフィスはその数少ないうちの二人だった。

問われた二人は妖怪という単語に少し驚いた顔をしたが、飛影の

性格なら不思議じゃないなど苦笑した蔵馬がそれに答える。

「正確に言つと少し違つた。けど、オレのことは概ねそう思つてく
れてかまわない。使つていいのも妖氣と呼ばれる力だし、人間とは
少し違うから。あ、けど桑原くんの方は正真正銘の人間だよ。靈界
やら魔界やら、いろいろと関わりは多いけどね」

蔵馬の説明にま、そういうことだと肯定を口にする桑原に複雑な
表情をする一同。そしてそのなかの一人、ティアナが何かに気づい
たように手を挙げた。

「人間・・・あれ? でもさつきフエイトさんみたいな光の剣を出し
てましたけど、アレは一体なんですか? 蔵馬さんも何か鞭みたいの
を・・・でもデバイスも何も使つてなかつたですし・・・」

一緒にいたスバルも、記録を拝見した者もそれに同意するように
うんうん頷いた。「デバイス?」と首を傾げる一人になのはとフュ
イトが簡単に説明すると、合点がいったように笑みを浮かべ、桑原
が一步前に出る。

「そんじゃ、いつちよ見せてやりますかね。出でよ、靈剣!」

桑原が握手をするように出した右手へと力を込めるとい、手の中に
光り輝く球形が出現する。それに一同が驚くより早く、玉は爆発す
るよう巨人化し、剣の形を成した。部屋にいた全員が呆気に取ら
れたように剣を見つめるなか、桑原はふふんと鼻を擦りながら笑う。

「こいつが俺の靈氣で作った武器、『靈剣』だ。物質系能力つてや
つでよ、オレ自慢の主武装だぜ」

桑原がバチバチと音を立てる靈劍を見せながら、得意げに胸を反らす。飛影がほつゝと少し驚いたような声を発した。

「前に見たときより靈氣の密度が数段アップしているな。切れ味や強度も以前より洗練されている。イメージの悪さだけは改善されていないようだが」

「褒めねーヤツだなテメーは！！」

飛影の痛烈な皮肉に桑原はさつそく食つて掛かる。まあまあと一人を仲裁しながら、藏馬が苦笑いしているフヨイト達の前に出た。

「それじゃ次はオレの番か。

ローズ・ウイップ
薔薇棘鞭刃！！」

「どこからか取り出したバラの花を藏馬が無造作に振るひ。と、花びらが宙を舞い、部屋全体バラの香りで覆いつくした。美しい花びらの舞にシグナムが気障だな、と軽く。中にはシャーリーのようにぽわーつとしている者もいた。その手に握られているのはあの鞭だ。

「薔薇棘鞭刃、オレが得意とする武器の一つさ。見た目はそれほどでもないだろうけど、鋼鉄ぐらいなら問題なく切り裂ける」

「ふえ～。飛影さんもすゞかつたですが、こんなこともできるんですね」

「これが妖氣の使い方か。けど、桑原は普通の人間なんだろ？さつき言つてた『靈氣』つてのは何なんだよ

ヴィータが眉を寄せながら疑問の声を上げた。少し離れて座つていた飛影が答える。

「貴様ら魔法と同じ、オレ達の世界で裏に関わる人間のほとんどが持っている力だ。靈氣は人間の肉体に宿るオーラの総称、人間であれば誰でもその可能性を持ち、それを操る人間をオレ達は靈能力者と呼ぶ。戦闘に耐えうるほどの靈氣を持つ人間は少ないが、使いかなせばお前らの魔法にも負けはせん。甚だ不本意だが、コイツがいい例だ」

「おめえはいちいちうるせエんだよー。」

憲りずに言い争つ飛影と桑原に、フロイトやなのは達は苦笑しつつも少し羨ましいなと思った。飛影がこんなふうに突つ掛かっていくのは、彼や蔵馬のことをそれほどまでに信頼しているからだ。少し寂しそうな彼女らの横顔を横目で捉えつつ、蔵馬がいつものように戦の仲裁に入った。

「まあまあ、二人とも。今は俺と桑原くんがこの機動六課に何を提供出来るか考えるほうが先ですよ。基本的に俺や桑原くんは会社勤めしていますからデスクワークも大抵はなんとかできますが、どちらかといえば

「戦闘技術を教えるほうが得意ですね、と蔵馬は涼やかな笑みを見せて言った。桑原もそれに同調し、それをなのはやはやてが了承して

・・・

「今に至るといつわけである。

「おう、お前らも結構しきかれたか」

「どちらも終わつたよつだな」

ヴィータが自らのデバイスを肩に掲げながら飛影とともに歩いてきた。その後ろからは、ふらふらと覚束ない足取りでスバルが歩いてきている。別訓練をしていたなのはティアナも、森の奥のほうから出てきた。どちらも相当絞られたよつだ。

「ま、こんなトコだな。とりあえず帰つて昼飯にしようぜ」

桑原の言葉で解散の雰囲気になる。だが全員が歩き出せりとしたとき、不意に声を上げた人物がいた。戦技教官、高町なのはである。「あの、和真くんに藏馬くん。一人は、その、どんな風に飛影くんと知り合つたの?」

「「飛影と?」」

なのはの言葉に全員が注目して立ち止まる。飛影も彼女を横目で見ていた。しかし誰も止めないと口を見ると興味はあるよつだ。

「どんな風に、か。俺は妖怪がらみだよ。そのあとこの場にいないもう一人の仲間とも知り合つて、桑原くんはさらにそのあとだつたね。改めて考えると、この中じや俺が一番付き合ひが長いってことになるのかな」

「オレは今藏馬が言つた奴とずつと喧嘩仲間だつたんだ。あいつと一緒に靈光波動拳の継承者トーナメントつてのを戦つたあと、四聖獣戦のときに助つ人として来た一人に会つたんだよな。もう十年ぐれえ前だから、懐かしいぜ……ん? でもなのはちゃんよ、なんで

いきなりそんなこと聞いてきたんだ?」「

いきなり問い合わせられたのはは頬を赤く染めて黙り込んでしまつた。だがその視線はチラチラと飛影の方と行き来していて、当の彼は不可解そうに眉を寄せる。それを見たフェイトやヴィータなどがむうと不満そうに頬を膨らましていた。

藏馬が珍しく呆気に取られた様子で固まる。だが少し考えるより、顎に手を当てた後、まじまじといった視線で全員を見渡した。

「これは・・・正直驚いた。あの堅物さと気難しいことで有名な飛影に、こんな素敵なガールフレンドが出来てたなんて。幽助や魔界のファンクラブ会員が聞いたらなんて言うかな？」

「ふええつ！？」

『なつ！？』

蔵馬の爆弾発言に、なのはをジトッと睨んでいた少女たちが驚愕の声を上げた。そのなかには焦りいらしきものも見受けられ、蔵馬はやはりかと内心溜息を零す。

どうやら、かつての戦友はここでは王子様という立場らしい。本人は気づいていないようだし、詳しい経緯は聞かないが。

「蔵馬、あまりふざけたことを抜かすと貴様でもただでは・・・待て、ファンクラブだと？そんなものいつの間に出来ていたんだ！？」

「飛影・・・君は一応？陣営でのＺ。・2、男ではＺ。・1だらう？強い上に容姿端麗、加えてフリーとくれば人気が出るのは当然のことじやないか。君は自分が思つてはいる以上に注目されていてもつと自覚した方がいい。ああ、潰すなんて考えないでくれよ。どうせすぐ元に戻るだらうし、いらない作業を増やされるのは御免だからね」

飛影の思考を先読みした藏馬が釘を刺した。図星だったのか、飛影は心底苛立しそうな表情をする。組んでいた腕をさら引きつくりめつて舌打ちしてそっぽを向いた。

ちなみに藏馬のもあるけどな、と零した桑原の後ろからはやでが駆けてきた。その肩にはリインの姿もある。

「みんなお疲れさまや。午後の教練のために今はしつかり身体を休めとくんやで？」

部隊長としての心配りを忘れないように新人たちに声をかける。それに気の抜けたような返事が返ってきたことに少し苦い笑みを零し、飛影たち三人に向かい合つた。心なしかその頬は赤いような・・・

「ぐ、藏馬さん達もおおきに」民間協力者の立場でここまでもうりつてゐるのに、ほとんど何にも返されへんで「めんな」

藏馬は「気にする」とはないですよ」と笑顔で返した。だが、はやては何だか納得いかないようで、モジモジと手を握つたり開いたりしている。と、そこで何か思いついたのかパチンと手を合わせた。

「ほ、ほんなら・・・お礼とは少しあやうねんけど、わ、私のこと

名前で呼んでくれへんか？蔵馬さんは管理団員やないし、私より年上やのに、敬語使われるんは何か恥ずかしゅうて仕方ないんや」

「はい、それはかまわないですが　　「敬語…」かまわないけど、いいのかい？君はこの課の部隊長なんだらひつへ確かにそのほうがやりやすくはあるけど・・・」

心配する蔵馬に、はやはやは大丈夫だし何も心配いらんの一点張りだった。拳動不審な上にその顔はほんのりと色づいている。なのはやフロイト、そして他の少女たちもぽかんとした表情をして、かつてない態度を振りまく親友、あるいは部隊長を見ていた。

（ねえ、フロイトちゃん。はやはちちゃんつてもしかして・・・）

（うん。たぶん考えてる通りだと思つ・・・）

フロイトとなののは、飛影に対する自分たちと同じような反応をするはやての心情に気づいたようだ。彼女を主とするヴォルケンリッターは複雑な表情をしており、フォワード四人やらシャーリーヤらは顔を突き合わせていた。

（主がそつこつた思いを抱く相手が出来たことは喜ばしいが、ひつむ・・・心配だ）

（こればっかはしかたねーよ、・・・（気持ちはわかるし・・・）・・・つて何考えてんだあたしはー？）

（はやてちゃん、可愛いわー。実を言えば彼に会つた瞬間からあんな調子だったものねー）

（成る程、一目惚れといつやつが。主の性格から考えれば意外だが、まあそれを省いても藏馬殿はなかなか出来た人物のようだからな。だがシャマル、なぜそんな実感がこもっているんだ？）

（はやてさんが藏馬さんを・・・確かに超のつくほどいい人だし、かつこいいしね～）

（はあ、いいのかしら？）なんで・・・）

（で、でも仲良しなのはこことですかよー。）

（キヤロ、それはちよつと違つたじや・・・）

（はあー、はやてさんにもよつやく春が来たですね。リインは嬉しいのです！）

（いいなあ、はやてさん。私もいつか・・・）

聞こえないとはこえ、本人を前にして言いたい放題な六課メンバーであった。一部羨望も混じっているようだが、全員が念話でひそひそと意思伝達をするなか、壁に寄りかかっていた飛影がフツと笑う。その口元はかつて無いほど、心底愉快そうに吊り上っていた。

「クツ、クク・・・いいからかの呼んでやれ藏馬。その方が面白いことになりそうだからな。フ、部隊長とやうは本当に大変だ」

「ひ、飛影くん！？ い、要らん」と言わんとこで！」

いつもとは逆のパターンに好機ととったか、援護というか追い討ちをかける飛影。さつ 気全開で忍び笑いを零す彼だが、なのはたちは引き攣つた笑顔をしていた。理由は無論、明日はわが身といふ言葉を彼が認識していないためである。

「なあ、どうしたんだこの空氣？ シグナムちゃん分かるか？」

「分からな」お前もどうかと・・・って、桑原！ 貴様、ちゃんと付けは止めるとあれほど言つただろ？ が！」

恥ずかしさから顔を赤くするシグナムに、「そうか～？」と首を傾げる桑原に笑いが巻き起こる。そんな光景を遠巻きにしながら、穏やかな時間は過ぎていくのだった。

第九話　日常～ある日の訓練風景（後書き）

日常編その2でした。

飛影の射程外にいる者は藏馬が撃ち落す・・・まさに作者の強引さの真骨頂であります。なんといつも都合主義・・・だが、まあよし！（いいのかよっ！？）

少し強引かもしませんが、はやてと藏馬はキャラ的に何だか馬が合つとは当初から思っていたのでこういう形にさせてもらいました。狸と狐つて反りが合わない感じがしますが、この一人ならマッチするような気がするんです。策を巡らせて、裏で薄く笑う感じとか特に・・・。

さて九話まで来たこのお話、ここからしばらくはバトルではなく日常編が続くと思います。ここでも独自設定が冴え渡りますが、それはまあ後ほど。

では今回はこの辺で。また皆様がこのお話を読んでくださいることを願っています。

それでは、サイイチ 再見！

第十話　出張機動六課（導入編）～始動（前書き）

第十話完成です！十話は文章が少なかつたので早く上げることが出来ました。

この作品も一桁台、そして今回からは地球編に突入いたします。さて、一体どんな話になるやら・・・

それでは、第十話テイク・オフあります！

「出張任務だと？」

「うん、ちょっと唐突だけどね」

朝方。いつものように自主訓練をしてフォワードたちの面倒を見たあと、立ち寄ったブリーフィングルームの中で聞かされた話に、飛影は少し声高に問い合わせた。その相手、飛影を正面に据えているのは時空管理局の執務官でもあり、ライトニング隊の隊長であるフェイドである。

聖王教会からこの意が通達されたのは今朝方であった。遺失物管理部の肩書きを持つ機動六課であるが、ロストロギア関連ではレリック専門で調査を進めている。あまり手を広げすぎても一つに対しう薄くなってしまうので、この采配は的確だといえよう。

本来ならこの件も他方に任せるのがセオリーなのだが、時空管理局は万年欠員と呼ばれるほど人員に欠いている。魔法を使えないものでも情報整理やデスクワークで活躍の場が与えられてはいるものの、最終的には魔導師が必要となる場合が多い。

そのバランスがきちんと出来ていない場合、指令が来てもどこも同じような返答をするのだ。六課に仕事が回ってきた理由は一つ。

すなわちここ以外は人手不足である、と。これだけであった。

「任務は正体不明のロストロゴギアの回収。どれくらいかかるか分からぬから、少し現地にどどまる必要があるの。それで、主要メンバーは全員が行くことになつたんだ」

「フン、ならお前達だけで行つてくれればいいだろ。ロストロゴギアのレリックだの、そんなものがどうなるとオレには何の関わりもないからな。ここにいるとは言つたが、積極的に協力すると言つた覚えはない。助力を求めるなら蔵馬か桑原にしろ。やるとこいつなら勝手に行つて、解決なりなんなりしてくれればいい」とだ

興味などない、という風に飛影はそっぽを向く。すると、あからさまに落ち込んだ様子のフェイトが顔をすいと寄せてきた。息を感じるほど近くへ来たことを感じ、飛影は一瞬ドキリとなる。だが彼の動搖には気づかない様子で、フェイトはそのまま詰め寄つた。

「飛影は来てくれないの？」

「そう言つてゐる

「私は一緒に行きたいんだ。そのほうが心強いし」

「オレは行かん」

「ホントに、ダメ？私たちどうじゃ……嫌……？」

「オイ……だから、オレの話をちやんと……」

「…………ぐすつ」

「・・・・・」

椅子に座つたまま彼女は見上げてくる。うなづくと見つめてくる。その田は水氣を帶びており、田尻に抑えきれなくなつたものが零れ落ちる寸前であつた。ここでもし断つたり突き放したりしうものなら、一気に決壊して飛影を飲み込むだらう。

被害を受けているのはむしろ自分の方だというのに、なんとも理不尽である。いつもながらここは頭痛の種には事欠かない場所であった。無論彼にとつては不都合極まりないが。

「くつ・・・ええいわかった、付いていってやる。ただしオレは手を貸さんし、仕事とやらはそつちで勝手にやれ。何でもかんでもオレ達に頼るようなら、すぐに手を引く。いいな？」

「あ、ありがとう飛影っー」

「ツー・フュイトーだから高町共々抱きつくなと、あれほど言つただろ？がーさつむと手を離せ！」

こきなり体を引き込まれ、頭ごとがつちり抱きしめられた飛影が怒りの声を上げた。フュイトの肩を押さえてその身体を引き剥がす。その姿は子供にせがまれるのをいなす父親のようだ。フュイトは寂しそうにしながらもすうすうと引き下がつたが、懲りている様子はないことを感じ取つた飛影はさらに不機嫌になつた。

任務は今から一時間後に集合して行くのだといつ。それを聞くと飛影はフェイトから離れ、自分の部屋へと歩いていった。

（やれやれ、飛影があんなに慌ててているのは久しぶりに見ましたよ）

その部屋の脇、壁の影に潜んでいたもの達が去つていく彼の後姿を見つめていた。メンバーは藏馬と桑原を始めとして、なのはや新人四人がいた。ヴィータやシャマルにシグナム、それにはやての姿もある。

女性陣の大半が羨ましそうな視線を注ぐ中、桑原が声を潜めて藏馬の独り言に答えた。

（やうだな。飛影のヤツ、フェイントちゃん相手にどうしていいか分かんねえみたいだつたぜ。意外な弱点発見だな）

にしし、と笑みを零す戦友に藏馬は同感ですね、と苦笑した。実際、あんな彼を見ることになつたのはこつちに来てからだ。今までを思えば信じられないぐらいであるが、一人にとつてはいい傾向であつた。

シグナムが彼の去つていた方向を見やる。

（行つてしまつたぞ）

（お兄ちゃん、怒つてましたね・・・）

キヤロが小声で話しながら周りを見渡す。念話をしないのは藏馬たちがまだ使えないからだ。『飛影を交えて、そのうち使えるようにしておくよ』とは藏馬の弁である。実際、盗聴とかに気をつけばこれほど便利な魔法はない。

少し蛇足的な話になるのだが、キャロのお兄ちゃん発言、あるいはヒリオの兄ちゃんという呼び名を初めて聞いたのは数日前だ。そのとき藏馬達は驚きのあまり硬直してしまった。

そして「犯罪はいけませんよ」と零した藏馬に、飛影が怒鳴りつけていたのは記憶に新しい。実際には、藏馬は飛影にとつて兄妹関連の話題がどれほど重いのかを知っていたので、彼がそれを許容したこと驚いていたのだが。

話を戻そう。藏馬はキャロの言葉ににじつと笑つて口を開いた。

（本当に嫌なら、どんなに言われても飛影は首を縦には振らない。彼なりに思つてるのはあつたみたいだし、何も心配ないよ）

（ホント素直じゃねえからな、あのチビ助は、なんだかんだ言つても、皆がけつじつ心配な癖によ）

呆れたような声をしながらも、そこには信頼感がはつきりと浮き出ている。彼の心情がちゃんと分かつてこる」と六課メンバーは少しの羨ましさを覚えた。

（前になのはせんに抱きつかれた時もあんな感じでしたしね。兄さんは女人の人人が苦手なんでしょうか？）

（とつあえず鈍感な」とは確かだな。アレ見つれば普通にわかんだろ……）

（……確かに、ねえ……）

飛影が去った方向を見つめているフロイトを指して、ヴィータとシャマルが溜息を吐いた。全員がそれに首肯する。

フロイトははあ、と息を零しながら、その日にいたままだ熱っぽい視線を宿していた。右手は胸の前で握られ、左手は彼が掴んだ右腕の辺りを擦っている。

（）からどう見ても、恋する女の子そのものであった。彼女自身明言はしていないが、これでは分からぬといつまづがおかしい。まあ、彼女の親友もまた然りであるが。

（飛影くん、モテてるみたいといったやん。それとも氣づいとつて無視しどのだけか？）

（いえ、飛影は本当に氣づいていないんだと思いますよ。彼は敵意や殺氣といったものには非常に敏感ですが、好意をあんなに真っ直ぐ向けられたことは片手で数えるほどもありませんから。飛影に何か言いたいのなら、率直に述べることをお勧めします）

藏馬の進言を受け、全員がおおと納得する。確かにそんな節はあつたから命懸がいったのだろう。少し不満そうに頬を膨らましていたのはやシャマル、ジト目をしていたヴィータやスバルがぐっと拳を握り締めた。藏馬はそれを見て再び苦笑いを浮かべる。

（飛影は好かれてるってことか？確かにフロイトちゃんはやけに飛影にかまつてんなー、とは思つてたけどよ）

（）にも結構鈍感な人が・・・でも敵意とかつて・・・飛影さんは一体どんな人生を歩んできたんですか？いくら元盗賊だつて言つても、ちょっと行き過ぎのような気がするんですけど・・・）

ティアナの言葉に全員が藏馬と桑原の方を向いた。飛影から少しばかり聞いたことはあったが、出生以降の詳しい経緯は、盜賊をやつていたという一点を除き、ほぼ全てがぼかされていったからである。

二人は苦笑するとそこから立ち上がった。藏馬が全員を見据える。

「こればっかりは俺から話していいことじやない。彼が話すまで待つしかないよ。といつても、俺が知つてることもそれほど多くはないかな」

「ま、俺もあんま知らねえしな。コーンマからうつとばかし聞きかじってるだけだからよ」

軽い口調だつたが、全員が理解した。これは興味本位で聞いていいことではない、と。それを汲み取つたのを確認したのか、二人は廊下へと踏み出していく。

飛影のことに関しては未知なこと、不確定なことが多い。だが、彼が信用に足る人物であることは理解していた。

知りたいとは思う。だが、それが本当に正しいことなのだろうかと、心が一の足を踏んでしまう。残された面々は、しばらくそのままホールに立ち尽くしていた。

任務は唐突だったが、出発に支障はなかつた。へりに乗つた一行は転送ポートに向けて、一路空の旅と洒落込んでいた。その道すがらへりの中では少女たちの会話に花が咲く。

「第97管理外世界、通称『地球』……ソラがなのはさん達の故郷なんですね」

「やうだよ。私やはやてちゃんの生まれたところで、フェイトやわんもしばらく暮らしてたんだ」

なのはが懐かしさを噛み締めるようにして笑う。数日前故郷のことが話題になつたところでの任務が届いたことに、エリオを始めフォワード陣は感慨深いものを感じていた。スバルが隣に座つた蔵馬の方を向く。

「やういえば、蔵馬さんたちの故郷も地球つて名前なんですね？ 同じ世界の出身だつたんですね？」

「いや、俺たちの世界は確かに地球だけじゃ」とは違つ、断層がされた位相世界の地球なんだ。分かりやすく言えば平行世界といったところかな。魔法はないし、データで見る限りは共通点も多いしね」

蔵馬はデータを端末で呼び出しながら言つた。彼はへりから世界の順応が早く、もうはやてやリインの手伝いでその実力を發揮し始めていた。意外なことに桑原も有能で重宝されている。

「そこ」に魔界、靈界、人間界といひ三つの世界が薄い次元の壁を隔てて点在し、一つの世界を形作つてゐる。魔法はないが、此方の世界には人間界が最も近いな。魔界は比べるだけ無駄だ、レベルが違

「あさる」

飛影が藏馬の台詞の続きを口にする。桑原がそれに回調するように肩を竦め、まつたくだというふうに両手を挙げた。

「まーな。毎度毎度思うが、あそこは非常識が服着でスクワットしてるようなトコだ。前回は浦飯がジーしてもつて言つから、四年も地獄を見ながらじこかれてトーナメントに出てやつたが、俺はもう御免だぜ。？とか黄泉とか、S級最上位のバケモンだらけだからな。あんなん相手にしてたら、命がいくつあつても足りやしねえ」

「「「「S級？」」」

「「「「トーナメント？」」」

桑原の言葉に全員が首を傾げる。だがそれを追求するより早くヘリが着陸態勢に入り、お喋りはそこで打ち切りとなつた。

シートベルトを止める。リインもはやての横に座つていた。その姿はいつも妖精サイズではなく、普通の女の子サイズにまとまつてゐる。容姿はエリオとキャロと同年代に見えた。といつか、戦闘力はともかく性格は彼らより幼いのではなかろうか。

蛇足だが、先ほどそれを指摘した飛影と桑原はどうじ。

『れでいに対して失礼なのですう

』

と、先ほどまで涙田をしたリインに上田遣いで説教を受けるという不思議な体験をしている。そんなことをしてくるうちに振動は止み、六課のメンバーはヘリを降りた。

「私と副隊長は寄るところがあるから、先に行つといでな」

「うううとはやてはシグナムたちを連れ、別のドアに消えていく。それを見届けてから、なのはは全員を見渡して笑顔を作った。

「じゃ、私たちは先に現地入りしておこうね。いろいろと準備もあるし、その方が効率的だしね。飛影くん達もいい？」

なのはの言葉に飛影はフンと唸つて視線を背けた。蔵馬と桑原がそれに苦笑と呆れを返し、彼女に問題ないことを告げる。フェイト達もそれ確認すると、転送ポートへと歩き出した。

第十話 出張機動六課（導入編）～始動（後書き）

夏は勝負の季節って言っていますけど、ホントですねえ。受験生では夏を制するものは受験を制すとよく説教臭く言われました。

・・・作者は卒論を書かなければならぬのでその件なんですけど。はあ、先は長いですよ。

つと、愚痴はこれぐらいにして小説関係に行きましょう。

つて、地球編つて言いながらまだ地球にすら到着していない・・・アリサやすずかとの対面を楽しみにしてくださっていた皆様には申し訳ありません！

次回は必ず登場させますので、どうかそれまで今しばらくの間辛抱をお願い致します。

さて、次回にまたお会いできることを願つて今回までのへんで。

では再見！（この締め、最近気に入っています・・笑）

第十一話 出張機動六課（邂逅編）～地球へ（前書き）

わへ、やつてまつりました地球編第一話。

今日は皆様がお待ちの一人と飛影たちの出来事が綴られます。

わへわへ、一体どういったお話になるのやら。書いた作者としては非常に出来が不安であります、どうか最後までお読み下さるといれしごです。

それでは、行ってみましょひー。

光が森の一角を照らし出し、風が周囲を舞つように巻き起こつた。ざわつとした空間を一瞬体験し、慣れ親しんだ引力による重みが戻つてくる。無事に足を大地に付けた六課のメンバーは、深い澄んだ空気が体で浴びせられるのを感じた。

ポートを降りた先は、大きく豊かな森が広がる湖の湖畔だつた。湖面が波打つように揺れるたび、光が万華鏡のように反射する。その様子にエリオたちは言葉を忘れて見入つていた。

「綺麗・・・」

ティアナが視線を縫い止められたまま呟いた。誰も言葉を返さないが、それは否定ではない。言葉は必要ない、というように誰もが空の色を映し出す鏡面を見つめていた。すると、遠くから車の音が響いてきた。

近づいてきたのはリムジンだつた。車としてはいさきか大仰すぎるほどの立派な造り、洗練されたフォルム、そしてその車体の大きさ、どれをとっても庶民には手がない代物だ。そして、そのシックな黒のドアがバーンと優雅さのかけらも無く開け放たれる。

「なのはーっ、フヨイトーっ！」

開放と同時に何かがなのはの身体に飛びついた。反動が大きすぎ

たのか、彼女を軸にしてくるくる回っている。それがようやく止まると、それは金髪をショートで切りそろえた、なのはと同年代ぐらいの少女だった。

「あはは、久しぶりだねアリサちゃん」

「久しぶり、アリサ」

なのはの返答に随分と「無沙汰だつたじやんか」とアリサは愚痴を零した。飛影たちや新人四人はまるつきり蚊帳の外である。

だが、全員の表情は笑顔一色で染まっていた。手を取り合い、抱き合い、互いの背中を叩きあいながらフェイトやなのはが喜びを全身で表現していた。藏馬たちはそれを微笑みながら見つめている。しばらくはそうやつていたが、なのはがじやれていたアリサから身体を離す。

「紹介するね、私とフェイトちゃんが中学校まで一緒にいた親友、アリサちゃんだよ。今は大学生なの」

「アリサ・バニングスよ、よろしく。すずかももうすぐ・・・」

「なのはちゃん、フェイトちゃん!」

「あ、すずかちゃん!」

遠くから紫がかつた黒髪をなびかせながら、アリサと同年代の少女が息せき切つて走つてくる。その足は意外と速かつた。遠くに見えていた影が大きくなりなのはの隣に並ぶ。そしてアリサと同じよう再会を喜び合つた後で此方を向いた。

「初めまして、なのはちゃんたちの幼馴染の月村すずかです。よろしくお願ひします」

おつとりした見た目を裏切ることのない、淑女然とした挨拶にフォワード四人は萎縮してしまった。スバル達は微笑むすすかに少しどもりながら、順番に自己紹介を済ませる。はやて達は別にやることがあるらしく、現在ここにはいない。

と、一通り挨拶を終えた一人が飛影たちを捉えた。

「あ、っと紹介が遅れてごめんね。この人たち三人は、私たちに協力してくれる民間協力者の人達なんだ」

「民間協力者の藏馬です」

「桑原和真だ、よろしくな

なのはの説明で、アリサとすずかの目が友好的なものに変わった。それぞれ一人と握手を交わす。だが、桑原がすずかの手を握つたとき、怪訝そうに眉を顰めた。

「あれ、アンタ・・・」

「はい、なんですか？」

握った手とすずかの顔を見比べながら桑原は首を捻る。が、僅かに視線を逸らした後、「いや、なんでもねえ」とだけ言って彼は手を離した。

その様子に飛影と藏馬の視線が一瞬鋭く光る。だが、瞬きほどの間に現れたその気配は搔き消え、最後に飛影の番が回ってきた。

「……飛影だ。よろしくするつもりはない」

飾り気も何も無いどころか、初っ端から名前と共に友人的要素を切り捨てた。これ以上ない拒絶の意思である。親しみも何も置いてきたかのような感じの彼に、フェイト達は若干苦い表情をした。

だが、二人の目は今日一番の驚きに見開かれる。一瞬にして、表情がそれまでとは別の感情を秘めたものに変わっていた。

「飛影、ですって……!?」

「じゃあ、あなたが……!?」

「？・・・なんだ」

相手が目の前まで来たことに飛影は怪訝な表情をする。一人は一様に飛影を見据えていた。すすかは興味深そうなそして窺うような目で、アリサは強い光を放つ瞳であからさまにじろじろと

これほどの美人の一人に見つめられれば、普通の男子ならドギマギするかもしない。だが、飛影は「フン」と鼻を鳴らすのみだった。不機嫌そうなその様子に、アリサの眉がピクッと反応して天に近づき、視線が刺々しさを帯びる。

値踏みするような視線に、何故かのはとフェイトが少し恥ずかしそうに俯いた。リンとすすかはおろおろと、新人四人は黙つて成り行きを見つめている。

緊張した空気の中を通すように、アリサが腰に手を当てながら「ふーん?」と鼻を鳴らした。

「この人がなのはとフェイトを怪物から救つたつていう命の恩人?二人には悪いけど、正直信じられないわね。私でも勝てそうな気がするもの」

「錯覚だ、バカめ」

アリサの無遠慮な一言に、瞳を半眼にした飛影が即座にツッコミを入れた。飛影の性格からすれば当然帰結と言えたが、如何せん間が悪すぎる。スバル達は「うわあ・・・」と顔を引き攣らせ、なのは達は「あぢやー」と頭を抱えていた。

そしてそこからは周囲が心配した通りであった。ここに集まつた中で最も沸点が低いであろうアリサが、飛影のあからさまな皮肉に顔を真っ赤にしながら噴火する。

「なつ、ななな、なんですつてえ!? も、もつにつべん言つてみなさいよ!」

「バカめ」

「う、こんのおつ・・・ホントに一度も言つたわねえ!?」

飛影の冷めたような声色に、怒りゲージが一トロエンジン仕様であるアリサがさらにヒートアップした。片方が落ち着いているからといって物事は收まらないといついい例である。そしてくわつと田を見開きながら振り返った。

「なのは、フェイト！コイツはダメよ、絶対に止めときなさい！」

「ア、アリサ（ちやん）……」

眉を吊り上げ、アリサは飛影を指をさしながら怒りに満ちた形相で言い放つた。一人は額から汗を流しながら、荒れ狂う親友の様子をはらはらと見ていく。飛影の方はそれすら一顧だにしないかの如く、あからさまに溜息を吐いていた。

「貴様らの事情なぞどうだつていい。オレはこいつ等に連れてこられただけだからな、貴様らに関わる氣はこれっぽっちもない。喚きたければ一人で勝手にやつていろ」

「あつ、こじら待ちなさい！まだ話は終わつてないわよ！」

付き合つてられんと背を向けてスタスタと歩き出す飛影。それにさらに怒りゲージを刺激されたのか、アリサが地ならしをするように闊歩しながら走つていった。全員がそれを呆気にとられた表情で見つめていると、遠くから駆動音が響いてきて車が止まつた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん遅れですまんな。今から作戦を…つてどないしたん？」

ようやく到着したはやとヴォルケンリッターの面々は、混沌と化したこの場に眉を顰めて首を傾げた。なのは達はそれに苦笑いする、作業を始める。新人四人も慌ててそれに倣つた。

「飛影さん、何気に女の子に構われることが多いですねー。将来はすこいシンデレな天然ジゴロさんになるかもです」

リンが、飛影が聞いていたら一瞬で血祭りに上げられそうなどとを言つ。失礼千万にも程があつたが、ちょっと見てみたい光景だと思つたのは、乙女たちの秘密であつた。

- Side chance -

「で、今度はどうじこくつもりだ」

歩きながら、飛影は横を歩くのはをジト目で睨んだ。ただいま飛影とヴィータを除いたスターズ隊の三人、そしてリンの五人はこの実家である喫茶店、『喫茶翠屋』に向かつてゐる。現在は場所が場所だけに、飛影はいつもの黒コートではなく、黒いジーンズと白い無地のTシャツを着ていた。

ちなみに藏馬ははやての、桑原はフヨイトの手伝いでここにはいない。別れ際、何故かフヨイトが少し不満げではやでがニヤニヤ笑つていたが、飛影には理由がわからなかつた。

「そ、そんなに膨れなくとも・・・アリサちゃんは本当はいい子なんだよ~。さつたはその、ホラつ、わよつと『氣』が高ぶつちゃつただけで・・・」

「誰のことを言つてゐるんだ。それにあんな小五月蠅い女など『氣』していないと、さつきから何度も言つてゐるだらう」

なのはが少し申し訳なさそうにしながら親友のフォローをする。だが飛影の態度は取り付く島もないがごとくで、なのはから顔を背ける。すると、その横を歩いていたリインがニヤリと笑みを零した。

「にゅふふふふ・・・・そう言いながら気にしてる感バリバリなのです。前から思つてましたが、飛影さんつば意外と根に持つタイプですね？」

「人形焼にしてやろうか？」

「み、身の危険を感じるのです！なのはさん、スバル、ティアナっ、ヘルプミーです！」

「「「あははは」」」

他愛もない談笑をしながらだと十分という時間は非常に短かった。舗装され、整つた街路樹が並ぶ通りを抜けると、小洒落た看板が目に留まる。

喫茶翠屋。なのはの実家で、ケーキと紅茶が自慢の地域密着型店であった。

「お母さん、ただいまーー」

「おお、なのはー帰つてきたなー」

「お帰りなのはー」

店の中に入った途端、なのはは次々に迎えられた。いるのは父の高町士郎、母の高町桃子、そしてなのはの姉である高町美由希らし

かつた。お母さん若い、とスバルとティアナが呆然とした様子で咳いている。ちなみに兄もいるらしいのだが、今はドイツにいるのそうだ。

なのはがスターズ隊の二人を自分の生徒だと説明すると、スバルとティアナは前に出て少し緊張氣味に自己紹介をした。それに対し土郎は喫茶店の主人らしい氣のいい受け答えでサービスをしてくれた。ティアナたちはほつと安堵の息を零しその脇で桃子が笑っている。

すると、土郎と桃子がなのはの後ろでポケットを突っ込んで佇んでいる飛影に気づき、おやと首をかしげた。その視線が鋭く光る。

「なのは、彼は・・・？」

若干声のトーンが低いことは全力でスルーしながら、なのははえへへと笑った。その頬が少しばかり赤いことに、桃子は「まあ」と口に手を当て、美由希はニヤニヤしている。それに慌てたのか、飛影の横に立つたなのはがわたわたとしながら視線を向けた。

「えつと、しょ、紹介するね？この人が飛影くんです。少し前に偶然再会して、今は私たちの活動に協力してもらつてるの」

「あなたが・・・そう」

近づいてきた桃子が飛影と視線を同じくしながら柔らかな微笑を浮かべる。飛影はアリサ達と同じ反応をされたことに少しむつとしが、桃子の表情を見た瞬間それは搔き消えていた。

優しげな、しかしそれでいて今にも泣き出しそうな表情。自分に

はそんな表情をさせる心当たりが無かったので、飛影は動搖してしまった。

「・・・何を見ている?」

「ふふ・・・あなたのことは以前からなのはに聞いていたから、ちよつとした確認をね。私も一度お会いしたいと思っていたの、会えて嬉しいわ」

魅力的な微笑みが飛影を捉える。それが見たこともない母の幻影と重なり、飛影は搔き消すように首を振った。さらに笑みを濃くして桃子が続ける。

「ホント、言つた通りそのままだつたわ。無口で、無愛想で、頑固で、融通が利かなくて、鈍感で、頭ツンツンで、意地悪で、嫌味ばかり言つて、容赦のない、とつても厳しい人だつて」

「お、お母さんーっ!？」

「・・・ほつ、それはなかなかに面白いことを聞いたな。オレの知り得ないとこで、まさかそんな認識が飛び交つていたとは。感謝するぜ、後で本人に聞かせてもらうとしよう。ククク・・・」

飛影が目に邪悪な光を宿らせながら低く笑つた。スター・ズ隊の二人と美由希、それにリインがひいといいと悲鳴を上げる。なのははわたわたと慌てながらオロオロしていた。

他には何か言つていなかつたかと飛影が聞くと、「もうやめてーつ!?」と涙目になるなのはを桃子が押しのける。そして「うーん」と唸つたあとで優しい笑みに戻つて言った。

「そうねえ、厳しいけどどつても優しくて、頼りになつて、かつこ
よくて・・・ずっと憧れて、いつか追いつきたい人だと言つてたわ」

「・・・・・」

今までで最高の笑顔を見せながら桃子ははつきりと告げた。なのはは青くなつていた顔を瞬時に赤に沸騰させる。飛影は少しばかり面食らつたあと、驚いた顔を隠すように鼻を鳴らした。

それが単なる照れ隠しであることは一目瞭然であったが。

「・・・そうか、ならば精々研鑽を積むがいい。一生を賭けたところで追いつけんとは思うがな」

「ひ、ひどーい！いいもんいいもん、いつか絶対に追いついて見せるからね！」

飛影の辛口になのはが頬を膨らまして宣言をする。それを飛影は短く息を吐きながら笑みを浮かべた。

『すぐに追いついてやるぜ。ヤツにも、お前にもな

かつて自分が放つた言葉が脳裏をよぎる。人間最強の名をほしいままにした元靈界探偵に向かつて、一度は死んだものの挑んでいた『アイツ』。それに追いつくと誓い、そして飛影は成し遂げた。

いつの間にかヤツは魔界の王にまでなつてしまつてゐるが、サシながら五分に持ち込める自信はある。

飛影はそこでふと思つた。あの時宣言を聞いたアイツも、今の自分と同じような気持ちだったのだろうか、と。

「ふふ、その意氣よなのは。どうせなら一緒に歩いてくれるような仲になるとお母さん嬉しいわねー」

「お、お母さんッ！？」

「クシシシ、いい感じじゃないの」

「む。桃子さん、それはなのはにはまだ早いと……」

悪乗りする桃子に顔を真っ赤にして焦るのは、そして忍び笑いを零す美由希と娘とはなんたるかを語りだす土郎。絵に描いたような理想の家庭がここに存在した。

飛影は呆れつつも目を離すことはなく、スターズの一人は笑つて見ている。リンはアーモンドココアを飲みながら、自分の主たちのことを重ねていた。

そこからは他愛もない談笑が続いた。六課の出来事から、飛影たちの指導まで、思いつく限りのことを話していく。最初は渋つていた飛影だったが、桃子の雰囲気につられケーキまでご馳走になつた。彼自身、楽しいと思っていたかも知れない。

だが楽しい時間というのは瞬く間に過ぎていくものだ。そういうつてゐるうちに集合の時間がくる。スバルとティアナはお礼を言つ

て店を出、なのはも持たされたお土産を持ちながら扉を潜つた。それに飛影も続く。

「飛影くん、ちょっといいかい?」

扉に手をかけようとした際、飛影は士郎に呼び止められた。この男からは強い闘気を感じる。飛影が少し警戒を施して振り向くと、その両隣には桃子と美由希の姿もあった。

「オレに何の用だ?」

「そんなに身構えなくともいい。ただ、僕らは君に言いたいことがあるんだ」

士郎の言葉に桃子と美由希が頷いた。警戒から一転、飛影は疑問に満ちた表情になる。何がなんだか分からないという状況に士郎たちは息を深く吸い込み、

「ありがとう。かつてなのはを救いだしてくれたこと、本当に感謝している。あの子が今も元氣でいるのは君のおかげだよ、飛影くん」全員一斉に頭を深く下げた。士郎など机に届かんばかりに掘り下げている。予想外のことにして飛影は目を見開いたが、彼の言つたことは理解できた。

おそれらく自分が過去に遡つた時、彼女を土蜘蛛から救つたことだ。そのときもつ一度夢を目指すための希望を与えたとなれば自身も語つている。だが、あれは事故によつて起こつた偶然だ。そして助けたのも自分の気まぐれにすぎない。

「礼を言われる理由がわからんな。あの時あそこで会ったのも、オレがあいつを助けたのも、今こうしているのも全てが偶然にすぎん。最後のはヤツ自身の努力だつたろうし、生きているのも単なる気紛れによる結果だ。感謝される謂れはない」

「けど、その偶然と結果が重なつて今があるわ。あの子が笑つてられる、あの子が生きていられる、あの子達が夢を掴むチャンスを持つことができる現在がある。それは本当に尊いことだと私は思うの。だから、あなたがなんと言おうと私たちは感謝してる。飛影さん、本当にありがと」

今にも涙を滲ませそうなほど輝いた桃子の瞳に自分が映る。その目に宿つた母としての慈愛に、飛影は懐かしさと共に強烈な寂寥感を覚えた。

『お前が抱いているのは、氷河の国に対する激しい憧れだ』

一昔前に?に言われた言葉がよぎる。かつては憎み、皆殺しにしようと思つていた冰女たち。自分を捨て、自ら死を選んだ母親の意志。母の愛情に触ることはできなかつたが、自分の中に答えを見つけることが出来た。

自分が預けた形見の氷泪石を持つうちの一人、高町なのは。彼女もまた飛影に憧れているのだといつ。飛影からすればその心は全く読めないのだが、その対象が力であれなんであれ、求め続ける意志を持つ限り、道を違えない限りは見ておくのもいいかも知れない。

「高町なのはが、その答えを見つけるときまでよ。」

「フン、ヤツが今後どのように生きるのかは知らんし憧れなんぞ関係ない。だが、本気でオレに追いつもりなら、それこそ死ぬ瀬戸際までやらねばならんだろうからな、ヤツが潰れそうになつたときは引き上げてやるとしょ。が、そのときは一切の容赦もせん。それだけは覚えておけ」

「ええ。なのはが道を間違えた時は、張り倒しても分からせてあげて。あの子思つた以上に頑固だし、思い込みも激しいから。手を焼くこともあるだらうナビ、これからもなのはをお願いします」

桃子の言葉に飛影はふつと笑う。そして、それに答えることなく扉を潜つて出て行つた。名残惜しげにドアベルが鳴り響くなか、士郎たちは去つていつた飛影の背中を思い出しながら笑みを零す。

「　　強いな、彼は」

士郎が視線をそのままにぱぱつと離す。美由希がそれに同調するように頷いた。

「あ、お父さんもそう思つ? やつぱり口者じやないよねえ、彼。ずっと見てても隙の「す」の字も見当たらんだから。あつや恭ちゃんでも瞬殺かな~」

「いや・・・彼は確かにとてつもなく強いだろうが、それだけじゃない。ただ強いだけ、ただ力を持つだけじゃなく、その力を根底で支える『強さ』がある。やれやれ、またか生きていのうかあんな青年に会つことになるとはなあ・・・」

士郎の言葉に美由希が首を傾げる。桃子は娘の考え方ぶり見て、心から穏やかな表情で笑った。

「ふふ、美由希もそのうちわかるわ。でも飛影くんがとつても頑固なのは思つてた通りだつたけど、鋭く見えて意外と人の感情には鈍感そうだったから、アレは一筋縄じゃ無理。

なのはも大変な人を相手にしたものね、どうやつたら貰つてくれるかしら?」

「も、貰つつー?ちよ、桃子さんつー?」

「あちやー、お母さん!ロックオンされちゃつたみたい・・・」『愁傷様です、飛影さん・・・』

美由希は去つていつた扉に向かつて十字を切る。同時刻、歩いていた飛影が珍しくしゃみをしたことと、何か言つようのない感覚が背中に走つたと後に語つている。

第十一話 出張機動六課（邂逅編）～ 地球へ（後書き）

アリサとすずかとの出会い、そしてクロス作品で十八番ともいえる士郎たちとの邂逅でした。

いやー、キャラの原作らしさを出すのに苦労致しました。アリサにすずかなど、原作で人気の高いキャラなのに *settler's* 編にはほとんど登場してないので、結構それらしく書けるように努力しましたが、いかがでしたでしょうか？

士郎たちとの出会いも、当初はけんか腰で飛影に戦いを挑むといった流れだったんですが、書いていくうちに方針を変わりました。変わってしまったともいいますが、それはそれとして。

ここで予告なのですが、地球編はあと2～3話ぐらい続きます。バトルの方の展開を楽しみにされている方は今しばらくお待ちくださいませ。

では、今回はこの辺で。次回もよろしくお願いいただけますよ。

それでは、サイション 再見！

第十一話　出張機動六課（事件編）～スーパー銭湯様々（前書き）

四日ぶりの定期更新、なんとか間に合わせることができました。

つ、疲れた・・・今回は少しだけ文章量も多いです。たった数行増えただけなのにかなりの労力を使わされた気がします。

それでは、第十一話のはじまりはじまり～！

「封印処理完了。うん、ちゃんと安定領域に達してる。よく頑張ったねキヤロ」

「あ、は、はー！ ありがとうございます・・・えへへ」

ロストロギアの封印を確認し、なのはがキヤロに向かつて微笑みかけた。封印作業を買って出たキヤロはそれが平穀無事、事なきを得て完了したという事実にほっと息を吐きながら封印したロストロギアを握り締めた。

「やつたね！」

「頑張つたじやない」

「す、いよキヤロ！」

スバルとティアナ、エリオも笑顔でやつてきた。ロストロギアがサーチャーに引っ掛けたのはつい先ほどのこと。

エリアサーチが指示示す場所へやつてくると、そこは防御機能が働いたロストロギアが既に暴走しかけていたが、危険性がないことから新人たち四人に任せられたというわけだ。そしてスバルの力とティアナの指揮、エリオとキヤロの連携によりなんとか対象を封じ込めることに成功したというわけである。

「みんな頑張ったね、よくやつたよ」

「ま、及第点つてとこだな」

「フ、鍛えがいがある」

フュイトと副隊長の二人が近づいてきた。フュイトは満面の笑顔で、あの二人は苦笑いと薄ら笑いでとそれ違うが、その声色にはどれも嬉しさが浮かんでいる。

「意外とはやく終わつてもうたな。皆、『苦勞様や。あと、『苦勞ついでに伝達事項があるで」

『伝達事項?』

きょとんとするスバル達に「そや」と言つて、少し楽しそうにはやては全員を見渡す。なのは達も予想外だつたのか、何だろうと彼女に注目していた。

「この前騎士カリムから伝達があつてな、ここんとこハーデスケジユールだつたこともあつて、一日ぐらい全員で休養せえ言われたんや。そんで、いい機会やからこつちの世界の時間で明日の朝八時までは臨時休養にする。宿泊は現地協力者がしてくれるから心配せえへんでな。もう夕方に近いから時間的には少ししかあらへんけど、私からみんなへのちよつとしたご褒美や」

はやてが満面の笑みからウインクを飛ばす。スバル達は少し呆けていたが、それが特別休暇のお達しであることに気づくや否や、その表情が笑顔に変わった。スバルやキャロは両手を振り上げて喜び

を弾けさせ、エリオは心からの笑顔を讃え、ティアナはそれに毒づきながらもその顔を笑みに崩している。

そこに飛影たちがやってきた。三人ともビートなく楽しそうな顔なのは氣のせいではないだろ？

「それはいいな。最近は皆頑張ってたからね、少しくらい休みをとつても罰は当たらなこさ」

「フン、あの程度頑張っている内になど入らん。オレからすれば耐えられて当然だが、氣づかんうちに潰れられるよりはマシか。それに、こちらもお守りばかりでは堪らんからな」

「ま、飛影の言つてることは正論だな。相変わらず素直じゃねえが、まだまだこれからつてもんよ」

「殺すぞ・・・」

桑原のセリフに殺氣の混じつた返答を返すが、なのは達はそれに苦笑を返すにとどめた。彼の優しさは非常に分かりにくいが、それはいつも自分達のためを思つてのことだと分かる。

氷のような厳しさと炎のような苛烈極まりない気性のなかにある、雪解けを促す風ような慈愛の光。飛影と会つてまだ一月程度だが、彼が見た田や表に出す態度よりずっと優しい男性であることを彼女たちは氣づき始めている。

シャーリー やルキノは今だその意見に首を傾げているし、本人に言つたら真つ向から否定されるだろ？ 耐え難いお仕置きつきで。

「でも、どうしよう。街に繰り出すのはひとつと遅いし、このまま時間潰すにまかせし長すぎるし……」

スバルが時計を見ながらむう、と考え込んだ。確かに、休暇といつにまは中途半端な時間である。のんびりしている時間はないが、ただ過ごすには長い」とも確かだ。桑原もスバルに同調して呟つ。

「だなあ。鳥にミジンコ、スルメに辛子つてのはまさしくいつことだぜ」

「たすきに短し櫻に長しですよよ、桑原くん」

「どうじまで奇天烈な脳内変換をしているんだ。頭が沸きすぎて味噌煮にでもなったのか?」

「どうか、今の言葉からどんな状況が思い浮かぶのかしら……」
藏馬のさりげない訂正ツッコミ、そして飛影とティアナの呆れたよつなセリフに一同は笑いあつた。と、そこで今まで黙っていたなのはが口を開いた。

「行くところがないのなら私達に提案があるんだけど

「提案? なのはさん達、何所かいといふ知ってるんですか?」

スバルが質問すると、なのははこつこり笑つて頷いた。横にいたフエイトも同じなのか、その表情には僅かな期待が浮かんでいる。

「うん。私達もなのはと行つたことがある所なんだ。あそこならアリサ達も呼べるし、結構久しぶりでこの時間からなら調度いいと思

うんだけど、どうかな

フロイトが確認の意を込めて尋ねると、スバル達が頷いた。蔵馬と桑原もOKサインを出していいし、飛影も好きにしろといったような態度である。はやてがうんうんと首を振った後、全員を見渡して手を高く振り上げた。

「決まりやな。ほんならのはちゃん達の案採用しよか。いいレッジゴーぜー！」

『オー！』

女の子特有の黄色い声が弾ける。飛影たちは各自の反応を見せながら、それを遠巻きにしていた。

ひつして、六課のメンバーははやてに同調して拳を振り上げつつ、意氣揚々と田的池に向かうことにになったのだった。

- Side change -

カーポーん

・・・・・

石畳の床に子氣味よい音が響き渡つた。

部屋一体に立ち込める白い湯気。曇つたガラスに隅に均等に重ね

られた風呂桶。湧き出るジョットバブルに流れ落ちるお湯の音。そして後ろに描かれた古風な富士山。

心が洗われるような日本の文化と伝統の一滴、銭湯である。その一角に湯につかつた四人分の姿があつた。言わずもがなの飛影たちである。桑原が頭に乗つたタオルを落とさないよう伸びをした。

「カーシ、やつぱいいねエこういうデカイ風呂は。六課じゃ忙しいのと時間制とかでシャワーが多いが、ありやどうも入つた気がしないでなア。これぞ日本人の醍醐味つてもんだ」

「少しは静かにできんのか。どこまでも騒がしいヤツめ」

「あはは・・・」

「まあまあ、久しぶりなんですから大目に見てあげてください。それについた感じで羽を伸ばすのも、お風呂での作法の一つなんですよ」

飛影達はその身体を湯に沈めながら、他愛も無い会話に花を咲かせる。桑原と藏馬は久々の、飛影とエリオは初めてとなる大風呂といつものを楽しんでいた。

無論、六課にも風呂というものはある。だが、時間制によつて女子と男子が分けられている上、このところ忙しい日々が続いたのでシャワーなどで手つ取り早く済ませるのが常だつたのである。それも相まって、銭湯のような大浴場に来るのが久々となる桑原と藏馬の二人も、少し気が乗つてゐるようだつた。

「フロイトさん達から聞いたことはありましたけど、こんなに気持

ちのいいものだつたんですね。少し気持ちが分かつた気がします」

彼ら三人の最も左側、飛影の隣にいたエリオが顔を拭いながら三人に話しかけた。ここに来ている機動六課メンバーで唯一の男である。

「兄さん、せつきはありがとうございました。それとすいません、嫌な役回りをさせてしまって・・・」

「フン、お前がいつまでもハツキリせんから少しイラついただけだ。フェイトと入りたくないのならそう言えればいいだらうが」

「い、いえっ！決して入りたくないわけじゃないんですが・・・それよりも恥ずかしい気持ちが強いので・・・」

そう言いながら、エリオは顔を赤くして俯いてしまう。事の発端はつい先ほど、エリオが十歳以下なら大丈夫という理由でキャロとフェイトに女湯に誘われていた時のことだ。

彼女ら一人を始めとして女性陣はエリオの入ることに反対しなかつた。統計的に見れば寧ろ賛成多数だったのだが、精神成長の早いエリオには、女性と一緒に風呂に入ることがどうにも恥ずかしかつたらしい。そこでエリオは、気遣いに感謝しつつもお断りという形を取ることにした。

だが、いざフェイトとキャロに断りの念を伝えると、二人は一瞬で落ち込んでしまつたのだ。キャロは雰囲気をしゅんとさせ、フェイトに至つてはその目尻に涙すら溜めて。「入つてくれないの？」という言葉が聞こえてくるような、そんな二人の無言の圧力には悪意こそなかつたが、だからこそエリオは困つてしまつた。

だが、そんな押すに押せず引くに引けない状況のなか、エリオがどう断るつかと頭を巡らしていたとき飛影が現れた。そして話を聞くや否や、マイツと話したいことがあると言つてエリオの首根っこを引っ掴み、そのまま男湯へと連行したというわけである。エリオからすれば、飛影に助けられたような形となつていた。

「エリオも勿体ねえよなー。年齢的には合法で相手は別嬪ちゃんばつか、しかも向こうからのお誘いとくりやあ奇跡の確率だ。こんなチャンス早々転がってるもんじゃねえぜ？見れるうちにしつかり見といたほうが後々いいと思うナビな」

「ぶつー？ほ、僕はそんなつもりじゃ・・・」

「桑原くん、純粋無垢な少年にあまり変な事を吹き込まないよう。今のはちよつと不謹慎ですよ」

蔵馬が軽く睨む。エリオは標的から外れたためかほつとしていた。

「いらっしゃ心配をすんじゃねえよ蔵馬。オレが雪菜さん以外に興味ないの、知つてんだらうが」

「雪菜？ 一体誰なんですか？」

初めての名前をエリオが鸚鵡返しする。飛影は不機嫌そうに目を閉じ、蔵馬はそれを横目で捉えながら柔和な笑みを零した。

「桑原くんの奥さんですよ。今は俺達の世界で育児の真っ最中ですけどね」

「え・・・ええええつ！？和真さんもう結婚して・・・というか、お子さんがいたんですか！？」

「・・・オイ。何だエリオ、そのものすゞーく意外そつな顔は」

「確認せんでもそつに決まつているだろつ。そろそろ自分の失敗面を自覚した頃だと思つたが」

「飛影テメエ！いい加減ひつくり返すぞ」

桑原がキシャーッと吼えるが、飛影は無視して立ち上がつた。そして広い屋内を歩き、一面ガラスの一角にある扉へと向かう。

「飛影、ゞにに行くんですか？」

「ゞには五月蠅くてかなわん。『露天風呂』とやらに行つてくる、あつちは人がいないうだからな」

「あつ、じゃあ僕も行きます」

飛影が扉を潜つていぐ。その後ろをタオルを腰に巻いたエリオがぺたぺたとついていつた。いないというからにはそうなのだろう。もしかすると邪眼で先に確認したのかもしれない。邪眼の力をそんなことに使うのはどうかと思うが。

相変わらずの彼に蔵馬が苦笑していると、横にいた桑原が「あり？」と首を捻つた。

「どうかしたんですか？」

「ああいや、そういうやさつきの注意書きに露天風呂は混浴つて書いてあつた気がしたんだが・・・」

「混浴ですか・・・まあ大丈夫でしょう。女性はそういうことに抵抗があるはずですし、いたとしてもかなり年配の方だと思いますから」

蔵馬の考察に桑原はまあそうだな、と軽く答えて風呂から上がり、今度はサウナの方へ入つていった。蔵馬は一度曇りガラスで見えない露天の方に目をやり、『死海と同じ濃度!』という看板が掲げられた塩風呂のほうに向かう。自分が考えたうちで最も面白・・・もとい最悪パターンではお約束の事態、『鉢合わせ』が起ころうとしていることなど知る由もなく。

スーパー銭湯海鳴。廃れ始めている銭湯文化を切り盛りし、海鳴に娛樂と癒しを与えている本格的な風呂屋さんである。その風呂の種類は二十を超えて、どんなニーズにもリーズナブルな価格で応えるとこう庶民の味方だ。

名物は様々あるが、中でも一番の注目度を誇るのが大きな露天風呂。白く濁つた湯はお肌スベスベの効果があり景色の良さは抜群であるが、注目すべきはそこではない。この露天風呂、実は混浴仕様なのだ。雑誌やテレビなどでも取り上げられたため、海鳴に住む人々ならほとんどが知っている。

だが、離れた土地に住む者にそんな勝手は通用しないわけで。

「なつ、なのは、フェイトッ！？」

「「飛影（くん）つ（と、エリオ）！？」

「いつこう事態が起つたこともある。

現在風呂場には四名。先に入っていたのは時空管理局民間協力者の飛影に同じく新人隊員のエリオ。そしてそこに入ってきたのが、

「ど、どどど、どうして飛影くんがっ！？」

「エリオまで・・・いつの間にこいつに来たの？」

若手ナンバーワンの期待株、不屈のエース高町なのはと、同じく若手の執務官にしてクロノ・ハラオウン提督の義妹、フェイト・T・ハラオウンであった。一人とも予期せぬ先客に呆然としている。だから忘れていた、自分達の今の姿を。

「そ、それは此方の・・・ッ！」

飛影がかち合つたその目に背を向けることと、一瞬にして視線を外す。後ろから見える耳は本当に珍しく耳まで真っ赤だつた。エリオも目をぎゅっと瞑り、顔から湯気を吹き出しながら一人に叫ぶ。

「ふ、二人とも、とりあえず前を隠してください！」

「え？ 前、つて・・・にや、にやあああつ！？」

「さやあうつ・・・・!？」

ヒリオの進言に、なのはとフロイトは悲鳴を上げて湯船に飛び込んだ。久しぶりの銭湯ですっかり気が抜けていた二人は、なんとタオルを脇に抱えたまま露天風呂に来ていたのだ。そして、風呂の中から誰が来たのかと見ていた一人とバッタリ真正面から遭遇。この後の展開は推して知るべしである。

（ま、また見られちゃった・・・）

（し、しかも今度は全部、だよ・・・!）

デジヤヴを感じながら一人念話で会話する。以前、飛影には一度裸に近い姿を見られたことがある。だが、あのときは少しではあるものの布で隠れていたし、何よりも幼い子供だった。だが、成長して人並みの羞恥心と体つきになつた年頃の少女に対して、この手のハプニングは恥ずかしいなんてものではない。

「ど、どうなつてるんでしょうか？」

「オレに聞かれても知らん！貴様ら、何故男湯に来た！？」

「そ、それを言つなら飛影くんだつて・・・」

「あ、なのはちょっと待つて・・・何か注意書きが書いてある」

フロイトが風呂の脇にある白いプラスチックボードに手をやり、視線を上から下に順々に走らせていく。すると、ある一節を見てフロイトが「あ！」と声を上げた。そして非常に申し訳なさそうな顔

をしながら、指をつき合わせて言った。

「ええっとね、ここ混浴つて書いてある、よ・・・？」

「「「」、混浴つー？」」

なのはとエリオが驚きの声を上げる。飛影は混浴と言つ言葉を知らないので、エリオから教えてもらつていた。すると、すぐにその顔が次第に苦虫を潰したように変わつていく。

「き、貴様らには悪いが今は戻れ。見えなくなつたら俺達が出て行く。それから入れば問題ないだろう・・・」

背を向け、少しどもりながら飛影は告げる。その声にはいつもの自信も重さもない。普段は冷徹冷静な彼も動搖しているということだろう。自分が超スピードで出れば解決することを失念しているあたり相当だ。

だが、それだけのことが一人には嬉しかつた。あんな姿を見られた時は死にそうなほど恥ずかしかつたが、飛影が自分達を意識しているということを実感できたのだ。もしこの姿を見られても、『なんだ、貴様らか』といった感じの皮肉しか返つてこなかつたら、二人一緒に泣き寝入りするところである。

だから、二人は踏み出すことが出来た。いまだ動かない飛影と、俯くエリオを視線で捉えて一人で笑い合つと、意を決したように同時に立ち上がつて、

「「し、失礼します・・・」」

「なつ！？」

「ええつ！？」

飛影の隣に腰掛けた。その距離はもはやゼロ、肩が触れ合つほど近くといふか触れ合つてゐる。彼女たちの熱がそのまま伝わつてくれるようだ。人の半分ほどのスペースをおいてエリオも座つてゐる。

飛影は驚いて二人を見ようとするが、二人の姿を思い出し寸前で目を閉じて前を向く。その柳眉は険しく反り立つたままだ。言葉を発するまでもなく何のつもりだと語つてゐる。エリオも至近に座つた二人の行動にオロオロするなか、なのはが遠慮がちに口を開いた。

「」「」「は混浴だから……も、問題ないよ？」

「そ、それに飛影は変なことしないだろ？」「お湯が真っ白だから簡単には見えないし、エリオとも入れるし……だから

「」「しててもいい？」と一人が声に出さない言葉で問いかける。かつての飛影なら迷惑だと一言で切り捨てただろう。だが、何故かそうする気にはなれなかつた。

今、彼の中に彼女たちへの恋愛感情はない。仲間としての好意はあるだろうが、それだけだ。そしてここまでされてもその理由もわかつておらず、愛だの恋だのという感情を彼が持つことがこの先あるのかどうかすらも分からない。だが彼女たちの精一杯、飾りも何も無い一人の気持ちを振り扱えるほど、現在の彼は冷徹ではいられなかつた。

不思議かつ不愉快だが、自分は変わつてしまつたのだろう。あの

幽助たちを始めとする、様々な出会いによって。だから彼は出来る限り不満げな顔つきと声色で、最近口癖になりつつある言葉を口にした。

「 勝手にしろ・・・」

- Side Nanoha & Fate -

「 勝手にしろ・・・」

不機嫌そうな返答を最後に飛影は黙り込んだ。その声に私達はぎこちなく頷き返し、彼の傍に完全に腰を落とす。温泉の温度が少し上がったような気がした。

自分達のすぐ脇、今にも触れそうなほど近くに皿を瞑つた飛影の姿がある。その隣にはエリオが顔を真っ赤にして、彼と同じく身体を堅くしていた。

おそらく自分達はもつと真っ赤になっていることだらう。色々な意味でのぼせないだらうか。わりと本気で心配だ。

(フヒ、フヒイトちやん・・・と、隣に、ひ、ひひ飛影くんが、い、いいいいるよ・・・)

（「うん・・・ま、まさかOKしてくれるなんて思わなかつたら・・・」）

念話で舌を噛むという稀有な体験を、私達は今一身に受けている。それだけ混乱しているということだらう。そもそも『あの』飛影と一緒に、それもお互に生まれたままの姿という壮絶すぎる状況下で、すぐ隣にいることが信じられない。

とこゝか、勢いだけでここまで来てしまったので、自分たちがどれほど大それたことをしたのかということを一人は今更のように自覚していた。彼と並んで湯に浸かつたはいいが、身体は極寒の地に放り出されたかの』とく力チンコチンに硬直している。

飛影の身体はその背丈からほほえられないほど引き締まっていた。鍛え上げられた腕や背中を見るたびにドキリとしてしまうし、頭もぼうつとして顔が熱くなってしまう。戦いなどによる傷跡もそこかしごに見え、彼が戦いの日々を生きてきたことを感じさせた。

（ねえ、フエイトちゃん。飛影くんの背負つているものって、何なのかな・・・？）

（それは・・・）

なのはが視線と共に向けた言葉に、フエイトが声を詰まらせた。答えに窮しているのではない、彼女も知らないが故に知りたいと思う本心と葛藤しているのだ。

思えば、一人は驚くほど飛影のことを知らない。和真や藏馬などのように一緒にいた時間も長くはないから、彼が何を思いここにい

るのかは分からぬ。けれど、確かなことが一つあった。

（私は飛影が何を経験してきたのか知らない。ここに来るまでに、私達なんかじや想像もできないことを経てきたのかもしない・・・。けど、それでも私は飛影と一緒にいたい。どんな過去があつたって、何度突き放されたって、手を伸ばし続ければいつか届くかもしないから）

彼は何も寄せ付けようとしない。それこそ、今も私達とはどこか距離を置いている感じがする。長く時を同じくする蔵馬たちでさえ彼の根底は知らないのだ、それも仕方がないことなのかもしない。

だが、だからこそその背中を追いかけていきたくなるのだ。

遠く、たつた一人で己が道を行く彼の後姿に、知らず心が惹きつけられる。語らない背中に思わず声を掛けたくなる。駆け寄つて思い切り抱きしめたくなる。

こんなことを言つたら彼はきっと怒るだろう。けれど、この思いは偽りない私達の本心だった。

そして自分達にすら制御さがが利かなくなる恐れも内包する、幾度となく繰り返されてきた人の性。それがおよそ世間一般で言われる所のものだということは、彼を探して八年の間にはっきりとした形になつていた。

（・・・私、飛影くんともつと分かり合えるようになりたいと思う。飛影くんが嫌わない限り、ずっと一緒にいたい・・・だから頑張ろうね、フェイトちゃん。あ、でも抜け駆けは禁止だよ？）

（うん・・・私も・・・私も、飛影がくれたモノよりもっと多くのものあげたい。だから、飛影の一番近くに行けるように私も頑張る。最近、ヴィータとかシャマルも飛影のこと意識してるみたいだけど、負けるつもりはないから・・・）

確認と宣戦布告を行い、しかし一人の間に険悪な空気はない。望むことは同じだけど、お互いに幸せになつて欲しいのは同じなのだから。

どちらともなく笑みが零れる。そして私達はもう一度視線を交わして笑い合つと、仮頂面のままお湯につかる彼に左右から身を寄せた。

- Side out -

「ふう、やっぱりした。久しづりに来たけれど、いつももたまにはいいかな」

「おうよ。江戸っ子なら銭湯つて相場が決まつてるからな」

蔵馬は長い髪にタオルを当てながら、桑原は自慢のリーゼントを整えながら満足そうに呟いた。その後ろからはエリオ、そして飛影がやつてくる。

だが、どういうわけか一人とも様子がおかしい。エリオは風呂上りを考慮しても顔が赤すぎるし、飛影は入る前よりも不機嫌そうに

している。蔵馬たち一人が首を傾げてそのことを尋ねようとしたとき、騒がしいロビーでも貫き通るような大声が響き渡った。

「えええええつー？なのは達、露天風呂へ入つてたのー？あそこ混浴なのよつー？」

声の主はアリサだつた。蔵馬たちがそちらへ向くと、おじおじしながらも首を縦に振るなのはとフェイトの姿が見える。

アリサの言葉を聞いてロビーにいた男性の大半が、首をぐりんと回した。そしてフェイト達を捉えると一様に涙を流し始める。流石にあからさまに悔しがる声は聞こえてこないが、その表情は口以上にものを言つていた。

なかにはハンカチを噛み締めているものまでいる。頑張れば血の涙も流せそうだ。

「男はー？といふか変なことされなかつたでしょ？」

「男・・・」

「変なこと・・・」

一人が同時に飛影の方を向く。そして無自覚に目が合つ・・・ボンッといふ音と共に一瞬で沸騰した。

瞬間湯沸かし器もびっくりな大記録である。顔面沸騰世界選手権なんてものがあれば、上位入賞どころか優勝候補の筆頭になうこと間違いないしだ。熱への変換効率とかを調べれば、近年深刻になりつつある電力不足にも貢献できるのではないだろうか。

「ひ、飛影さんとお風呂……はうつ……？」

「うわあつー？シャマル先生、鼻血、鼻血！」

「むう～・・・何か納得いかねえ・・・」

「やれやれ・・・」

あつちはあつちで盛り上がっているようだ。倒れ伏してだくだくと血を流すシャマルをキャロが必死に看護しており、頬を膨らませるヴィータをシグナムが呆れ半分といった様子で見ていた。

と、そこで飛影の両肩がポンと叩かれた。見ると、後ろにいた蔵馬と桑原が何とも微妙で居心地の悪そうな顔をしている。それでいて、何だかすこぶる不愉快かつ殴り倒したいほどに生暖かい感じがした。それを打ち払うが如く、意を決したように蔵馬が口を開く。

「飛影・・・君は俺達の大切な仲間だ。しかし、だからこそ簡単に言えないこともあるだろ？。だけど、これだけは言わせて欲しい。君の趣味をとやかく言う気はないが・・・その・・・公共の風呂場で、しかも二人同時といつのは流石にどうかと・・・」

「蔵馬ッ！貴様、一体何の話をしている！？」

「いや、俺あ安心したぜ。付き合には長年のこと、浮いた話の一つもなくてちっと心配だつたからな」

「馬鹿げた事を抜け抜けと・・・本当に済すぞ貴様・・・」

「に、兄さん落ち着いて・・・」

ぶつとい青筋をいくつも浮かべ、周囲に殺氣を撒き散らし始めた飛影に横にいたエリオが仲裁に入る。が、一緒にいたことは確かに飛影も強く出れない。アリサがフェイトらに懸かりきりで彼らとの関係に気付いていないのが唯一の幸いであった。

「あー、いいお湯だつたあ、なのはさん、これから一緒にアイスでも・・・つてどうしたんですか？」

暖簾を潜つて出てきたスバルが空気が何か違うことに首を傾げる。それを機におかしな空気が流れていき、一呼吸が置かれたあと、誰ともなく溜息を吐いた。

「ま、飛影くんじゃ間違いは起きんわな。からかうんは命がけになりそやし、それはまた今度にしよか。よっしゃ、まだまだ今日はこれからや、皆これからアリサンち行くでーー！」

「「「はーー」」

フォワード四人が声を揃える。なのは達は解放されたことにほつと息をついてはやてとヴォルケンリッター、そして四人についていった。飛影らも少し遅れてそれに続く。なのはたちはまた一つ、飛影たちとフォワード四人にとっては新たに、この地球での思い出が増えたのだった。

一昨日まではカンカン照りの日が続いていたのに、昨日の凄まじい豪雨に驚いている作者であります。

しかし家から出れなかつたおかげで小説を書く時間がどれ、いつもて間に合わせることができたので結果的にはよかつたのかな？

さて第十一話です。今回の目玉は決して外せないお風呂イベントでした！ドラマCD編でも結構人気が高いところじゃないんですかね。ちなみに考えた末、ロストロギアの発見及び捕獲のタイミングを作とは逆にさせて頂きました。このほうが後へ続く流れを決めたときには自然だったので。

お風呂イベントは最大の見せ場であると同時に、最大の山場でもありました。わかつてはいましたが・・・難しい。というか、飛影をうまく操縦できない！展開とかも強引なんでものじやないだろうに！

このことに反省はしておりますが、どうしてもこうこうお色氣シーンを入れたかったんです！作者の願ぼ・・・げふんげふん、深い考えあつてのことです。ああ、何か空き缶を投げられる予感！

なので、読者サービスということでここのひとつお願いします。サービスにはちょっと足らないかもしだせませんが。

さて、地球編も残すところが少なくなつてしまひました。予定だと、あと一話で終了すると思います。そこからはまた少しバトルなどを交えつつ、書いていくつもりです。

作品評価も感想などと並んでじっくりよみじくです！

それでは次回もまた皆様にお会いできることを願つて。

再見！ツアイツエン

第十二話　出張機動六課（終結編）～帰還（前書き）

お待たせいたしました、作者です。

今回は一日更新が延びてしまいました。本格的に忙しさはお盆あたりがたぶんピークなのでまだまだ先と言えますけど、卒論がなかなかまとまりずかなり焦っています。

小説を書くのは楽しいんですが、あれは書いても拷問に近いですからねえ・・・

まあ、作者の愚痴はさておき、第十二話を投下致します。カオスなことになつてますが、其処はどつか知らん振りで・・・ホント、お願いします・・・

では、どうぞ。

アリサ・バニングスの邸宅の一角。林に囲まれたテラスの周りには幾つものバーべキュー・コンロが並べられ、煙と共においしそうな匂いが上がっていた。

火と網の上の世話に追われる者、ひたすら食べ物をかきこむ者、それに対抗しようとする者、面白がつてよそ者、肉ばかり食べて怒られる者、苦笑いで見つめている者などなど、etc. . .とにかく楽しみ方は人数の分だけ存在する。

「はいはい、おかわりはあるからがつつかないの」

「はぐはぐ・・・おー、焼肉はやつぱおいしいね～」

小柄なオレンジ髪の少女が、紙皿の上に山と積まれた肉を次から次へとその口へと放り込んでいく。その頭には、人には似つかわしくない犬耳のようなものがピクピクと揺れていた。

彼女の名はアルフ。フュイトの使い魔であり、彼女の家族でもある狼だ。彼女も一昔前まではフェイトとともに戦っていたのだが、フェイトが力をつけてきたため、するべきことを彼女のサポートから彼女の帰る場所を守ることへと変え引退した。

本来は成人した女性体の姿なのだが、現在はフェイトへの負担を考えてエネルギー節約型のロリ体型になっている。

その隣にはアルフが守るべき家族の一人、エイミー・ハラオウンが高町家から付いてきた美由希と共にいた。彼女もアルフと同じく引退の身であり、現在はクロノ・ハラオウンの妻として二人の子供の育児に追われる身だ。

彼女は親としての自覚ゆえか、それとも元来からの世話焼き気質だからか率先して供給側にまわっている。

「はい、飛影君や桑原君たちもどうぞ～」

「おお、あんがとなエイミーちゃん」

「オレはこり「有難く頂きます。ほら飛影、早くしないと冷めますよ~」チツ・・・」

桑原は遠慮なくといった感じで、片つ端から肉や野菜をパクついている。飛影は、藏馬から受け取られた肉を静かに食べはじめた。藏馬と彼を見ていたなのは達はそれに苦笑を零す。

「まあいいじゃないですか。魔界では戦いと修行、それにパトロールばかりだったことを思えば、楽しむ時に思い切りよくするのいい刺激になりますよ」

藏馬が諭すように語りと、飛影はフンと顔を背ける。それに横にいたアリサ達が反応した。

「修行にパトロールって・・・藏馬さん達は妖怪の警察みたいなものなんですか？」

少し意外そうな表情でフォーカクを口から離したすずかが、少し離れた蔵馬に尋ねる。他の面子も興味があるのか聞き耳を立てていた。

ちなみに彼女たちは自己紹介で飛影たちの内情は大体把握しており、彼ら一人が妖怪であることも知っている。アリサは驚きながらも「妖怪のイメージが変わった」と感想を零し、すずかは終始微妙な顔つきをしていた。

すずかの言葉に、蔵馬は「まあ罰ゲームみたいなものですよ」と無難な答えで返す。全員が首を傾げるが、飛影は今だ剣呑極まりない皿つきで睨んでいた。そこへフェイトが苦笑しながらやつてくる。

「あはは・・・でも、飛影がそんなことしてたなんて初めて聞いたよ。飛影はあんまり自分のことを疋らしないから・・・たまに聞いても『わざわざ聞かせる義理などない』って言つ」

「アタシも言われたけど、相変わらず予想通りすぎる反応ね。というか、コイツに親切心とか気遣いを求めるほつがまず間違ってるのよ」

アリサが紙皿の肉をもしゃもしゃ咀嚼しながら、フェイトの言葉に同意する。見下されたような態度に、飛影は面白くなさそうな表情で鼻を鳴らした。

「フン、貴様らに理解してもらつつもりなどないといつたはずだ。煮えたぎつた残念な頭では、そんなことも記憶しきれなかつたのか？」

「アンタ喧嘩売つてゐのつ！？売つてゐのねー？も、もう堪忍ならないわつ！勝負よ飛影！今度こそとつちめてやるから、今すぐ表に

でなさあああいっ！」

「あ、あの、ここ外ですけど・・・」

トロの「」とく咆哮するアリサに、キヤロがおずおずとツツ「」を
入れた。このままだと、遠からずバトルが始まる。エリオが顔を引
きつらせながら、話題転換のために努めて大きな声を出した。

「ほ、僕はお風呂でいろいろ聞きましたよ！ 蔵馬さんが会社で結構重役らしいこととか、眞さんのリーダーだった方が今魔界で王様になつてることとか、和真さんがもう結婚して子供もいることとか！」

「へえ～ そうなの、楽しそうで羨ましいわ。それにしても驚きね、和真さんに子供がいたなん

「いやかに返そうとしたシャマルの笑顔がその途中でピキッと固まつた。なのは達を始めとして、はやてやヴォルケンリッターの全員、フォワード四人やアリサ達地球陣営も一様にエリオの方を向いて眼をカツ開き、その場が一瞬にして彫刻展と化す。無事なのは、僅かに驚きながらも「あ、私とおんなじだね～」と笑っているエイミィヒ、「そうなんですかあ」と目を輝かせているキャロだけであった。

そんな言ひよひの無い空氣と、乙女達から溢れる重圧にヒリオは
氣圧される。そして、とにかく安全を確保しようとして一步下がひつと
して、

一步どころか、十メートルは吹き飛ばされそうな突風がエリオを襲つた。物理作用すら感じさせる勢いを全員から受け、エリオはたじたじになりながら後退する。今なら、近くでニトログリセリンを詰めた大樽が爆発したと聞いても、きっと驚かない。

次に渦中の人である桑原に視線が集中した。そして真偽のほどを問い合わせ、それが間違いでないことを知ると、全員がさらに大きな反応と声を上げる。

なのはとフロイトが顔を見合わせた。

「お、驚きの事実発覚だね・・・確かにエリオ達の扱いが上手いとは思つてたけど、ホントに子供がいたんだ・・・」

「で、でもエイミィも結婚してるし、別に不思議じゃない、よ・・・？」

「テス・タロッサ、そこで疑問系になるのは何故だ？」

シグナムが半眼で彼女に突つ込む。だがそれは言った彼女を含め、一同の総意であるのは確定事項であった。そもそも桑原の性格や容姿を鑑みて一番に来るのが「何故！？」という疑問符以外にありえないだろうか。いや、ありえない（反語）。

「「」の男性陣で唯一・・・意外や、意外すぎる」

「ど、どんな人なのかしら・・・」

「「トイツと呪り合つようなヤツだからなー。いろいろ落書きが多いデカイバイクとかに乗りながらサラシ巻いてて、特攻服と木刀をいつも持つてる感じじやねえか?」

「もしくは制服にバツテンマスク、赤毛にそばかすにロングスカートというのもアリです!」

「す、すごく想像できるところが恐ろしいですね・・・」

「でもでも! すごい大穴で、アイスっぽいクールビューティーな人だつたりして! ?」

「アイスってクールビューティーなの? エリオくん?」

「さ、さあ・・・?」

「でも、ヴィータの言葉ももつともね。想像できる範囲がかなり限定されちゃうやつもの。すずかはどひつ思ひ?」

「あ、あはは・・・ノーロメントで・・・」

「あたしも。蔵馬とかなら分かるけどねえ・・・」

「う、羨ましいツ・・・」

「いいな~・・・」

「でも、意外と可愛い子だつたりするかも?」

ひどい言われようだつた。普段、彼がどんな目で見られているの

かがありありと分かる。

因みに上からはやて、シャマル、ヴィータ、リイン、ティアナ、スバル、キャロ、エリオ、アリサ、すずか、アルフ、シャーリー、美由希、エイミィである。

「テメヒら、揃いも揃つて同じ反応とはどうこいつ事だア！それとチビッ子どもー雪菜さんはそんなイカツイなりしてねえぞ！」

「誰がチビッ子だッ／ですかっ！」

桑原が激昂する傍ら、無自覚に喧嘩を売られたヴィータとリインがヒートアップする。仕舞いには、

「雪菜さんは俺の天使だ！バカにするのは許さねえぞ！」

とまで言い出す始末だ。その脇では飛影が静かに不機嫌になつていた。

「て、天使があ・・・き、きつとすごい綺麗な人なんだろうね・・・あ、会つてみたいなあ・・・（やつぱり派手な人かな・・・）」

「そ、そうやなー、興味はあるで・・・（きつと、たで喰う虫も好き好きつてヤツやな）」

なのは達は顔の端を引きつらせながら、必死に笑顔を見せる。その裏ではかなりひどいことを言つてゐるが、実に現実的であつた。といふか、容姿もなにも分からぬ相手なのだ、抽象的かつ主観的な言葉で推測できるわけがない。

だが、実際の方向性は異なるが、スバルとエイミーの言ったことが最も近かつた。そして、彼の言葉が彼女らの予想を根底からぶち壊すほど正しいものであることを知るのは、もう少し後になる。

そんな感じで夜は更けていった。夕食が終わるころには、大量に用意したはずの肉や野菜は全てからっぽになつている。

明らかにこの人数にしては多すぎるはずだが、スバルやエリオ、それに和真など、かなりの食い扶持を持つものがいたので、バランス的にはちょうどよかつたのだ。買いすぎたのも幸いと言える。

「お～い、機動六課全員集合や～！」

そこへはやてが皆へと号令をかけた。本田は無礼講とのことだが、仮にも部隊長なので何事かと思いながらそろそろとやつてくる。そこで彼女は全員の寝床がアリサたちによつて用意されたことを説明した。

「朝七時半にここに集合、そのあと出立する。帰つたらまた訓練と仕事を再開するから、今日一日はしつかり休んどき。各自あまり羽目を外し過ぎないようにな。じゃ、解散！」

彼女の言葉には～～と遠足ばりの返事が響き、スバル達は方々に散つていく。はやて達はそれを見届けながら苦笑し、テーブルに座りなおす。どうやら明日からの予定やらなんやらを決定するために、簡易的な会議をここにするらしい。

「“めんな～、二人は提供者なのに片付け任せてしまつて・・・

はやてやなのはが申し訳なさそうに言つたのに対し、アリサとす

すかの一人は気にしないでと笑顔で答える。

すると、片付けを始めるのを見た藏馬と桑原が手伝いを申し出た。驚くことに飛影も加わってくれるのだと。二人は一度断つたのだが、再三の進言を受けたのと提案 자체が有難い限りであったことも手伝い、苦笑しながら受諾した。

別荘の持ち主であるアリサと勝手知ったるなんやらのすずかは的確に指示をだし、見る見るうちにテーブルが片付けられていった。

そして片付けも佳境に入る。出たゴミをまとめるに、アリサはそれを飛影に手渡した。どうやら捨てて来いといふことらしい。

非常に気に入らないが世話になつたのは確かだ。鼻を鳴らした飛影がそれを受け取つて歩き出そつとしたとき、すずかが駆けてきた。

「あ、私も行きます。飛影さんだけじゃ、場所が分からないとしますから」

「・・・ああ」

と、意外にも一度で承諾し、ドでかいゴミ袋を肩に担いだ飛影の横にすずかが並んだ。そのまま一人して離れたごみ置き場まで歩いていく。会話はなかつたが、すずかは時折飛影のほうへ視線をやりながら気にするような仕草を見せていた。

そしてすずかに案内されるまま、大きめの倉庫のような場所に辿り着く。その中にある金属製の大きな箱に、飛影は自分ほどもある「ゴミ袋をぽいとぶん投げた。

ドスンといつ音と共に、袋が積まれた山の中心に着陸する。すずかは驚きながらも、笑顔を向けた。

「わあ、すゞいですね。あの大きの『ナミ』をあんなに簡単に、それも正確に投げちゃうなんて。ふふ、アリサちゃんが見たら悔しがるかもしません」

「・・・フン、見え透いた世辞はよせ。あの程度貴様でも軽くできるだろう。錆びついているとはいえ、その『血』の力は完全には消えてはいなはずだからな」

「え・・・?」

すずかの顔から笑顔が消えた。表情をなくして顔を青くするが、どこかでそれを予想していたように見える。それを見て飛影は口の端をニヤリと吊り上げた。

「気づかれていないとでも思つていたのか?こちうに気づいておいて、自分はそうでないなどありえん。平和ボケしている高町達なともかく、オレ達は全員が初見で気がついている。藏馬は匂い、桑原は持ち前の靈感、オレは僅かにもれる妖気からな。貴様は、いや貴様の血筋には」

「はい。貴方達と同じ世界の住人・・・魔界に住む妖怪がいました。吸血鬼と呼ばれる種族です」

そこで黙つていた彼女が口を開いた。その顔には先ほどまでの親しみは消え、不安と焦燥が取つて代わつている。だが、これは飛影達にとつても重要なファクターだ。

つまりはこの世界にかつて妖怪が来たということである。「情報としてはあまり残っていないんですけどね」というすずかに、すぐため息を吐くことになつたが。当てが外れたことこ、飛影は興味を失つたように肩を竦め、彼女に向けて口を開いた。

「その身体に流れる力から見るに、その吸血鬼はB級クラスの妖怪といったところか。だが、血はかなり薄れている。もはや元の妖怪としての強さは發揮できんだろう。もつとも、この世界で強さはそれほど必要なく、貴様は既に折り合いをつけているようだがな。興味もないが」

「言いたいことはそれで全てだつたらしく、飛影はゴリラ倉庫に背を向けて歩き出す。もう用はない、とでも言ひやうな感じだ。彼の反応にすずかは驚いたような顔をしたあと、たまらなくなつて声を上げた。

「あ、あの・・・」

「心配せんでも貴様のことは誰にも言わん。それは藏馬や繆原もそれはわかつて『い、いえそりやなくて!』む?」

飛影の言葉をより強い口調ですすかが遮る。その田には既に不安はなかつたが、強い戸惑いが浮かんでいた。

「なんで、秘密してくれんですか? そんなことをしても、貴方にはメリットなんて何もないはずなのに・・・」

そこまで言つて彼女は黙つてしまつた。確かにこれはかなり重要な話だ。その扱い方如何では月村家を自由にできるだらう、その気になれば破滅させることもできる。

妖怪は基本的に無慈悲、そして自分の思うがままに行動するものだと教えられてきたすすかにとつて、飛影や蔵馬の反応は予想外だつた。しかし、飛影はそんな彼女の心のうちを見抜いたのか、溜息を吐きながら田を向ける。

「言つたはすだ、オレはそんなものに興味はない。高々人間の小娘の弱みなど何の得にもならんからな。秘密にしたければそうして、虐げられたいのなら勝手に触れ回れ。どうなろうとオレは知らん」

冷静かつ冷たい口調で言つたと、飛影は今度こそ背を向けた。すすかの秘密など完全に眼中にないのか、その背中は付き合つてられんと語つている。

（飛影さん・・・なのさちやんの言つたとおりの人だつたよ）

だが、すすかは言葉の中に確かに優しさを感じていた。

飛影は嘘を吐いているわけではないのだろう。興味がないというのも真実で、それで彼女がどうなるか知つたことではないといつのも本當だと思う。

しかし興味がなくとも、人の弱みを握つたとき悪意がある者がどんな行動にでるかなど、それこそ子供でもわかる。容赦などない、果てない地獄がぽつかりと口を空けているのに墮ちていくだけだ。

知られたときはもう終わつたと思つた。この生活もこの平穀も友との関係も。飛影をここへ案内する役を買って出たのも、薄々気づいていただろうと思っていた彼にその確証を取り、可能なら交渉するつもりだったのだ。どれだけ犠牲を払つても、守りたかったから。

しかし、それは思いもよらぬ方向で打ち砕かれることになった。すすかが知りうる中で最も不可解かつ、最も好ましい終わり方で。そしてそのことは彼女のなかに火を灯させた。

なのはやフュイトなどることは元より、いつも一緒にいる親友も久々に張り合える相手を見つけたようで、とても活き活きとしていた。本人は気づいているか分からぬが、それをふまえてもゆっくりしている暇はないのかもしれない。

「ふふ・・・」めんね、なのはちゃん、フュイトちゃん。応援はできない、かも

去っていく飛影の後ろ姿を見ながら、すすかはその隣へと駆け出した。近しい存在というだけでなく、もっと近くになりたいという願いを込めて。

- Side change Next day -

「よつしゃ、全員忘れ物はないなー?」

「」「」「はーいー」「」「」「

翌日、よく晴れた朝の七時半。園児の遠足点呼のよつよつノリにもしっかりと答えるフォワード陣。飛影たちは呆れたよつよつ息を吐いていた。すすかやアルフも苦笑気味に眺めている。

「あ、帰つたら仕事と訓練が待つてるよ。前より少しハードにするからみんな頑張つていこうね！」

「な、なのは・・・容赦ないね・・・」

「流石、鬼教官って呼ばれてるだけあんな・・・あと魔王とか」

美由希と桑原が少し引いている。なのはは笑顔で「・・・和真くん、後で『お詫』しようか」とか言つているが、桑原が青い顔をして首を横に振つていた。まだ会つて一週間程度でも、なのは（ダーク仕様）の怖さは身にしみている和真である。

「まあ、しつかりやんなさこよ。でも、仕事が片付いたらちゃんと報告に来なさいよね！」

「うん、わかったよアリサ

フロイトが必ず来る、と深い笑顔を見せる。その表情を見たアリサがうんと頷いた。ヴォルケンリッターの騎士達、はやてやシャーリーもそろそろと近寄つてくる。

それと同時に別荘に続く森の端に魔法陣が現れた。出立のときが來たのだ。

五メートルほどの転送陣に全員が乗る。大きさからすれば人数は少し多かつたが、何とかその中に納まつた。

「ほんじゃ、協力してくれてホンマありがとうな

はやてが陣のなかから礼を言つと、アリサが「水臭いわね」と恥ずかしそうに言いながらも一番の笑顔を見せた。頬られたことと、また旧来の友に会えたことが嬉しかったのだろう。それを見たとすずかは彼女に微笑ましい笑顔を向けた後、陣の外側に近寄った。

「飛影さん、これを

「む？」

訝しげに眉を寄せる飛影の前に白い布が差し出された。それは飛影の首元に巻かれたものと同じような、シルクで出来たスカーフ。それが赤いリボンで纏められている。ただ、そのきめ細かい編目と滑らかな手触りは、それがかなりの高級品であることを強く誇示していた。

「何のつもりだ？」

目の前に綺麗に置まれた布を受け取ることもせず、飛影はすすかに視線をやつた。だが、探るような目つきにも彼女は笑顔を途切れさせず、差し出したものも下げる。訝し気に睨む飛影に、すずかは柔らかい笑みを浮かべた。

「さわやかな・・・相談に乗つてもらつた私個人のお礼です。気に入らなければ捨てても構いません。けれど、今このときだけは受け取つてくれませんか？どうかお願ひします」

「・・・チツ」

あの時の会話は相談ということになつてゐるらしい。視線を逸らさず真つ直ぐに見つめてくるすずかに、飛影は舌打ちしつつも差し

出されたスカーフを乱暴に受け取る。横にいたアリサが呆れたように息を吐いた。

「もう少し嬉しそうにしなさいよ、まったく……それと意外だけど、私も結構楽しかったからお礼言つとくわ。また私に会いに来たくなつたら、特別に来させてあげてもいいわよ」

「安心しろ。天地が引っくり返つても絶対にありえん」

「ア、アンタはまたあああああ！」

冷めたよう半眼になる飛影に、アリサが顔をさらに真つ赤にして吠え掛かる。事実、この一日間での言い争いの回数は軽く二桁に届くので、はやてや藏馬は微笑ましい表情で一人を見つめていた。

なのはやフェイト達は一人の行動を彼女たちの優しさと気遣いとするべきか、それとも別の要因とするべきか考え、微妙な表情をしていた。

「ともかく終わつたよつやな、ほないくで！」

魔法陣が起動し、青と緑の中間のような光を放ち始める。しばらくは彼女たちともお別れだ。なのは達は親友との別れを、フォワード四人は、優しくしてくれた地球の人たちともつと親しくなりたかつたな、と残念そうな色を見せている。

「「「お世話になりました！」」」

光が満ちていく。魔法の発動はもうすぐだ。始まれば一瞬で彼らを魔法世界の住人へと戻すだろう。

だが、陣の光が極大に差しかかるのとしたとき、その傍へと走りこんだ人影があった。紫がかつた美しい長髪を棚引かせ、普段からは考えもつかない勢いで近寄ったのは、

「 「 「すずか（ちゃん）？」」

先ほどのプレゼント発起人であった。誰もがお淑やかな彼女からは想像だにしなかつた行動に目を剥いて驚く。そして周囲を置き去りにしながら、彼女は輝く陣の光に照らされた飛影に腰を屈めて近寄り、

「 一つ・・・・・忘れていました・・・・・んつ・・・・・」

彼の額に唇をそつと触れさせた。

「 ・・・・・」

『な、ななな、なあ

フー?』

一瞬のことに飛影は目を見開いて言葉を失い、機動六課のほぼ全員が悲鳴を上げる。ただし各自でその性質は違うようだったが。す

ずかは整った顔を真っ赤に染めながら、飛影に向かって少しばかり悪戯っぽい笑顔で微笑んだ。

「秘密のお礼、です……」

言葉とともに彼女は離れていく。そして同時に魔法陣が完全発動した。一瞬にして全員の姿が消え、別荘の庭に静寂が戻る。

光がいまだ残滓の糸を紡ぐ中、すすかは空を見上げた。今までの自分から考えれば、今の行動は恥ずかしいなんでものではなかつたが、後悔の念は湧いてこない。

（当分は会えないんだし……い、いいよね？）

自分にしてはやりすぎたかなと少し思いながら、いまだ赤い顔ですすかはくすつと笑つた。

もしこのまま別れてしまえば、自分は取るに足らない他人としてでしか彼の中には残らないだろう。だからこそ、忘れられない印象を付けようと思っていたのだが、やりすぎだったかもしれない。

本当を言うと最後のは予定にはなかつた。何故か消えていく彼を見たら、胸が切なく高鳴つて、気が付いたら駆け寄つてキスしていたのだ。

「また・・・会えますよね」

鳥が高く飛ぶ空から名残惜しげに視線を水平に戻す。

さて、やることは一つだ。まずは、傍で固まっている親友を解凍

する」とから始めなくては。

風を切る音を放ちながら、空気が脈動する。そして一瞬強い光を放つたかと思うと転送ポートが設置された空間が揺らぎ、次の瞬間に機動六課の面々が連なつていた。転送空間の外側に待機していたヴァイスがよみがへる帰還に待合ベンチから腰を上げる。

「隊長達、それに姉さんもお疲れ様だー！つても俺達と同じでそつちも休暇っぽくなつてたみたいで、手配されてた仕事はちゃんと仕上げておきましたぜ。それにしてもいいな、俺も地球で観光とかをのんびりまつたりと楽しみたかつ・・・つてビーツしたんスか？」

こつもよつ反応の薄いことに、ヴァイスは「むう？」と首を傾げる。その中でいち早く反応したのは苦笑した蔵馬だった。

「ちょっとしたサプライズがあつたんだよ。驚きすぎて皆状況が整理し切れていないみたいだけど、しばらくすれば元に戻ると思うから安心していい。かくいう俺もかなり驚いたけどね」

「ふーん？まあ、蔵馬さんがそう言つない・・・」

それだけ言つと蔵馬は仕事がありますので、とその場を後にする。余人には分からぬが、アレは彼の十八番だ。完全なる緊急回避である。

その数分後、予想通りなのは達が覚醒して鬼の形相で飛影を問い合わせ

詰めた。その得体の知れない気迫に、何故か気圧された飛影はそこから機動六課宿舎へと逃げ出し、宿舎につくまで転移や攻撃魔法まで使った追いかけっこが行われたのは完全な蛇足であろう。

第十一話 出張機動六課（終結編）～帰還（後書き）

やつてもうたあ あああああ

ツ！！！

・・・この話を書き終えたときにして作者のリアクションです。今回は流石にやりすぎたかなあ。何せずかの設定を改变させて、強引にあのシーンですもん。

しばらく血闘血答してました。

つていうか、すずかってそこまで積極的じゃないよね！？それが会つて一日でアレはないよ！…どうしてこうなった！？

答え。曰く『やつしたかったからです』・・・って、何を種をハジケさせむる乗りっぽく纏めてるんだ私は！

こんな感じの繰り返しでした。よく、『勢いでやつた。けど後悔はしていない』といった主張がありますけど、あれ絶対後悔していますよね？

そのことをこの身で経験した作者です。後悔したポイントは、主に自分の文才や構成力のなさですが・・・っていうか、飛影スゲー。リインの言つとおり、ホントに天然ジロロになるやもしれん・・・。

そんなわけで十二話でした。

かなり強引な足運びとなつてしましましたが、どうでしたか？

次は再びミッドチルダに戻ります。はてさて、どうなるのか。構成自体に魅力を出すのは難しいので、皆様にとつて少しでも面白みのある文章を書ければな、と思っています。

ではでは、また今回はこの辺で。夏バテと夏風邪には、十分にお気をつけいただきますよ。

再見!
ツアイシエン

第十四話 ホテル・アグスター 岐路の胎動（前書き）

第十四話の完成です。

今日はお休みといつゝともあって、午前中に更新することができました。

いつもこれぐらい順調なら書くことはないんですが・・・

では、ホテル・アグスター編、堂々のスタートです。

エネルギー貯蔵型ロストロギア『レリック』を専門に扱う機動六課だが、例外というものは存在する。もともと遺失物管理部なんて名称であるとおり、表向きにはその主な仕事はロストロギアの発見及び保護となつていいからだ。

とはいっても、機動六課の総責任者である八神はやてが設立したこの部署も、地上の治安維持が最優先事項である。コレクターじゃあるまいし、集めて保管して終わりといかないところがロストロギアの辛さでもあり、そして存在意義でもあった。

決して便利屋ではなく、ロストロギア関連に関する者たちの安全確保も任務といつことだ。

今日、ホテルアグスターと呼ばれる場所でロストロギアのオークションが行われる。そこでは許可の通ったロストロギアが数点出品される予定だ。そして、その反応をレリックだと誤認して嗅ぎつけたガジェットローンから会場、出品対象、そして参加者を守り通すのが今回の仕事だった。

長々と申し訳ないが、要するに要所警備あるいは防衛戦及び、要人警護というわけである。現在、ヘリの中ではその説明と共に現在地上を齎かすガジェットの製作者にしてレリックの収集者、そして事件の数々を引き起こした黒幕が全員に伝えられていた。

その名をジエイル・スカリエッティ。違法研究で広域次元犯罪者として指名手配されている男である。その姿を見た桑原が腕を組んで眉を寄せた。

「あんな悪趣味なもん作ってる奴だ、垂金とかイチガキみてえなヤツじゃねえかと思つてたが・・・意外と普通だつたな」

桑原はかつての成金とマッドサイエンティストを思い浮かべる。片方は人間で片方は妖怪だったが、二人とも彼から見ても見るに耐えられない面だった。決して比べていいわけではないのであしからず。

「見た目で判断しないほうがいいよ桑原くん。見たところは人間のようだけど、彼の罪状は違法取引から人身売買、果ては人体実験なんものまである。中には人の尊厳すら危ぶませるほどに行いまであつた。世界は違つても、やつてていることは彼らと同じさ」

藏馬が言つと、飛影は視線を鋭く尖らせた。彼の立場からすれば、かつてと同じようなことをする相手が許せないのかもしれない。

と、リインが指を一振りして空中のスクリーンを消した。大方の説明が終了したようだ。なのはが全員を見渡したあと、口を開く。

「伝達事項はこんなとこかな。藏馬さんは会場内で警護。和真くんはシャマルさんと一緒に屋上で警備。飛影くんは最初は私たちと同じ任務について、あとは適宜行動・・・で、いいかな、飛影くん？」

「フン、そこから先は勝手にさせてもらうがな。一々オレを頼られても困るが、いざというとき使えん奴ほど手に負えんものはない。こひりで実戦を積んでおけ」

「・・・言い方は乱暴だけど、一理あるね。いつでも飛影達が出れるわけじゃないし、一度の実戦は百度の訓練に勝るから」

フエイトが自らのデバイスであるバルディッシュに触れながら、彼の言葉に同意する。しかし、その様子は何だか妙だ。飛影は訝しげな表情をして、自分の向かい側に座る彼女に尋ねた。

「・・・? 何を睨んでいる

「し、知らないっ!」

若干頬を赤くしたフエイトが飛影から顔を背けた。しかし、その態度は「不機嫌なんだからねっ」と全身で表している。まるで不貞腐れる子供のような反応だ。

飛影はなおも怪訝そうに眉を寄せて周りを見渡すが、ヴィータやスバル、シャマルに至っても同じような有様だった。にこにこと笑っているのは、自分の隣にいるのはだけだ。蔵馬とはやての意味深な笑みも何だか癪に障る。

しばらく前、正確には地球から帰った日から、彼女らは時折こうして不機嫌になるようになつた。会話の流れからそうなることもあるし、誰かが自分に接触してきたときに唐突に起つることもある。

しかし、この程度飛影にとっては別にどうということはない。元より人の機嫌を気にする性分でもないからだ。寧ろ関わってこないのなら好都合、と当初は無視していたのだが、それはおよそ逆効果であつたらしい。

しばらくスルーを決め込んでいた飛影の元に、彼女達がいきなり

突貫してきたのである。そこで、今は機嫌が良いのはやヴィータには怒りながら説教され、残りの三人には無視しないでと泣きつかれた。

ならその態度は何だと飛影が聞くと、全員があからさまに話を逸らしにかかるのだ。結果的に何も変わらないのだから、飛影としては何をしたいのか全く理解できない。単なる怒られ損だ。

理不尽もここまでくるとこいつを清々しい。一体どうじつとこいつのか。

その後、見かねたかのように来た蔵馬に言われたのは、

『女の子の気持ちをもつと考えてあげなきゃダメですよ』

という一言だった。本人曰く重要なアドバイスとのことだが、余計なお世話である。それ以前に、話の核をわざと喋らないで傍観しているのが見え見えだった。相変わらず悪趣味だ。

「はあ・・・・」

ティアナがまたか、というようにこめかみに手をやる。このような光景も、最近の六課では日常茶飯事だった。

何も分かつていらない様子の飛影には迷惑極まりないだろうが、こればかりは運命だと諦めてもうしかない。諦観と憐れみを込めた視線で彼を見やり、にぎやかなへりの中を見渡した。

すると、少し珍しい光景が目に入る。ティアナは思わず彼女に問い合わせた。

「へ、どうしたんですか、リイン曹長？」

いつもならはやてなどと共にクスクス笑つてゐるリインが、神妙な顔で浮遊していた。「もうう・・」と唸りながら一人百面相をしている。如何せん、普段は主共々茶々を入れることが多いので、その真面目顔が気になつたのだ。

「ふえ！？ い、いえ、何でもないのですよ…まあ皆、今回もしつかりバツチリ決めるです…」

「は、はあ・・・」

いきなり声を掛けられたからだらう。彼女は少し動搖した様子で、わたわたと手を振つた。その様子からして何でもないといふはずがないのだが、のんびり聞いている時間もない。

ティアナはすぐに引き下がつて、なのはと作戦の確認を取り始める。そんなか、いまだフエイトやヴィータと言い合いを続ける飛影を見て、はやてが口角を吊り上げた。

「シシシ・・・・皆もいに感じにドロドロしてきたやないか・・・・この調子で堅物のシスター・シャツハとともに餌食に・・・つて、あたあつー？ 何で殴るん！？」

「ひどく不愉快な気配がしたのでな

素晴らじいまでの勘のよさであった。一瞬で近寄つた飛影がそのまま頭に一撃をくれ、元の席に戻つていく。はやてが「おーぼーや！」と涙目で後ろから抗議して、蔵馬に慰められていた。幸せそう

なので放つておく。

しかし、何だかんだ言つても飛影と意見を同じくするあたり、フエイトたちもちゃんと先が見えているらしい。若干スルーしかねる態度ではあるが、肯定の意を見せて頷いていた。

三人の役割をそれぞれ挙げると、蔵馬がホテルの守り、桑原が屋上で迎撃、飛影が遊撃だ。彼らからすれば配置は妥当といったところだろう。そこでスバルが声を上げた。

「あれ？ 和真さんの武器はあの剣なんですね？ なら、接近戦のほうがいいんじゃないですか？」

「ま、普通はそう考えるわな。けビオレはこの三人の中で一番靈感があるから、危険察知とかそういうのには適してんのさ」

桑原の言葉に首を傾げたのは機動六課メンバーである。理由は言わずもがな、靈感という聞きなれない言葉が出てきたからだ。

靈感。正式名称を『靈感能力』といい、靈氣や妖氣などの力の流動や氣配を鋭敏に察知する能力のことについて、人などが持つ靈的ポテンシャルの一つである。

詳細はここでは省くが、要するに高感度の氣配察知を常時自然展開しているようなものだ。桑原はこれがズバ抜けて高く、しかも靈氣などの力は全く喰わないのだからかなり使い勝手がいい。

「彼の感知能力はすごいわよ、私のお墨付き」とここにこしながらシャマルが言い、それならばと全員が息を吐いた。

「シャマル先生が言つなら安心ですね。それとせつせつから飯になつてたんですけどその箱つて・・・？」

キャロに指摘されたシャマルが「これ？」と首をかしげ、そしてにゅふふと顔を崩した。少し、いやかなり含みのありそうな笑みになのは達は苦笑を零し、エリオなどはきょとんとしている。箱をポンと叩きつつ、シャマルは魅力的なウインクをした。

「隊長達と飛影さんたちのお仕事着」

- Side change in Hotel Augusta -

ホテルアグスタは一流企業の社長やその令嬢が宿泊することもある、かなり名の通つた宿泊施設である。規模はそれほどではないにしろ内装は充実しており、その調度品の一つにも氣を使つという力の入れようだ。

体面を取り繕つばかりが営業ではないが、それを蔑ろにしては一流は一流に成り下がるということを示したいのだろう。それが、企画者にここを選ばせた理由の一つでもあるのだから。

とまあ少しばかりホテルの概要を語つてみたわけだが、そんな一般人には少しばかり値が張るこのホテルの一角、広いロビーに二人の男性が佇んでいた。赤と黒という髪の色、加えて背の違いがはっきりしていて、にじみ出る雰囲気もほとんど真逆である。

背の高い方、スーツ姿に身を包んだ藏馬が、隣で話しかけるなオーラを撒き散らす相方に視線をよこす。そこには自分と『同じ』黒のスーツをバツチリ着こなした飛影がいた。

「似合つてゐるじゃないですか、飛影

「クツ、何故オレがこんなものを・・・」

ネクタイや襟の感覚がうつとおしいのか首元を少し緩めている。本来こういう場でのそれはNGなのだが、言ったところで正す性格でないのが彼の彼たる所以であった。というか、そちらのほうが彼らしく、しかも似合つてしているので藏馬は苦笑する。

そのとき、廊下のほうでざわめきが巻き起つた。そのほとんどが男性のものだ。それとともにホールに響いたのは、よく通る済んだ声が三人分。

「いやー、化粧室が混んどつたなー」

「いやははは・・・」

「お、お待たせ・・・」

飛影たち一人が振り向く。そこにいたのは言わずもがな、機動六課が誇る隊長陣の三人だ。

全てを吹き飛ばす直情型魔力^{バカ}、アグレッシブな根暗にして、最近はややヤンデレ属性にも足を踏み入れた『元』可憐な少女。砲撃させたら局内一、鬼に金棒、悪魔に魔導砲。もしも彼女を怒らせたらば、消し炭にされる前に土下座しろ！もしくは飛影のプロマイド（際どければ言つことなし）。

『白き大魔王』高町なのは。

ヒントリーNo.2。

ボケが突っ込みかと問われれば、間違いなくボケ。純粹無垢が一周回つて大ボケになる六課のオアシス。思い込んだら一直線だが、どこかがいつもズレている、だけど、それがいちいち可愛いお年頃。そのテンジャラスバディは誰のためにあるのか、何もないところで口るのは仕様なのか！？

『金色のお花畠』フェイト・T・ハラオウン。

ヒントリーNo.3。

やや似非っぽい関西弁にしてミス・一枚舌、機動六課が誇る策略謀略ハリセンシッコミミと三拍子揃つた彼女は今日も不気味に笑っている。青春に色気は不要、ついでに男の影もなし。奴と戦うなら狐を連れろ。ついでに手土産持つていけ。

『化狸・似非関西仕様』八神はやて。

戦力的にも人間的にもなかなかない組み合わせであった。何がここまで彼女たちを変えてしまったか、それは神のみぞ知る。这样一个のプロレス団体のようなノリは一体なんのだろうか。

「何だか、ちょっと許し難いテロップが付いた気がするよ……？」

「奇遇やなのはちゃん、私もや。今ならこのホテル丸」と消し飛ばしても許されそうな気がするんやけど……とりあえず似非はないんちやうか！？」

「ふ、一人とも落ち着いて。なんだかキャラが壊れてきてるよ？そりや、ちょっととは誇張な気がするけど……」

「「ちよつとつて何（や）！？」フロイトちゃんはあんま言われてないから、そんなことが言えるんだよ／やー。」

うがーっと吠えられたフロイトはびくつと肩を竦ませる。なのははやての髪がぶわあああああと逆立ち、その後ろに天に向かって吠える魔人王女と狸が見えた・・・気がした。嗚呼、世界の条理に逆らうとは、どうして悲しいことなのだろう。

「頭の悪い会話だな」

「まあまあそつ言わずに。三人ともすくへお似合いですよ」

蔵馬が場の空気の入れ替えるため、率直な感想を二人に告げた。機嫌直しの意味合いも半分ほどあつたが、驚きなども大きい。何故

なら田の前にいる二人はいつもの制服ではなく、眩いばかりのドレスを身に纏っていたからだ。

なのははピンクと赤を基調とした色合いで、ワンピースのような上掛けと赤い下掛けを組み合わせた、二重構造のドレス。はやてとフェイトは肩が完全に出ており、それぞれ白と水色、黒と紫を中心としたインパクトの強いドレスだった。

そして薄めに決められたマイクが、少女にいつもより大人っぽく艶やかな表情をさせている。

全てがシャマル先生プロデュースの、彼女たちの魅力がぐっと凝縮したような出で立ちだった。その証拠に男性陣の目線をこれでもかと釘付けにしているし、受付も仕事そっちのけで見入っている。一流ホテルマンの氣概はどこかにおいてきたのだろうか。

「……ほ、ホンマに……? 世辞やのうて?」

「ええ、はやてちゃんは十分に魅力的ですよ。もちろんのはやんやフェイトちゃんもですれけどね」

蔵馬の言葉にはやてが頬を真っ赤く染めた。なのは達も蔵馬の笑顔に若干顔を赤くしていたが、何かを決意するような眼差しで飛影の方を向く。

心なしか、先ほどより真剣さが混じっているような気がした。

「ね、ねえ飛影くん。これ、どうかな……?」

「へ、変じや、ない?」

不安と期待が織り交ざった声色で一人が尋ねてくる。その視線に居心地の悪さを感じた飛影は、渋々ながらも一人に目をやり、僅かに見開いた横目でしばらく眺めた後、鼻を鳴らした。

「・・・変なのは今の貴様らの態度だ。まあ、いつものあの服と戦闘服以外見たことがなかったからな、少し新鮮ではある。馬子にも衣装とは言つたものだ、着飾れば貴様らでもそれなりに映えるとはな」

「えっ、あ、あああ、ありがとう・・・すいぐ、嬉しい・・・」

「似合つてゐるって・・・飛影が似合つて・・・」

フツと、僅かながら柔らかな視線を宿して飛影が一人を見た。なのはとフェイドの頬が一瞬にしてりんご色に染まり、呆然としたままぶつぶつと呟き始める。

普通なら褒められているかどうか判断に迷つところであるが、相手はあの飛影であるからして。興味ないの一言で切り捨てられると思つていた二人にとつては正に天恵、脳内ではスタンディングオベーションフルオープン状態であつた。

拡大解釈も甚だしいが、いつの時代も恋する乙女補正は理屈を超えるのだ。一旦ポジティブに解釈すればあとはもう走りぬくだけである。

飛影はといふと、そんな二人から既に視線を外し、周りを眺めていた。おそらく邪眼で妖氣などの異変を探つてゐるのだろう。何だかんだ言つても、一度負け負うと言つた以上は仕事としてしつかり

するつもつらしげ、そんな態度の戦友に蔵馬は苦笑した。

桃色の花びらが「フォ」で背景につきやつた一人に、はやてが口元を引きつらせる。

「すういなー一人とも・・・さつきのセリフを褒めると解釈してるんか・・・」

「ふふ・・・飛影も隅に置けないな（彼自身も、少し見惚れていたみたいだしね）」

優しい笑みをした蔵馬が、はやてをエスコートするように立ちながら笑う。視線の先にはロビー中の男から嫉妬と殺氣をぶつけられ、訝し気にしている飛影がいた。彼が軽く一睨みすると、ロビーから何人かが飛び出して行く。自業自得だが、こちらとしてはもう少し加減をして欲しいものであった。

彼はまだ二人の気持ちを分かつていないのである。態度がそれを物語っているし、あの二人もアピールはしているが、積極的かといえばそこまでもないから当然といえは当然だ。

しかし蔵馬は、今は気が付かないほうがいいのかもしれないと思っていた。彼自身感情の整理がついていないなかでそれが露見すれば、自分の内に近づかることを嫌う彼がここから去ってしまう可能性がある。

今でこそこうして仲間とともにいるが、飛影はもともと一匹狼のスタンスだ。それは不思議ではない。

だが、それでは彼にとつてプラスにはならないと思つた。ここで

の人との交わりのなかで得るものはきっとあるだろ？。かつて幽助が俺たちにそうしてくれたように。

そしてこれは契機でもある。彼が他者との、こと男女関係において発生しつる事象を理解する契機だ。彼の上司である？も女だが、あれはお互い信頼に値する仲間、あるいは戦友と捉えているように見える。おそらくそれ以上進むことはないだろう。

だからこそ、ここでの経験や日常が価値と輝きを帯びるのである。何気ない日々の中で得る安らぎと、彼女たちの想い。それが飛影をどう変えていくのか、昔なじみとしては非常に気になるところであつた。彼が聞いたらまた悪趣味と言われそつだが。

蔵馬は友の幸せを願つている。無論、そう遠くない先で知ることになるであろう、彼女たちの心の動きを彼がどう受け止めるのかと、いう不安はあつた。もしかしたら彼女たちを悩ませ、やうには傷つけてしまつかもしれない。

だが、蔵馬は信じるほうに賭けた。『それ』を理解できたとき、彼は幽助のように今よりずっと強くなつているに違いないという期待を宿して。

こればかりは信じるしかできない。人の気持ちなど様々であるし、彼が辿ってきた過去の片鱗から考えてもいいことばかりではないだろ？。それこそ彼が理屈なしで接する相手は、女性では片割れの『彼女』だけだ。

しかし、それでも蔵馬は可能性を広げたかった。彼は一人ではない、そのことから逃げないで欲しいと。

彼は何かから逃げることを嫌うが、逃げないわけではない。そして、こういったことに関して後ろ向きであつたことも事実。

だから、彼に一度真正面からぶつかつてもらいたい。揺さぶられても翻弄されても、それを受け入れる強さを彼には持つてほしい。彼が生来受けたことのないであろう、人が持つ心の動き、理屈も何も通用しない『愛情』という感情を前にしても。

（少し押し付けがましいけどね・・・）

そう言つて彼は少し面白い様相を呈しているメンバーに苦笑を零す。結局夢見心地の二人が現実に戻ってきたのは数分後で、その頃には飛影の関心は他を向いていた。そして呆れたように溜息を吐いたはやての台詞で任務がスタートしたのである。

第十四話 ホテル・アグスター、岐路の胎動（後書き）

ホテル・アグスター編その一でした。

早いもので、もう連載開始から一ヶ月半が経過しました。物語最初の山場が近づいてくると同時に、リアルの方で卒論に追われている作者であります。

夏休み中にはほぼ完成させておくつもりではあるので、これからガングンスピードを上げてきますが、小説は並行して書くのでご安心を。更新の方もたぶんつづがなく進むと想つので、いつものようにお待ちいただければと思います。

タイトルに明記してはいませんが、今回は一話構成です。次回は戦闘もほんの少し加わるのでお楽しみに。

それでは、短いですが今回ほこの辺で。

再見!
ツアイツエン

第十五話 憲哭の空（前編）～悲しき信念（前書き）

やつてまいりました第十五話。

さて、今回はホテルアグスタ編第一弾となります。非常に申し訳ないのですが、大きなミスをいたしまして、アグスタ編はあと一話続くことになりました。

作者のうっかり属性（ホントにもつてます。車の運転とかでかなり注意されました）で、じつなつてしまつたことはまことに申し訳ありません。

とはいっても、物語で先のほうでの展開をもつて行くことで凌いだの、ストーリーや設定が変わることはありません。そこは安心ください。

それでは、第十五話、ドライブイグニッショーン！

・・・真面目に書つて恥ずかしいですね、この台詞。

第十五話 憲哭の空（前編）～悲しき信念

「ガジェット反応です！機影特定、陸戦？型三十五、空戦？型六十七、陸戦三型四機を確認しました！皆さん、お気をつけて！」

「任務開始から一時間弱。ロングアーチから、シャーリーの声が全員に通達された。ついに敵が出現したのだ。

しかし想定外のことでもあった。ガジェットが襲つてくることは作戦のうちだったが、存外に数が多いのだ。しかも陸戦ではなく空戦型、これは少しようしくない。

「うひゃー、空に浮いてんの全部ガジェットかよ。堅気もいるつてのに、テメエには全く関係ないってか？」

クラール・ヴィントのセンサーより早く敵を感じていた桑原が唸る。横にいるシャマルは、空から迫り来る数多の黒点が序序に大きさを増すことに歯噛みしながら、桑原に答えた。

「考えたくはないんですけど、おやじくやうこいつでじょうね。こんなものを次から次へと投入していくような相手ですから」

「やりたい放題つてわけかよ。気に食わねえな・・・」

桑原が怒氣を滲ませた顔で空を睨む。彼の中の靈氣は今にも外に流れ出そうなほどの中まりを見ていた。流石に飛影ほどの威圧感は感じないものの、曲がりなりにもはやての守護騎士であるシャマルを一步下がらせ、身を強張らせるほどのものだ。その力を向けら

れていないのにも関わらずである。

(これが靈氣・・・人の持つ新しい可能性・・・)

シャマルは自分達のもつ魔力とは違う力の放出に、不思議な感覚を覚えた。飛影や蔵馬の妖氣もさることながら、彼の靈氣も魔力と比べるとかなり異質なことが分かる。

確か靈劍と言つていただろうか。ガジェットを一撃の下に切り伏せた、フェイトのザンバーと似た色を放つ光の剣。AMF効果領域でも全く問題なく使えることから、魔力と靈氣はエネルギーとして根本的な違いがあるのだろう。氣を刃状にしただけだと聞いたが、その威力は試してみずとも明らかだ。

彼ら曰く、靈氣とは人間の肉体に宿る精神エネルギーが、オーラと呼ばれる形を伴い力となつて現れたものらしい。もしかすると、この世界にも靈氣を扱える人間がいる可能性がある。魔法が漫透しきつているからなんとも言えないが。

「シャマルちゃん、聞いてつか？」

「え、あ。な、なんですか？」

いきなり声をかけられたことに少々慌てるが、それを押し隠して尋ね返す。ちゃんづけという『少女』扱いに密かな喜びを覚えたのは乙女の秘密だ。「あの人も呼んでくれないかしら」、といつ妄想は戦闘中ゆえ即座に打ち消す。いつの間にか近くに寄っていた桑原は、首をかしげながらも空に指をさした。

「？ま、いいや。それよか頼みがあんだけどよ、ちょっとくら掃除

すっから、シグナムちゃんとヴィータちゃんを下がらしてくれねえか。ちつと邪魔だし、スバル達の応援にや丁度いいだろ」

「掃除？それに下がらせろって・・・シグナム達を下げたら、空の防衛線に穴が空いてしまいますよ。何をするつもりなんですか、和真さんのスタイルは近接戦闘なんじゃ・・・？」

怪訝な表情をするシャマルに桑原は「いいから任せとけ」と少し強めに言つ。意図は掴めなかつたが、何かしら考えがあるのだろう。シャマルは空で縦横無尽に戦う一人に念話を飛ばした。

最初は何を考えているつもりだと返答が来たが、和真に何か考えがあることを伝えると、渋々ガジェットから離れた。ヴィータは尚も何か言い足らなそうだったが、シグナムに引かれ地上へと降りてくる。ガジェットがその後ろについてくるのを見て桑原は構えを取つた。

「味方は引いたな。数は、ひい、ふう、みい・・・ヴィータちゃん達が減らしたからあと四十機つてどこか。っしゃ、久しぶりに試してみるぜえ おつりやああああッ！」

桑原が右手に力を込めるごとに、光り輝く黄金色の剣が現れる。だが、いつもと違うのはその剣が出現したと同時に巨大化を始めたことだ。

膨大な靈気をその身に宿し、どんどんとその大きさを増していく。まるで大木の成長を早回ししたかのような光景にシャマルは目を見開いた。

「うし、こんなもんか」

桑原の軽い口調が響く。数秒後、剣はゆうに百メートルはあるつかという大きさにまでなつていた。

ここまでくると剣というよりもはや聳え立つ壁だ。そして桑原がその剣を持ち上げる。靈氣で作ったからか重さはさほどでもないらしい。

剣の所々からバチバチッと青白い火花が迸る。そこで漸くガジェットの射程距離に入つたのか、空から一斉に光が降り注いできた。

「極大靈光剣

・・・

レーザーが対象を焼き切らんと迫つてくる。桑原はそれを睨み据えると、両手で垂直に伸びた剣をバッターの要領で構え、

「一氣、倒す　　ツ！」

力任せに振り抜いた。空に光が一筋走り、数多のレーザー光ごとガジェットを飲み込んでいく。次の瞬間、まるで花火が打ちあがつたかのような火線が空を煌き、辺りは爆音で包まれた。そして光が収まつた後にガジェット？型は影も形もない。文字通り桑原の『一羅ぎ』により一掃されたのである。

彼は靈氣を曲げたり結んだりくつつけたり、はたまた飛ばしたりと、その扱いがいちいち非常識だ。本当のことを言えば伸縮などのほうが得意だが、今の彼の靈力は人間界で最強であるからして、この程度の靈力行使では息切れ一つ起こさない。

靈氣の密度が靈剣より数段低いとはいえ、これほどの力技を可能とした理由はそこについた。

「又の如き//スターフルスイング剣だ。フツ、ビツでい」

呆気にとられるヴィータやシグナム、そして硬直したシャマルを尻目に、桑原は胸を張つてピースサインを決めていた。

- Side Hotel -

オーラクション会場の中で、なのは達は戦闘状況下にある外の様子をトレイスしていた。彼らの前に展開された空間スクリーンには、得意げにピースサインを見せる桑原が映つている。その後ろでは、引きつった笑みを見せたシャマルが遠慮がちに彼と同じポーズを決めていた。

なのは達と同じ画面を見ていた飛影が溜息を吐く。呆れた、とも言いたげな表情だつた。

「相変わらず非常識なヤツめ。竹を割つたよつた力技に何を偉そつにしているんだ」

「しかし、あの数相手なら靈氣の消費効率から言つてもメリットの方が大きい。それに以前靈氣の密度次第で威力を抑えることもできると言つていたし、一対一を主とする彼にとつては貴重かもしれない。使い勝手もさほど悪くないですよ。本当、桑原くんらしい技だ」

蔵馬は苦笑いを零しつつも、冷静に技についての考察を述べた。だが、その後ろにいるなのは達は完全に固まっていた。二人の会話に口を挟む余裕などなかつたのだ。

それはあまりにも圧倒的な光景だつた。あれだけのガジェットをたつた一撃で、それも無造作に倒してしまつたのだ。

呆気にとられたどこの話ではない。魔法を以つてしてもアレだけの威力のものは数えるほどしかないし、普通の魔導師が魔力での『剣』を作ろうとすれば、數十分の一に達せずして氣をやつてしまふだらう。ランクオーバーの魔導師ですら、十分の一を作れるか怪しいものだ。

(フH、フHイトちゃん・・・)

(う、うん。飛影がすごいのは知つてたけど、和真もこんなに強かつたなんて・・・蔵馬も同じなのかな・・・?)

(し、信じられへん・・・靈氣とか妖氣はまだよく知らんけど、あんだけの力放出して全く堪えてないなんて、底が見えないどこの話やないやないか・・・和真くんは人間つていうけど、飛影くん達と同じで、私たちの常識を軽く超えていきよるな・・・)

彼らの規格外さを三人は改めて認識する。そして彼らが敵でなかつたことに心から安堵した。どれほどの力を秘めているかは分からぬが、敵対するのは死んでも御免だ。

「・・・やれやれ」

すると、飛影が突然椅子から立ち上がり、扉のほうへ向かつた。

「飛影、じゅりへ？」

「屋上だ。そこから先は勝手にさせてもいいがな。こんな茶番に付か合つてられるか」

「え、ちよ、飛影へ」

はやての言葉を聞き終わる前に、飛影は自動ドアを潜つてその向いへと姿を消した。浮き上がりかけた腰を落とし、空中に彷徨つたままの手を膝の上へ落とす。そして同時に深い溜息を吐いた。

「ホンマに勝手されちや、たまらんのやけどなあ・・・」

「は、はやて、ファイト！」

「そ、そうだよ。それに飛影くんだって、何か想つといふがあつたのかもしないし！？」

無責任な励ましとポジティブシンキングを放つてくる親友一人。はやての目が半眼になつてジジトツとした色を帯びた。

「思つといふお？一人とも勝手なことこによつてからに、ホンマにそつ思つてるんか？あの捻くれもんが？責任とつてもいいで

「「え、そんなあー？」」

涙目で悲鳴を上げる一人。言葉はともかくとして、始末書を書くのが嫌なのは誰でも同じである。蔵馬は飛影が去つていった扉のほうを見つめた。

（なのははちゃんの考えは当たっているかも知れないな。彼が何の意味もなく出て行くとは考えづらい。何かが『視えた』のか？）

邪眼の力なのか、力の乱れを感じたのかは分からないが、飛影の後ろ姿を見ながら蔵馬は一人思つ。しかしその予想そのものは的を射していくが、後に起る新人と教導官の諍いの原因にまでなつてしまふことまでは、聰明な彼とて全く予想できはしなかつた。

-Side change -

風を棚引かせ、飛影は森の中を駆ける。服装はいつものコート姿に戻つていた。

常人には目で追うことすら出来ないほどのスピードで彼は森のある地點を田指す。そしてその表情は先ほどより少し険が入つっていた。原因はそこら中に現れている田障りな銀色の虫である。

「邪魔だ」

観察するように周りを飛び回つてゐるのに舌打ちし、機械じみた甲殻を残らず切つて捨てていく。刃の軌跡すら残さない洗練された太刀筋は、数十の虫を一瞬にしてバラバラに切り裂いた。

その残骸には目も留めず、飛影はひた走る。森の木々や茂みが覆い重なつた奥底、通常では形すら捉えられない『少女』を飛影は捉

えていたのだ。

ホテルに飛んでいった黒い影も把握しているが、大したことではないと無視した。リストに興味の引くものはなかつたため、何を盗まれようが自分の知つたことではない。

見えたのは淡い紫の髪と額にある特徴的な紋様を持つた、キャロと同じぐらいの少女。虫を召喚するのも邪眼で確認している。ほぼ術者であることに相違なかつた。

敵を潰すには頭、非常に単純だが的確な行動である。しかし、飛影が行こうとしたその先で新人FW四人が防衛線を維持していた。全員が迫り来るガジェットに対して迎撃をかけている。別に大した興味も抱かずそのまま通り過ぎようとしたとき、不意に見上げた空に飛影は僅かに目を見開いた。

「チツ！」

舌打ちと同時に地を蹴つて飛びながら剣を構え、飛んでいく光の弾に追いつくと、正面からそれに向けて振りぬいた。光弾は飛影の身体に当たる寸前で四つに弾け、後方へと乱れ飛ぶ。それらは流れた先にいた四機のガジェットを貫き、轟音と共に爆発した。

飛影は身体を捻りながら、展開されていたウイングロードに着地する。そして、剣を一、二度ほど振つて鞘に納めると、背後に向かつて一瞥した。

そこにいたのは、目を見開いて硬直するスバルだ。だが、今見るべきは彼女ではない。飛影は苛立ちと呆れを滲ませた声色を隠そうともせず、そのまま眼下を見下ろした。

「何を遊んでいる？確実に仕留められんのなら出しゃばって余計なことをするな、ティアナ・ランスター」

- Side Teana Runstar -

「何を遊んでいる？確実に仕留められんのなら出しゃばって余計なことをするな、ティアナ・ランスター」

飛影さんの言葉で私は我に帰った。表情は蔑むような色が込められている。そして、その後ろには果然とした顔の相棒の姿も見えた。戸惑いと不安が入り混じったその表情を見て私の胸は締め付けられるように痛む。

それを見たのは初めてではない。そんな顔をしたアッシュを私は何度も叱ってきた。

下らないことじこちこちメソメソするんじゃないわよ。

落ち込むぐらいうらしつかり鍛錬に励みなさい。

アンタのお守りは御免だけど置いていくのも気分が悪いわ。

幾度となく私が放つたセリフ、そして愚痴つっていても怒鳴つてい

ても、いつもアイツはそれに微笑むのだ。

えへへ ありがとう、ティア。

だが、今回は違っていた。その表情を向けられているのは私という点だけが。

「貴様らは下がれ。これ以上やつても時間の無駄だ」

吐き捨てるように彼が言う。表情には何も浮かんではない。ただ淡々とした口調で彼に戦力外通告を下されても、私は何も言い返せなかつた。私を見たスバルが、慌てて飛影に詰め寄つていく。

「あ、あの飛影さん、今のもコンビネーションの一つで……それにティアも頑張つたし、ミスは誰にでも……」

「愚にも付かんフォローはやめる。貴様は既に今田一一度死んでいる。万が一今度を避けられたとしても、横のガジェットにその身を撃ち抜かれていた。奴の誤射がそれほどに致命的だったのは、貴様が一番よく分かつているはずだ。それとも、貴様は後ろから撃たれても平気で笑つていられるような死にたがりか？」

うつ、とスバルが声を飲み込む。言葉は乱暴だが事実その通りだつた。直撃したら怪我ではすまなかつたことは明白、そしてかわしたあとの無防備な身体をガジェットが見逃してくれるとも思えない。

「偉そうな台詞は一度死に際に至るまで修行して、自分の力量を自覚してからにするんだな。覚悟もなく、力もなく、ただ勝手な理屈で動いたせいで起き得た可能性を棚上げした拳句、頑張つただと？自分の後始末もできんようなガキの戯言は他所でやれ」

それだけ言って飛影さんは踵を返した。もはや私たちのことなど眼中にないのか、その足取りには何の未練もない。

だが、それに対し怒りが湧き上がる。

確かに無視できないミスだつたけれど、私だつて好きで誤射したわけじやない。私なりに考え、チームの為を思つての行動だつた。慰めて欲しかつたなんてことはない。スバルを助けてもらつたことは感謝しているし、あの場面でスバルを救うことなど彼になら造作もなかつたのは確かだ。

だが、だからこそ悔しかつた。力がなれば何もできない、それはわかつてゐる。だから努力してきたのだ。人の何倍も、できなけばかなりの無茶までして。しかし届かなかつた、私はまだ届いてなどいなかつたのだ。

「くつ・・・・

胸の奥から嫌な感じが湧き出でてくる。黒く淀んだ、私がもつとも嫌うもの。

それは痛みだつた。自分の存在を、いや自分そのものを否定されたみたいで、大声で喚き散らしたくなる。この痛みは、六課にいる誰よりもよくわかっているつもりだ。力があれば、少なくとも大切なものが潰されることはない。

だつて力があれば、『お兄ちゃん』は・・・

「・・・かる、も・ですか・・・」

「ティア?」

スバルが心配そうに近寄る。だがそれに気を払うこともできず私は拳を血が滲みそうなほど握り締めた。知らずに口を突くのは怨嗟の言葉。みすぼらしい、情けないと思つても、一度あふれ出した言葉は留まらず、涙と共に流れしていく。

唇を噛み締めてなんとか抑えようとする。だが、一度堰をきつた流れは止めることなどできなかつた。それがこれ以上ないほど醜い、ただのハつ当当たりだと分かついても。

「あ、貴方に・・・力がある貴方になんかわかるもんですか・・・ただの凡人で無力ばかり感じさせられる私の・・・守りたいものすら守れなかつた私のこと、なんて・・・つ・・・・」

「ティア・・・」

スバルが顔を俯かせて私から離れていった。私は木に頭を押し付けるようにして慟哭を零す。頬を伝つた涙は少し苦味を帯びていた。

第十五話 憲哭の空（前編）～悲しき信念（後書き）

アグスタ編第一節、第十五話でした。

今回はテンプレみたいな流れとなってしまっていますが、そこはど
うかご了承のほどをお願い致します。どうやつても、これ以外の展
開でいい案が思い浮かばなかつたんだよう・・・つて、いじけて
もダメですね。

それでは氣を引き締めて。第十五話、どうでしたか？リアルとの兼
ね合いがかなり厳しくなつてきており、本当に八月中に卒論の型は
上がるのか、と本氣で心配になつてきた作者であります。

皆様お盆休みに入った頃でしょ？ 作者は卒論と実家の手伝いで
てんてこ舞いな日々を送つてあります。休みも何もあつたもんじゃ
あつません。

くわう、私だつて遊びたいのにー！

次回はタイトルから分かるとおり今度こそアグスタ編終結の話です。
さてさて、どういうことになるやう。考えていた設定を思つていた
よつ早く出すことになつてしまつた作者ですが、これも自分のミス
が原因なので次はこんなことにならないように気をつけたいです。

それでは今回はこんなとこりで。夏休みも中盤ですから、皆さん色々
と頑張つてください。

それでは再見！
スタイル

第十六話 憲哭の空（後編）～記す想い（前書き）

十六話の完成であります。

今回のお話も少しシリアス成分が混じつておる、飛影ではなく、他に主軸を置いたお話になります。

本当は、もつと先に展開しようとしていたお話だつたんですけれどね。

そして唐突で申し訳ないのですが、次の更新はお休みいたします。お盆のときはまったくと言つていよいほど休めなかつたこともそうなのですが、じつは卒論にも本腰を入れて片付けてしまいたいので。

更新は22～26日の予定ですが、若干前後するかもしれませんので、お暇でしたらその辺りでチェックのほどをよろしくお願ひ致します。

それでは若干不安要素もありますが、第十六話、堂々のリフト・オフです！

第十六話 憲哭の空（後編）～記す想い

「フン・・・」

少しばかりのイラつきを顔に浮かべながら、飛影は元来た道を歩いていた。「一トを撫ぜる風がいつもよりうつとおしく感じる。飛影は足を止め、背後を振り返った。

現場近くでは大騒ぎ状態となっている。そのため、先ほどから違う課の魔導師の部隊や現場検証官などと幾度となくすれ違った。その誰もが、飛影を見て一瞬怪訝そうな顔をしたが、端末を操作して彼が民間協力者だと分かるとそそくさと去つていった。

新参ゆえか、それ以外の理由か、飛影の顔はほとんど知られていないようだ。しかし風体だけで一々確認を取るとは、今の自分は悪人ヅラも際立つているらしい。いや、それは普段からかもしないが。

遠くに『視える』ティアナは、木を支えにしていまだ肩を震わせていた。気が強いとはいえ、ここは恵まれた世界。それにあれどもまだ打たれ弱い少女だ、仕方のないことなのかもしれない。

今は触れないほうがいいだろう。あれが目指すものは、おそらく自分達も通ってきた道だ。力を求め、力無くしては生きられない修羅の道。その理由がどうであろうと、背負っている物がなんであろうと、渴望や絶望から来る気持ちは通つた者には十分に分かる。

だからこそ、飛影は彼女に手を貸すつもりも助言を『えるつもりもなかつた。自分自身が経験して得たことを考へても、それが最善であつたからだ。

他人の指図で得た物に価値などない。それは彼や彼の仲間が一番よく知つてゐる。

飛影は厳しさと懐かしさを含んだ表情をしながら、邪眼を通して嗚咽を零すティアナを視つめた。

「フ、オレもヤキが回つたか」

飛影はひとりじめながら思つた。若き口のあの『バカ』と同じようながらむしゃらさを持つ彼女を、今はただ見ついているだけにしておこう。

まだ『何も分かつていな』彼女が、かつてこの目で見たような道へと違えそぞにならない限りは。

「飛影くーん……」

そこまで考へてみると、遠くから自分の名を呼ぶ声が聞こえた。声のほうを見やると、なのはが小走りに駆けてくる。その後ろには蔵馬に桑原、それに六課の隊長や副隊長に加え、見慣れない男性二人の姿もあつた。

存外にそのペースも速い。飛影が全員を見渡し終えると、なのは達は既に傍まで寄つてきていた。

「もう、飛影くんたら探してもいいんだもん。どこに行つちゃつた

のかと思つたよ

「でも、スバル達を助けてくれてたんだよね。モニターで見てたよ

「何のことだ。オレは単なる暇つぶしをしていただけだ」

なのはとフロイトの労に、飛影は鼻を鳴らして顔を背ける。すると、その後ろから苦笑気味な声が聞こえてきた。

「ははは・・・どちらも苦労してくるようだね」

「ええ。ですが、二人ともとても楽しそうですよ」

現れたのは、飛影にとつては初めて見る一人だつた。一人は高い背に淡い緑色の長髪を棚引かせ、白いスーツを完璧に着こなした青年、そしてもう一人はこれまで長い茶髪を首の後ろで束ね、ダークグリーンのスーツを纏つた優しい顔立ちの青年であった。

前者は飛影たちと同じぐらい、後者はなのは達と同年代ぐらいだろうと見る。眉を寄せた飛影に一人は苦笑気味な表情を浮かべ、一礼して緑髪の青年が前に出た。何だか、横にいる赤毛の狐とダブるのは気のせいだろうか。

「初めてまして、といつたところかな。僕はヴェロッサ・アコース、時空管理局本局の査察官さ。君の事はいつもはやてからよく聞いているよ、飛影くん」

「ほう? では八神、貴様には後でばきつと聞かせてもいいつとしよう。無論、拒否権はない。脱走すれば極刑に処す」

「ちよつ、何か話し合いには不釣合いな擬音が混じつてへん！？つていうか、どつちにしても私の扱い酷ツ！」

飛影の獵奇的な台詞をいい方向にスルーしたのか、「それはいいな、僕も誘つておくれよ」と悪乗りするヴェロッサ。翌日、彼女が病院のベッドの上でうわ言を洩らしながら横たわるビジョンが、彼には想像できないのだろうか。いや、絶対に分かつてゐる人、と全員が思った。

後に語った飛影によれば、この時既にヴェロッサに対するイメージが固まりつつあつたのだという。

曰く、狐一号だと。

涙目で抱きつくはやてを藏馬が慰めていると、その横からもう一人の青年が進み出た。柔らかい表情を眼鏡が覆い、無害な雰囲気を醸し出している。

「あはは、会つてみるまで少し不安だったけれど、なのはの言ったとおりの人だ。初めまして、僕は無限書庫と呼ばれる場所の司書長をしている、ユーノ・スクライアとります」

穏やかな笑みを称えながら、彼は笑う。その笑顔が一瞬どこか無理をしているように感じた飛影だが、その気配は始めからなかつたかのように消え失せ、意味深な笑みをなのは達に向ける。

「貴方のことは昔からなのはやフェイトによく聞いてましたから、僕もずっとお会いしたいと思っていました。そういえば、貴方を探すためにはには協力を求められたこともありましたよ。どうしても会いたい人がいるから探すのを手伝つて欲しい、つてね」

「「「コ、コーコー（くん）っ…！」」

「きなりのカミングアウトに、なのはとフロイトが顔を赤くして声を上げる。はやてやヴロッサはあたふたする彼女たちを、早速捲くしてていた。そんな中、コーコーは飛影に近づき、真剣味を帶びた表情を彼に向ける。

「…………飛影さん。いきなりで申し訳ないんですが、貴方にお願いしたいことがあります」

静かに飛影を見据えながらコーコーは言った。その声色に何かを感じ取ったのか、なのは達が一様に動きを止めた。問われた本人も、コーコーへと視線をよこした。

その田には一筋の光。少しの悲しさと悔しさ、そしてとてつもなく強い想いを感じさせる不思議な瞳が飛影を見下ろしていた。いまだかつて見たことのない光をその田に宿らせたコーコーに、飛影は見上げるようにして対峙する。

コーコーは一度軽く息を吸い込み、澄んだ田でまつすぐに飛影を見ながらその口を開いた。

「なのはを…」の機動六課を守つてやつて欲しいんです。こんなこと僕が頼めることじやないし、今日会つたばかりの飛影さんにそんな義理なんてないってことも分かつてます。けど、それでも言っておきたかった。僕の力は、彼女たちを守るには足りないから。だから飛影さん、命を守つてあげて下さい。お願いします…」

「「「コーコー（くん）…」「」」

直立不動からキッチリと頭を下げる。コーカは言葉を紡ぐ。なのは達はそれを僅かに潤んだ目で見つめていた。飛影はそんなコーカから目を逸らさずについたが、柳眉を僅かに上げると鼻を鳴らす。

「フン、甘つたれるな。自分が出来ないからオレに守れだと？都合がいいにも程があるな。貴様が言うようにオレに助ける義理はないんだ、勝手な理屈を押し付けるのは止めや」

「なつ！？飛影く」

あまりにも冷徹な台詞に、はやて達が非難の声を上げようとする。だが、寸でのところで藏馬とヴェロッサに押し留められた。コーカは身動きするも、顔を上げようとはしない。

三人を抑えながらヴェロッサ達は黙つて首を振つた。そして、藏馬が横目で見据える飛影に続きを促すように視線を送る。その顔に浮かんでいる笑みに若干目を鋭くさせながら、飛影はコーカを見据えつつ口を開いた。

「だが・・・ここつらとは偶々向いている方向が同じようだからな、敵対するものも必ずと絞られてくる。現に奴らとは何度か剣を交えてしまつてもいるから、不本意だがオレも仲間の一人に映つているだろ？」

顔全体で不機嫌を表した飛影が淡々と語つた。なのは達がキヨトンとするなか、付き合いが長い藏馬や彼が口にする言葉の意図を理解したヴェロッサやはやは、含みのある顔でニヤニヤ笑つている。

だが、それに睨みを据えながらも飛影は言葉を止めようとはしな

かつた。

「あんな鉄屑を出してチヨロチヨロとするだけの連中が、何を考えているかは知らん。だが、奴らの目的がどうとか、何故敵対するのかとか、そんなものは端から関係ない。オレに刃を向けるなら、まとめて切り捨てるだけだ。分かつたなら、その表情を止める。いい加減うんざりだ」

泣きそうな顔で俯いていたユーノが、ハツとしてその顔を上げる。そのときには、飛影はユーノ達に背を向け、一人森のほうを向いていた。

風によつて黒く棚引くコートが随分と遠く感じる。ユーノは彼の言った内容をもう一度頭の中で反芻し、その意味を数秒かけてようやく理解するに至つた。そしてその表情を笑顔に変えながら、その背中へ黙つて頭を下げた。

それと同時に一帯の緊張が薄れ、音が戻つてくるのが分かつた。その場にいた全員が、緩んだ空気に息を吐き出しながら安堵する。少し呆れたようにやてが飛影を見やつた。

「まったく、飛影くんたら相変わらずの天邪鬼なんやから・・・言い方からしてももつと色々あるはずやのに、回りぐどくつてしまはないわ。意味は同じやねんから、素直に『愛しのハニー達はオレが守つてやるから安心しや』って言つたらええのにな〜」

「・・・八神、後で話がある。遺書を書いて俺の部屋に来い

「や、それは全力で遠慮させてもうつてええか！？」

はやでがドスの聞いた飛影の声に怯えながら、藏馬の後ろに隠れる。それを見たなのはと藏馬は相変わらずの苦笑いだ。ユーノはそれに笑みを濃くしながら、ヴェロッサと話をし始める。

だが、フュイトには分かつていた。彼の笑顔には隠し切れない悲しみの色が滲んでいる。今の自分には、それがどれほどもののか痛いほどよくわかつた。

(ユーノくん・・・自分が一番悲しいはずやなのにな・・・)

(つー?・・・はやで、知つてたんだ)

いきなり頭に聞こえた声にフュイトが驚いて視線を向けると、何とも居心地の悪そうなはやでと田が合づ。ユーノを横で捉えるそのまま、少しばかりの寂しさを漂わせていた。

(当たり前や、何年一緒にいると思つとるんや。それに、ユーノくんの気持ちに気づかくんのは、なのはちやんと朴念仁の飛影くんぐらいのもんやで?)

はやでが何を今さら、という風に零す。思えば、フュイトもはやても、彼がなのはに惹かれていることは早くから分かつていた。フュイトは自分と戦り合つたときには既にそう感じていたし、闇の書事件の時は、彼の気持ちはもう疑いようのないほどだつただやつ。

しかし、ユーノが自らの気持ちを告げる前に、飛影となのはは出会つた。それはたつた一度きりの、夢とも思えるほどの一瞬の出会い。しかし、彼女にとつては運命的とさえ言える出来事だったのだ。

（フエイトちゃん。私な、『あん時』なのはちゃんを立ち直らせたんは、はじめコーノくんやと思つたんや。同じような時にコーノくんが見舞い行くゆうてたもんでな・・・まあ勘違いやつたんやけど）

突如としてはやでが零した言葉に、フエイトは思わず彼女の方を向いた。そこにいる彼女は、いつもどどこかが違う。いつもの明るさやお気楽ではなく、自嘲を多分に含んだよつた笑みが浮かんでいた。

（だから・・・なのはちゃんが治つて、無限書庫でコーノくんと余ったときに一度茶化してしまったことがあるんよ。なのはちゃんに上手いことやつたやないかつて。そしたら、『ひつひつ暗い顔で言われでん。『僕じやないよ、それは』って）

（それ、は・・・）

獨白するよつた口調のはやでに、フエイトは息が苦しくなるのを感じた。もはや、その先は眞まで言わざとも分かる。

はやてに悪意は全くなかつた。彼女からすれば、さつとこつもやつているじやれあいのよつなやり取りの延長線上だつたのだつ。しかし、それは傷ついた一人の少年に、さらなる追い討ちをかける結果となつてしまつたのだ。

（今思えば、残酷な勘違いやつた。いや、勘違いじや済まれへん。・・だから、私はなのはちゃん達には聞かなかつたんや。気にはなつたけど、罪悪感が疼いてそれどこじやあらへんかつたから。そないなことしてゐうちに時間が経つて、フエイトちゃん達が連れてくるまですつかり忘れてもうて。まさか、それが飛影くんみたいな人

やとは思へんかつたけどな)

クスッと、ようやく少し険の取れた笑みを浮かべるはやで。その視線は頬をリスのように膨らませて飛影と言い合いをするなのは、そしてそれを仲裁しているユーノへと向けられている。

事実、飛影と出会いを果たした後のなのはは、それこそ別人のように変貌を遂げた。消極的だつたりハビリもすゞい勢いでこなすようになり、立つことさえ出来ぬとされたその体を、医者すらも驚く速度で完治させてしまった。

理由は何かと聞かれれば、彼女は満面の笑みで応えるのだ。

ある人が自分を変えてくれた。その人と再会するためには、会つた時にがっかりされないように私は努力するんだ。

慕つていた女の子を何とか励まそうと思つていたといひで、いきなり彼女が立ち直り、その理由が自分ではない男が原因と聞かされたこと。そして憧れといいつつも、彼女がその飛影とかいう男を想い忍んでいるのは誰から見ても一目瞭然だつたこと。

それはユーノにとつて寝耳に水のことだつたに違いない。

自分の思いを告げることも出来ず、逆に彼女からは想いを寄せる相手を探すことを頼まれる。それは何よりも残酷なことだ。そのことを告げられたとき、彼は一体どんな気持ちだつたのだろうか。

そのことでユーノが落ち込んでいたことも、フェイト達は知っている。聞けば、自分達が知らないだけで荒れていたときもあったのだそうだ。

しかし、今彼はそんな恋敵である飛影と席を同じくしている。自らの気持ちが消えたわけではないだろうに、その微笑は痛々しくも穏やかだった。抑え付けたのではなく、吹っ切れたという感じ。

この八年の間には、数え切れないほどの葛藤があつたはず。それこそ、なのは達が笑っている時、きっと彼は泣いていた。一瞬でなのはの心を奪つていった飛影を恨んだことも一度や一度ではないだら。

だが、それでも彼は今こうしてこういた。友達のユーノ・スクライアとして。

なのはを悲しませない為に、自分の想いを打ち明けるより彼女の幸せを願つたのだ。彼の葛藤は八年にも渡る長く辛いもの。だが、その末に得た答えであつたからこそ、彼が心根から優しき青年だつたからこそ出来うることだつたに違いない。

（ホンマ、見直したで。好いた惚れたつていうんは正直どうにもならんけど、好きな相手の気持ちを察して引き下がるなんて、分かつとってもなかなかできることやない。ユーノくん、アンタ男やで。それと、あん時はホントに「ごめんなさい、ユーノくん」

はやは一人、目に浮かんだ涙を拭う。それを言葉に出すことはしない。謝つてしまえば、きっと彼にとつて最大の侮辱となるだろうから。

フロイトは優しげな表情で彼女の肩へと手を添える。そして、ごめんなさいと心のなかで懺悔する親友と、ユーノを交互に見つめた。

（・・・強いね、ユーノは

（ホンマにな・・・）

フェイトは痛む胸を抑えながら、傍らに立つユーノを見る。飛影と話す彼の表情は、旧来の友人と語り合いつつな清々しさを感じさせていた。

もし同じ立場になつたら、自分はきっと耐えられないだろう。考えるだけで、身体が引き裂かれるような痛みが胸を襲う。フェイトにはそんな痛みを抱えて立つユーノが、とても眩しく見えた。

だから自分も誓つ。可能性がある限り、絶対に諦めたりはしないと。

遠く響く泣き声も、静かに仕舞われる嗚咽も、空は等しく吸い込んでいく。今映る笑顔も大切な人達とのくだらないやり取りも、すべては青き輝きの中へ溶け落ちて、いずれ消えてゆくのだろう。

告げられぬまま突き進む思い。告げずに受け継がれる想い。

だがどちらも碎けはしない。その先にはきっと、新しい形が待つているから。

晴れやかな上空に雲が流れ、陽光が木々を照らし出す。

穏やかな風が、彼らを見下るよつてその髪を攫つた。

第十六話 憶喚の空（後編）～記す想い（後書き）

ホテルアグスタ編最終となる十六話でした。

今回は、はやてとコーカーをメインに据えたお話となりました。色々なところで淫獣などと散々な言われようのコーカーくんですが、今回はかなり男らしいというか、カッコイイ感じでまとまります。

こんな風にカッコイイコーカーくんも偶にはいいんじゃないかなあと思い、書いてみました。実際彼の立場になれば、易々と出来ることではありますからね。

無論、シリアスだけでは終わりません。コーカーくんには普段の淫獣ぶりを發揮して頑張つていただくなつもりでいるので（オイ）、またの登場はギャグ要素を強くするつもりであります。

と、ここで前回のお話で活躍した桑原くんのオリジナル必殺技について、簡単ながら説明をさせてもらつことに致します。

＜極大靈光剣・一氣倒干（ミスター・フルスイング剣）＞

多量の靈氣を靈剣につぎ込んで巨大化させ、バットの要領で力の限りなぎ払う技。飛影には竹を割つたような力技だと呆れられるが、単純な大多数戦では高い効果を發揮し、靈氣の密度を調整することで消費靈力を調整したり、相手を殺さないようにもできるとこれから、藏馬には究極の掃討技とまで言わせていく。

無論のこと規模の違いから靈劍より段違いに靈氣を消費するが、相手がただの人間やガジェットである場合はその密度がそれほど必要ではないため、効率から言えば燃費は悪くない。シグナムとアギトの合体技、火龍一閃と非常によく似ているが、最大威力・範囲共に桁違いである。

ネーミングは一人で千人分の活躍をするといつ『一騎当千』に『一気に千の相手を倒す』という言葉をかけたもの。

感づかれた方もいらっしゃるかも知れませんが、この一話に渡った『慟哭の空』は、一人(二人)の人間の『涙』と『信念・想い』をテーマにしたお話です。

それぞれ事情は違いますが、心に持つ悲しみに対する各自の捉え方を書いてみました。上手に纏まっているか心配なんですが・・・まあなるようになるでしょう。

そして、次回はなんとこの作品に転機が訪れる・・・かも知れません。お話自体はそんなに変化しないと思うんですが・・・詳しくはまた本編をお待ちください。

それでは、今回も長々と付き合つていただきありがとうございました。夏ももう終わりに近づいてきたので、お互い悔いの残らない夏にしましょう！

ではでは、また皆様とお会いできるのことを願つて。再見！ （アライアンス）

PS

ユーザー登録をしなくとも感想は書けますので、デシデシビリペ。また、ログインされたユーザー様は、作品評価のほうも並んでどうぞ。自分の作品の出来がどの程度の出来なのか知りたいこともあるので、どうかお願い致します。

第十七話 夢での邂逅～秘められし力（前書き）

大変長らくお待たせいたしました！！！戻ってきた作者であります。

自分のことを第一にしていた期間とはいえ、随分とお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。お陰で、といいますが、卒論は八割とはいからないまでも、まとめた解説を書き写すだけというところにまできました！

わー、パチパチ。字数からすれば残り8000字ほど残っているのですが、あとはひたすら書き写すだけの作業。しかし、書き写すのって意外と大変なんですよねー・・・

ソロモンよ、私は帰つてきた！まだどこかへ行くかも知れないけど・
・

ではでは、そんなわけで第十七話、久々のスタートです！

第十七話 夢での邂逅～秘められし力

- Side Teana Runstar -

ホテル・アグスターでの事件から数日、私は塞ぎこんでいた。ベッドの上に身体を横たえる。別に引きこもりになつていいわけではない。だが、人間関係でいえばその傾向も出始めていた。

もちろん仕事は誰よりもキッチリとするのを心がけているし、訓練だって全てこなしている。だが、澁みのような嫌な感情が次第に自分のなかに溜まつっていく感じは日々増していた。

今日が終わる。厳しい訓練の後だといつに眠気は来ず、いつものようにベッドに寝転がり、いつものようにマイナス思考を始まる。

「このところずっとそうだ。飛影にスバルを助けてもらつたあの日から止まらないのだ。

（私だけ・・・なんで・・・くつ）

怒りとも悲しみともつかない黒い感情が自分を押し流そうとしてくる。いつもは耐えていたが、今日はその流れが強い。才あるものへの、そして自分への憎しみや妬みなのだろう。

こんなのは嫌だ。惨めになりたくないからこそ死に物狂いで努力して管理局に入ったというのに、これでは真逆ではないか。

(もう・・・嫌・・・)

頭から布団を被り、うつ伏せになつて枕に顔を押し付けた。同じ問い合わせがぐるぐる回つた末、思考が極大に達しそうになる。そしてそれが思うがまま、滅茶苦茶に爆発しそうになつたとき急速に意識が遠のき、

『辛氣臭えなあ。あー、やだやだ』

「う、わあっ！？」

それは唐突に終わりを告げた。頭のなかに誰かの『声』入り込んできたのだ。私は目を開いた『感覚』を覚えながら起き上がり、響いた声を追つようにして後ろを見た。

そこには青年だった。白い胴着を着込み、鍛え抜かれた両腕を惜しげもなく晒した年上の青年。瞳は飛影さんのような勝気な光を帶びていたが、彼とはまた違う印象を受けた。

そして黒色の前髪は見事なリーゼントを描いている。桑原ほど露骨ではないが、普通の髪型といつジャンルとは少しばかり方向性が異なるだろう。

『つたく、真面目ちやんはこれだからいけねえよな。考えばつか先行つちまつて頭でつかちにしかなりやしねえ。強いだの弱いだの、いちいち難しく考えすぎだ』

口調は軽い。だがその身体から発する『何か』に私は身構えた。得体の知れない感覚、それは恐怖だ。威圧感を灯した飛影さんと並び立つほどの何かを、私は田の前の男から感じていた。

「あ、貴方誰よ！？」人の部屋に勝手に入つてきて、私に何をするつもりー？」

『何言つてんだよ、お前はそこまで寝てんじゃねえか』

「えつ・・・な・・・」

相手の指した方向、自分の後ろを見やつて私は声を上げた。そこで田を閉じ、等間隔に静かな息をしているのは紛れもなく『私』だつた。寝ている自分を見下ろしているのである。

「ど、どうなつてゐの・・・ー？」

『それを今から教えてやる。と、思つたが、言葉で言つのは面倒だから、とりあえず自分の力を確認がてら磨いてーい。潰されんなよ』

彼が言つた瞬間、景色が突如変貌を遂げる。闇が降り、黒一色だつた就寝部屋と彼が消え、変わりに板張りを敷き詰めた大きな部屋が現れた。

どこの道場のような莊厳とした佇まいに自然と背筋が伸びる。足が地に着いた感覚に戸惑つていると、床板の一つが歪み何かが迫り出ってきた。

「な・・・」

私は言葉を失う。

一言で言えばそれは影だった。何の感情も、何の生氣も感じさせないただ虚無を固めて生み出したような空ろな人形。目も耳も口もない、ただ不気味な色を立体化させたような出で立ち。そのあまりの無機質さに、背中を嫌な汗が流れていった。

それに驚く間もなく、影はゆっくりとこちらに歩いてくる。顔のない相手からは表情など読み取りようもないが、明らかな敵意が伝わってくる。私は慌ててポケットに手を伸ばし、いつも傍にいるはずの頼れる相棒を探した。

だが、手に馴染む大きさのカードの感触はどこにもない。いつもは体に満ち溢れている魔力も感じない。それが不安を恐怖に変える。

「ひう・・・つー」

情けない声が喉を通して空気を震わせる。私は後ろに下がりうとしたが、そこに壁が在るかの如く下がることができない。

と、何か言いようのない悪寒を感じて私は体を捻った。体裁もなにもなく、無様に床を転がる。瞬き程度の僅かな時間の後、私は倒れた体勢から自分がいた場所を見た。

そして絶句する。目にしたのは影が突き出した手から伸びる闇。まるで獲物を食らい尽くすかのように蠢くそれが壁を覆っている。そして、それは程なくして私へと向けられた。

「う・・・あ・・・」

もはや悲鳴にもならない。そこにあるのは絶望だ、このままいけば自分は死ぬという確信のみ。

殺される。直感でそう感じた。涙が出そうになるのを嫌うよう思わず目を瞑る。だが、その瞬間に私の中に流れ込んでくるものがあつた。まるで濁流のような勢いで以つて、私の中に入り込んでくる。

私の中に満ちていた恐怖や焦りなどを、それは一瞬にして押し流していった。混沌とした心がより強い混沌で上書きされ、それらが徐徐に形を成していく。

輪郭が宿り、線が走り、色が満ちる。それらは時に調和し、時に互いを押し潰しあいながら生き物の「」とく姿を変える。そして一つの光景が映し出された。

映つたのは先ほどの青年、そして彼は右手を掲げた。そして瞬く間に指先に光が集まつたかと思うと、彼は無造作にその青い半透明な光を撃ち出した。空間が僅かに震え、光はそのまま遙か上空へと消えてゆく。

光の尾をなびかせながら飛んでいくそれに私が弾丸のような印象を持つたとき、景色が戻り、止まつていた時間が動き始めた。

「・・・・・」

田の前には先ほどの影がいた。だらんとした腕をゆらゆらと振りながら、じちらに向けて少しづつ近寄つてくる。私はギリッと奥歯を噛み締め、右手を前に突き出した。

「ツ・・・もつ、」うなりや駄田元よー。」

先ほどの映像と同じように、右手の指先に気を集中させる。すると何の滲みもなく、先ほどの見た時と同じようにして自分の人差し指に光が集まつていった。私が息を飲む中、ライトブルーの光は導かれるようにしてその輝きを増し、指先を覆い隠していく。

影が残り五歩前後のところまで迫る。私はそれを睨みつけ、恐怖を振り払つようにして、腕を構えた。

「・・・喰らいなさい、」このおおおおおーー。」

『彼』と同じような弾丸をイメージして、私はこの身に馴染んだ射撃魔法を使うように心へ念じた。刹那、光は私に応えるように飛び、そのまま影を撃ち抜いて虚空へと消えていく。黒一色だったその身体に風穴を開けられて外郭を保てなくなつたのか、程なくして影は消えた。

それと同時に私の意識も急速に遠くなつていく。まるで引き込まれるかのような、いや引き上げられるかのような力に抗うことなく私は沈んでいった。

絶望はない。何とかなつたのだから、もうこれぐらいでいいだろう。そう見切りをつけて私は意識を完全に手放した。

『ま、ギリギリ合格だな。力を見つけたのは偶然だつたし、ホントはついてぐらいのつもりだつたんだが、気が変わつたぜ。軽く鍛えてやるから感謝しろよ、ティアナ』

だから、どこか嬉しそうな声は私には届かなかつた。

- Side change several days after

「そうそう、いい調子だよティアナ」

「・・・はいッ！」

なのはの声が横から響いた。四方八方より迫り来る光の玉をクロスミラージュで撃ち落していく。同じくして足元に薬莢が次々と転がつていった。

ティアナのポジションがやるいつもの訓練の一つだ。目的は視覚を広く取つたり、多角的な攻撃に対抗できるようにすること。あるいは戦況把握のために大きな視野による判断を素早く正確に下せるようにするためにあるセンターガードの訓練である。

「ツ・・・ヤツ！」

この訓練をティアナはかれこれ數十分は続けていたが、何週間もやつてきたことだ。疲れはするが、これぐらいでまいりのような柔な鍛え方はされていない。

前と真上、そして右上と左から来る光を順々に一丁銃で全て

叩き落した。光が碎けて魔素へと還り、虚空へと溶けていく。

撃ち落した光の残滓を見届けてから視線を下げる。すると、此方を見ていたなのはと目が合った。その周りにはもう浮いている光は残っていない。

彼女がティアナを見てにつこりと笑った。張り詰めていた空気が緩み、緊張を解く。そうしてティアナがほつと一息吐こうとした時、背筋に何かが走るのを感じた。

「ツ！」

考えるより速く、身体を捻つて左手のクロス//ラージュを背後に向ける。それは流れるような無駄のない動作、気づいたときには躊躇なくトリガーを引いていた。

「シツ！」

銃撃の鈍い音を残しながら、薬莢が地面に落ちて立てたカラシという乾いた音と重なる。そしてティアナの視覚がそれを捉えた。

それは光の玉の欠片。桃色の光を放っていたそれは、ティアナの黄色がかつた弾丸に撃ち抜かれ、高い音を響かせて消える。そこで漸く大きな一息を吐くことができた。ティアナは少しジト目氣味で苦笑しながらのはを見る。

「まったく酷いですよ。どんな時でも油断しないようにって言いたかったんですねか？なのはさんって相変わらずスバルタですよね」

「・・・え？あ、う、うん。よくわかったね、ティアナ。これなら

何の心配もないよ

「ありがとうございます。午前はこれで終わりでしたよね、それじゃあ私はご飯食べてきます」

ティアナはそれだけ言つと踵を返した。強くなるために、少しでも練習をするために時間が惜しい。一刻も早く食事を終わらせて、自主練に入らなくてはとティアナはスタスタと歩いていく。

その後姿をなのははじつと見つめていた。

- Side change at night -

「うん・・・」

夜の自主練習の合間の休憩タイム。伸ばした右手の指先を見つめながら、ティアナは一人考え込んでいた。彼女の視線の先にあるのは男の姿・・・などではなく何の変哲もない自分の人差し指だ。いつもと別に変わりはしない。

訓練で傷ついているが、マメにケアはしているので女の子らしい手だとは、思う。けれど今考えるべきはそこではなかつた。

「はあ・・・」

十日ほど前、衝撃的だったあの夢を見てからティアナは毎晩のよ

うにそれに準ずる夢を見るようになっていた。一晩も欠かすことなく文字通り毎晩である。

そのどれもが黒い影と戦う夢だ。始めは一體だけだったのが、二体になり三体になり、今では両手の指ほど、それもかなり強くなつた影を一度に相手するにまで至つている。

見えないとこから来る攻撃もあるので、次第に影から発する気配や殺氣、そして何か不思議な感覚のようなもので動きを読むことが出来るようになり、それを頼りに攻撃するなんてこともしていた。あくまで夢の中でだけという話だが。

そして目が覚めれば現実の訓練が待つていて。寝ても醒めてもティアナは動き続けていた。だが、不思議と疲労は少ない。

「やっぱり光らないか・・・」

あの夢の中ではティアナは不思議な力を使えた。指先に力を集中して弾丸のように放つという、魔法のようで全く違つ力による攻撃だ。魔法陣も出なければデバイスも使わない。

だがその力は無尽蔵というわけではなかつた。使えば使つただけ減り、なくなれば出せなくなる。たつたそれだけ、普通に考えれば当たり前のことだが、夢であるその世界でそうなつていてるにティアナはひどく現実感を感じていた。

しかもそれだけでは終わらない。

夢を経るごとに身体に流れる力の感覚が分かり始め、自分の拳や足に力を乗せて攻撃や移動をするなんてことも出来るようになつた。

理屈は分からぬが、ひたすら耐久組み手のよつなことをしているうちに、あの力には強化魔法のような防護や攻性作用があることも分かつたのだ。

しかもこの方が力の使用量も少なく場所を選べば効果も大きいので、決め手である『アレ』を撃つことが必要な相手に温存できた。

今の自分では『アレ』を一回撃つと、ほぼ全ての力を使い果たしてしまった。結果としていつも射撃一辺倒では通じず、それなりに身体を使った攻撃もするようになつたというわけだ。それも最初は一発しか使えなかつたことを鑑みれば、普通は成長していると言えるだろう。

しかしきどいようだが、全てが夢での話だ。あまりのリアルさに、これが現実だつたらと考えたこともある。

だが、夢では簡単に出来た力の集中も起きてみれば何もできない。所詮は夢の中、才能を求めるあまり自分の卑しさを思い知らされたようで、少し気が沈んだ。

「頑張つてるね~。暇だつたから付き合つにきたよ」

そこに馴染み深い声がかかつた。声の主は言わずもがなだ。五月蠅い鬱陶しいバカつぽいと三拍子そろつたティアナの腐れ縁、天然突撃娘ことスバルである。訓練で疲れているというのに、彼女は満面の笑みだつた。

アグスタで致命的な失敗したあの日から、ティアナは自主練習を始めた。無理は承知だつたが、何もしないままではいられなかつたのだ。

そして一人でいいと言つてているにも関わらず、何かと理由をつけて彼女はティアナに付き合つてくれる。世話焼きなお人好しであるが、その想いがとても温かかった。

「ティア、昼間もなのはさんの教導があつたんでしょう？その割にはなんか元気に見えるけど、ホントに大丈夫？」

「大丈夫よ。自分のことはそれなりにわかってるつもりだから、今どこのろは平気。それより、アンタもしつかりやんなさい。あたしとの特訓を急けの言い訳に使われちゃたまんないしね」

「うー！パートナーがせつかく来てあげたつていうのに、まったく酷いなーティアは。けど、成果はでてるみたいだね。なんだか前よりタフになつたような感じがするし、反応の速度だってどんどん上がつてるじゃん」

「え？ そ、そう？」

予想外のことを言われ、ティアナはきょとんとする。スバルのほうはティアナがそんな表情をすると思わなかつたのか、彼女と同じような顔をした。短期間で伸びればいいと思っていたが、目に見えて力がついているらしいことには驚くしかなかつた。

「ティア、気づいてなかつたの？ キャロとかエリオも騒いでたし、リイン曹長とか結構驚いてたよ？」

スバルの言葉がティアナへの心へと届いてくる。正直な話、まったく気が付いていなかつた。自分を高めることと、夢での出来事を整理することで精一杯だったからである。事実、考える時間はほと

んどそつちに費やしていた。

もちろん、ティアナが実力が伸びているといつに嬉しい気持ちになつたのは本当だ。才がないと言われ、そして自分でも認識していたものが少しずつ覆ろうとしていることに素直に喜ぶ。

しかし、ティアナは同時に何か訢然としないものを感じていた。

どんなに努力しようと、これまで一向に伸びる気配すらなかつたのだ。秀才と言われつゝも、それは人の何倍も時間をかけて自分の中にてきた結果でしかない。ティアナにとつてこのよつた伸びは異常だった。

理由は・・・思い当たらないわけではない。偶然だが、その時期も重なる。

だが、あれは

、

「・・・まさか、ね」

「ん? どうしたのティア?」

「なんでもない。さつ、休憩終わり。続き始めるわよ」

ティアナの掛け声にスバルがお一つ、と間延びした声を上げた。

馬鹿馬鹿しい。

あれは夢だ。いくら毎晩続く不思議な感じで、ちょっとリアルだからつて夢は夢なのだ。

肉体が疲れていないことを踏まえて、全てが現実とは違う。ありもしない理想や叶わない夢を追いかけても、その先にあるのは失望という名の現実だ。何度も何度も経験してきた。

きっと、訓練の成果が今になつて大きく出始めたのだろう。ティアナは勝手に理屈を固め、疑問を横に流した。

（・・・私にはやらなきやならないうことがあるんだから）

スバルを交えつつ、ティアナは訓練を再開した。

そこから飛ぶように消えた、黒い影に気づくことなく。

第十七話 夢での邂逅～秘められし力（後書き）

卒業論文というのは存外に強敵がありました。

自分の中では夏をかければ簡単に終わるぐらいの認識だったのですが、そうではありませんでした。ここに記しておきます、前々からの準備とか絶対おろそかにしちゃダメですよー！

・・・ちなみに私の妹は大学二年なんですが、もう卒論の準備を始めているそうです。そのぐらいからやつてなかつたの？とちょっと不思議そうに言われました。

分かってるんなら確認ぐらいは取つて欲しかった！出来のいい妹を持つと、兄は辛いです。誇らしいけど。

さて話は変わりますが、わたくし、今日久しぶりにアクセス解析を見て、ぶつたまげました。な、なんと、この小説のPVが40万越え、ユニークは5万に達していました！

・・・びっくりです。正直、かなりビビッて椅子から滑り落ちました（マジ）。

驚いたのは事実ですが、これからもこの小説を「」に頼んでくれると嬉しいです。

さて、とんでもない設定が出てきた今回ですが、これは作者が前々から考えていた最大のご都合主義の一つです。

彼女を部隊を纏める指揮官として育てているとなのはは言つていま

したが、彼女が最終戦で出したのはなのはの育成方針と何の関係もない空間の認識力からですし、自分自身の力がなくては凌げないときもあると考えていたので、なのはの砲撃力と比べたらひょっとかわいそだよなあ・・・という思いからこうなりました。

ランスターの弾丸は何でも撃ちぬける・・・なら遠慮なく撃ち抜いてもらおうじゃないか!といった感じです。

・・・なんだか力オスな展開になりそうな気がしますが、これからも頑張つて行くので応援よろしくお願ひ致します!

ではでは、また次回でお会いできることを願つて。

再見!
ツアイション

第十八話 後悔×喝入れ×秘奥の解放 ↗ 譲れぬもの（前書き）

八月も、もう終わりですね。なんだかあつという間だつた感じです。

大学生活最後の夏が終わる・・・悲しいいいいです。

いつまでもこんな風にのんびりと小説を書いていたい・・・ダメ人間ですね。

停滞することは後退である。と昔どこかの偉い人が言っていた気がするので、ともかく悔いがないようにしたいです！

それでは、第十八話です。どうぞー！

第十八話 後悔×喝入れ×秘奥の解放 ↗ 譲れぬもの

飛影は機動六課の廊下を歩いていた。夜も遅いのか、自分の足音が遠くまで何度も木靈しながら去っていく。そして突き当たりの部屋の扉を潜り、少し不機嫌そうに息を吐いた。

「……行つてきてやつたぜ」

「ふふ、相変わらずやね。モノを頼まれた人の態度やないなあ」

尊大な物言いに応えたのははやてだった。その他にも、蔵馬と桑原の二人とフェイトになのは、それにヴィータとシャーリーなどが部屋にいる。その机の上には資料がいくつかと何故かトランプが乗っていた。リンゴやシグナムは現在別の任務を遂行中なのだそうだ。

「コイツ……いい加減、本当に消してやるつか？」

「自然体で人を脅すのは止めてくれ、飛影。正当な経緯でこうなっているんだし、そもそもトランプ初心者とはいえそれを承知で挑んだゲームに負けたのは貴方だ。間違いなく自分の責任だろ？？」

「せうだぜ、まっさか飛影は言い訳なんかしねえよなあ？」

「くッ……当たり前だ！」

蔵馬と桑原に窘められ、というか半分挑発され、飛影は悔しそう

に息を吐いた。会話で察するとおり、実は先ほどのみんなでトライアップゲームをやっていたのだ。その罰ゲームとして、飛影は言われたことをやつてきたというのである。

「つ、次はきっと勝てるよ飛影ー！」

「こりん世話を焼くんじゃないー！」

「あ～ダメだよ、飛影くん。フロイトちやんに当たつや～」

なのはは「あうつ」と數みこんだフロイトの頭に手をやり、よしよしと撫で付けていた。涙田のフロイトに若干怯む飛影だが、キックと田を細め、剣呑な田付きでなのはを見据えた。

「当たつてなどいない！それに元はとこえば、貴様がオレに下らん命令したのが原因だらうがー！」

「あはは、そじこえばそじだつけ……で、どうだつた？ ティアナの様子、見てきてくれたんだよね？」

先ほどの明るむなつを潜め、存外に真剣な声でなのはが「四つ。その顔は深い憂慮と若干の怒りで構成されていた。

トライアップで一番だつたなのはが飛影に下した罰ゲーム、それは最近無理を通してているティアナの様子を見てくるといつものだつた。フロイトやなのはがじくら休めといつても聞かず、彼女はスバルやエリオーリと一緒に無茶な訓練を続いているのだ。

ヴィータ達、それに飛影らは彼女にあそこまでさせる原因が最愛の兄だつたティーダ・ランスターの死とそれにつわる悲劇、そし

て最近あつたアグスタでの一件が絡んでいることをなのはから告げられた。そして、この状況をどうするのか彼女たちは頭を悩ませていたのである。

トランプは、はやてが飛影を挑発した末に行われたものだつたが。

「ティアナちゃんの目標は兄の汚名を雪ぐこと。そしてその兄が目指していた執務官になることで、管理局に自分と亡き兄の力が本物だと示すこと、か。彼女にも背負つているものがあるようですがれど、実際どう思いますか、飛影？」

「フン、別にどうも思わん。それなりの疲労はあるだらうが、際立つた問題はなかつた。そもそもどのように動こうが何をしようが、端から俺の知つたことじやない。オレも一度ヤツを試したが、それでも折れるつもりはないようだからな。それほどまでに突き通したい事なら、奴の勝手にさせればいいだけだ」

「ツーなのはの話を聞いてなかつたのか！？オマーはティアナがどうなつてもいいってのかよ！？」

あまりの言い草にヴィータが声を荒げる。だがそれに対して何の感情も浮かべず、飛影は一睨みしてそれを黙らせながら口を開いた。

「言葉にせんと分からんか？例え潰れそうにならうが、死ぬ瀬戸際まで行こうが関係ない。奴が何かを目的にしてそうしている以上、それによって降りかかる災難も責任も、全てアイツ自身の問題だ。オレ達があれこれと関与することじやない。それ以前に、奴自身がそれを求めていらないんだからな」

「・・・確かにティアナは成長してきてるよ。今日も信じられない

ぐらいの動きを見せてた。でもつーこのままじゃティアナの為にならない・・・無茶は危ないって・・・分かつて欲しいの！」

なのはは声を大にして飛影に叫びる。そこには抑えきれない憐憫が浮かんでいた。なのはの目には、ティアナがかつての自分の投影のように見えるのかもしれない。それははやてやフュイト、そして飛影も分かつているはず。

しかし、期待を寄せた言葉に対し返ってきたのは、芯まで呆れた返つたような声だつた。

「やれやれ・・・高町、貴様はそれで本当に奴の教官をしているつもりか？ ヤツも相当なバカだが、貴様はそれ以上だな」

放たれた言葉に、なのはは絶句して言葉を飲み込む。飛影はそれを横目で見て一度目を瞑ると、ソファから腰を上げた。

「無茶だといふことなど奴はとつぐに気づいている。自分が今いる立場も分かっているはずだ。だからこそ、あれだけ特訓に励む。まあ、オレ達に言わせればあんなのは無茶でもなんでもないし、少々『力』に固執しすぎている面もあるがな。どちらにしろ、あんなつた奴は梃子でも動かんが」

飛影はふつと息を零しながら言つ。閑じられたその田蓋の裏側で、彼が見ているものを知る者は誰もいなかつた。

「教導は刷り込みではない。たかだか数週間程度の面倒を見たぐらいで、考えまで同調させられるなどと思うなよ。何とかしたいのなら、腹の探りあいのような上辺だけの言葉や、芝居にもならんふざけたやり取りをやめるんだ。他でもない、貴様自身のな」

切れ長の瞳が、矢のような鋭さを伴つてなのはを射抜いた。心の奥底を突き刺されたように感じ、なのはは一瞬息が出来なくなつて胸を押さえつける。だが、怒りにも似た感情が湧き上がつてくるといつに、何故か反論の言葉は出てこなかつた。

飛影にはいまだ表情がなく、そこには侮蔑も奢りもない。彼はそのまま、ただ単調に言葉を紡いでいった。

「自分本位な考え方は止める。ランスターのこともそうだ。横から勝手に決められてしまえば反発するのは当然、言葉もただの枷にしかならん。それはいずれ奴との間にひずみを生み、耐え切れなくなつて爆発する」

スタスタと黒い背中が遠ざかっていく。そして自動ドアの扉が開き半分外に出た状態で飛影はもつ一度振り返つた。

「自分の考えを強要するだけなら、どんなバ力にでも可能だ。高町、仮にも貴様が何かを教える立場だと言つのなら、少しは考えてからものを言え。ランスターの奴は、お前と『同じく』相当な頭でつかちだからな。今の貴様のやり方では、一片の言葉も奴には届かん」

飛影は今度こそ部屋を出て行く。いたたまれなくなつたのか、蔵馬と桑原もそれに続いた。部屋に沈黙が降りる。だが、それを破つたのは怨嗟のよつたな呟きだつた。

「・・・強い飛影くんには分からぬよ、何にも出来ない辛さなんて。弱い人の気持ちなんて。幸せがどれだけ脆いのかなんて・・・」

「なのはちゃん・・・」

「なのは・・・」

はやてとフロイトが膝の上で拳を握り締めたなのはを慮る。その気持ちは彼女を良く知る一人には痛いほどよくわかった。

今の彼女を放つておくなど、そんなことできるわけがない。元よりなのはに許容できるはずもなかつた。うわべだけなんて言わせない、彼女は必ず救い上げてみせる。もつ繰り返さないために。

「私はティアナを止めるよ・・・絶対に」

想いを胸に少女は立ち上がる。自分が受けたような傷跡がティアナに降りかかるのは、絶対に回避しなければならない。あんな辛いことが正しいことのはずがない。そう信じて。

- Side change Next day -

翌日、飛影はいつもより遅くに目を覚ました。窓から差し込む光を受けて目蓋を開く。

いつもは早朝練習や朝の日課である妖気のコントロールなどをするのだが、今日はそのどちらもせず彼の身体は布団のなかに埋もれたままだった。

何故かと問われれば理由は至極簡単だ。単に起きる気がしなかつただけ。スバルなどが起こしに来たが、悉く無視した。人の指図や

命令はよっぽどでなければ受けない、それが彼のスタンスである。

「今日は、確か模擬戦をやると言っていたな・・・」

ぽつりと言葉を零し、飛影は掛け布団を退けた。ベッドから起き上がり、何時ものノースリーブシャツとズボン、そして黒コートを身に纏う。最後に剣を腰に差すと扉を潜り、忌々しそうな顔をして通路の左側を見た。

「気配を断つて様子を窺つた。悪趣味な奴め」

その先、扉の真横の壁に背を預けていた蔵馬が苦笑して、そのまま腕組みほどくと姿勢を正す。先ほどのことにはちつとも悪びれる様子もなく、そのまま近寄ってきた。

「やれやれ、わざわざ呼びに来たといつのに随分な言い様ですね。模擬戦、始まつてしまつますよ?」

「すぐに勝負が決まるわけでもあるまい。それに、時間的にはちょいどこにはすだらつ」

「始まる前にいろいろと準備がありましたからね。それをボイコットした誰かさんは知らない」とドジョウけど

「フン」

蔵馬の厭味や小言を聞きながら、飛影は訓練場に辿り着く。そこでは既に模擬戦闘が始まっていた。あちこちから響く轟音や飛び交う魔力光がその激しさを物語つている。

その中ではスバルとティアナの一人が、なのはと戦っていた。飛び交う黄色の魔力弾を、同じく桃色の魔力弾が相殺し、あるいは牽制しながら弾いていく。絵に描いたような射撃戦と火花を散らすような格闘戦だ。

「あ、蔵馬に飛影。見にきたんだね」

「遅つせえぞ、オメーら」

フェイトとその横にいた桑原が一人を見つけて近寄ってくる。後ろにはヴィータとライトニングの一人もいた。挨拶もそこに集まつた全員が訓練場へと視線を移す。

何時もと変わらぬ風景と訓練フィールドシステム。しかし、戦うもの達の様子はいつもと少し違っていた。蔵馬が何かを考えるような仕草を続けながら、上空で繰り広げられている模擬戦に目をやる。

「ティアナちゃんの弾のキレはいつも増して凄いな・・・けど、何か迷つてる。いや、認識に感覚が付いていないのか・・・？」

下方ではティアナが飛行するなのはに向け、死角から陣形クロスシフトを取り得意の射撃で攻撃していた。一段と鋭くなつたその攻撃を、なのははそれを身体を僅かに反らしながら避けるが、その回避行動によつて制限された軌道上にウイングロードから疾走したスバルが突撃していく。

なのはの牽制弾をバリアで強引に受け流しつつ、スバルは力任せに拳を突き出しが、同じようにレイジングハートで構えを取つたなのはがそれを受け止め、逆に弾き飛ばした。

「あつ・・・」

「ちょっと強引なような・・・」

なんとかウイングロードに着地したスバルを見て、安心した息を吐くキヤロや見上げていたエリオが咳きを零す。一人の表情が優れないところからも、なんとなしには異変に気づいているようだ。

「オイオイ・・・何を焦つてんだ?」

「話にならんな。ティアナの腑抜けも相当だが、スバルに至つては考えなしに突つ込み過ぎてている。おそらく陽動か何かだろうが、あんな動きでは撃ち落してくれと言つていいようなものだ」

「ん・・・まあ、そうだな」

桑原の呆れ声に飛影の言葉が連ねられる。キツイ言い方だが的を射ていたのだろう、ヴィータも同じような表情をすると市街フィールドへ視線を戻した。

すると、なのはの額にレーザーポイントが照射される。その起點、遠くに立つビルの屋上でティアナが砲撃姿勢を取つていた。スバルは同調するようにカートリッジをロードし、またなのはに突っ込んでいく。フェイトが驚いたように背を伸ばした。

「砲撃・・・ティアナが・・・?」

「バカめ、アレは囮だ」

「化」.「」

「ええ。本人は……」

「あつちだぜ」

言葉と同時にティアナが幻影となつて消える。蔵馬と桑原が視線と言葉を向けた方向、スバルのパンチを受け止めているなのはの後ろから、ウイングロードを駆けてティアナが走ってきていた。

そのスピードは、以前までの彼女からは考えられないほど素早いものだった。なのはが意識を向けたときには、既に射程距離に入っている。

そしてそのままなのはの上を取るようにして、ダガー状の光を出したクロスミラージュで突貫していつた。ダガーでバリアを切り裂いて一撃で力タをつけるつもりらしい。

攻撃が来ることを分かつてはいるはずだったが、なのはは動かない。そしてその刃が彼女に届こうとしたとき、飛影は吹きすさぶ風が不愉快な濁りを帯びたのを感じた。

・・・チツ、面倒なことになつたな

— ● ● ああ「

飛影の呟きに藏馬が間を置かず応える。その瞬間、時が遅くなつたよつに色あせていく、場が呼応するよつと音を無くした。

「・・・・レイジングハート、モードリリース」

なのはの言葉と爆発音がシンクロする。予想外の爆発力で突風が巻き起こり、土煙が辺りを支配する。そしてようやく光が差し込んだとき、空気を震わせるような言葉が静かに響いた。

「おかしいな・・・一人ともどうしちゃったのかな・・・頑張つてるのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

煙の晴れた先には一人ぶんの攻撃を受け止めるなのはの姿があった。だがレイジングハートをセットアップ前に戻つており、防いでいるのもシールドではなく、自らの手によつてだ。

左手でスバルのマッハキャリバーを。右手でティアナのクロスミラージュのダガーを掴みながら、なのはは俯いていた顔を上げた。ダガーを握つた右手は血を滴らせ、彼女の純白のバリアジャケットを濡らしていく。

それを見て二人から血の気が引いていった。

「練習のときだけ言うこと聞いてる振りで、本番はこんな無茶するんなら・・・練習の意味、ないじゃない・・・」

「う、あ、あの・・・」

なのはの空ろな目が一人を捉える。いや、空ろなのはうわべだけだ。感情がないのではなく、感情を浮かべることすら忘れるような激情が彼女から一切の色を消し去つていた。

その身体からほ少女らしからぬ殺意すら浮かび出でる。

「ちゃんとさ・・・練習どおりやるわよ。ねえ、私の言つてること、私の訓練・・・そんなに間違つてゐる・・・？」

『Blade-release』

殺氣立つたなのはの言葉にティアナは怯んだ。その瞬間主の意志を汲み取つたか、クロスマリージュがダガーを形成していいた魔力を破棄し、彼女の動きをアシストする。同調するようにティアナも後ろに飛び、展開されたままのウイングロードに着地した。

「あたしはーもう誰も傷つけたくないからー失くしたくないからつーーだから・・・強くなりたいんですー誰にも負けないぐらいの強さが・・・守られてるだけじゃない、皆を守ることができただけの力が・・・私には必要なんですッー！」

その頬を涙で濡らしながらティアナは叫んだ。長年抱えていたものが溢れてしまつたのだろう、彼女らしからぬ感情の高ぶりだった。なのはに向け、ガシャガシャとマガジンの切れた銃のトリガーカーをかまわず引き続ける。なのははそれを表情も変えずに見上げたまま、指先に魔法陣を展開した。

「少し・・・頭冷やそつか。クロスファイア・・・ショート」

「うああああー！ファンтомブレ・・・」

なのはの放つた狙撃魔法がティアナに直撃する。威力は抑えられていたが訓練としては最高レベルであり、その爆発によつて粉塵が

舞い上がった。

海から吹く風によつて、ウイングロードを覆つていた煙が晴れていく。そのなかでティアナはかろうじて立つてはいる、がその身体は所々傷つき、クロスミラージュも足元に落ちていた。

「ティア……ツ、バインド…? なのはさん…」

近寄るうとしたスバルは突如かけられたバインドに動搖し、目の前のはなはを見た。表情を僅かも変えず、声色もそのままになのはは指を掲げた。

「じつとして。よく見てなさい…・・・クロスファイア…・・・

暴れるスバルを押さえつけ、なのはは魔力弾を形成させていく。それは先ほどのような拡散弾ではなく、威力の範囲を絞つた砲撃型である。狙いは寸分違わずにティアナを捉えていた。

「おー、ありやいぐらなんでもやりますがだ! 止めんぞ戻馬!..」

「わかった!」

なのはの所業に怒りと焦りを滲ませ、各々の武器を構えた。二人はそのまま彼女達の前に飛び出そうとする。

だが、そこに思わず横槍が入った。

「待て」

「飛影！？」

「つー？飛影テメー！何を待つてつてんだ、ボケッとしてたらティアナちゃんがやられつちまうだろうがよ！」

桑原が鬼の形相で飛影に詰め寄つた。蔵馬の方はそこまではしないが、硬い表情を崩さず説明を求める眼差しを放つてくる。

一人とも『あの時』のことを思い出して『からだりづか、纏う空気には鬼気迫るものがあった。

それが読み取れないほど彼は鈍くない。何より付き合ひの長い間柄だ、言いたいことは全て分かつていた。

だが、それでも飛影は引いどはしない。フエイトやキャロたちが怯えるほどの一人の気迫にも全く動じず、飛影は淡々と答えた。

「あいつからは戦う意志と力が消えていない。今お前らが手を出るのは筋違いだ。それに・・・」

視線を流して対峙する一人を眺める。そして、ティアナを見据えて意味ありげな光を宿しながら、興味深そうに口の端を吊り上げた。

「奴の纏つていた気が変わった。まだ何かするつもつらじいぞ？」

私は暗い中を漂っていた。

なのはさんに勝つため、彼女たちを見返すため、自分に力があるということを証明するため、そして大切な人たちをこれ以上傷つけさせないために頑張ってきたことが、みんな終わってしまった。

(私、間違つてたのかな・・・)

兄の名譽を取り戻すためにスバルたちと共にやつてきた全てを否定されたようで、私は次第に考える気力も失っていく。体もまったく動かなかつた。

放つておいて。私はもう傷つけたくない、傷つけられるのを見たくないの。だからもう、私を傷つけないでよ・・・。

もうこのままこの海に解けてしまえば、と。そんなことが頭に浮かんだ時だった。

『このアホが・・・いつまで腐つてゐつもりだい！ぐじぐじ言うのも、ガキみたいに甘つたれるのも、どっちもくたばつてからにしな！』

沈みかけるようにしていった私の意識が、引っぱたかれる様な衝撃とともにたたき起こされた。それを為したのは突如として響き渡つた、澄んだ鈴のような女性の声。驚いて身体を起こし声が聞こえたほうを振り向くと、そこには一人の少女がいた。

その背はかなり低く、私の首辺りまでしかない。着込んでいる白い胴着には赤いチャイナ服状の垂れがついている。見た目からして自分より数歳ほど年上に見えた。

だがそんな風体だといつにもかかわらず、彼女から発される気迫は尋常ではなかつた。まるで何十も歳を重ねたような威圧感に気圧され、竦みそうになる体を必死に押しとどめながら、私は漸く声を発する。

「だ、誰……？」

『人のことを気にしてゐる場合か！まつたく世話が焼ける、お前は自分の言いたいことを全部言つただろう！？だつたらやることは一つだ。相手が聞いてくれないつてんなら、その横つ面を張り飛ばして耳元で聞かせてやるんだよ！』

攻撃的、といふかストレートで暴力万歳な物言いに私は絶句する。だが私自身動搖していたためか、頭に浮かんだのは言い訳じみた言葉ばかりだつた。

「で、でも、私の魔力じや、なのはさんには……」

『ボケ！魔法の話なぞ誰がした。何のためにアイツが夢で散々教えたと思っておるんだ！こんな状況になつてまで寝言を言ひつゝか！少しばし眞面目にやれ！』

彼女の声にはつとまる。その言葉にこじこじ数日の『記憶』が脳裏をよぎつた。リアルすぎるあの夢の連鎖が頭の中を駆け抜けていく。

「夢・・・？じゃあ、あの夢はやつぱり・・・」

『ボサツとしてる暇があつたらさつさと意識を集中させな！お前が夢でいつも使つていていた魔力とは違うエネルギー、アイツが教えた『靈波動』が感じ取れるハズだ。後は流れにお前の意志を乗せ、力を発するに相応しい形に変えるんだ！強い思いが肉体を押し、限界を超えた力を制する鍵となる！』

消えかけていた闘志が蘇る。気づけば私は拳を握り、動かないと思つていたその足で立ち上がつていた。彼女の言葉を繰り返す。

「思いを、力に・・・？」

『そうだ！その身にかかっていた靈氣の封印は解いてやつた。あとはお前次第だ。力に踊らされず、力を過信せず、その身に流れるモノを心で念じて形にしろ！集中力だ！』

それだけ言うと、私の身体からガラスが碎けたような音が聞こえた。同時にあの懐かしく、初めての力が奥底から湧き上がつた。

同時に彼女の姿が靄に包まれたように輪郭を失つていく。そして、消えて行く彼女に導かれるようにして、私は現実を取り戻した。

「シユート」

「ティアアアアアアア

「ツー！」

スバルの絶叫で私の意識は現実へと完全に引き戻された。涙目で

こちらを見据える親友。いまだ体感時間はスローで流れている。

彼女には悪いことをしてしまった。今度は絶対侘びを入れなければなるまい。と、そこまで考えて私は彼女に視線を戻した。

彼女と私を結ぶ線を沿うようにして、桃色の魔力弾が自分へと迫ってくるのが見えた。その威力は先ほど拡散型を複数受けている自分が一番良く知っている。しかもアレは砲撃系だ。となれば、威力はさらに上であろう。

だが、心には不思議と恐れはなかつた。寧ろ忘れていた何かを取り戻したかのように、気持ちが高揚しているようにも感じる。

力の差があるのは歴然たる事実。けれど立ち止まろうとは思わない。新しい力、いや奥底で眠っていた力が嬉々とするように躍動し、私の身体を満たしていた。後はそれを引き出すのみ。

スッと、自然に右腕が上がつた。迷いは消え、身体に力が戻つていぐ。いや、それは前以上の力だつた。

『いつも』と同じように右手を銃身のように突き出し、人差し指を伸ばす。そして心に『慣れ親しんだ』感覚が蘇り、青色の奔流が解き放たれ、指先に集まつていった。

迫り来る桃色の弾が、青い光を通して白く輝いて見える。ティアナはそれを見据えながら、トリガーを構えた。

私の思い・・・行きますよ、なのはさん！

爆発する瞬間、頭の中にイメージが滑り込んでくる。そしてそのイメージをトレースしながら、私は浮かんできたその名前と共に心にかかる引鉄を引いた。

「貫いてツ・・・・靈丸　ツ！－！」

- Side out -

「貫いてツ・・・・靈丸　ツ！－！」

「つ－？」

ティアナが叫びをあげると同時に、その指先に青い光が一瞬にして宿り、爆発音と共に撃ち出された。デバイスも用いず、魔法陣も出ないその技にはが初めて顔色を変え、大きく目を見開く。

そして弾丸のような軌跡を描きながら光は空を駆け、そのまま桃色の魔力弾と正面からぶつかった。

二人のちょうど中間あたりで二つの弾丸が衝突した。ぶつかり合

つた弾は押し合いをするように力を迸らせ、火花がそこ彼処に飛び散っていく。

「「「うわあっ！？」」

純粹な力の闘ぎ合いに、キャロとエリオが悲鳴を上げた。力と力、小細工も何もない真っ向からのぶつかり合いだ。

その威力は互角に見えた。だが、永劫かと思われたその均衡に唐突に終わりがくる。刹那の輝きを切り裂き、力の削りあいを押し切ったライトブルーの光が魔力の弾丸を貫いていた。

「つー？ハツ！？」

今度はなのはへと、光が間近に迫る。硬直で避けられないことを悟ったなのはは防御魔法陣を瞬時に展開させ、飛んできた弾丸を間一髪で受け止めた。

蒼と薄紅色が矛と盾に立場を変え、再び相まみえる。青い光弾は尚も彼女へと迫ろうとするも、先ほどの押し合いで力を殺がれていた為か僅かに弾道を変えられ、なのはの後方へと飛んでいった。そのまま背後のビルへとぶつかり、轟音を上げる。その爆発はビルの屋上に近い角を削り、破壊していた。

なのはがその様子を見て、視線を戻した。そこには、肩で息をしながらもこちらをじつと見つめるティアナがいる。そしてその姿を認めた時、彼女の前に何者かが降り立つた。

黒いコート、炎のような黒髪、そして自信に満ちたその双眸。なのはの憧れにして、最も彼女に影響力を持つ者。

「飛影、くん・・・」

炎殺の邪眼師がそこにいた。

第十八話 後悔×喝入れ×秘奥の解放 ↗ 譲れぬもの（後書き）

第十八話でした。

結構詰め込んだ感がある今回ですが、いかがでしたでしょうか。不自然な点などがないことを祈るばかりであります。

ついにStriker's編で鬼門といえるあのシーンが近づいてきました。最後は少し衝撃的な展開でしたが、ティアナの性格や、周りの状況を鑑みて何度も構想を練り直しながら書き上げ、このような結果となりました。

はてさて、この後どうなるのか、それはもう少しお待ちくださいませ。

いつもより短いですが、今回はこの辺りで。またご拝読いただければ幸いります。

それでは、次回『激突』進む心と臆する心』をどうぞよろしくお願い致します！

再見！
ツアイツエン

第十九話 激突～進む心と臆する心（前書き）

ようやく完成いたしました、第十九話！

いや、ホント間に合つてよかつた！なかなか展開とか台詞とか、納得がいかず書き直していたら、いつの間にか更新ペースの期限に・・・
・時間が進むのは早いですね。

さて、前回に続いてのバトルのお話。展開は一体どうなるのか！？

それでは第十九話、どうぞご覧あれ！！

第十九話 激突～進む心と臆する心

「ティ、ティアナの奴、一体何しやがったんだ……！」

ヴィータが目を大きく開きながら声を震わせた。キャロやエリオ、そして後ろに控えていたフェイトすら声も出せずには達を見つめている。スバルも親友を呆然と眺めていた。

スバルとティアナの無茶な戦闘行動、そしてそれに対し怒ったのは。一人とはいまだ未熟であるスバル達にどうにかされるはずもなく、この戦いはなのはの魔力弾で決着がつくはずだった。

だが、ティアナが予期せぬ力を見せたのだ。彼女が指を向けて構えをとつた瞬間、見たこともない光がその指先より撃ち出され、訓練用とはいえ、なのはの魔力弾を真正面から撃ち抜いたのである。

だが、混乱を導く一番の要因はそれではない。

「ま、魔法じゃ、ない……？」

エリオが食い入るように目を凝らした。視線の先には肩で息をするティアナの姿がある。

彼女の足元には、煤汚れたクロスミラージュがいまだ転がっていた。そのことがヴィータ達をさらに混乱させる。

魔法とは科学と理論に基づくものだ。いくら根幹は術者本人のものとはいえ、半分はデバイスが支えている。確かにのはやフェイトのような卓越した魔導師であれば、デバイスが手元になかったり、リリース状態であっても中程度までの魔法なら使うことができよう。

だが、ティアナはまだ駆け出しのBランク魔導師。しかも魔導師の命ともいえるデバイスから身を離していたとあっては、大方をデバイスに頼っている彼女では弾丸系の魔法の使用はあらか、発動すら満足にできないはずだ。ベルカ式、ミッド式問わず出現するはずの魔法陣が現れなかつたこともそれを裏付けている。

そして、驚愕は別陣営の人間にも飛び火していた。彼女たちが受けた衝撃とは全く違つた形で。

「あ、ありや浦飯の靈丸じゃねえか！ 何で、ティアナちゃんがあの技を使えんだよ！？」

「クツクツク・・・面白いことになつてきたな。まさかランスターのやつがアレを撃つとは。だが、靈氣を知らないはずの奴が靈丸を撃てるわけがない。となれば、可能性は一つだけだ。幽助め・・・奴にしては随分とおとなしいと思っていたが、既にこつちに入り込んでいたか」

桑原がティアナの放つた光を見て驚きの声を上げた。それは藏馬も同じようで遠くに立つ彼女をじっと見つめている。飛影が意外だというふうに肩を竦め、その瞳に高揚を宿させていた。

「「「れいがん？」」

「それに幽助つて、一体誰なの？」

飛影の咳きに反応したキャロ達一人とヴィータが尋ね返す。フュイトも、いつか聞いたような名前を飛影に問いかけていた。

尋ねられた飛影はフツと笑いを堪えるような表情をする。そして僅かに口元を動かすと、ティアナ曰掛けて跳んでいった。藏馬と桑原もそれに続く。

ティアナの正面を塞ぐようにウイングロードに着地した彼らを、二人が呆然として見つめた。予期せぬ割り込みに動搖しているようだ。そしてフュイト達は、飛影の口から虚空へと投げ出された、先の言葉を反芻していた。

その横顔が嬉しそうだったのは氣のせいではないだらう。なにせ彼の声は、

『世界一の単細胞、そして宇宙一の戦闘狂だ』バトルマニア

それだけの強い感情を内包したものだつたのだから。

人が着地したにしては軽ずさる音と共に、ティアナの皿の前に黒い「コード」がはためいた。コード裏の深紅が外の黒とコントラストを描き、霞みそつた視界を塞ぐ。

「下がれ、ランスター」

「飛影、さん・・・？」

田の前に現れた黒い背中に、ティアナは呆然とその名を呼んだ。硬い表情のはと彼女の間を遮り、強い闘争心がいまだ疼く訓練場に飛影が音もなく降り立つ。

だが、今回はそれだけでは終わらなかつた。

「和真くん・・・それに藏馬さんも・・」

飛影より一步下がり、ティアナの脇を固めるようにして繩原と藏馬が佇んでいた。その顔色にいつものようなおけやうけた雰囲気はなく、真剣そのものといった出で立ちだ。

その筆頭に立つていた飛影が、流れるような動作で振り向く。相変わらずの鋭い視線、しかしその目には抜き身の刀の「」とく、背筋が凍るようなモノが見え隠れしていた。

彼はそのまま、なはとティアナを交互に見る。そしてフンと鼻を鳴らしてティアナを見下すと、一つ溜息を吐いてから口を開いた。

「貴様にはすぐにでも聞かたいことが山ほどある。だが、のんびり聞いてなどはいられんよつだ。なによりこの戦いはあまりにも見る

に耐えん。貸しを一つやる、代わりにこの場はオレが引き継いでやるつ。こんな見え透いた茶番は、さつと終わせるに限るからな」

「で、でも・・・つ・・・！」

思わず反論しようとしたティアナは、喉元まで出かけた言葉を飲み込んだ。飛影の目が一段と鋭利な光を帯びたからである。

「足腰も立たんようなザマで強がるのは止める。土壇場でアレを発動できたのは大したものだが、今の貴様にはもう靈丸を撃つだけの気力は残つていまい。仮にそうでなかつたとしても、その靈氣も完全には馴染んでいよいよつだからな。そのまま無理を通せば、腕が使い物にならなくなるぞ」

「つ・・・わかり、ました・・・」

そこで初めて、ティアナは自分がへたり込んでいたことに気づいた。また、自分の中にある力に身体追いついていないことも薄々分かっていたため、彼女は無言で引いた。

やるせない感情を一瞬だけ表に出すが、彼女は何かを決意したような表情をしたあと、いつものクール然とした顔立ちの中に感情を鎮める。そして、「掴まれ」と手を出してきた桑原に肩を借り、ゆっくりと立ち上がった。

「蔵馬、桑原。ついでにスバルも運んでおけ」

「ああ・・・飛影、君は？」

「フン、わかりきったことを聞くくな。頭でつかちな木偶の坊に、少

々灸を据えてやるだけだ」

飛影が視線を流す。その先にはいつもの温和さからは想像も出来ないほど・・・相手を底から凍えさせるような目をしたのはの姿があつた。藏馬たちが下がるのを感じ取ると、飛影は見下ろす位置にいる彼女へ目を向ける。

瞳から溢れるものは暗く重く、そして鋭い光。なのはの表情には、いまだかつてないほどの強い怒りが浮かんでいた。

「何で邪魔するの、飛影くん・・・？」

「愚問だな、単に貴様のやつていることが気に食わんだけだ。貴様は奴と本当の意味で分かり合いつもりなどないのだろう？奴のためを思つての行動などと言いながら、踏み入られたくないがために自分の保身に走つている。そのまま奴が腐つていく可能性を捨て置いてな・・・フン、貴様も力だけを求める者だったか・・・」

飛影の目が細くなる。そこには、珍しく純粹な怒りが浮かんでいた。力を売つて歩けるほど持つている彼が、まるでそれを否定しているようで、なのははわずかに気圧される。

「・・・これは私の教導だよ・・・飛影くんは手を出さないでくれるかな？」

「教導・・・こんなものが教導だと？聞いて呆れるな。ただ倒すだけなど、どんな下等な生き物にでもできる。それともお前は、こいつらを突撃するだけの捨て石にするつもりか？」

飛影がFW陣一人一人に目をやりながら、なのはの疑問を切つて

捨てた。彼女の雰囲気がより剣呑を増す。それは既に威圧感を超えて、敵意にすら変わりつつあった。

「分からぬ奴には腕づくで分からせる力の論理、大いに結構だ。だが、貴様は分かつて欲しいなどとほざいておきながら、奴の言葉を聞こうとしなかつた。言葉を求めた奴の土俵を無視して、自分の意思とプライドを優先した。他人が傷つくるは嫌う反面、自分に背く者は言葉すら交えずに淘汰するか。どこまでも身勝手だな。教えられた通りに動く『駒』が欲しいなら、早々に転職を勧めるぞ？」

「違うつー旨は駒なんかじや・・・！」

『駒』という単語に反応したのか、なのはは声を荒げる。離れたところで一人を見守っていたフェイトがビクッと肩を震わせ、その瞳が悲しみと動搖で揺れ動いた。

「何も違わない。今の貴様の行動は、うまくいかないからと喚き散らす、癪癱持ちなガキのハつ当たりだ。傍から見ていても、見苦しいことこの上ない。ストレス発散なら他所でやれ。当たられた方はたまつたものではないからな」

視線を流す。その先にいたティアナが微かに震えた。

「確かにランスターはとんだ間抜けだろ。そもそも戦いを甘く見すぎている。そのことに関してはオレも同様の認識だ。だが、バカさ加減では貴様も同じこと、いや自覚しているものから目を逸らしている時点で、奴よりも性質が悪いな。師弟がそろつて道化とは、ある意味貴様ららしげ」

飛影は続ける。その声色には、どうしようもない呆れと落胆が入

り混じりはじめていた。

「はつきり言つてやろうか。貴様はただ押し付けていのだけだ。他人の心情を無視して貴様が信じる正しさ、貴様に都合がいい仲間、貴様が思う理想をな。勝手に干渉してくるだけでは飽き足らず、自らの方針を言うだけ言つて、善人面で仲間気取り。そのくせ自分のことは棚に上げて、他人には上から目線でスカした態度ばかり見せやがる。いい加減反吐が出るぜ」

「つ・・飛影くんに、何が分かるの？」

「フン、その頭の中のほつがよっぽど不可解だが。貴様のことだ、自分で氣づかねば意味がないとでも思つてゐるんだろうが、オレにはランスターから逃げてゐるようにならへんぞ。信じるなどと聞こえのいいことばかり抜かして丸投げするのは勝手だが、誰しもが『貴様のように』悪運が強いとは限らん。奴が理解するまで、状況が待つ保証などどこにもない」

「 ッ！」

なのはを取り巻く空気が変わつた。自分の深くに切り込まれたよう胸を押さえ、睨み据えるその瞳に危険な光が宿る。飛影はそれを見て取ると、彼女に向けて挑発するような笑みを浮かべた。

「どんな言葉で飾ろうが戦場にあるのは命のやり取りだ。『知らない』ということは、それだけで死に繋がる可能性を持つてゐる。そして、死に逝くものに『次』は無い。気づいたときには既に手遅れ、などということになつていなければ良いがな。ククク・・・」

「・・・つて・・・」

低く、それでいて重い声が響いた。その声は届かなかつたはずだが、キャロが自らの肩を抱くようにして知らないうちに後ずさる。フリードも変化した空気を敏感に感じ取つたのか、エリオの肩に乗つたまま低い唸り声を上げていた。

「フ・・・そら、図星を突かれて本音が出てきたな。フン、そういえばこれは侮辱に当たるのか？ よかつたな、これで思う存分オレを叩きのめす口実が出来たようだ」

「黙つてッ！ ……飛影くんにも、ちょっと頭冷やしてもらひー。」

叫びと共に彼女の手が光り輝いた。レイジングハートが再セットアップされ、凄まじい魔力の風が辺りに吹き付ける。

「やれやれ・・・」

飛影はあからさまに肩を竦め、呆れたように目を閉じる。そしてもう一度開かれたとき、その目からは肉食獣を思わせる鋭い光が放たれていた。

「湯が沸いたような脳みそで何を言つかと思えば・・・笑わせてくれる。だが、最近の貴様は日に余るものがあつた。完膚なきまでに叩き潰すには絶好の機会だ」

飛影が溜めをつくるように腰を落とし、右手を剣の柄に添える。同じく、なのは手に強く握られた杖が天に掲げられた。

「レイジングハート、アクセルシューター・・・」

構えを取った飛影を迎え撃つよつこ、俯いたなのはの足元に魔法陣が展開された。レイジングハートが主の言葉を受け取り、周囲に桃色の光が出現した。

浮遊するその光は徐徐に数を増し、彼女の周りを守護するようにして取り囲む。そしてその数が十の一倍ほどに達したとき、なのはは杖を振り下ろした。

「 シュート 」

彼女の声で、数多の光のうちの一つが意志を持ったかのように飛影に飛来する。それを跳んで避けた飛影だが、光は柔軟に軌道を変え、さらになのはの周りに浮遊していた魔力弾までが一斉に踊りかかってきた。

宙に身体を躍らせたまま、軸を捻った飛影の横を光が通り過ぎた。空中を蹴り、反動を利用して、身を翻しながら次々と迫り来る弾丸をかわしていく。なのはの魔力弾は紙一重というところで飛影を捉えられず、すべてが建物や大地にぶつかった。

そして最後の一発がかわした軌道上にあつたビルに衝突し、破碎音とともに消える。それを確認した飛影はビルの上に着地し、なのはを真正面から見据えた。

顔には相変わらず自信に満ちた笑みが浮かんでいる。彼女との戦いを楽しんでいるようだった。

「 なるほどな・・・駆け出しが比較するのは間違いか。あれだけの

数と威力の弾を同時に軌道制御するなど、並の人間では早々には出来まい。流石は魔法の戦技教導官……と、言いたいところだが」

賞賛の言葉を切り、飛影がニヤリと笑みを浮かべる。そして重心をずらし、真横に身体を流した。

「不意打ちとは……随分と必死だな？」

刹那、彼が四半秒前までいた場所の足元から、桃色の弾丸が飛び出した。それに続くようにして出てきた光に、彼はビルの屋上から床を蹴つて離脱する。

一瞬前まで彼がいた場所が崩壊し、光がいくつもその姿を現した。建物にぶつけて破壊したと見せかけ、そのうちのいくつかを滯空させたまま密かに忍ばせていたのである。

「アクセルシューター……シュート！」

なのはが再び同呪文を詠唱する。その周囲に先ほどより多い魔力弾が浮かび上がり、その掛け声に従つた凄まじい速度で飛影に迫ってきた。後ろからも、先ほど残つていた弾が逃げ道を塞ぐように追いすがつてくる。

「チツ」

空中に躍り出た飛影を囲むように、光はすべて彼を目標にして一直線に迫り来る。物理的に回避不可能なことを悟つた飛影が腰元の刀に手をかけた時、集束していつた魔力弾が一点に集まり大爆発を起こした。

ビルの鉄柵が衝撃で吹き飛ばされる。衝撃波はそのまま周囲に伝わり、爆炎を伴った土煙を上げた。それを確認したのは、カーリツジを一発ロードする。

濛々と立ち上る煙を見下ろし、眼下の様子を探る。しかし、上空から覗き込もうとした身体を寸前で引き、レイジングハートを正面に構えた。

次の瞬間、そのまま体ごと持つていかれそつな強い衝撃が彼女を襲う。腕が電撃を受けたように痺れた。

「フッ・・・・」

至近から視線が邂逅する。爆炎を隠れ蓑にした飛影が真正面から斬り込んで来たのだ。あまりの速度と突撃の衝撃に踏ん張りが利かず、なのはは後方に吹き飛ばされる。

しかし、彼女を引き離すように飛影が剣を振りぬいた瞬間、その周囲から光の筋が迸つた。鎌のような強靭さを持つ何かが、身体中に巻きつく感触が走る。

「ツー?」これは・・・・

「ファーフバインド。高い拘束力と隠密性を持つバインド系魔法だよ」

抑揚を感じさせない声で告げ、なのははレイジングハートの先を飛影に向ける。表情は変わらないが、雰囲気には愉悦が満ちていた。

飛影は短い息を吐く。彼女は今までの経験と観察から行動を推測し、飛影が隙に乘じて攻撃してくるであろうことを読んでいたのだ。

手加減しているとはいっても、戦いというものを知っている彼がこの程度で終わるべくもなく、煙を囮にしつつ接近戦を仕掛けてくることまで計算して。

だからこそ、彼女は得意とするフィールド魔法の一つも張らず、カートリッジまで使用してこの魔法に全力を費やしていた。

硬直時を完全に取られた上、ブーストされた魔力によって強化された、破格の拘束力と力の放出を阻害するバインドの十以上の重ねがけ。流石の飛影といえど、妖力を抑えている身では簡単には破れなかつた。

抑えを解くか今の全力で力任せに破れば、彼なら容易に脱出できるだろう。だが、これだけの拘束を上回る力を出せば、外れた瞬間に噴出する妖気まで完全に制御するのは不可能だ。下手をすれば地形が変わるどころか、ここいら一帯が吹き飛んでしまう。

飛影は眉間に皺を寄せ、唇を噛んだ。

「油断したね飛影くん。それはカートリッジで魔力を限界までつき込んだから、そう簡単には外れない。これで終わりだよ」

マガジンから装填された三つの薬莢を吐き出すと、変形機構が作動してその形が変わった。

『Load Cartridge Divine Buste』

レイジングハートが自動詠唱を起動し、魔力充填を開始する。なのはが最も力を發揮する、敵を寄せ付けないアウトレンジからの攻

撃手段。魔力の風が彼女を中心にして渦巻き、エネルギーの高まりを辺りに顯示した。

「ディバイン . . .」

魔法陣から溢れる光が輝きを増し、杖の先に魔力が集まっていく。光は周りから音を奪い、一点に向けて収束する。その先には幾重にも連なったバインドにより、四肢の動きを完全に封じられたままの飛影がいた。

「ぐつ・・・こんなも」

拳に妖氣を滾らせ、炎を出そつと彼が呻いた瞬間、

「バスター」

感情の宿らない声を引き鉄にして、神の名を持つ破壊光が放出され、その炎ごと無防備な飛影を飲み込んだ。直撃した魔法は爆発へと変わり、辺りへと散乱する。

「「「うわああつー?」」」

先ほどとは比べ物にならないほどの魔力行使に、爆風が熱を以つて辺りを吹き荒れた。エリオたちがいる所にまでそれは届き、突風が砂埃を巻き上げる。

そして風が收まり、フェイト達が顔を上げたとき、煙と若干の赤を纏つた飛影が空中に存在していた。魔力砲撃をもろに受けた飛影は、いまだ煙に包まれたままゆっくりと下降し、そのままビルの屋上へと打ち付けられる。そして、燐つた煙が立ち上る中に消えた。

「嘘……」

「お兄ちゃんが……負けた……？」

「そんな……」

フロイトとキャロ、それにエリオは目の前のことが信じられないかのようご、彼が消えた方向を見つめた。ヴィータも、なのはと上がった煙を交互に見比べている。その横にいるスバル、ティアナも同様に目を見開いていた。

なのはは後ろのビルを一瞥すると、背を向ける。

「少しキツイかもだけど、非殺傷だから大丈夫だよ。そこで反省しててね、飛影くん」

なのはが飛影に一言残し、その視線がすっと先へ移る。その目は膝をつくスバルとティアナを寸分違わずに射抜いていた。その横にいる蔵馬たちにも目をやるが、飛影がやられたというのに表情一つ変えない。彼らから視線を戻し、再び一人を捉えた。

そして、なのはは固まつたままのスバル達へと一歩を踏み出そうとして、

いい腕だ・・・

「「「「「！」？」」「」「」「」

反響するような低く通つた声に、心臓を驚くみされたように動きを止められた。悲壮感すら漂わせていたエリオ達も、突如響いた声に息を呑んでいる。硬直した彼女の背後、煙で満ちていたビルの屋上から巨大な火柱が上がつた。

潰すには惜しいぐらいだ・・・

火炎の中から影が浮かび上がつてくる。それは炎のよつた髪を揺らめかせ、口元を愉悦に吊り上げた、

「飛影つー！」

フエイトが安堵と不安とを複合させたような、どうしていいかわからない表情をしながら声を上げる。その先にいたのは、炎に包まれながらもいまだ健在の飛影だった。

スカーフは既になく、彼のトレーデマークとも言える黒いコートも大部分が炎の苗床となつており、その原型を留めてはいない。

だが、遠巻きに見ていたヴィータ達はその表情を驚愕に染め、視線を動かすことができずにいた。スバルが呆然と言葉を零す。

「む、無傷・・・!？」

「う、嘘だろ・・・なのはのマジ砲撃を、フィールドもバリアジャケットもない生身で・・・それもまともに喰らつたんだぞ!?」

震えるヴィータの声が、目の前に映る全てを意味していた。あれほどの威力を持つた魔力砲撃を、しかもまったく防御が取れないま直撃させられたのにも関わらず、彼の身体には掠り傷一つ付いていなかつたのである。

なのはがゆっくりと振り向き、その顔を強張らせた。

「あれに耐えたっていつの・・・飛影くん・・・!」

「ああ。だが正直驚いたぜ。まさかオレが攻撃してくるタイミングを読み、罠を張っていたとはな。どうやらオレも、お前への認識を改めなければならんらしい。先ほどのは全力の五分といつたところだろう。威力から換算して、本気で攻撃すればB級クラスに達するかもしけん。今のですら、下級の妖怪なら一撃で終わっていた。だが・・・」

オレを相手にしたのが運の刃だったな

言葉が波となり、なほの冷静さを攫つた。恐怖が理性を侵食して、嫌な汗を噴出させる。それに同調するようにして、彼の額を覆つていた布が炎の中へと消えていく。

様々な想いが交錯する中、真なる意味での戦いが今、はじまつとしていた。

第十九話 激突～進む心と臆する心（後書き）

さて、十九話。魔王編の中盤でのお話でした。

いいところで終わってしまったア…と思う方が多いかもしませんが、そこはご了承頂きたいです。

本音を言つと、作者はこういう次回が楽しみ…といつ終わり方を一度作つてみたかったんですよ。

なんというんですか…こう、ドラゴンボールの次回予告で悟空が超サイヤ人になることを知ったときみたいな…まあ、そこまでのゾクゾク感は到底出せませんが、そんな『焦らし』的な展開にしてみました。

幽白を少しでも知つている方なら、この展開と飛影の台詞にビビッと来たかもしれません。しかし、幽白をそれほど知らない方でも分かるようにしたつもりでしたが、いかがでしたか？

飛影の台詞が上手くできたか心配ですが、少しでもカッコよく映るように努力しました。若干喋りすぎな気がしないでもないですが、そこは作者の技量の甘さです。これから精進していくつもりなので、どうかお手にぼしを。

次回、なのはとのバトルはどうなるのか…飛影が彼女に伝えたかったこととは一体何なのか、どうじ期待！…しても大丈夫だと思います、はい。

それでは長々と失礼致しました。また次回にてお会いしましょう！

再見
ツア
イイツ
エン
!

第一十話 炎獄の極地～奥義顯現（前書き）

やつてまいりました。なのはVS飛影、ガチバトルの後編です！

おー、ついに話数が二十代に突入しましたよー！六月からはじめて…結構早かつたなあ…

これも読者様の応援ありきです、本当にありがとうございます、これからもよろしくお願ひしますね！

さて、今回のお話で魔王降臨バトル編は決着となります。一体どんな展開が待っているのか…

予想できる人もそうでない人も、張り切つていつてみましょー！

それでは第一十話、スタートですっ！

「飛影、くん……」

なのはが戸惑いを押し殺したような声色で彼の名を呼んだ。その声に飛影は口角を吊り上げる。

あたりには静寂が満ちていた。耳鳴りがするような無音の空間で、風が頬を撫でる感触だけが今ここにいることを証明している。

飛影の周りで満ちるが如く揺らめいていた炎が、感情を持つかのように猛りを増した。放たれる熱が周囲を劣化させ、床がぼろぼろと崩れ落ち、等間隔に打たれた鉄柵の杭をバターのように溶かしていく。炎が額を覆っていた布を焼き切り、熱は残滓を塵へと変えた。

現れたのは、この世界では彼だけが持つ第三の眼。無機質な色を帯びた邪眼に射抜かれ、なのはは金縛りを受けたようにすら感じる。飛影は僅かに視線を細め、動けない彼女に向けて戦闘開始を告げた。

「喜べなのは。人間相手にこれを使うのは一人目……そして、貴様がこの世界での、記念すべき第一号だ！」

言葉と共に、額の邪眼が凄まじい光を放った。どこまでも届くかのような力の波動が、ビリビリとなのはの頬を突き刺す。そして、飛影は自信に満ちた笑みのまま右腕に巻かれた布の上部に手を伸ばし、その上に添えられていた札を無造作に引きちぎった。

ドクン

・・・。

空間そのものが鼓動しているような音が、重い響きを以つて周囲に伝わる。体を芯から揺さぶるような寒気が全員の中で木霊した瞬間、飛影の右腕を覆つていた包帯が焼け落ちて空に舞つた。

今まで隠されていたその包帯の下より現れたもの、それはひじ先から手首まで伸びた黒い紋様。まるで悪魔が宿つたかのように黒く、そして蛇が巻き付いたように震いとこづ、ビームでも至な癌だつた。

「忌呪帶法を・・・それにこの妖氣は-」

「オイオイオイオイー！まさか飛影の奴、なのはけやん相手に『アレ』を使う気じゃねえだろ！？ありや流石に洒落こいべ和牛じや済まねえぞ！？」

それまで場を静観していた藏馬と桑原が、いつになく焦りを交えた声を上げた。その視線の先には露になつた右手を晒す飛影がいる。

「アレ？アレって一体・・・」

鬼気迫つた一人の表情にエリオが事を尋ねようとしたとき、おぞましい気配を感じ、首を捻つた。飛影から、正確にはその右手より溢れる力が邪悪さを増して周囲を侵食していく。

瞬間、右腕を中心として彼の周囲から上がった『炎』に全員が目を見張った。

「な・・・・く、黒い、炎・・・・？」

「それだけじゃない・・・あの炎全部、とんでもない力が込められている・・・！」

「キュ・・・・クルウウウ・・・・クア・・・・」

「フリードが・・・怯えてる・・・」

「兄さん・・・・」

ヴィータとフェイトが後ろに下がりながら言葉を零す。キャロとエリオは唸りを上げるフリードと飛影を交互に見つめていた。

飛影から溢れ出す膨大な力に呼応するように、訓練場を中心とした天空と海中から巨大な黒い光が貫くよう進った。空は赤色に焼かれ、稲妻を受けた建物が一瞬にして崩壊する。見渡す限りを覆う黒い光にフェイト達が驚く間もなく、ロングアーチに控えていたシャーリーから緊急通信が入った。

『ぐ、空間シミコレーターの周囲十キロ四方に次元干渉ですっ！さらに巨大なエネルギー反応を確認！エネルギー指数を魔力ランクに換算します！ランクAA、AAA、S、S・・・・ま、まだ上昇していく！？』

「間違いない・・・あれこそ、魔界の獄炎！」

よくないう確信を得たよつに蔵馬が唇を噛む。その表情を横田で捉えつつ、飛影はビル三つ分ほど離れたなのはをその田に納めた。波紋のように満ちた力の脈動が、瓦礫となつた頭を宙空へと誘つていく。

「ただ力を示せばいいだけのルールだつたな。遠慮は要らん。精々全力で、本当にオレを殺す氣で來い。

手加減など考えるなよ？ 半端なものなら一瞬で炭脣にされんぞ」

「ツー？」

飛影の言葉がなのはの背を強張らせた。黒と紫の中間のような陽炎が、彼を守るようにその存在を主張する。まるで生きているかのよつなそれらは、その手を中心として不気味に揺りぬいていた。

「！」の程度で十分だな・・・見えるか？貴様らの魔法！」とせ一
味違ひ、『魔力』を秘めた本当の炎の術が。

邪眼の力をナメるなよーーー！」

「ツー？ レイジングハート、カートコッジローブー！」

『All right. Let's do our best.』

迸る炎と邪眼に射竦められそつになつたなのはが、恐怖を押し殺しながら迎撃の態勢を取る。蔵馬たちはそれを確認すると、すぐ行動を開始した。

「うーーでは巻き添えを食いつ、桑原くん！」

「おーー！一人とも、ちよつと悪いー！」

「蔵馬わー・うわわー・？」

「ひやあーー！」

「あや・・・・」

「おいー何すん・・・・」

言つが早いか蔵馬がエリオとキヤロを、桑原がフェイトとヴィー
タを抱えて一気に圈外まで飛びさする。するとそれを待つていたか
のように、場は流動を始めた。

「喰らええツ！炎殺

「ディバイン

二つの流れがそれぞれに向かつて収束していく。対称的な二つの
力場同士が真っ向からぶつかり合い、訓練場に不規則な風を生んで
いた。

そして飛影の邪眼が一際強い光を放つた瞬間、暴力的な風と共に
渦巻いていた妖気が枷を失つたように弾けた。

「黒龍波ツー！」

刹那、飛影の右腕から黒き炎が顕現した。それは曲線的な軌跡を

描きながら徐々にその体格を為し、巨大な龍へと変貌を遂げる。爆発的に高まつた妖氣で空氣が燃焼され、稻妻が轟いた。

その先には白の姫君、不屈の名を持つ管理局のエース。対するなのはは、全てを飲み込むような炎の龍に向けて、ロミッター限界値のギリギリまでつぎ込んだ魔力をぶちかました。

「バスターッ！！」

絶大なる威力を誇る神光が撃ち出される。なのはの最大武器である砲撃魔法は、局地的な攻撃力だけならばやてすら凌ぐほどだ。それこそ六課どころか、管理局を見渡してみたところでの右に出るものはいない。

だが、その魔力光は黒い揺らめきを帯びた炎によつて受け止められていた。いや、受け止めているのではない。彼女の切り札はすでに侵食されていたのだ。

「つー？」

自らが放つた桃色の光が暗黒の口中へと飲み込まれていく光景に、なのはは目を見開いて絶句する。炎が彼女の魔力を喰らい、より勢いと猛りを増していく。

他者の攻撃魔法を、それも抑えているとはいえランククラスの砲撃を呑み込むなど、普通では到底考えられない。一個人からのエネルギーとはいえ、魔法を極めた魔導師の力は絶大だ。それはもはや兵器の領域、魔法を持たない者たちがその危険性を疎むのも道理といえる。

だが、もしそれが『普通』ではなかつたら？相対する力が彼女たちのちつぽけな常識で測れるようなものでなく、兵器などという言葉すら及びもつかないレベルだったとしたら・・・答えは一つだ。

ちつぽけな力はより強大な力に呑み込まれに屈するのみ。

その答えを体現した光景が目の前で展開されていた。闇色の炎に侵食され、桃色の光は次第にその勢いを弱められていく。

力とて、被捕食者となつてしまつたが最後、抗うことなどもはや出来はしない。そしてほどなく、なのはから放たれた魔法を喰らい尽くした黒き龍が、大口を開けて襲い掛かってきた。

『Load Cartridge-Oval Protection!』

レイジングハートから四つのカートリッジが吐き出され、自律発動によつて編まれた防護膜がなのはの身体を一瞬にして包み込む。インテリジェンステバイスの意志が、主の危機を察知し自ら防御行動に出たのだ。

そして桃色の光がなのはを包み丸い球体と化した瞬間、その全てを覆うように黒き龍が喰らい付いた。

「ぐうつーー！」

防御を全力展開しているにも関わらず、トラックに最高速で撥ねられたような、凄まじい衝撃がなのはを襲つた。そのままなす術なく押しやられ、周りを確認するような余裕もない。

彼女の目に与るのは自分を守る桃色の光と相棒の杖、そして奈落へと続くような黒一色の穴だけだ。おぞましい流れに抗おうと、なのはは必死に杖に力を込める。

しかしその進撃は止まらない。なのはがそれを確認すると同時に、空中にいた彼女の身体が叩きつけられ、バリアごと地面へと縫い付けられていた。

「ぐ・・・重い・・・つ！」

押しのけようとする力は簡単に押さえつけられてしまう。その動きは獲物を押さえつけ、根こそぎ貪りうとする獣の本能そのものだ。碎き、侵食し、焼き付けて、黒龍は先にすすもうとその勢いを強める。

意志を持つかのような黒龍の衝動に歯を食いしばりながら、のはは杖を盾にしてひたすら耐えていた。

「オオオオオオオオオオオオ
ツ！・！・！・！」

雄叫びを上げる黒龍の牙が膜を隔て、なのはから寸でのところで止まっている。だがその強靭な顎は止まることを知らず、目の前の障害を碎こうと唸りを上げていた。その度に訓練場のビル群が難ぎ

払われ、焼かれた破片が一瞬にして塵へと変わる。

思うように獲物に到達できない黒龍の憤りが、凄まじい衝撃を伴いながら大地を震わせた。それはなのはにも伝わり、同時に大量の汗が流れ落ち、そして滴になる前に蒸発していく。

なのはは身体が芯から揺さぶられるような痛みを必死に耐えながら、レイジングハートにありつたけの魔力を注ぎ込み続ける。そして、そのまま黒龍の力をやり過ごそうとした時だった。

〔 ビキッ 〕

「 つー? 」

僅か、物が引きちぎられるような嫌な響きが耳を突く。見ると、何かが迫つてくる気配と共に、ピシッと音を立てたレイジングハートの球面にヒビが入つていた。

同時に桃色の膜にも揺らぎが生じる。断絶が走り、色が薄れ、歪みは崩壊へと変わっていく。先ほど響いた音の正体は、無敵とまで呼ばれた彼女の防護魔法に限界が近づいてきたことを意味していたのだ。

「 くつ・・・! 」

そのことを理解し、なのはの顔に焦りが浮かぶ。しかし、一度入

り始めた亀裂は止まるはずもなかつた。からうじて拮抗していた状況が加速度的に傾き始める。

亀裂が傷跡を沿つゝにして、ピシピシと断続的に、そして放射状に線を描きつつ走つていく。軽かつた音は次第にくぐもつた音に変わり、時間と共に小さなヒビも深く大きくなりながら、膜全体へと広がつていつた。

「ぐ・・・う、ああああああ！？」

そして一際大きな亀裂が走つた直後、レイジングハートを強く握り締めたなのはが、背中を仰け反らせながら叫びを上げた。ついに、ダメージがバリアと補助フィールドを貫き、内部へと抜け始めたのである。

身体を襲う凄まじい痛みに、なのはは悲鳴を上げることすらやつとの有様だつた。バリアジャケットに切り傷が出来、胸元のリボンが破れて燃え、レイジングハートから断続的な破碎音が木靈する。

「な、なのはさんのプロテクションが！？」

「まずい！いくら彼女でも、黒龍波をまともに受けたらひとたまりもないぞ！」

蔵馬が焦りを混じえた声で叫ぶ。加速度的に広がつた亀裂はその深さを増し、既に球体の表面全てに及んでいた。もはやその守りに当初の頑強さは残されていない。不屈のエースの防御魔法は、いつ崩壊してもおかしくなかつた。

龍は獲物へと執着しつづける。そして、限界を感じ取つたなのは

が静かに目を閉じた。

刹那、

「ふツーーー。」

あと少しでヒビが球を横断するといつとき、飛影が右腕を大きく振り上げた。それに引かれるようにして黒龍がなのはから逸れ、彼女の脇を沿いながら龍はそのまま空へと駆け上がっていく。

「ギュアアアアアアアアアアアアツーーーー。」

訓練場の上空に破壊の雄叫びが木靈する。飛影は依然として暴れている黒龍を一警し、解放された右腕を空へと掲げると、少しの苦い笑いを零した。

「悪いがお前はここまでだ。呼び出しておいてなんだが、さつさと魔界に帰れ・・・ハアアアアアツーーー。」

飛影が右腕に力を込めて、空へ向け一喝する。すると、暴れ狂つていた龍が断末魔の叫びを上げながら一瞬にして崩壊し、そのまま虚空へと消えていった。

空が狂氣さすら窺わせる様な赤色から、穏やかな水の色へと戻つていく。黒龍が消滅したことを確認すると、飛影は視線を水平に落とした。

同じくして桃色の球体が、甲高い音を立てて砕け散った。砕かれた球体の中から出たなのはが、瓦礫が散乱する大地に倒れこんでいく。

だが、その身体は地面に衝突する寸前で力強い腕に受け止められていた。視線だけ動かしてその主を見る。

「ひ・・・えい、くん・・・・」

「やれやれ。貴様が売った喧嘩だというのに、いちいち世話の焼け
る奴だ」

身体全体に響く頬もしい感触に、彼女は覚えずしてその名を呼んでいた。耳元からいつもの皮肉が聞こえる。飛影の表情は見えないが、苦笑しているように感じた。心配されていると思うのは、都合が良すぎるだろうか。

「・・・あ・・・・ひ、飛え・・・・うくつ！」

体中が痛い。指先さえ満足には動かないし、自分の声も何だか遠い。意識も正常だとはいえないだろう。だがそんな中でも、彼の言葉はなのはの耳にはつきりと届いていた。

「力で分からせる」とはあらゆるものの中にある。オレもその方法しか知らんし、他に取りうるすべもない。だが、『言葉でなれば伝わらんこともある』・・・・貴様が以前オレに言つたことだ』

「え・・・・あつ・・・・・」

「飛影の言葉がかつての出会いをリフレインさせる。あの時自分は言つたではないか、言葉を交わすことで分かり合えることもある、言葉でしか伝わらないものもあると。

なのはは顔を飛影の肩にもたれかけたまま、力なく笑つた。

「いや、はは・・・私、忘れてたんだね。一番大事な、こと・・・」「フン、自分の言つたことぐらい責任を持って。でなければ、貴様は一生道化だ」

「うん・・・ごめんね、飛影、くん・・・また、助けら、れ・・・ちや・・・」

ふつとなのはが首をもたげてくる。そのことに一瞬焦る飛影だが、首元にあたる寝息を感じ、一息ののち表情を仏頂面へと戻した。

そして両手を彼女の背中と膝の後ろに回した形、俗に言つお姫様だつこというヤツでなのはを抱え、飛影はシミコレーターの外側へと歩いていく。その正面からヴィータやフュイト、それにスバル達が一斉に近寄ってきた。

「「なのはあつー。」」

「「なのはさんつー。」」

フュイトたちが飛影から少し離れたところで停止する。彼の腕の中では傷つきボロボロになつたなのはが、同じくヒビだらけになつたレイジングハートを握り締めながら完全に氣を失つていた。

しかし傷だらけではあったが、死んではいないようだ。顔を煤だらけにしたなのは飛影の胸に顔を付けて寄りかかり、安らかな寝息を立てている。胸もきちんと上下していた。

飛影は上空を見やる。少し遠くに、リンフォースとはやてが浮かんでいた。その表情は警戒するような、穏やかとは言いがたいものだ。

ヴィータも同様に睨んでくるが、同時に泣きそうな顔になつている。飛影はフンと息を吐くと、俯いていたフェイトになのはを押し付けた。

「わざと手当てをしてやれ。今はオレの妖気に当てられたのと魔力の使いすぎで気絶しているだろ？ が、寝かせておけばじきに気づく。心配なら藏馬に頼るといい」

「飛影・・・」

戸惑うような彼女を置き去りにして、黒い背中が離れていく。その何かを背負うような後姿に声をかけたい衝動を必死に押し込め、フェイトはヴィータらと共に医務室へと走るのだった。

第一十話 炎獄の極地 → 奥義顯現（後書き）

第一十話、なのはと飛影のバトル編をお送りいたしました。

バトル・オールオーバー、オールオーバー！ ウィナー、飛影！

まあ、当たり前・・・順当過ぎるところに收まりましたね。大方予想出来ていたかもしませんが、いかがでしたでしょうか？

飛影がなのはに言ったこと・・・それは成長する上で忘れかけていた、彼女本来の輝きだったんですね。この言葉でフェイトも救われたんでしょう。

とまあ、飛影の行動に一応考へがあつてのものだつたと这件事を書いてみました。他人に入れ込むことの少なかつた彼も、不器用ながらも他人を思いやれるようになつていたんですね。

少し強引だつたでしょ？でも、これ以外にいい考へが思いつかなかつたんです・・・頭の固い作者ですみません。

次回はバトル編から続く、その後のお話になります。さて、どうなるんでしょうか。これ以上のグダグダにだけは避けなければ・・・。

さて、ここで少し予告を。

来る9月11日ことあることを予定しています。なので更新は少し遅れるかもしません。

その日・・・パリの上空で何かが起る！（あ、これは某猫型ロボ

シートの映画のくだりでした。)

「JJ君の『JJ愛読、真にあつがといへ』がこれます。

ではでは、また次回に。

再見!
ツアイツエン

第一十一話　眞実と憑依と初対面～親友（前書き）

第一十一話であります。

文章を何度も練り直していたのと、少しリアルの方でトラブルがありまして、更新が遅れてしまいました。申し訳ありません。

また、明後日より大学の方も始まつてしまつので、度々更新が遅れてしまつことが多くなるやもしません。ご了承のほどをお願い致します。

重ねて、謝罪いたします。

それでは、第一十一話スタートです！

「・・・あ、れ・・・？」

「うすらとした白。なのはは見知らぬ天井、ではないがあまり馴染みのないアングルから部屋を見上げていた。ぼんやりと、自分が今寝かされていることを頭のどこかで悟る。

「おい、気づいたぜ！」

脇から声が聞こえたので視線を向けると、赤い髪を三つ編みで縛ったスターズ隊副隊長の顔が見えた。声を聞きとめたのか、そのままわりにフェイドを筆頭にして人が集まってくる。

「なのは、よかつた日が覚めたんだね！」

「まったく、心配をかけさせおつて・・・」

「よ、よかつたです〜・・・」

「フロイトちやんにシグナムさん、リインまで・・・」

涙目で覗き込む親友や優しいユニークンデバイス、安堵の溜息を吐く烈火の将が目に映る。その横で計器に目を落としていたシャマルの顔が綻んだ。

「心肺、脳波正常……うん、リンクアーコアも安定してるわね。怪我以外は何も異常はないわ。藏馬さんが薬草とかいろいろ出してくれたお陰よ」

「いえ、俺が手伝えるのはこれぐらいですから」

病室の隅にある椅子に座りながら苦笑する藏馬。その横には安堵の顔をした桑原の姿もある。エリオがほつとした表情で、ベッドの横に立つた。

「よかつたです……結構怪我してたから……」

「大丈夫だよ。大袈裟だなあみんな……」

なのはは自然に笑う。そのとき、慌ただしい足音が響くと部屋の入り口が音を立てて開いた。

「シャマル先生！なのはさんが田覓めたつて本当ですかっ！？」

「ちょ、バカスバル！いきなり失禮で……あつ……」

「あ……」

走りこんできたスバルとティアナがなのはを見て固まる。勢いで飛び込んできたはいいが、そのあとのことを考えていなかつたらしい。だが、自分を心配してくれているだらうことは、二人の表情からすぐに分かつた。

なのはは若干目を見開いたあと、ぎこちなさを残した微笑みで彼女らを迎える。

「あはは・・・無事だつたんだね、一人とも」

「そ、その・・・」

スバルとティアアナは申し訳なさそうに俯く。そして少しの逡巡のあと顔を見合わせ、

「「すみませんでしたつー」」

一人同時に頭を下げた。ヴィータ達や、謝られた当のなのはも面食らつたようにきよとんとしている。

「シャーリーさんから聞きました・・・なのはさんの過去」

「『めんなさい』・・・なのはさんの気持ちも知らないで、私・・・」

スバルとティアアナが涙を流しながらぼつぼつと語る。しばらく重い雰囲気が漂つたが、なのはは俯いたままの教え子に穏やかな声をかけた。

「ううん、謝るのは私の方。自分のことを見ないようにして、ティアナ達のことを考えもせずに押し付けちゃった。私も前に言葉で伝えることの大切さを知つたつもりだったのに、いつの間にか忘れて・・・ううん、考えないようにしてたんだ。いつか分かってくれるだろ、つて勝手に思い込んで・・・昔はちゃんと分かってたのに、ダメだね。飛影くんにも言われたよ、『自分の言つたことぐらい責任を持って』って」

なのはは胸に手を当てながら微笑んだ。そこには負の感情は一切

見受けられない。大切なものを取り戻した、本来の彼女がそこにいた。スバルとティアナはもう一度なのはに向かつて頭を下げ、瞳を濡らしながら笑いあう。

「飛影がそんなことを・・・忌呪帯法を解いたときはどうかと思つたけれど、俺達と過いした時間やこの田舎で、やはり彼は変わつたみたいだな」

彼女の雰囲気を察し、蔵馬がここにいない仲間を思いながら安堵した。なのはの横で涙を流していたスバルが、はつとしたように顔を向ける。

「やつにえは、やつもやんこと言つてましたよね。ええつと、なんでしたっけ？飛影さんの右腕に巻かれてる・・・」

「一帯法だろ？」

「そう、それです！」

「アホですね・・・」

桑原とスバルのあり得ない聞き間違いに、流石のリインも呆れ顔でツツ「ハミを入れる。蔵馬は苦笑いを零して口を開いた。

「忌呪帯法だよ。名称には聞き覚えがないかもしれないが、こちらで言つリミッターと同じことさ。特殊な包帯と呪符で封印の呪縛を施して、自分の力を抑え込んでいるんだ。出してしまつたら自分でも止められないほどの、凄まじい力をね」

力を抑えていたという蔵馬の発言に全員が驚く。その中で、シグ

ナムが藏馬に確認の視線を送った。

「それがあの黒い炎、という」とか・・・まだ日に焼きついて離れん・・・私の扱う炎よりずっと強化された・・・いや、もはやそんな次元ではないな・・・上手く言えないが、あの炎は普通ではない・・・我々が知る『炎』などとは存在からして違うような、異質な何かを感じた・・・」

自らも卓越した炎の使い手だと自負するシグナムが、あの時の光景を噛み締めるように言った。その表情には、いつもの厳格さもバトルマニアとして的好奇心もない。

彼女自身も心に浮かんだ事が信じられなく、そして信じたくないつた。烈火の将とまで称えられた自分が、『炎』に対して恐怖心を抱いているなどということには。

「お願いや藏馬さん。知つとおのなら答えて・・・『アレ』は、一体なんだつたんや・・・？」

はやても藏馬に詰め寄つた。その表情は、飛影が来た時にさえ見せなかつた真剣さを含んでいた。そして、これが彼女にとつてのギリギリの妥協線だらうことは、誰もが理解していた。

部隊長は課におけるまとめ役である。そして、そこで起きたことに関して全責任を負う立場にある。本来なら、彼女は先ほどのことを有無を言わざず問い合わせ、早急に視野に入れなくてはならないはずだ。

おそらく、地上や海の管理局のほうからも、飛影が呼び出したあの黒い光に関する問い合わせが殺到しているだらう。もちろんあれ

は魔法でも質量兵器でもないし、自分達も『り知らぬモノなので、知らぬ存ぜぬで通すことはできる。

だが、それにしたって何も分からぬままというわけにはいかない。自分達にとつて一番の使命はミシードチルダの安全管理だ。あれが六課やミシードにとつて危険と見受けられる以上、いくら仲間の力でも知つておく必要があった。その結果、飛影や蔵馬たちとの関係を壊すことになつてもだ。

蔵馬は様々な感情を宿らせる彼女達の瞳を見返した。その中には恐怖心が渦巻いているが、それ以上に強く輝く光が見える。全員の目に浮かぶそれは信頼の色だ。彼女たちも自分達と同じ気持ちなのだということに行き着き、蔵馬はふつと笑つた。

そして、一つ息を吐いてから静かに頷く。元より隠しておけるはずも、そのつもりもない。それに、この場の全員があの力を肌で感じ取つているのだ。どちらにしても説明は必要である。

それになにより、蔵馬は大切な戦友が危険人物にされることだけは許せなかつた。極大な力を持つてゐるというだけで、彼をまた一人にしてしまうなど出来るはずがない。

蔵馬は桑原と一度目をあわせると、もう一度彼女らを見返す。そして再度息を吐くと、ぽつぽつと言葉を紡ぎはじめた。

「あれは黒龍・・・本来は瘴気の中しか存在できない、邪王炎とも呼ばれる魔界の獄炎だ。そして、邪王炎殺拳において本当の『炎』とされるものもある・・・それが、飛影の持つ『力』の正体・・・相当な手加減をしてたようだから、なのはちゃんを殺すつもりはなかつたみたいだけね」

「はええつーー？」

「あ、あれで力をセーブしてたんですかーー？」

「ア、アホも大概にしろー黒龍だかコツクリさんだか知らねえけど、あんなもん出しといて殺す気がなかつたつていうのかよーー？」

蔵馬の言葉にリインやシャーリー、ヴィータが椅子を蹴立てるよう立上がつた。特にリインとシャーリー、それに後ろのはやは管制室でその力の大きさを数値で知つていてるから、受けた衝撃も相当なものだ。シグナムやフェイトなども黙つてはいるが、驚きに顔が強張つている。

だが、蔵馬は表情を変えずに頷いた。

「ああ、それは断言できる。もし彼が本当になのはちゃんを殺す気だつたのなら、技を発動したあの一瞬で勝負は決まってたよ。炎殺黒龍波の力の源は魔界という世界の化身。魔法を使えるとはいえ、それ以外は普通の人間と変わらない彼女では、それこそ跡形も残らなかつたはずだ」

「まあ、ありや邪王炎殺拳の奥義だからな。その気になつて撃ちやあ、この訓練所どころか見渡す限りを軽く焼きせんべいにできるぐれえの威力だ。あれじや全力の一割にも全然届いてねえ」

蔵馬に続けるように桑原が補足を口にする。二人から紡がれる信じられないような言葉に、話を聞いていた全員がフリーズした。

垣間見た飛影の秘密と、出現だけで次元干渉を起こすほどの凄

まじきを持つ黒龍の超パワー。それだけでも度肝を抜かれるのは十分だといつのに、飛影が見せた力は一割にすら遙かに及ばない程度のもの。もはや笑い飛ばすこともできない。

蔵馬が灰になりかけているメンバーに苦笑し、ベッドに座る彼女の方を見やる。瞳に宿つた優しくも強い光に、なのはは目をそらすことができなかつた。

「強大な黒龍の力を制御しつつ、相手を殺さないよう手加減するなんて芸当は、本気で放つより遙かに難しい。飛影は初めから、君を殺すつもりなんてなかつたのさ。ただ彼は彼なりに考えて、それなりの本気を見せなければ、君には伝わらないということに至つた末の行動だつたんだと思う。人を思いやる心は持つてゐるけど、飛影はあの通り、とても不器用な男だからね」

蔵馬は苦笑しながらも、その言葉に優しさを滲ませる。おずおずといつた感じでキャロが頷いた。

「わかります・・・お兄ちゃん、普段はすぐ厳しくてぶっきらぼうですけれど、見えないところで私達のことを遣つたりしてくれますから・・・」

仲間の言葉にエリオが静かに頷いた。何かにつけて文句を言つ飛影だが、決して仲間を見放すことなくいつも影から見守り、いざといつ時には必ず助けにきてくれる。

そのことを誇る様子もなく見返りを求める事もない、ただ強く、気高く、そして遠い背中。そんな彼だからこそ信じられる、尊敬しているといつた態度であった。

はやはては黙つたまま仲間達の表情を見る。彼女はそのままじばらく考え込んだが、何かを得心したかのように一つ頷いた。

「……うん。 セウやな……わかつた！ 後のことは私たちが絶対何とかする！ 蔵馬さん達は心配せんといで！」

ドンと胸を叩いてはやてが宣言する。いきなりの行動に全員、特に藏馬と桑原が驚いたように彼女を見据えた。当の本人は少し頬を染めながら、こほんと咳払いをしてから口を開く。

「確かに飛影くんの力は脅威や。 たぶん藏馬さんとか和真くんの力もそりやうやうのし…… 万が一あれが向けられたら、今の私らには正直打つ手があらへん。 けど、それは飛影くんを嫌悪したり、追い出す理由にはならへんや。 飛影くんの人となりは、私も少しあは分かるつもりやからな」

部隊長の顔に、本当の彼女の優しさが見え隠れしてこる。 それは、彼女なりに掲げた覚悟の証だった。

物事を一側面だけで決めず、危険が内包されていよの内面を信じる覚悟。 巨大すぎる彼の力よりも、それに覆い隠されそうな彼自身のことを見て、信じると決める。

変わったのは、なのはだけではなかつた。 そして、続きを促すような面々の様子に、はやはては苦笑しながらもはつきりとした口調で言つ。

「何よりあそこまでして……自分の立場を危ういもんこじつまで、飛影くんはなのはちやんを救おうとしてくれた。 その気持ちは、私の勝手でぬ無しにできるもんやあらへん。 それにいくつもじい力を

持つとしても、振るうのは飛影くん達やろ？だつたら大丈夫や。何があつても、私はずっと信じていける」

「はやてちゃん・・・うん、ありがとう・・・

「ありがてえぜ・・・ホントによ」

藏馬と桑原が、彼女に向かって素直な感謝を紡いだ。部隊長というその肩書きからして、彼女には大変な仕事が待つている。しかもこれから行動如何では、今ですら折り合いで悪い地上本部との仲がさらなる険悪状態になつてしまふ可能性だつてある。

だが、彼女はそれでも飛影や自分達を信じると言つてくれたのだ。一人は無言で頭を下げた。

「！」の件に関してはもう何も言わへん。みんなもいいな？」

『はい！了解しました！！』

応答する声には、その一つとして淀みはない。心が伝われば思いも伝わる。それを聞いたはやは「よし！」というふうに頷き、漸くの笑顔を見せた。

その場にいる全員に笑みが戻つてくる。と、そこでエリオがあれ、といった感じで首をかしげた。

「うん・・・問題が解決したのはいいんですけど、そこまでして兄さんが言いたかつたことって一体なんだつたんでしょうか？」

「そういえば・・・そうだね」

解決した問題と引き換えるように、新たな疑問が提起する。確かにそれはもつともだつた。なほに教訓を与えたことで一応の説明はできるが、それだけでは理由として少し弱い気がする。

加えて、飛影はティアナも気にかけていたのだ。それに関する回答がまだ無い」とも気になる。

先ほどのシリアルスマードほどではないが、ふむ、と考え込む一同。あの飛影の心理だ、興味があるのは当然といえた。

しばらく顔を突き合わせ、意見を交換し合つ。だがどうやら答えは出せないらしく、彼女たちはそろつて唸り声を上げていた。

そんななか、見かねた藏馬が声を掛けようとしたとき、

『そこからは俺が説明するぜ』

不意に、女の子とは程遠い口調の女声が響いた。全員がぎょっとしたように其方へと視線をやる。その発声源は部屋の中央、オレンジ髪の少女からだつた。

「ティ、ティア・・・？」

「え、え？ 今の声なに…？」

ティアナ自身、自分の中から聞こえた声に戸惑つ。だが次の瞬間、彼女の雰囲気ががらつと変わり、視線も鋭いものへと変化した。髪を掻き揚げ、強い光をその目に宿している。

フロイト達は教え子の豹変ぶりに瞬時に距離を取ろうとしたが、彼女自身が軽い口調でそれを押し留めた。

『あーあー、慌てんな。ただ、こいつの体を借りて喋つてるだけだからよ。蔵馬、ちょっと飛影の部屋に行つてコーンマが渡した『アレ』、とつて来てくれ』

「そ、その喋り方は・・・まさか浦飯！？」

桑原がティアナに対し驚きの声を上げる。浦飯と呼ばれたティアナがニイツと自信に満ちたように口の端を曲げるのを見て、蔵馬が確信と驚愕、それに懐かしさをない交ぜにした表情で頷いた。

「・・・わかつた、行つてくれる。だが、やはりこいつに来ていたんだな、幽助」

『まあな、つと、自己紹介しとくぜ。俺は浦飯幽助、飛影や蔵馬とは長い付き合いで、魔界に君臨する最強の大魔王様だ。今はこいつの体を介して話してる。よろしくな、お前ら』

ポケットに手を突っ込みながら、幽助はティアナの声で告げる。なのはが若干戸惑いつつも口を開いた。

「浦飯さん……確かに、いつか飛影くんが言つてた人ですよね」

「な、なんでティアの中に?」

『いやな、俺も飛影のこと聞いてそっちに行こうとは思つたんだよ。けど俺、今は魔界の奥がどこまで続いてんのか修行の旅がてら黄泉とか?つてやつと調査してる最中だし、結構な人数で来てつから途中で放り出すつてわけにもいかねえ。んで意識だけをこっちに飛ばしたらこの嬢ちゃんがいたから、それを通して度々状況を窺つてたつてわけだ。ついでに夢のなかで修行をつけながらな。さつきはちよつと手が放せなかつたから、頼んどいた助つ人に面倒見てもらつたけどよ』

「……やっぱりあの夢は貴方が……けど、どうして私なんですか?」

ティアナが途切れた言葉にこれ幸いと、意識を顕現させて問いを返す。一人二役をしているようだが、表情や口調が勇ましいものから女の子のものに、加えて取り巻く雰囲気も変わつてるので不思議と違和感はない。表情が再び幽助のものに戻つた。

『ま、それはあとでな。取り合えず話さなきゃなんねえことがあるし……蔵馬、持つてきてくれたか?』

「ああ」

蔵馬の声が部屋の中にじく自然に響いた。が、気配を感じ取れなかつたのか、六課の誰もがびくっと身を竦める。そんな彼の手に携えられていたのは、コーンスマが飛影に渡した頭陀袋だった。

幽助はその中へと無造作に手を突っ込む。そして探るよう『ひらめ

『ひらめ』やつていたが、しばらくおいてから直径十センチぐらいの水晶と白い付箋の束を取り出した。水晶は透明なはずだがその向こう側の景色は見えず、付箋からも何か普通ではない力を感じる。

『ここには『波璃虚玉』と『念出ラベル』。靈界探偵七ツ道具つてやつの一つでよ、まあ早い話が記憶を立体化して追体験することができんだ』

「あ、記憶を！？」

「程度は低いけど、ロストロゴニア級のアイテムやな・・・」

はやて達の言葉を適当に流しつつ、ティアナ（の姿をした幽助）は付箋の束から一枚を引き抜き、おでこに当てた。その色が白から赤へと変わるのを見計らい、ラベルを離し水晶へとがざす。と、赤色のラベルはまるで解け落ちるかのように水晶に吸い込まれていった。驚く一同に幽助が向き直る。

『お前らには昔の俺の闘いを見てもらうことになる。俺の勝手な推測だが、おそらく十中八九合つてる。それで飛影がそこの一二人だけじゃなく、お前ら全員に何を言いたかったのか、それが理解できるはずだぜ。けど、くれぐれも心しろよ？ 正直、あんま気持ちのいいもんじゃねえからな』

その言葉と共に、波璃虚玉より光が伸びる。それは一定の枠を囲み、部屋全体を覆っていく。そして強烈な光を伴い、周りから一切の音が消え失せた。

おまけ・没ネタ（憑依するところとは・・・ルート）

注意 グダグダです）

幽助「それにしてもティアナ、お前相当無茶したなあ。傷だらけだし、体洗うときとかすげえ痛がつてたじやねえか」

ティアナ「ビ、ビツしてそれをつ！？」

幽助「お前は俺の精神下にいたからな、感覚とかはオレにリンクしてんだ。まあ、早い話が意識を共有してたってわけ。視覚はなかつたから感触とかだけだけどな。記憶もいくつか見えたから、今お前のことを聞かれれば結構答えられんぞ」

ティアナ「な、何てことしたんですか！か、感触とか、し、信じられない！それに、勝手に人の記憶を覗かないで下さい！…」の鬼畜！ド変態！人でなし！最低です！、デリカシーなさすぎですよ！」

幽助「むつ・・・ほー、そんなこと言つちやつていいのかなー？俺はせつから黙つとこつと思つたのになー？んじゃ、『希望のようだ』、ちょつくり話すとしますか。そーだな、例えば・・・こいつが七歳の時のある日の夜中、田がさめてトイレに行こうとしたんだ。けど、その田テレビでやつてたお化け特集にビビッて布団から出られなくて、我慢できずにつのまま致しきゃあああああああつー？やめてやめてこんなのはどうだ？九歳の夕暮れ時、公園のベンチであつことか実の兄にお嫁さん宣げ「いやあああああああっ！」「

藏馬「幽助・・・まつたく君は・・・」

リイン「ま、魔王さま、結構愉快なお人ですね・・・」

シグナム「ただの子供のようにも感じるが・・・」

フュイト「あ、あはは・・・（よかつた、憑かれなくて・・・）」

なのは「へえー、そんなことがあつたんだあ」

はやて「なあなあ、他になんかないんかー？」

スバル「知りたい知りたいー！」

キャロ「ティアナさん、可愛いかつたんですね～」

シャマル「はやてちゃん・・・スバルにキャロまで・・・」

ヴィータ「何やつてんだか・・・」

桑原「・・・お前ら、緊張感ねえな」

エリオ「か、和真さん、お煎餅を食べながらそのセツツはちよつと・

・・」

（憑依するといつ）とは・・・ルート（

「藏馬、助。君はここ数日はずつとティアナちゃんの影から見てたんだろ? う?」

「ん？ ああ、 そうだぜ。 ティアナがトイレとかそういうときは
流石に潜つてたけど、 それ以外はだいたいな」

「そうか、幽助がティアナちゃんを鍛えたんだって言ってたな」

幽助 一
おひよー

蔵馬「彼女に発破を掛けたのもそりゃうつへ、内情を知らなければで
きる」とじやない

幽助「へへ、まあな！」

蔵馬「なるほど。『いう』とは彼女たちのプライベートも全て見ていたつことかな？お風呂なんて絶好の機会だつたんじやないか？」

幽助「もあら・・・ソンナコトナナイゼ?」

藏馬「・・・やれやれ、覗いてたんですね、幽助。皆のシャワーシーンなどを見

六課女子全員「「「「「「ええええーー?」」」」」

桑原「な、何イツ！？」

ティアナ「な、何で」としてんですかっ！？」

ザファイー「なんとこゝ（恐ろしこ）」とを・・・

幽助「バーカ、事故だよ事故。ちょっと五月蠅いと思つて目玉を開けたら、偶然その場面だつたんだ。まったく、紳士にあるまじき失態をしちまつたぜ」

藏馬「・・・本音は?」

幽助「狙つてはなかつたけど超絶ラッキーだつたな。黄泉も手伝つてくれてたから、偶然見てすげえ顔赤くしてた。コーンマも意識共に何回かか見てたぞ、あつちは自分からな」

藏馬「協力してくれた彼に何をさせたるんですか・・・」

なのは「や、やつぱり覗いてたんだ・・・これは、お話が必要かな・・・」

シグナム「お、落ち着くんだ高町。こゝは隊舎だぞ、あまり物騒なことは「おー、お前はあんときのやつぱい魔人じゃねえか」そこになおれ魔王、今すぐレヴァンティンの鎧にしてくれる・・・」

幽助「殴れるものなら殴つてみなさい。俺はぜーんぜん痛くないもんねー」

ティアナ「私の体で好き勝手言わないで下をこー」

シャマル「みんな、怒りを治めてーこの体はティアナちゃんのでもあるのよー?」

「フヒイト」や、やつしょうだつた・・・・・

はやて「なら私は見られ損かいな！」

ヴィータ「むひひひひひ・・・・・けび、」れじや腹の虫がおさまんね
ーーー

藏馬「仕方があつませんね・・・桑原くん」

桑原「おうー浦飯イ、んな」としてていいのかア？・・・蜜子たち
んに言つづけるぞー？」

幽助「つぐー？ んだよ、テメー関係ねーだろー？」

桑原「どうなんのかなー。そいや最近見てねえもんな爆裂ビンタ、
いやいや、いい見ものになるぜー」

幽助「アホオー！ オレを殺す氣か！ アイツは手加減知らねえんだぞ
！」

エリオ「あ、あの・・・？」

キヤロ「蜜子さんつて・・・？」

藏馬「幽助の奥さんです。普通の人間ですけど、幽助の暴走を唯一
止める女性ですよ。魔界最強の名をほしいままにする彼も、彼女
にはまったく歯が立ちません」

スバル「ま、魔王様が敵わない・・・」

リイン「普通の女人……」

全員「…………（じ～）」

なのは「な、何で私を見てるのかな……」

全員「…………（クンクンクンクン）」

幽助「そりゃ魔王だからだら」

なのは「…………氣にしてるの……トライバイン……」

フヒト「や、やめてなのはーわたし達を巻き込……」

なのは「バスターアアアアアアー……」

全員「うわあああああああーーー！」

シャーリー「あ、あの……私の出番は……？」

やひーさんちやんー！

さて、怒涛の展開となつた十一話でした。

今回は飛影が出なかつたので、少しバランスをとらせるのに苦労しました。なんだかかなり駆け足な上、グダグダになつてしまつた気もしますが、上手にまとめ切れませんでした・・・小説構成の勉強もしたいんですが、なかなか手に取る機会が在りません。

上のルート1とルート2は書いたものの没になつたネタです。少しは面白みがあるといいのですが。

と、この辺りで今回初登場のオリジナルアイテムを紹介します。

波璃盧玉

靈界にあるエンマ帳を書き出す元、人の過去や未来を全て見通すことも可能な最上の宝具、『淨波璃鏡』の簡易携帯版。ラベルで抽出した人物の記憶を映像化し、空間に投影することができる。投影される場面は使用者が強く念じた記憶の一部であることが多いが、強いトラウマなどが抽出されたりすることもある。死人の場合は死後三日以内であれば可能だが、その場合も死者が最も強く抱いていた記憶が取り出される。名称は不完全なもの、見てくれだけの意の『張子』ともかけてある。

念出ラベル

『波璃盧玉』とセリトとなつてゐる付箋型ラベル。これをおでこに

あて、映像化させたい場面を強く思い描くと、その場面を第三者に
もわかるものとして取り出せます。

靈界探偵七ツ道具と言いつつも、あと一つが空いていたので、最後
の枠をこのアイテムにして登場させました。次回もこれに沿って話
が進んでいきます。

わたくし前回発表した9月11日のことについて改めて述べて
おきます。

この小説を手がける片手間としても、一つのなのはクロスを執筆す
ることに決め、この『にじファン』にて発表致しました。

題名は『魔法少女リリカルなのはACE』です。

気づいていたよ?という方も多い、サプライズになつてないだろ、
とお思いになるかとは思いますが、詳しく知りたい方は、作者の活
動報告の方をじ覽下さい。

ただ、発表しておいていきなりなんですが、しばらくはこちらの『
炎殺の邪眼師』の方をメインとしていきたいと思つております。な
ので、更新は不定期です。

この作品が節田を迎えるまでは、あくまでもオマケ程度だと考えて
下さい。愛着はあるのですが、まずはこちらの方をしつかり済ませ
ませんと。

それでは、長々と失礼致しました。こんな身勝手で駄文ばかりの作

者ですが、これからも気にかけていただけたと幸いです。

次回タイトル、『喪失の重み・渴望の果て～戦士達の過去』を
よろしくお願い致します。

それではまたお会いできることを願つて。

再見!
ツアイツエン

第一十一話　喪失の重み・渴望の果て～戦士達の過去（前書き）

ようやく完成いたしました第一十一話。

いや～、学校が始まったので忙しさが倍増したのもやうなんですが、ついていた授業の開始直後にレポート課題を出され、それに追われる羽目になってしましました。

しかも今回はいつもより長いこともあり、うまくまとめるのにも時間を要してしまい、結果一週間という間が空くことになってしまったこと、ここにお詫びいたします。

今でも上手くまとめられているか自信はないのですが、なんとか形にすることができたので投稿いたします。

それでは第一十一話、スタート！

第一十一話　喪失の重み　・　渴望の果て　・　戦士達の過去

なのは達は一瞬の光に目を覆つ。そして間をおいてから窺つよう
に徐々に開いていくと、そこには、既に六課の部屋はなかつた。

はじめに見えたのは多くの観客席とそれに座る異形の者達、石で
出来た巨大なリングだ。歓声が響くその中央、一人の男が数歩の距
離をおいて対峙していた。背丈も年代も違いそうな二人であつたが、
その周囲は事情を知らないなのは達にもわかるほどの緊張感に包ま
れている。

一人はスバルやティアアナと同年代ぐらいの少年。黒髪を見事なり
ーゼントで決め、目の前の男を睨みつけていた。

「あれは・・・」

「アレがホントの俺。この映像は今からだいたい十年ぐれえ前の、
俺が十四だった時のもんだ。何の力もねえ一般人だった俺が、この
世界に足を踏み入れたのは全くの偶然でな。そつから靈界にいろんな
指令を受けるようになつて半年、俺は裏の世界のバトルトーナメント、この暗黒武術会に招待された」

「「「「は、半年つ！？」」」

「偶然・・・私と同じ・・・」

幽助の成長速度にスバル達が声を上げる。なのはは少し複雑そ
な表情をしながら幽助を見つめた。

「飛影や和真たちもいる・・・知らない人もいるけど」

フュイトも傍らに立つ三人と、青い衣を纏った一人に気づいて声を上げる。シグナムが視線の先、真正面を見つめていた目を細めた。

「あの大男は・・・？」

その先にはサングラスを掛け、上半身を露出した長身の男がいた。その鍛え抜かれた肉体を惜しげもなく晒し、幽助と相対している。

「奴は戸愚呂。当時、暗黒武術会において最強の名をほしいまにした元人間の妖怪だ。この時点での彼の力は凄まじくてね、当時の俺や桑原くん、それに飛影すら凌いでいた」

「ええっ！？ひ、飛影さんより強かつたのですか！？」

「お兄ちゃん以上なんて・・・」

蔵馬の台詞に全員が度肝を抜かれる。十年以上前とはいえ、あの飛影よりも強いという事実は、六課の全員にとつて衝撃的なことだつたらしい。

『元人間』という言葉にフュイトやエリオが不可解そうに眉を寄せたが、始まつた戦いに正面を見る。フュイト達は尚も何かを言おうとしたが、両者の戦いはその目を釘付けにし、彼女達に尋ね返す機会を与えたかった。

戸愚呂が体に力を入れると、その筋肉がみるみる発達していくのである。そして、その体がおよそ人間の限界を超えたような筋骨隆々の姿へと変わった。放出される戸愚呂の妖気、その凄まじさを

感じ取つた全員が言葉を失つ。

「か、体の筋肉が・・・・・！」

「戸愚呂は自分の筋肉の量を操作することができんだよ。それを割合で高めて妖力と戦闘力を調整する。ありや 80%だな」

「あ、あれでハ割やて！？」

「発する気だけでこれとは・・・何という禍々しい力だ・・・」

桑原の言葉と戸愚呂の様子に、スバルやはやてが目を剥いた。ザフィーラは、戸愚呂の妖気に当たられて消滅していく妖怪を見ながら低く唸る。そして碌に言葉も発せないまま、戦いの火蓋は切つて落とされた。

一人の一足一動に風を切つて空気が震える。振り抜かれた、あるいは突き出された拳の風圧が、頑丈な石版や石のフェンスをたやすく粉碎し、時に観客すら巻き込む。幽助はそれを紙一重で避け、隙を見て攻撃を加えていた。

「な、なんて戦いなの・・・・！」

シャマルが一人を凝視して身を震わせる。戦い方は肉弾戦というミッジとは一線を画すほど原始的なものだが、そのレベルは桁で違つた。非殺傷などという都合のよいものなどない、食らえば一撃で死に至るであろう攻撃が飛び交う、本当の意味での『戦い』。しかし、幽助によればこれでもまだ様子見に過ぎないと呟つ。

そんななか、痺れを切らした戸愚呂が石のリングに拳を突き落と

した。凄まじいエネルギーと衝撃に石版が残骸となつて吹き飛び、数メートル四方の岩がさながら紙吹雪のじとく宙を舞う。

だがそれを隠れ蓑にした幽助は、天地が逆転したような体勢のまま戸愚畠に向けて空中で構えを取つた。

「あ、あれは…さつきティアがやつた…・・・」

スバルが滞空する幽助を見て叫ぶ。そして、指先に集まつた青い光が戸愚畠に向けて撃ち放たれた。

『 灵丸ッ！』

声と爆発音が等しく反響した。ティアナが放つたものと名は同じだが、その威力は恐ろしいほど高く、見た目は巨大な砲弾のようである。そして膨れ上がつた光はそのまま飛翔し、轟音を轟かせながら無防備の戸愚畠に直撃した。

爆風が散乱し、砂塵が舞う。戸愚畠の巨体は勢いに為す術なく押しやられ、青い靈光に包まれた。靈丸はそれで減速せず、何層にも渡つて組まれた闘技場の壁をも突破する。そのまま周囲に繁茂する木々をなぎ倒し、戸愚畠の身体は遙か彼方へと吹き飛ばされていった。

「！」これが、浦飯さんの靈丸・・・・・

「なんちゅう威力なんや・・・軽くティアナの十倍以上はあつたで・・・

・

「溜め無し・・・けど、カートリッジを使ったなのはさんのドラン
ノータイム

クオーバーの砲撃魔法と、同等クラスのパワーです……。』

ティアナのものは比べ物にならないほどの大靈丸に、全員が口々に言葉を零した。広範囲攻撃を得意とするのはやはやて、それにリインに至つても、その威力と発動速度に目を剥いている。また靈丸だけでなく、ただの一撃でリングを跡形もなく吹き飛ばした戸愚呂の攻撃力にも恐れを抱いていた。

『幽助の靈丸は、戸愚呂を完全に捉えた』

『ああ。戸愚呂はガードも間に合わなかつたはずだ』

記録の中の飛影と藏馬が、靈丸によつて空いた大穴を見つめながら呟いた。彼からから見ても、どうやら同じ認識だったようだ。それならばもはや心配はない。

全員がほつと息を吐いた。少しヒヤッとした所もあつたが、ともかくこれで決着だろ。あんなすごい靈丸を受けたのだ、勝負は決まつたも同然である。六課の全員がそう思つて氣を抜いた。

だが、なのは達の常識と安堵は容易く打ち碎かることとなる。緩んだ彼女らの心中を凍らせるような言葉が、記録の中の飛影から紡がれたのだ。

『…………戸愚呂が無傷だつたら…………』

「…………え?」

藏馬と桑原、それにティアナに乗り移つた幽助を除く全員が、一様にぎょつとして一斉に彼の方を向いた。その台詞を何度も頭で繰

り返し、言葉の意味を理解するのに数秒をかける。やがて咀嚼した彼女達が辿り着いた答えは、唯一つの疑問だった。

「無傷？」 一体何を言っているのだ、彼は。

「ちよ、ちよっとちよっと、冗談キツイで昔の飛影くん。なのはちやんが全力で守っても大怪我確定なのを、完璧に生身で受けたんやで？ 無傷やなんて、いくらなんでもそれはないわ。ひとたまりもあらへんに決まつたるやろ、なあ？」

「そ、そうですよ！ あんなの受けた無事なはずが……」

同意を求めてくるはやてに、ほぼ全員が頷く。あまりにもバカなことを提言されたかのように、半分笑っている。だがその顔は、一目見てわかるほど強張っていた。

そして現実はまもなくして、彼女らに真の恐怖といつもの植え付ける結果となる。すなわち、本当の驚愕はここからであったということを。

靈丸により数キロに渡つて火の海となつた中、その遙か向こうに何かの影が現れる。炎によつて揺らめく視界の彼方から、相対的に黒い何かが近づいてくる。近づくとに影はその輪郭を成していく。ジャリ、ジャリ、という碎かれた地面を歩く音が妙に大きく響いているような気さえした。

「な……・・・・・！」

はやての口から呻き声が洩れた。それと同時に影が光を浴び、闇技場に空けられた風穴に手をかける。目に映つたその姿になのはや

フェイト、新人達が声も出せぬ中、闇より這い出た影は埃を払つような仕草に失望の声色を重ねて言つた。

『こんなものかね……？　お前の力は』

それは紛れも無く、先ほど吹き飛んだはずの戸愚呂だった。所々ズボンは破れ、トレードマークのサングラスを失っているが、まったく健在なまま彼はそこに立つてゐる。後ろに下がつたフェイトがソファに躊躇、キャロの横にすとんと腰を落とした。

「か、掠り傷一つ付いてない……！」

「そんな……間違ひなく直撃だつたはずよ……？」

シャマルが呆然として呟く。彼女は幾度となく傷を負つたなのは達を診てきたから、魔法の威力と傷の深浅には詳しい。その関係は比例するのがセオリーだ。

そのことをふまえ破壊規模から想定してみる。どう考へても、あの靈丸は相当な威力だつたはずだ。生半可なバリア魔法などでは、防壁ごと消し飛ばされてしまつただろうし、ましてや直撃では即死、あるいは消滅しても何ら不思議ではないほどだ。

だから、あれだけの攻撃をまとも受けて全くの無傷など、普通の人間では絶対に不可能だ。もしも可能とするのなら、それは頑丈を通り越してはや異常。実際に見ても信じられないが、戸愚呂の力はなほは達の想像を遥かに超えていたのである。

『お前も100%で戦うには、値しない。』のまま決着をつけてやる。80%のままでな

幽助が張つた靈氣ガードを、氣の放出だけで突き破りながら戸愚呂が言つ。はやて達は震えた。

強すぎる。誰が見ても、絶望的な状況なのが明らかだつた。ティアナに乗り移つた幽助が「まいつたぜ」という風に肩を竦める。

「ま、こん時はまだ俺も本気じやなかつたんだけだ。けど、ここまで圧倒的だつたのはちつと予想外だつた」

「あ、あれで本気じやなかつたんですか！？」

なのはが驚いて尋ね返す。そして全員が成り行きを見守る中、幽助の操作で場面は次々に入れ替わつていつた。

そして言葉の通り、枷を解いた幽助が戸愚呂に飛び掛つていく。消えたように見えるほど速度で戸愚呂に肉薄し、素手で戸愚呂を吹き飛ばした。

「は、速いつ！？」

「う、動きが全然見えませんでした・・・」

スピードに自信のあるフォイトやエリオが目を見開く。全力の幽助はその全でが先ほどの比ではなく、徒手空拳で80%の戸愚呂を圧倒するほどのもの。だが、それで勝負は終わらなかつた。

幽助の猛攻を受け倒れていた戸愚呂が立ち上がる。体の筋肉が縮んだ戸愚呂は力を失つたかのよつにも見えるが、それ以上に見て者に不気味さを感じさせる。そして彼は殺氣とも怒氣とも違う、しか

し目が合つただけで殺されそうな視線を愉悦で満たし、一人呟いた。

『初めて・・・敵に会えた・・・』

声と同時に、戸愚呂の体に筋が走り始める。それは瞬く間に彼を覆いつくし、不気味な妖気が辺りを包む。そして寒気をさらに加速させる瞳で彼は幽助に笑いかけた。

『いい試合をしよう。100、パーセント・・・!』

言葉と共に地鳴りが起きる。そして、目も眩むような光が戸愚呂を包み込んだ。凄まじい妖気が周囲に辺り、触れた妖怪たちはそれだけで蒸発していく。地獄を体現した世界がそこにあつた。

そのあまりのおぞましさに言葉を失いながら、なのは達は元凶である戸愚呂へと視線を戻す。その先には、目を疑うような光景が展開されていた。それこそ、地獄すらも凌駕するような。

「な・・何、あれ・・・」

なのはの口から、声と共にカチカチと歯がかち合つ音が響き渡る。その先には、筋肉が怒涛の勢いで膨れ上がりさせる戸愚呂の姿があつた。破壊と再生が同調して行われ、まるでぶくぶくと大きくなる泡のように、その身体は変形を続けていく。

拳が巨大化し、背中が山のように盛り上がり、戸愚呂の体は脈動と収縮を繰り返しながら、先の一倍ほどの巨躯にまで膨れ上がつていた。筋肉は硬質化して鎧のようにせり上がり、もはや人界に留まっていない。

そんな常識外れの工程を経て、ついに戸愚呂は自らの全力、100%へと変革を遂げた。

「あ、あれが、元は人間だったというのか……！」

シグナムが呆然として声を震わせる。だが、なのは達が恐怖を感じる暇もなく、戸愚呂が手を動かした瞬間に幽助が突然吹き飛んだ。驚く一同に、桑原が口を開く。

「今のは指弾だ。浦飯に向けて空気圧を飛ばしたんだよ」

「ゆ、指を弾いただけで！？あの一瞬であんだけの威力を持たせるやなんて……まるで弾丸やないか……！」

はやての言葉を遮るよつに、マシンガンの「じく繰り出すされる指弾を幽助が叩き落す音が響く。それを捌ききつた幽助は戸愚呂へと突撃し、渾身の力を込めたパンチを見舞う。

だが、凄まじい威力を持つはずのその拳が届くことはなかつた。なんと鉄をも軽々と碎く一撃は、戸愚呂の親指一本で受け止められてしまつていたのだ。本当に無造作すぎるほどだ。

自失しかかつた幽助の隙を戸愚呂が見逃すはずもなく、代わりに一撃で腕がイカれるようなカウンターを左腕に喰らう。硬直によりてモロに受けた幽助は、悲鳴すら上げられぬほどの痛みにもんぢりうつた。

「う・・・そ・・・」

なのは達は、あまりの光景に言葉を失つた。その様相は子供と大

人どころではない。先ほどの優勢が再び逆転し、パワーでもスピードでも圧倒されている。完全に追い詰められた幽助は、戸愚呂に向けて靈丸の構えを取った。

『全力で撃つてみろ。ラストチャンスかもしれんぞ』

『ツ！・・・舐めんなアツ！…』

挑発するように見下ろす戸愚呂に向けて、幽助はフルパワーで靈丸を放つた。枷をした状態の倍以上はあるだろ？凄まじい靈丸。先ほどまでなら、これで勝負はついていた。だが、

『喝　　ツ！…』

幽助が渾身の力を込めて撃つた靈丸は戸愚呂に到達することなく、寸前で露と消されてしまった。それを為したのは、戸愚呂が放った『ただの怒号』である。あまりにも非常識な光景を理解できなかつたキヤロが、呆然としたまま呟いた。

「な、何が、起こったんですか・・・・・？」

「ば、馬鹿な・・・・・氣合を放つただけであれほどのエネルギーを・・・あの巨大な靈丸を消し飛ばしたとでも言つのか・・・・？」

「ふざけるよ・・・・」、こんな奴、データラメじやねえかつ・・・！」

シグナムとヴィータが強張った表情のまま声を震わせて言つ。

戸愚呂が行つたのは、技も論理も何も無いただ力を真っ直ぐにぶつけただけだ。それも、彼にすれば児戯に等しいレベルで。ミッド

チルダに存在するあらゆる魔法理論の観点から考へても、彼の取つた行動は愚策としか言いようが無い。

だが、それですら圧倒的すぎたのだ。自分たちの力は、おそらくこの記憶の幽助にすら遠く及ばないであつ。そして彼が相手取る戸愚呂から感じる、考えたことすら無いほどの力の差。

闇の書の一部として、永き時を戦い続けた彼女たちは一騎当千の戦士という自負があつた。だがシャマルとザファイーラを含め、四人の頭に浮かんだのはひとつだけ。

勝てない、と。

『元人間の俺から見て……今のお前に、足りないものがある』

戸愚呂は悠然と佇みながら幽助を見据えた。恐怖から後ろに下がった幽助へと一瞬で近寄り、その襟首を掴んで持ち上げる。視認できないほどの速度を造作もなく繰りだす様は、少女達にさらなる恐怖を植えつけるには十分すぎた。

『危機感だよ……お前……もしかしてまだ自分が死なないとでも、思つているんじゃがないのか?』

言葉の終わりと同時に、戸愚呂の一撃が幽助の腹部に炸裂した。繰り出された拳になす術もなくその身体は宙を舞い、遙か彼方へと吹き飛ばされていく。そのまま三階客席を軽く抉り、彼の身体は闘技場の壁へと打ち付けられた。

「…………ああつ……」「…………」

砕かれた壁を背にして、ズルズルと身体が滑り落ちた。倒れた身体を必死に起こそうとした幽助だが、内臓へのダメージからか、口元に押し寄せた血を吐き出す。

ボタボタと、零というにはあまりに大きなそれらが地面に次々と赤い花を作つていった。その光景に、スバル達が顔を真っ青にして言葉を失う。

『勘違いしてないかね、浦飯。お前はまだ、100%の俺と戦う資格を持つたにすぎない。今のお前を殺すには、片手で十分だ。だがそれでは俺が100%になつた意味が……ない』

戸愚呂は地上から幽助を見上げる。圧倒的な力を誇示しながらも、その目的は幽助を殺すことではない。彼は無感情で告げた。

『お前の最大の力を見るために、俺は100%になつた。だからお前には義務がある。今持てる力を最大限に使い尽くし、俺と戦う義務が！　正に鉄のロジック！』

戸愚呂が佇む幽助に向かつて己の理論を展開する。彼がわざわざ全力を出したのは、ただ戦いに勝つためではなく、退く事が許されない極限の状況下での幽助との真剣勝負、つまりは命の奪い合いをするためだったのである。

そして、それが自分の意志だと戸愚呂は告げた。闘争本能などではなく、死を賭して戦うということこそが自分の生きる目的だと。

「狂つてゐる……！」

常軌を逸した彼の信念に、フヨイトが声を震わせる。そして、そ

「から正に一方的な戦い、いや戦いとも呼べないものが始まった。

死んだ者たちの魂が戸愚呂の身体に引き寄せられ、吸い込まれていくのだ。不吉な風が辺りを覆い、妖怪たちが次々と蒸発する。

「！」これは……！？

「あたしらがやつた蒐集みたいにエネルギーを取り込んで……いや違う……喰つてやがるんだ……ヤベエぞあれは！」

それは一方的な捕食だった。恨みと悲鳴が全て戸愚呂に吸い込まれ、その身体の一部となっていく。戸愚呂は不気味に笑った。

『100%の俺はひどく腹が減る。弱いものからどんどん喰つぞ。』この会場の餌を食い尽くすのに、一十分とかかるまい……ほんやりしていくいいのかね？お友達も応援に来てるんだろう？クククク・

・

スバルやキャロをはじめ、戦い慣れしているのは達までが吐き気を堪えるように身体を丸める。シグナムやヴィータはそこまで行きはしないものの、久しく見なかつたおぞましい光景に顔を芯まで青くした。

だが映像は続く。幽助は果敢に挑みかかるものの、全て軽くあしらわれてしまっていた。カウンターで攻撃を受けるたびに傷つき、普通の人間なら余波だけで消し飛んでしまうような拳が、何十発もその体に浴びせられる。

吹き飛んでフェンスに激突した幽助に、戸愚呂は溜息を吐いた。

『がつかりだぞ浦飯、やつとまともに戦える相手が見つかったと思つたんだよ。俺を失望させた罪は重いぞ・・・!』

その力の差を憂いながら、戸愚呂が幽助に近寄つていぐ。だが、青いすんぐりとした鳥のようなもの　名を「フウ」と言ひがが両者に割つて入つた。

『盛り上がつてゐるところ、邪魔するよ』

外見に似合わないしわがれた声が響いた。スバル達は救援が入つたのかと、期待に満ちた表情を零す。だが、パタパタと二人の間を飛びながら、フウは恐るべき提案を口にしたのだ。

『戸愚呂、幽助の本当の底力を見たいんだろ。手つ取り早い方法を教えてやるよ。こいつの、幽助の仲間を殺すことだな』

「　「　「　「　「　なつ！？」　「　「　「　「　「

紡がれた台詞になのは達は耳を疑つた。それは幽助も同じだつたらしく、信じられないかのようにフウに問いかける。だが、返ってきたのは冷たい言葉であつた。

『今のことつは自分で真の力を引き出すことはできない。誰か一人ぐらい、目の前で死ななきや目が覚めないのさ』

『バ、バカ言つてんじゃねえよ!』

幽助はいまだ混乱しながら声を荒げる。だが声は淡々と告げた。

そのままじやどの道誰も助からない。なら一人が犠牲となり実力

を引き出すことで、戸愚呂を倒す可能性を見出す方が筋だろう、と。その言葉にスバル達は声すら出せなかつた。つまり、みんなのために仲間のうち一人を見殺しにしろと言つてゐるのだ。

幽助は怒りに任せ、プウを怒鳴りつけた。だが切つた啖呵も応じられず、逆に殴りつけられて幽助は激昂しかける。

しかし、ただ真つ直ぐに自分を見つめてくる瞳に射抜かれ、彼は氣を取り戻した。プウに乗り移つた声は静かに、言い聞かせるようになに彼に言い放つ。

『幽助・・・これが、お前の首を突つ込んだ世界なんだよ。力の無い者は何されても仕方がないのさ』

言葉の終わりに結ぶよつに戸愚呂から指弾が飛び、幽助とプウを吹き飛ばす。彼はそのままニヤリと笑つた。

『それは・・・俺も考えていた、最後の手段としてな。お前が自身の力すらコントロール出来ぬほど未熟なら、それしか・・・あらまいな・・・』

倒れた幽助を見下ろし、戸愚呂は背後にいる四人に目をやつた。ひとしきりそれを眺めた後、その指先を桑原へと向ける。桑原は顔を引きつらせ、幽助が半ば放心したように見つめる中、戸愚呂は無感情に告げた。

『お前がいいな・・・浦飯の力を引き出すために・・・つまりは、オレのために、死んでもらひ』

感情など微塵も浮かべず、戸愚呂は歩き出す。そこにまほや慈悲はなく、幽助を自分と対等に戦わせることしか頭にない。

『や、やめろ、戸愚呂オオツー。』

焦燥を滲ませた表情と声で、幽助はがむしゃらに戸愚呂へと特攻する。だが何度も立ち向かっても、拳やキックを何発打ち込んでも、戸愚呂を祛ませることにすら至っていない。

何度も戸愚呂の拳を受け、逆流してきた血反吐を吐き出す幽助に向かって、彼は優越感すら滲ませた声色で告げた。

『惨めだなア・・・浦飯。お前は・・・無力だ』

言葉とともに、戸愚呂は幽助の身体を押さえつけた地面へと埋め込んだ。動かなくなつた幽助を見て、戸愚呂はせらうに桑原たちの方へと歩いてくる。

藏馬と飛影が迎え撃つことを告げ、構えを取つた。だが、桑原はそれを遮るように二人の前に出て、助太刀を拒否した。

「俺一人でいい」と言葉を残した桑原に、彼の意図が掴めない藏馬と飛影が詰め寄る。だがその目を見た瞬間、一人とその後ろにいた青年が息を呑んだ。

桑原は静かに三人を見返す。穏やか過ぎる彼の瞳になのは達が言いつの無い寒気を感じた時、不意にはやてが声を震わせた。

「あの田・・・同じや・・・あの時のリインフォースと・・・

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

はやての言葉に、隊長一人とヴォルケンリッターがびくつと反応し、その目を見開く。雪の降る丘に消えていった銀髪の少女の目が彼と重なったとき、桑原が飛影の後ろにいる青年に声をかけた。

『・・・・アンタ、浦飯に命を賭けてくれたよな・・・俺もかけるぜ！湿気た命だがなア・・・』

『！？ よせつ、桑原あツー。』

幽助の声を振り切り、桑原は特攻する。そして叫びも空しく、急接近した戸愚呂によつて桑原は胸元を貫かれた。

映像とはいえあまりにも残酷な光景に、少女たちは口を、そして目を覆う。夥しい量の血を吐き、胸元から流れ出していくのもかまわず、桑原は必死に告げた。

『う、浦飯・・・ゴフツ・・・テメエは・・・こんなもんじやねえ、ハズだろオ・・・俺をがっかり、たせるな、よ・・・』

桑原はそこまで言つて地に倒れ付す。蔵馬が駆け寄つて抱き起ますが、その顔をやるせなさで一杯にし、強く唇を噛み締めた。なのは達の顔が青を通り越し、白く色を失う。

『どうだね、少しばらる氣になつたかね？ 一人じゃ足りないか。なんなら、もう一人ぐらい死んでもらうかね？』

戸愚呂が震える幽助に向けて言葉を吐く。だが、そこで幽助に変化が起こつた。立ち上がった彼が、戸愚呂さえ知覚できないほどの

速度でその背後に回ったのだ。そしてその身体から、先ほどとは比べ物にならないほどの靈氣の風が噴出した。

『情けねえ・・・仲間一人、助けられねえよ・・・』

解放された靈氣の大きさに、はやて達は息を呑む。そして戸愚呂は待ちに待つた死闘に喜びを滲ませていた。こうなったのはお前も望んでいたことだと、自分に近づきつつある幽助に向かつて言う。

だが、幽助はそれを否定した。

『アンタとは違う』

不動の幽助を戸愚呂が殴り飛ばした。幽助は錐揉み状に吹き飛び、フェンスに激突する。だが、壁を抉るような衝撃もそれほど効いていないことを悟っているのか、彼は戦つように促した。

『俺の殴る力は同じ。だがお前の受けたダメージは小さくなっているはずだ。それが強さでなくてなにかね！？』

戸愚呂は声高にして叫ぶ。だが、そう問われても幽助は否定を続けた。一人でここまで来れたわけではない、今の強さは仲間たちの存在ありきだと。

それを聞いた戸愚呂は声を高くして笑った。心底下らないという風に口角を吊り上げる。まだ足りないようだ、と。

邪悪な笑みを浮かべ、彼は歩き出そうとする。しかし、一瞬で近寄った幽助がその腕を掴んで止めていた。氣を放出しながら、独白するように彼は告げる。

『俺は・・・どこかでアンタに憧れてた。小便ちびりそつごビビリながらも、その強さに憧れてたんだ』

何度幻海に言われても、心のどこかで全てを投げ打つても戸愚呂のよほな強さを得たいとだけ思つていた、と。だが薄く笑う戸愚呂に向かつて、今はもうそつはならないと断言する。

「 人はみな、時間と戦わなきやならない。だが、奴はその戦いから逃げたのや・・・誇りも、魂も、仲間も全て捨てて・・・お前は間違えるな、幽助。お前は一人じやない・・・誰のために強くなるのか・・・それを、忘れるな・・・」

意識の中だからか、幻海の言葉がなのは達にも届く。心のなかで彼女の言葉が強く反響した。迷いが晴れた彼は高らかに叫ぶ。

『俺は捨てねえ！しがみ付いてでも守るつ！』

言葉とともに幽助は戸愚呂を吹き飛ばし、同時に靈丸を放つた。今までのパワーを大きく超えたその威力に、全員が目を剥く。そして、もう一度指先を構えながら彼は戸愚呂を見据えた。

『次が最後の一発だ。俺の全ての力を、この一発に込める。テメエが魂を捨てた代わりに得た力を全部、全部使って掛かつて来い！テメエの全てを壊して、俺が勝つ！』

幽助が戸愚呂に向けて最後の勝負を告げる。戸愚呂はそれに呼応するよほにして、自身のフルパワーである100%中の100%へと変身を遂げた。

戸愚呂は全てを否定して得た力を肯定し、全てを肯定する幽助を否定する。だが幽助は、全てを捨てたと言つ戸愚呂に向け蔑みを込めて言い放つた。

『そいつは違うな。逃げたんだよ・・・テメエは逃げたんだ!』

指先に全ての力を集めていく。絶対に逃げないと、何があつても捨てないと、その強い思いだけが戸愚呂を貫くために咆哮した。

『喰らいやがれ、靈丸　　ツ――』

お互いが全ての力と信念を一撃に込め、二人は真っ向からぶつかった。幽助が自らの力を限界以上にまで振り絞つた靈丸を放ち、戸愚呂がそれを受け止める。靈丸は戸愚呂に握りつぶされてしまったが、力の限界を超えた歪みにより戸愚呂は力尽き、幽助はこれを打ち破つた。

そこで幽助が映像を止め、全員に向き直る。世界が元に戻つても誰も口利けない。その中、横にいた藏馬が静かに言葉を発した。

「こうして幽助は戸愚呂を倒し、他の者たちを救うことができた。幸いなことに、戸愚呂も元々殺すつもりがなかつたのか、桑原くんも死んでいなかつた。けれど、目の前にいた大切な仲間を救えなかつた絶望は、あのとき確かにあつたんだ」

藏馬はわずかに沈んだ声色で告げ、話を続ける。

「これは後でコーンマから聞いた話だけれど、実はこの戸愚呂も大切な存在を失つた者だつた。奴が人間から妖怪へと転生する前、戸愚呂は自分の弟子や格闘仲間すべてを、妖怪に殺されているんだ。

彼の・・・田の前で「

「や、そんな・・・」

「酷い・・・！」

キヤロとヒリオが涙を流しながら、唇を噛み締める。暗い雰囲気が漂う部屋に、蔵馬と幽助の声が響いた。

「仕方のないことだつたとはいえ、自分の力を過信し、弟子達を守れなかつた罪の意識は、相手を倒して仇を討つても消えなかつた。そして苦難の道ばかりを進んだ拷問のような人生の末、後悔を背負いすぎた彼は、力だけを求める存在と自分を偽つてしまつた・・・」

「これで分かつたか？飛影はどっちかじやなくて、お前ら一人に対して怒つてたんだよ。目的は違つが、どちらも同じく『力』に固執してること。高町は言つてることとやつてることが違つて、ティアナのことを理解しようとしなかつたこと。ティアナは力を求める姿勢が戸愚呂と同じになりそうだつたことだ。悲しいことを背負いながら歩いてくお前らがあんまりにもダブつてに見えたから、譲らなかつたものをお互いに曝け出して理解して欲しかつたんだろ。戸愚呂みてえに、二人が道を違える前にな」

幽助はなのはを意味深な視線で眺めながら言つ。田尻に涙をたたえた彼女を見て、蔵馬が意を決したよつに近づいた。腰を落として視線をあわせ、正面から見つめあつ。

「なのははちゃん・・・飛影は君を渡した後、俺に『自分がした後始末』を任せると言つていて。そして、『これ以降の君のフォロー』も頼む、ってね。この意味が分かるかい？」

「！？ まさか・・・ツー！」

「えつ、なのはつー？」

蔵馬の言葉に、なのはが血相を変えて飛び出していく。自動扉にぶつかりながら、彼女の姿は廊下へと消えた。蔵馬はそれを呆然としながら見つめるはやて達を一瞥し、ティアナに向き直った。

「ありがとう幽助。君のお陰で、なんとかなりそうだ」

「へつ、いいつてことよ。俺も飛影には返しきれねえ借りがあるからな・・・つと、そろそろヤベエか。今回はここまでだ。じゃあなお前ら、飛影にはよろしくへ言つといてくれ！」

その言葉とともにティアナを覆っていた薄い光の膜が消え、彼女は一瞬ふらつく。スバル達が慌てて駆け寄ると、いつもの彼女の笑みがあった。

「稀有な体験ね、取り憑かれるなんて・・・」

「ティアナちゃん、平氣？」

シャマルの心配そうな声に、「ええ」と笑うティアナ。軽口が叩けるところを見ると、問題はないようだ。全員がほっと息を吐く。

「あとは、あの一人だな」

桑原がなのはが去つていった方向を見つめる。思つのは、一途な彼女と素直になれない大切な仲間のことだった。

いつもは容易く上れる階段に息を切らしながら、なのはは屋上の扉を押し開いた。水面に反射した陽光が視線を遮り、一瞬視界がぼやけるが、すぐに慣れしていく。

「飛影くんつーー！」

「ーー！」

田一杯の声で正面に向かつて叫ぶ。彼女の視線の先には、初めて会った時のように黒コートを風になびかせる飛影がいた。驚いているのだろう、振り向いた顔は僅かに強張つていて、目も少し開き気味だ。だがそれは一瞬にして表情から消え、彼はいつもと変わらぬ口調で問いただしてきた。

「何故・・・貴様がここにいる」

「藏馬さんから聞いたのー酷いよー飛影くん、ここから出て行こうとしたでしょーつー？」

「チツ・・・あのお喋り狐め」

なのはの言葉が的を射ていたためか、憮然として顔を背ける。それに胸を掻き毬られるよつなざわつきと、鋭い痛みを感じた。震え

る身体に鞭を打つて飛影に近づく。

「やつと、やつと余えたのに・・・どうしたのー?」

「答える必要もないと思つが? オレは貴様を完膚なきまでに痛めつけ、そして撃墜した。それも、お前を殺し尽くして釣りがくるほど の力でな。現に貴様はそうして怪我を負つていて、八神を始めとするこここのやつらもオレを危険視し始めているだらう。今更、オレを ここに引き止める理由などないはずだ」

「つー」

淡々と、感情も交えない声色で飛影は述べる。だがその一言で、 なのはの心を保っていた何かが焼き切れた。心が一気に膨張し、弾 けるよにして流れ出す。

我慢などできない。感情が怒涛の流れを以つて口元に押し寄せ、 気づけば大声で叫んでいた。

「理由なんていくらでもあるよー! 私に大切なことを思い出させて くれたのも! 私とティアナが仲直りできるように動いてくれたのも ! ティアナの気持ちをちゃんと分かることができるように・・・分 かり合えるようにしてくれたのも全部・・・全部飛影くんがやつて くれたことばかりじゃない!」

止まらない。止めるつもりもない。

強い思いはそれゆえに巨大な怒りとなり、声帯を支配する。そし て口を突くのは、また同じくらいに悲しさを帯びた叫びだった。

「ティアナが気負わないように、私の過去のことを黙つてくれたのもそつ。飛影くんの言葉を聞かないで意固地になつてた時も、ずっと見放さないでいてくれた！それなのに・・・それなのに、どうして何も言わずに行こうとするの！？」

感情が言葉だけでは表しきれず、目尻から溢れたしづくが次々とアスファルトへと落ちた。無機質な屋上に斑点を作るたび聞こえないはずの音が響き、日の光がそれを消し去つていく。

ぱたぱたと零れながらその頬を伝う涙に、飛影は少し驚いたような視線を向けていた。

「あの時みたいに、助けてくれたのがただの気紛れならそれでもいい。でも、こんな・・・こんなこと私は望んでない！私はもう飛影くんのことを忘れるなんてできない！それなのに、いなくなつたほうがいいなんて勝手に決めないで！私の気持ちを一人だけで決めて、自分勝手にいなくなるうとしないでッ！」

叫びを捨て置き、なのはは飛影に駆け寄ろうとする。痛みによるショックと疲労で、身体がふらつかせながらも懸命に。

だが身体が心に付いていけない。涙で景色がぼやけていたせいか、床に足を取られる。支えを失つたなのはは、抗うことも出来ずアスファルトへとその身を投げ出され、

「フン。まだ満足に動けん体で、随分と無茶をする

一瞬で近寄つた飛影に、再び抱きとめられていた。数時間前にもされたばかりだというのに、彼の身体の感触がとても懐かしく感じる。伝わってくる鼓動がとても温かい。

「無理をするな。防御越しで加減したとはいって、オレの黒龍波を受けたんだ。ただの人間の貴様ではこれ以上の無理は利くまい。体がどうにかなる前に、さっさと戻つてしばらく寝ていろ」

ぶつきらぼうな気遣いが体を包む。だが、なのはは感じなかつた。その手により強く力を込め、涙と共に共に言葉が流れ出していく。

「嫌……今放したら、飛影くん絶対どこかに行っちゃうもん……いなくなっちゃ、やだよ……もう、どこにも行かないで……」

言いながらさらにコートを握り締める。いやいやといった風に顔を押し付けたのは、すすり泣くようにして飛影に縋り付いていた。

腕を振つただけで軽く払えるような、弱弱しい力。だが、向けられた精一杯の気持ち、万力のように飛影の心を捉えていた。

一度たがが外れ、隠していたものが完全に出てしまつたからであつ。感情が抑えられなくなつてしまつた彼女は、幼子のように泣き続ける。飛影は大仰に肩を竦め、鼻を鳴らした。

「 フン。ガキが……甚だ不本意だが安心しろ。一度はオレ自身で決めたことだ。それに貴様の母親との約束もあるからな、今しばらくはその面倒を見ておいてやる。だが、オレを失望させるなよ? 次に間違えば今度は火傷では済まん。精々肝に銘じておけ」

「うん……うん……つ……ひつく……ふええ……」

涙はいまだ止まらず、頬を流れ、しづくがコートへと染みていく。

いつもなら怒鳴り声をあげるところだが、今回ばかりは勘弁してやるつもりらしい。ポケットに手を突っ込みながら、呆れたような、しかしそこか優しい顔をしていた。

「泣き虫め。八年経つても、脆いのは変わらんらしい」

「・・・泣き虫で、ヒック・・・いいよ・・・それでも、いい・・・だから・・・だからもう、絶対・・ヒック・・いなく、なつた、りしない、で・・・」

「やれやれ・・・子守が必要なのは、スバルやキャロなどよりお前かもしけんな、なのは」

嗚咽を零し、子供のように泣き続けるのは。慟哭を零す少女に田をやり、飛影は上へと視線を流した。

晴れ渡る空と穏やかな陽の光が一人を包み込む。強い潮風がなのは髪を攫い、さながら絹糸のように空へ躍らせた。

涙は日の光で消え、声は風に紛れていく。

「一、二、三、元気！」一つの戦いと過去が終わりを告げた。

第一十一話　喪失の重み・渴望の果て～戦士達の過去（後書き）

過去編、幽助と彼の死闘のお話でした。

「戦い」というものなど世界にもあります。特に戦争などはマンガでも多く取り上げられるテーマの一つですね。

以前私が受けっていた授業の講師はこんなことを言つていました。

「戦争を終わらせる方法は簡単だよ。争つてゐる国々の両方のトップ陣を最前線に並べればいい。そうすればどんな戦争だって一発で終わる」

もつともです。死んでいくのはいつも立場的に弱い者たちが圧倒的に多いんですから、それを盾にして命令しかしない者たちほど嫌な存在はいません。管理局の最高評議会と似たような感じですね。

と、少し重い話になつてしまいまして。以前こんなテーマでレポートを書かされたことが多かつたものですから。

さて、そんなこんなで今回のお話でしたが、いかがでしたでしょうか。

まだまだ文章的に粗も多く駄文なのは田を瞑つて頂き、皆様にひとつ少しだけ面白いお話を書けていれば幸いです。

これからも少し授業とか、ゼミの集中講座なんかもあつたりするので、更新が遅れ気味になることがあるやもしませんが、どうかご了承のほどをお願い致します。

それでは、また次回でお会いできることを願つて。

再見!
ツアイシエン

「お話初となる外伝です！」

まずはこの場を借りて謝罪をば。更新が遅れてしまい申し訳在りませんでした！

この所家族がらみのことや、家業の手伝い、その他諸々とリアルのほうでの兼ね合ひが大変厳しいものとなつていいのであります。

さうにオリジナルのお話を考へる辺り、アイディアが思いつかずかなり苦労することとなり、結果、一週間以上も間を空けてしました。本当にすみません。

今回は飛影は登場せず、サブキャラクターのお話となります。初めての試みなのでごく不安が残るんですが・・・まあなるよつにしかならんばい！

とこりの感じで、外伝の第一作スタートです！

「ふう・・・」

穏やかな陽光が差し込むカフェテラスに、静かに息を吐く響きが漂つた。このカフェは機動六課の誇る立派な施設の一つである。高级レストランとはいからいまでも、かなりレベルの高い料理を安く食べられると評判の食堂だ。

機動六課に派遣されてくる誰もが口をそろえて言うほどのクオリティと、毎日に楽しみが増えるという嬉しい要素。まあ男にはそれ以外の要素の方が大きいのだが、とりあえずこの評判は上々といったところであった。

だが、話の焦点はそこではない。昼時ほどではないが、にぎやかな喧騒に満ちたその空間の一角、白い丸テーブルに一人の男の姿があつた。そして、彼こそが今この場を支配している人物だ。

赤い長髪に整った相貌、そして女性に美しいと呼ばせるほど澄んだ深緑の瞳。一目でも見た女性ならば、そのほとんどが目を奪われるであろう男性。ひとたび話せば、彼の雰囲気にやられるであろうこと多數。しかも仕事もでき、おまけに優しくくれば、イケメン指数も鰐上りになるといつものだ。

これほどハイレベルな要素を持つた者は他にはいない。彼こそが六課が誇る民間協力者の一人、南野秀一こと藏馬であった。

現在、藏馬は午前に担当していた仕事を完了させ、遅い昼食とハイタームと洒落こんでいる所だった。いつもなら飛影や桑原と一緒に食事だが、少し仕事が多く、今日は一人での昼食だ。ハイタームをする男など、普通は気取っているとも思えるかもしれないが、藏馬がやると違和感がないどころか一枚の絵になる。

その中で藏馬は置かれたティーカップを手に取り、優雅さをえ漂うような動きで口に運んだ。ブレンドでなくストレート、少し柑橘の香りが強めのアールグレイを、存分に楽しんでいる。

そしてその香りを鼻腔で、渋めの味を舌で味わいながらも、目はテーブルに置いた本に向けられていた。内容は、この世界での知識やその他諸々についてのことのようだ。勤勉な彼らしいチョイスである。

片手でゆつくつとページを捲り、時折思い出したよつてお茶請けのクッキーに手を伸ばす。組んだ足も見事に雰囲気とマッチしており、これ以上ないほど紳士のくつろぎシーンである。

と、そんな一時を中断させる声が唐突に響いた。

「ぐ、ぐく藏馬さん…」

「ん？」

クッキーに伸ばしかけていた手を戻して、本から顔を上げる。すると藏馬のテーブルの前に数人の女性、いや彼からすれば少女の団が立っていた。

見覚えはないが、時空管理局の制服を着ているから管理局関係なのは間違いない。その誰もが世間一般で言うところの『可愛い』部類に入るような子達だった。

さらにその表情は一様に赤く染まっているほか、目が泳いでいたり、そわそわと落ち着かない様子だったりする。周りからの視線も妙に気になった。

「俺に何か用かな？」

相手を驚かせないよう、蔵馬は自然体で問いかけた。穏やかな笑みを浮かべることも忘れていない。これはもう本能的にだ。同時に、カフェの各所で黄色い声が上がったのはスルーする。

そんな状況のなか少女達は顔をさらに赤くさせ、わたわたと慌て出す。そして怪訝そうな顔をする蔵馬に、彼女達は息を呑わせ一斉に口を開いた。

「あのーーーこれ受け取ってくださいーーー！」

「どうかお願ひしますーーー！」

「前からファンでしたーーー！」

それ以降も口々に言葉を吐き、蔵馬に向かって何かを差し出していく。反射的に一人目のを受け取ると、それに便乗するように様々なものを次々と蔵馬に手渡してきた。

「あ、えっと、ありがと。でも俺は・・・」

少女たちのパワフルな態度に少し面食らいながらも、断りの台詞を口にしようとすると。だが蔵馬が口を開きかけると、少女たちはどちらながらも失礼しますとだけ言い、黄色い声を弾けさせながら走つていつてしまつた。

蔵馬は渡されたものに目を落とすと、他人に見えないようにながら溜息を吐く。手に持つてるのは数通の手紙だつた。それだけではなく、キー・ホルダーのようなものやクッキーなどまである。

この手の贈り物は蔵馬にとって別段珍しいことではない。中学生の頃から女子に言い寄られることが多かつた彼にしてみれば、これでもかなり大人しいほうだ。

「まつたく、騒がしいことだ」

「苦労しているな、蔵馬」

「ああ、シグナムさんにザフィーラ。休憩ですか？」

蔵馬の言葉にそのようなものだ、と軽く返すシグナム。ザフィーラが同情するような、その苦労を労うような眼差しで此方を見上げてくる。蔵馬は数少ない自分の理解者の態度に、軽く肩を竦めた。

「局員が失礼をしたな。先ほどのは、他の課から研修のような目的で来た者達だ。それも先ほど終わつて解散したのだが・・・どうしても会いたい人がいると、主に頼み込んできたのだ。別段不都合もないところで許可は下りたが・・・まあ、大方こんなことだらうとは思つていたがな」

周りをさりげなく見渡しながら、呆れた様な、そして少しだけ申

し訳なさそうな表情で、シグナムが謝罪を口にする。人当たりがよく、真面目で優しい蔵馬が人気者なのは、常識的に言つても当然だつた。その姿勢もさることながら、人として生きる彼の魅力がそうさせるのだろう。

だが、自分の本質を、妖怪だということを知つてなお付き合つてくれる人間は本当に限られてくる。なので、蔵馬は邪険にこそしないが、事情を知らない者とは距離を置く傾向にあつた。

だからこそといふか、当然といえば当然だが、この六課の隊長陣や新人たちの存在は蔵馬や飛影には有難い限りなのだ。妖怪と分かつても、普通でないと知つても、普通と変わりなく仲間として接してくれる。それが自分たちにとつて最も得難いものであることを蔵馬は知つてあり、心から感謝していた。飛影は思つていても絶対に口にしないだろうが。

蔵馬は僅かに笑みを浮かべ、アールグレイのポットべと手を伸ばす。だが、シグナムらと一緒にどうかと誘おうとしたところで、紅茶を傾けた体勢のまま蔵馬の動きが止まつた。そして、ティーカップから口を離しながら、恐る恐る一人に尋ねる。

「ええと、シグナムさん？ 後ろにいる、そのお一方は一体どうしたんですか？」

「何？ 後ろとは・・・って、うわわ！？」

「あ、主はやで、それにシャーリー！ ふ、一人とも、いつからそこには？」

シグナムとザフィーラが怪訝そうにしたのは一瞬。振り返つた二

人は、いつの間にかそこに佇んでいたはやてとシャーリーにびくうつと身体を飛び跳ねさせた。本当に気がついていなかつたらしい。

その声に反応したのか、一人が顔を上げた。何だか纏う雰囲気が尋常ではない。口元には薄笑いも浮かんでいた。

「いつから……？シグナムの『大方こんなことだらう』あたりからやで……」

「……乙女の力を甘くみないで下さ」、シグナム副隊長……

ふふふ、と抑揚の無い声で笑う一人。何だか場が視覚的に暗くなつたかのように感じ、その背後からは一万トンよりも重い空気が漂つてきていた。

怖い。怖すぎる。そして不気味すぎる。髪に隠れて視線が見えないところなんか特に。自称であるのは何とも言えないが、乙女の力は歴戦の戦士に気配一つ悟りせぬ近づけるのか。もはや理屈とかそういうのを軽く超えている。

「……さつきのは藏馬さんのファンやつたんかそうなんか許可出したのは間違いやつたなこれは問題や私に対する挑戦やそうやきつとこれは自分で道を切り開けつちゅうことのあらわれやなうん間違いないこれからはこんなことが起こらんようにしないといかんな今こそ覚悟が試されるその時や場合によつてはフレスベルグやラグナロクもありの方向で……」

「……うう、どうせ私は後ろに立つても声を掛けられるまで気がつかれないような、地味でテバイスマニアな女ですよ……だから藏馬さんだつて……」

「あ、あの・・・主はやて? フイーーノ?」

ふつぶつと、呪詛とも付かない言葉を吐き続ける夜天の主と、部屋の隅っこでタイルの数を数えているメカニック担当に、シグナムが若干引きながらも近づこうとしたが、それを後ろにいた男二人がおしとどめる。ザフィーラは、動物形態にあるまじき哀愁を漂わせながら、静かに首を振った。

「聞かなかつた」としろシグナム。主や仲間の気持ちを察するのも
守護者の役目だ・・・」

「ええと、俺もその方がいいと思つた」

人を超える聴覚で聞こえた台詞を、二人は氣のせいだと必死で聞き流していた。流石、民間協力者とヴォルケンリッター中で最も空気が読める男の組み合わせである。紳士オブ紳士と盾の守護獣の名は伊達ではない。どこかの提督にも見習わせたいものだ。

「シグナム、シャーリー！」

そこへ、リインがふよふよと飛んできた。後ろからはなののは歩いてきてくる。どうやらひいきも休憩らしい。

「何の話をしたの？」

「え、ああこや・・・主はやてとフイーノが少しストレスが溜まつていいのようなのでな、どうしたものかと考えていたところだ」

「はやてちやんがですか？」

「うん。 あつち

蔵馬が指を差した方向、なのはとリインの視線が今だに鬱々としているはやて達とらえる。ブツブツと言葉を零していたり、いじいじとの字を書いたりしている一人に若干引くが、少し考えるような仕草をしてからパチンと手を合わせた。

「なら、ちゅうどいいかな。 じいのところ根詰めてるし、一人とも今日は午後はお休みにして気分転換でもしてきたら?」

「 」

スターズ隊隊長の進言に、はやてとシャーリーは揃つてポカんと口を開けた。何故だかその様子は少し可愛く、さらに幼く見える。なのはは一人に向け、満面の笑みを見せつつ一人を見た。

横に浮かんでいたリインも蔵馬の方を向く。浮かんでいたのは邪氣のない、煌くような笑顔であった。そして、祝福の風リンゴースの名を持つ少女は頬に人差し指を当てながら、

「蔵馬さんも一緒に、ですね 」

ワインクをオマケした魅力的な提案を口にした。

天気は快晴。陽の光が少し眩しさを含んで目を刺激する。まだ五月の終わりだというのに、既に汗が浮き出そうな陽気である。夏の気配がもうすぐそこまで来ているようだ。

ミッドチルダの首都クラナガンは、いくつもの高層ビルが並び立つこの世界でも最大の規模を持つ大都市である。高度に発達した魔法という名の科学の恩恵により、ミッドの環境は温暖化などで悪化することなく、しかし街には活気が溢れている。魔法の恩恵というものは個人だけではないのだ。

そしてその人口も、地球とは比べ物にすらならないほどの規模であることは言うまでもない。快適な環境となり、医療も同等にまで発達した世界では、人間の生の数や長さも必然的に増加するというものだ。存在する人間を支えるためには、これだけのものが物理的にも必要なのである。

「へえ、すごい賑わいだ。仕事でここへ来ることは何度かあつたけれど、プライベートでは初めてだな」

そんな賑やかな街の一角。ミッドチルダのメインストリートを歩く三人分の靴音が響いている。だがそれもすぐに雑踏に混じり、余韻を残すことなく音は消えていく。石敷きのタイルを先頭で踏み鳴らすのは、黒のローファーを履いた藏馬であった。

無地のホワイトTシャツに白を基調とした薄い青色のオープンシャツは彼の爽やかさを一層引き立て、上物だろうと思われるグレーのスラックスが長い足に映える。右肩には二つのポケットをつけた皮製の分厚いサスペンダーが真っ直ぐにかけられ、藏馬の右前と右後ろでそれぞれスラックスの腰部に固定されていた。彼らしいラフ

なスタイルである。

蔵馬がさりげなく後ろを振り返り、自分の人一人分ほど後ろから歩いてくる女性一人に目をやつた。だが視線が合った瞬間に、その二人はわたわたと慌てたような態度へと変わる。その様子に若干申し訳なさそうな顔をした蔵馬が、気遣わしげに口を開いた。

「二人とも大丈夫かい？ それともつまらなかつたかな？ なのはちゃんと言われたからと言つても、無理して俺に付いて来る必要はないんだよ？ 疲れているんなら、六課で休んでいた方が・・・」

「い、いや！ そんなことあらへん！ 私は楽しんでるで！ ホ、ホラ、気分転換は大切やしな！ なつ？ シャーリー！」

「は、はい！ はやてさんの言つとおりです！ 一蔵馬さんの行きたい場所に連れて行つてください！」

蔵馬の提案を半ば鬼気迫る勢いで却下するのは、機動六課部隊長の八神はやてと同じくメカニック担当のシャリオ・フィニーーノである。二人はいつもの六課制服ではなく私服、それも今時の若者といった服装であった。

はやはては蔵馬と同じ淡い青色に英語のロゴが入ったシャツと、前を開いたグレーのパーカー。紺色の短いデニムスカートから覗く足には黒のニーソックスを履き、絶対領域が眩しい。なのはから借りた底が厚めのロングブーツは、少し大きいのか歩き方がぎこちなかつた。

一方のシャーリーは白にペイントで落書きしたようなシャツに青い緑のジャケット。茶色のミニスカートを履き、ショートブーツを

カツカツ鳴らしながらはやてに横を並んで歩いていた。その顔に眼鏡はなく、コントラクトで決めた相貌が新しい彼女らしさを醸し出している。

午前中にはとリインフォースから提案されたりフレッシュップラン、又の名を藏馬との初デート案に「一人はのつかつていた。正確には男性一人に対しても女性一人なのでデートとは言えないかも知れないが、藏馬と一緒に出かけられるということで「一人は一も二もなく賛成したのだ。

「一人つきりでないことは少し不満だが、本当は諸手を挙げて喜びたい。だが、いざお出かけとなつたら気持ちだけが先行してしまい、緊張でガチガチになつていて一人であった。

「行きたい場所か・・・初めてだから行き当たりばつたりになつちやうけど、たまにはそういうのもいいかもしれない。三人でいろいろ見ていくとしようか」

「「は、はいっー。」

二人の声が弾けてシンクロする。そして、先を行く藏馬の隣に並ぶと、精一杯の笑顔を浮かべて歩き始めた。

そこから三人はいろいろな場所を巡つた。女性に人気のある「一ディネイトショップ」に、藏馬が行きたいと言つた本屋。時間的に映画は見れないため、はやての要望でゲームセンターに行きプリクラを取つたり、シャーリーお勧めのスワイーツがある甘味処にも足を伸ばした。

色々な店や遊び場など時間が経つにつれ、はやて達の硬さも消え

ていく。三軒目の店を出たときには、なのは達へのお土産を考える余裕もあるほどに普段の彼女達に戻っていた。歳相応と言つヤツだらう。

午後からという短い時間ではあれど、三人は楽しい時間を思い切り満喫する。そして日が傾いてきた頃、その姿は公園にあった。

噴水がオレンジ色に染まっている中、遊び疲れたはやてとシャーリーが同じく夕陽に染まつた白いベンチに並んで背を預けている。蔵馬は一人から少し間を空けて、同じベンチに座つていた。

「遊んだなあ。こんな思い切り遊んだの、いつぶりやろか」

「そ、うなんだ。ちゃんと休みはとつてゐるのかい？ 有給休暇はどれるんだろ？」

「はやてさんは六課を設立するまでも大変で、設立したらそれ以上に忙しい日々でしたから、ほとんど休みを取つてないんですよ。私にとつても充実した日々ですけど、やつぱりこういうのは大事ですね」

最初の頃のきこちなさがすっかり抜け落ちたシャーリーが、蔵馬へ同意を求めるようににこつと笑う。蔵馬は苦笑しながらもそれに頷き、ベンチから腰を上げた。

「さつとあつた商店で何か買つてくるよ。一人は何がいい？」

いつもなら慌てて自分が行くといつ一人だが、今はそこまでの元気がない。気遣いをありがたく受けることにして、一人は蔵馬に任せした。歩いていく彼の背中が見えなくなると、一人そろつて溜

息を洩らす。

「もう今日も終わりやなあ・・・」

「そうですね・・・」

はやての言葉に、隣のシャーリーがゆっくりと答えた。藏馬がいなくなつたベンチに沈黙が下りる。今すぐこれを破らなくてはならないような、ずっとそのままにしておきたいような、そんな奇妙な葛藤が一人を伝わつて一帯に満ちていた。

しかし、そのとき二人の前に影が落ちる。藏馬が帰つてきたのだろうか、と一人は顔を上げたが、そこにいたのは三人の女性だつた。しかも、こちらに向かつて穏やかとは言いがたい視線をぶつけてきている。そんな目を向けられる覚えはないが、どうやら自分たちに用があるらしい。

と、はやてが漠然とそこまで考へた時、リーダー格らしき女性が二人の前にすいと進み出た。

「あなた達、藏馬様といつた方々ですわよね？」

「そ、そうですけど、何か？」

女性の態度にシャーリーは少し不安げに隣を見た。何故その名前が今出てくるのかとか、なんで様づけなんだという疑問を押し込め、はやては彼女の視線を真つ向から受け止める。隣の彼女と相手の雰囲気を察し、『部隊長』の顔を浮かべてながら。

「初対面の人相手に自己紹介もなしに詰問するなんて、失礼と違い

ますか？」少しどとしては、名前くらいは名乗つてからにして欲しいですね」

後ろの一人がはやての眼力に僅かに気圧される。さすがは仮にも機動六課をまとめる立場の人間だ。だが、先ほど口火を切った女性は、彼女の態度に眉を吊り上げた。

「まあ、蔵馬様とご一緒にいうのに品がないことですこと。何故蔵馬様がこのような女性と一緒にいらっしゃるのかわかりませんわ。そもそも、どのような目的であの方といふのですか？」

「目的なんてありません。今日はお互に都合がついていたので、三人で少し羽を伸ばしに来ただけです。部外者のあなた方にとやかく言われる筋合いはないと思いますが」

「部外者ですって？私たちは」「ついう者ですわ！」

はやての言葉に、彼女たち三人が一斉に上着を脱ぎ去る。はやてとシャーリーは目の前の光景に硬直した。その意味不明な行動原理もさることながら、一人が目を奪われたのは彼女達が纏っていた服である。そこには、大きな文字ででかでかとこう書かれていた。

「蔵馬様」「〇∨E！」

「蔵馬様は至高なり！」

「蔵馬様の敵は我らの敵！」

かなりどうかと思うデザインのTシャツで胸を張る三人娘。その根拠もなく偉そうな態度に合点がいった。同時にこう思つ。

馬鹿だ。こいつらとんでもない馬鹿だ。一瞬前まで問答に付き合つていた自分たちがバカらしく思えてきた。

どうやら、彼女達はファンクラブ（おそらく非公式）の会員か何からしい。街で珍しく藏馬を見かけたと思ったら、傍にはやて達のような女性がいたのでわざわざしゃしゃり出てきたところだらう。いい歳して暇にもほどがある。

「分かりましたか？我々は藏馬様を守る立場にあるのです。分かったのなら今ここで誓つてくださるかしら。今後一切、の方に付きまとわないと」

付きまとつているのはアンタラだらう、とこうシッ「ハハをどうぞ」と飲み込む。そして横にいるシャーリーに目をやつたはやては、とても珍しいものを見た。

普段は温厚であり、こいつらの状況では比較的気の弱い彼女が、むすつとした顔で相手を睨んでいたのだ。譲る気はないといった雰囲気がありありと出ている。そして、彼女と目があつたはやはては一瞬笑い、そして強い意思をその目に宿してはつきりと告げた。

「お断りします。私たちと藏馬さんは仕事場の同僚ですから、どちらにしても顔を合わせて仕事する仲ですしね。そもそも、あなた達の言葉を聞く理由があつませんから」

「それに、そんなことを藏馬さんが頼むなんて絶対にありません。あなた達こそ、ありがた迷惑といふ言葉を覚えた方がいいです。ストーカーになつてしまつ前に、自分のしたいことをよく考えたらどうですか？」

「うーー言わせておけばうーー」

一人の言葉に気分を害されたのが、女性が手を振り上げる。その目標はシャーリーだった。はやてが声を上げる暇もなく、向かられたシャーリーは田を見開くしかできない。

そして、風を切る音と共に撓つた平手が思い切り振り下ろされ、「やれやれ。女性であつても、無抵抗の相手に暴力を振るうのは関心しないな」

風よりも早くその間に割り込んだ影によつて掴まれ、寸でのところ止められていた。赤く長い髪がさらりと揺れる。

「「藏馬さんーー」」

「ぐ、藏馬様・・・ー?」

腕を掴まれた女性は、田を見開いて田の前の青年を見つめる。自分が追い求めた姿を見れたことに一瞬嬉しそうな表情をするが、すぐにはそれは成りを潜めた。いつも優しげな藏馬の表情が、見たこともないほど険しいものだったからである。

「ぐ、藏馬様・・・あのええと、これは、その・・・藏馬様を想つての・・・」

たどたどしく言葉を零す彼女に、先ほどの氣勢はない。ぱつが悪いような、何かに怯えるようなそんな様子だ。蔵馬は表情を変えないまま一瞬目を閉じて、再び彼女を強い瞳で見据えた。

「俺なんかのことを考えてくれるのは素直に嬉しい。それは本当だ。だけど、もし俺の大切な仲間を傷つけたら・・・俺は、君達を許さない」

「「ぐ、蔵馬さん・・・」」

はやてとシャーリーの頬が夕焼けより真つ赤に染まる。だが、それは同時にその他の者たちへの拒絶の意思であつた。

「う・・・うわああああん！..」

有無を言わせぬその声色。それも他ならぬ蔵馬からの言葉が利いたのか、リーダー格の女性は涙を浮かべながら走り去ってしまった。後ろの一人も半泣きになつてそのあとへと続していく。

彼女達が見えなくなると、蔵馬は一つ溜息を吐いた後ではやて達に振り向く。表情はいつも彼が見せる苦笑に戻つていた。

「俺が少し遅くなつたせいでこんなことになつてるなんて・・・」
「めんね。お詫びにはならないけど、一人とも手を出しだ」

蔵馬がポケットから何かを取り出す。一人は反射的に手を出し、そしてその上に乗せられたものに目を丸くした。

「蔵馬さん、これ・・・」

はやてが手の上に光る『それ』を見ながら呆然と呟く。蔵馬から渡されたのは、銀色の光を放つブレスレットであった。シャーリーはシンプルなストレートリングに数個の小さなリングが通ったデザイン。はやてのは少し幅広いリング面に十字架の彫が入っていた。どちらにも一人のイニシャルが刻まれている。

「近くに露店が出てるのを見つけて、そこで買ってきたんだ。安物だけだ」

「安物つて……」

シャーリーはブレスを見つめながら言葉を零した。アクセサリーにそれほど詳しいわけではないが、その輝きと手に伝わる重量感を見ればすぐにわかる。これは道端の露天商から買えるような代物ではない。明らかに、その手の方面からでなければ手に入らないはずだ。

だが、蔵馬はそんなことを億縞も出さず、微笑みながら言ひ。

「我ながら安直で申し訳ないんだけど、今田一田むけ合ひてくれたお礼、俺からのせめてもの感謝の気持ちとして、ね。要らなければ諦めるけれど、よかつたら受け取つてくれないかな?」

「も、もちろんやーこんな立派なもの貰つて不満なわけあらへん! ホンマにありがとう……!」

「す、すごく嬉しいです! 大事に、しますね……」

一人の返答に満足げな顔をした蔵馬が、そろそろ帰りましょうか

と促してくる。それにあぐれも體ごと、はやて達は藏馬の左右隣へと並んだ。

少しだけ冷たくなつた風が一人の頬を撫でる。血はかなりの暑さだったが、夜はまだ冷える日が続くやうだ。暗くなり始めた空に一一番星が輝き出していた。

(シャーリー、藏馬のこと好むやう)

「くえつーへ」

「へ、ビリウつたんですか、シャーリーさん？」

こきなり、本当に唐突に念話で紡がれた言葉に、シャーリーは飛び上がらんばかりに驚いた。手をわたわだと規則性なく振り、視線や顔は宙を泳いでかなり拳動不審っぽい。

「（い、こきなり何を言つたんですか！そ、そんなこと私は……）

不思議やうに見つめてくる藏馬に、動搖しながらも愛想笑いでこまかしながらはやてに詰問する。そんな初々しい反応の彼女に、はやては藏馬に隠れてニヤリと笑いながら続けた。

（「まかしても無駄や。今日一日、デバイス関連のことをやつとる時よりも、ずっと嬉しそうやつた。その舞い上がり方を見とればすぐわかる。やつを助けられたときなんか、もつすごいかったで？『私とおんなじ』なら尚更にな……）

「あ……」

そうだ。はやてが蔵馬に惹かれていることは、もつと前から分かっていた。彼女ほどの敏い人物なら、同じ気持ちを蔵馬に向ける者のことが分からぬはずがない。

シャーリーは見破られていたことに顔を赤く染めながら、黙つて彼女の言葉を待つた。

（ファンクラブのことは、前からフュイトちゃん達を通して何回か聞いた。けど、蔵馬さんの人気がここまで広がつてることはさすがに予想外やつたな。そういうえば、飛影くんの周りもおんなじようなことになつたるらしい。性格はアレやけど、姿形はイケメンそのものやからなあ）

はやてが悪戯をした子供のような笑みを浮かべる。事実、飛影の秘密は全て伏されているが、その存在は局員の情報網を通して世に流れ出していた。

ただし蔵馬とは事情が違い、彼の場合はその見た目のみで釣られる傾向が多いらしい。一度会つたり人づてで聞いたりして、彼の実態を知れば引いていく者がほとんどなのが救いだが、中にはあんな感じで冷たくされるのが好きつゝ、という物好きな女性もあり、ヴァイータやフュイトが頭を悩ませているのだと。閑話休題。

（ファンが付くのは止められへんけど、あんまり過激になつても困るから少し抑えなあかんな。私たちのことを抜きにしてもや）

はやてが意味深な笑みを浮かべて此方を見てくる。シャーリーはその視線を受け止めながら、同じく強気な瞳で相対した。

こんな気持ちになつたのは彼女も初めてだ。けれど、それはウソ

にできるほど小さくはない。念話はできないので、シャーリーさんは表情に全てを乗せた。

『負けませんから』

宣戦布告と同時に決意ともなる、ただ一つの感情を。

記念すべき初外伝なのに、なんだか「」のグダグダぶりは。

と、はやくも脱力感に襲われているコトணマです。改めて書いてみると、藏馬って扱いが難しいのなんのー台詞は幽助とか飛影みたいにガツンとやれないし、あまり敬語にしあがると不自然だし・・・

このにじファンを利用していとある作者様の「」好意で、別サイトにある藏馬主人公のクロス作品を読ませていただきましたが、改めてすごいと思いました。自分は藏馬を上手く操縦できないので・・・もつと精進せねば。

さて、次回以降の予定についてですが、なんともう一つの外伝を計画しています。こつちは飛影メインの外伝で、飛影がとんでもない田に遭う予定ですので、もうしばらくお待ちくださいませ。

今回ほどお待たせする「」はないと・・・思います。たぶん。色気もそれなりにつけるつもりですよ。あくまで当社比ですが。

ではでは、また次回にてお会いできることを願つております。

再見!
ツアイシヨン

外伝其の一が完成いたしましたー！

今回のお話はかなりハッチャけた内容となつております。つていうか、今までになく遊んでる内容です。

そして、文字数が少し多くなつてしまつたため前編後編構成となりました。外伝なのにお話が大きくなりすぎている気もしますが、そこはスルーで。

ではでは、外伝第一弾のはじまりはじまり～！！

「シャマルさん。」これが、例のモノです」

「え、蔵馬さん。もう出来たんですか？」

六課を裏から支える大黒柱、シャマルの城ことメディカルルームに一人分の声が響いた。声の主はいわずと知れたこの城の管理者シヤマルと、六課の緩衝剤兼癒し存在、蔵馬である。彼が癒し的な存在になつていていたなどと知れば、黄泉辺りが腹を抱えて笑いそうな話だった。

と、それはさておき、蔵馬が「それ」とした動きを見せた後、持つていた紙袋の中から一つの円柱型の透明なケースを取り出した。その中にはパチンコ球大の球が赤と青で分けられ、それぞれのケースに無数に入つていて、おそらく薬品関連の何かだろう。

「はい。難しいものはいくらでもあります、これは製造自体がそんなに難しいものではないので。とはいって、初めての試みですからね、参考になるでしょうか？」

「十分すぎるぐら」ですよ。私だけじゃちょっと難しいけど、意見を出し合つて改良していけば、きっといいものに仕上がるわ。あの子たちのバックアップが私の務めですもの、使えるものは何でも使わないとね」

シャマルはケースをバックに仕舞い、嬉しそうな笑みを見せる。蔵馬もそれに同調するように微笑んだが、少し真面目な顔つきになると一言付け足した。

「あ、でも扱いには気をつけてください。死ぬなどとこいつとはないですが、一応魔界のものなので服用すると・・・」 という副作用が出ますから。つと、そろそろいに時間ですね。さつき飛影たちも休むつて言つてましたし、一緒にカフュへ行きませんか？」

蔵馬が紳士オブ紳士な態度でシャマルを誘う。彼の言葉に含まれていた名前に反応したのか、シャマルは大仰に頷いた。

「ひ、飛影さんもー？そ、それなら是非、もちろんーあ、私は隣の部屋の最後の荷物を片付けてなくてはならないので、蔵馬さんは先に行つて、その・・・」

「ふふ、大丈夫ですよ。飛影はちゃんと引き止めておきますから」

「あ、ありがとうございます。早く済ませてきますね！」

言つが早いが、ぴゅーっと駆け出していくシャマル。蔵馬はそれに苦笑しつつ、席と飛影を確保するために部屋を後にした。

だが蔵馬が部屋を出て数秒後、それを見計らつていたかのようにな、蔵馬が出て行つたドアがキイツと開いた。

「フフ・・・・・・」

突如現れた不気味な声に気づく者はいない。誰もいない部屋で、その視線はシャマルのバックへと注がれていた。

カフェは毎時も近いといふこともあり、テーブル席はほぼ埋まっていた。その中の一角、やや入り口よりの丸テーブルで談笑する四人の姿があった。

メンバーは、なのは、シャマル、ヴィータ、リインフォース?、そして言わずもがなの飛影である。蔵馬は気を利かせてお茶菓子を取りに行つており、現在はこの五人で卓を囲んでいた。

先ほどまではお茶を持ってくれたはやてもいたのだが、来てすぐには仕事があるといつて退席してしまっている。部隊長は忙しいんやと連呼していたことからして、ほんの数分の休憩だつたのかもしない。

「ふー・・・午前はこれで終了か。みんなも第一段階へ進んでも問題なさそうだね」

「ああ。アイツらも少しは形になつてきたみてーだしな」

なのはの独り言にヴィータが笑みを見せながら返答する。なのはと飛影の一件以来、新人達は目を見張る速度で成長していた。まだ信念といつには程遠いが、心に何かしらの決意を持つことが出来たからであろう。

「そのぶん怪我も増えてきそうだナビ」

シャマルは少し心配そうに言つものの、その顔は笑っていた。仲間の成長ぶりが嬉しいのは彼女も同じじらしく、これからの方針を二人と言いつけている。

飛影は淹れられた紅茶をゅうべり飲みながら、その会話に呆れたように割り込んだ。

「フン・・・偉そうな台詞はアイシラの甘さを全て抜けてさせてから言え・・・ああ、だがそれは教導官譲りだつたか。これでは奴らも苦労するはずだな」

「あー、またそういう事言ひつい。飛影くんたら、戦いに関してのことはホントに鬼なんだから・・・いつつも睨んでばかりだし、そんなじや女の子に嫌われちゃうよ?」

飛影の分析に、なのはが頬を膨らませて軽口を返した。そこに先日までのギスギスした雰囲気はもう無い。素の笑顔を見せながら接していくなのはに、飛影は口の端を吊り上げた。

「一向に構わん上に余計な世話だ。それに、陰で魔王などと呼ばれている女に言われたくない」

「ああ、それはあたしも同感」

「ちよー?ヴィータちゃん、少し酷くない?」

「あはは、でも明るくてたのしーですっー」

リイーンの声でテーブルに笑いがはじける。シャマルはそれにくすりと微笑み、相も変わらずの仏頂面で紅茶を飲む飛影に声をかけた。

「飛影さんはどうするんですか。午後の訓練、参加します?」

「フン、悪い冗談だな。午後は藏馬だ、わざわざ面倒を抱え込むほど物好きじゃない。オレは好きにさせてもら……」

と、出掛けていた言葉を呑み込み、飛影が止まった。いつもの如くクールにかわされると思っていたシャマルは、不思議そうに首を傾げる。そして、怪訝な表情をする彼女の目の前で、

「ぐ・・ア・・・・ツ!?

飛影は突如、テーブルに倒れこんだ。バターンッといつ音を盛大に響かせた、それはもう遠慮の無い見事な倒れっふりだ。驚いたのは周りにいたなのは達である。

「え? え! ? ど、どうしたの飛影くん! ?」

「お、あい! フザけてんのか! ? が、顔を上げろよ! ? なあ、あい!」

「ひ、飛影さん! しつかりしてくださいです! ?」

いきなりの事態に、少女たちは混乱しながら口々に嘆きたてた。動搖がカフェ全体に伝わり、どよめきが各所から上がる。それを聞きつけた藏馬がトレイをそそちのけで飛んできた。

「なのはちゃん! 一体これは……?、飛影! ?」

「ぐ、蔵馬さんつー飛影くんが、飛影くんがあつー。」

「落ち着いてなのはちやん！飛影がどうしたのか、さつきまでのことを説明してくれ！」

なのは達は自分達が見たこと、その会話や状況、後は思いつく限りのことを蔵馬に伝える。蔵馬は赤い顔で唸りを上げる戦友に近寄り、その身体を慎重に調べる。

そして、触診と考察を段階を経て済ませると、ハツとしたように飛影を見据えた。その表情が徐々に確信的なものへと変わっていく。なにかに思い当たる節があるような顔だ。

「これは・・・まさか『邪快丸』の症状！？だが、あれはさつきメディカルルームでシャマルさんに預けたはず・・・シャマルさん！」

「え、ええ、確かよ！蔵馬さんから受け取つて、このバックの中に・・・えつ、ふ、蓋が開いてる！？」

見ると、密閉されていたはずの容器の蓋が僅かに緩んでいる。ヴァイータは自分達そっちのけで話を進める一人に向かつて怒鳴つた。

「お前らだけで話を進めんな！何なんだよ、その邪快丸つて・・・」

他の者も、言葉にはしないが説明を求める視線を送つてくる。蔵馬がシャマルの持つ容器を見ながら、少し早口で話し始めた。

「邪快丸は魔界にある薬草を用いて生成された、特殊な療養効果を持つ丸薬なんだ。ひとたび飲めば、傷や疲労、枯渇した妖気や靈氣、

おそれくは魔力なんかも完全に回復するような脅威の代物さ

「す、す”に薬なのです！」

「けど、それなら何で飛影くんが苦しんでるの……？」

なのはが机にしがみ付く飛影と寄り添つよつにしているヴィータを見ながら、心配そうに藏馬に尋ねる。すると、その横にいたシャマルが代わりに口を開いた。

「邪快丸の効力は確かに強力よ。けれど、それだけのメリットを持つが故に、邪快丸には相応の副作用が存在するの」

シャマルの言葉に「副作用？」と首を傾げる一同。藏馬は全員からの問い合わせを受け取ると、シャマルの説明の続きを口にした。

「ああ。邪快丸の本効力が現れるまでは個人差があるけれど、だいたい約一日かかる。それまでの間、飲んだ者には頭痛や発熱、間接や筋肉の激痛、吐き気に眩暈などの副作用が常時発生するのさ。しかも、潜伏期には妖氣や靈氣といった力は一切使用できないんだ。簡単に言うなら、相当ひどい風邪にかかっているようなものだと思つてくれればいい。けど、心配ないよ。これには解除薬があるから、すぐに治る」

全員がほつと息を吐く。病気などではなく、すぐに回復するのならとしあえずは安心だ。

「はあ、驚かせんじゃねー、悪い病気かと思つたじやねえか……ん？でもよ、なんでそんなもんがこんなとこにあるん「あああああつ！？」だああ！うつせーぞシャマル！今度は何だよー！」

ヴィータの言葉を遮るようにして、シャマルから悲鳴が上がった。バックをひっくり返しながら、しきりに何かを探している。そして、目当てのものが見つからないうことを悟ると、蔵馬の方に泣きそうな顔を向けた。

「な、無いのよー。一緒に入れておいたもつ一つのケース……解除薬の容器が無くなってるのー。」

「「「ええつー?」」」

全員が驚いて彼女のバックを見やる。その中には、確かに赤い色の球が入ったケースが一つしか見当たらなかつた。纏まりかけていた話が再び拗れ始める。

「あれは魔界産の代物……軽くセキュリティは掛けをおきましたから、この建物からは持ち出されていないはずだ。俺が探してきます、みなさんは飛影を休ませていてくださいー。」

しばらく考へに耽つていた蔵馬が、カフェから飛び出しついた。とつあえずは彼に任せれば大丈夫だろー。

だが、

「くつ……ナメや、がつて……。」

希望的観測とは常に裏切られるものだ。少し安堵する四人を尻目に、いきなり飛影が立ち上がつた。そして、あるいはとか蔵馬の後へ続いて出よーとしたのである。

なのは達は彼の行動にさせよつとして、その体を慌てて押し留めた。

「飛影くんー? ダ、ダメっ、藏馬さんも言つてたでしょー? 動いちやダメだよ!」

「なのはの言つ通りだぜー! どっちにしたって、一日経てば治るんだろー? なら、今無理して探しでもしょつがねえじゃねえかー! ほら寝てろつて!」

「ヴィータちゃんの言つ通りなのですー! 薬は私達が責任持つて探しますからつー!」

「そ、そうですー! 病人は安静が第一と言こますしー!」

なのはを初めとし、四人は飛影に駆け寄つてその行動を止めようと/or>する。傍から見れば、温かく優しさを滲ませる光景だ。もちろん、なのはたちの本心の『半分』がそこにあり、実際ヴィータとリィンフオースは純粹に心配していた。

だが、もう半分はどうとそれとは真逆のところにある。なのはとシャマルは心配しつつ、大丈夫だと分かった瞬間に並列思考で違うことも考えていた。

彼女たち一人の心中を示すといつだ。

「棚からぼたもち、またと無い看病チャンスピックチャンスイベントーお世話も存分に出来るし、これを機に彼との距離を一気に縮められるかもしねー!」

・・・つまりはこの偶発的に出来た事態に何かと理由をつけて、飛影と一緒にいたいのであった。あわよくば・・・などと策謀らいものを巡らせているところは、決して悟られてはならない。乙女の心中は存外に黒いのである。

だが、そんな乙女の内心を知らずとも、飛影の考えは変わらない。元々が施しや逃げ道を嫌う性格の彼だ。そんな方針に対して素直に納得するわけが無い。

そして何より、自分にこんな罠を仕掛けた相手を、彼がみすみす逃すはずも無かつた。

「邪魔を、するな・・・つ・・・・・・指図、は受けん・・・!」

押さえようとしたのは達を振り払つて、飛影は駆け出していく。ひどい風邪を召しているとはいえ流石は魔界の猛者、並び立つテーブル群の間をあつと/or>う間に駆け抜け、その姿を廊下の端へと眩ませた。

遅れる事しばし、なのは達もカフェの入り口から飛び出す。

「私達も追わなきや！急いで三人とも一飛影くんより先に解除薬を見つけるんだよつ（私が看病するんだからつ）！」

「お、おおー？わかつた！（な、なんかえらく気合入つてんな・・・）」

「私はもう一度メディカルルームを探してみます！（何としても確保しなきゃ……！）」

「私ははやてちゃんとかに聞いてみるですっー（待つていてくださいね、飛影さんっ・・・・）」

言葉を置いて、各自の目的をすべく走り出す面々。

ひつして、様々な思惑が交差する中、休日の午後は幕を開けた。

- Side out -

（解除薬は・・・じこだ・・・早く、見つけなければ・・・）

荒い息を吐きながら、飛影は廊下を疾駆していた。会った人全員を引きとめて聞くが、いまだ芳しい返答は得られていない。いつものように千里眼透視ができればいいのだが、現在では妖氣を封じられていて、それすらもままならないのだ。

イライラつきを隠さうともせず、飛影は次の部屋を目標す。そして、ちよつと右に位置していた扉の一つを押し開けた。

「あれ、飛影？」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。響いた声に顔を上げると、そこには制服姿のフェイトだった。

調べ物でもしていたのだろう。棚から取り出した分厚い資料本を片手で開きながら、こちらを見ている。表情は予想外の来客に驚いたかの如く、どこまでもきょとんとしたものだった。

「フェイト、か・・・ちょうどいい、貴様、このくらいのケースに入つた・・・ハア・・青い丸薬を、見なかつた、か・・・？」

藁にも縋る思いで飛影は問いを口にする。半ば諦めの質問だったが、返ってきたのは初めての色よい答えだった。

「青い丸薬つて・・・ええと・・・それならどこかで見た気が・・・」

「な、何つ！？何処だ！」

「え？ひえ・・・きやあつ！？」

息を荒げながら飛影が詰め寄つた。体当たりを受けたように体勢を崩し、フェイトの背中は鈍い音を立てて壁と接する。その拍子に、持つていた書類がバサバサと音を立てて床に散らばつた。

飛影に押さえつけられたフェイトが、何が起こっているのかわからぬといつた様子で目を白黒させていた。だが、押さえつけた当の本人はそのまま力を緩めることなく、彼女へと身体を寄せた。

「解除薬を・・何処で見た・・・！ハア・・ハア、言え！」

「ちよ、ひ、飛影！？い、一体どうし・・・え・・ええつ！？」

フエイトは動搖の声を上げるも、風邪に似た症状のせいで意識が覚束ない飛影には届かない。加えて力の加減が上手くできず、かなりの強さでフエイトを壁に押し付けてしまった。

密着した身体の間、彼女の前面にあるふくよかな何かがもにゅもにゅっと潰れる。フエイトは考えもしなかつた事態に、顔をこれ以上ないほど真っ赤っかにしていたが、飛影は目的を遂げることしか頭にないため、完全に意識の外であった。

「どうか方に一つに考えていたとしても、意識とともに感覚もかなり薄れてきているため、それを気にするどころか認識する余裕もないだろ」が。

飛影がさらりと顔を寄せた。フエイトは「く、はつ・・・」と熱い息を吐いて田を閉じ、近づいてきた飛影から顔を逸らした。

「あう・・・そ、そんな飛影・・・いきなり乱暴すぎ、だよ・・・あんつ、だ、駄目・・・そ、そこは・・・ふああッ・・・」

「妙な声を出すんじゃ、な「・・・赤くなつていないで、せつ」とオレの質問に答え・・・ぐうつ！？」

度重なる頭痛が飛影を襲う。生まれてこのかた風邪になったことなど皆無であつたがゆえに、そのダメージは大きい。邪眼の手術や戦闘によるものなど、外部からの痛みなら売つて歩けるほど受けた彼だが、内部から生じる苦痛には慣れていないのだ。

だが、弱り田に祟り田とは言つたもの。痛みで顔を顰めた飛影の隙を突くようにして、資料室の扉が開け放たれた。

「フェイトちゃん、ここにいるの？ちょっと聞きたい」と……が。
・
・

入ってきたのは同じく飛影の事情を知る少女、高町なのはである。フェイトに薬のことを聞こうとしてここに来たのだろうが、彼女は扉を開いた体勢のまま、瞬間冷凍を受けたように硬直していた。

その視線は彼女の目の前、寸分違ひ無くある一点に注がれている。すなわち、壁を背にしたフェイトと飛影が正面から至近で相対しているという、ちょっと理解し難い状況にだ。

さて、今の二人を客観的に見てみよう。

飛影の左手は身体を支えるように正面の壁に置かれ、もう片方はフェイトのか細い両手首を掴んで、その頭上の壁に押し付けている。また、彼の片膝は動きを封じるためフェイトの両太股の間に差し込まれ、触れ合わされたその距離はゼロというか既にマイナスの域だつた。具体的に何が、とは言わないが。

さらに彼女の持つ最大武器の一つ、もはや敵なしとまで言われた一つの核弾頭も、飛影におもいきり押し付けるような形となつてしまっていた。女性的火力が他と比べて高い機動六課だが、その中でも群を抜いて最強とされるフェイトのリーサルウェポン。

そんな乙女の最終兵器が飛影の胸板によつてむにゅりとその形を艶やかに崩し、視覚的な方面から存分に猛威を奮つてゐる。純情を地で行くエリオなどなら、鼻血を吹いて卒倒しそうな光景だ。

「ふ・・あん・・う・・・・・・」

そして、視線を横に逸らすフェイトと飛影の視線的距離感も加味せねばなるまい。僅かに視線を逸らす彼女に対し、（熱で）赤くなつた飛影の顔は息も容易くかかるほど距離にあつた。邪推すれば、キスをする寸前ともとれる。

無論彼からすれば、逃亡を防ぐためと相手を問い合わせるためにとつた無意識の行動であつた。まかり間違つてもその心に他意はなかろう。なんたつて飛影であるがゆえ。

しかし、第三者はそうは思わないのが世の常だ。言葉が交わされない今、自分の見たことから判断するしかないからである。そして、その視覚情報が告げるフェイトの態度もかなりますかつた。

まず飛影と壁とで物理的に封じられている身体は、身動きが取れそうにない。だがこれほどの至近、普通の男女の距離感ではありえないほどにまで接近を許しているといふのに、彼女が抵抗らしい抵抗を見せているのは視線を外していることだけ。

自らのパーソナルスペースをほぼ掌握されているにも関わらず、距離を詰められることを拒んでいる様子は見られない。寧ろ、身じろぎをする度に制服が着崩れていく様子が何だか誘つているようにも見え、妙な艶かしさを帯びていた。

加えて、まとう雰囲気も等しくヤバかったのがよくない。いつものクールフェイスはそこになく、浮かぶ色は子猫のように弱弱しいものだった。だがそれ以上に甘く濁み、切なさを感じさせる色は、平時であれば誰もが思わず息を呑むほどだつただろう。

吐く息は荒く、熱に浮かされたように上氣する表情は、彼女を実年齢より幼く見せる。トドメに深紅の瞳は水気を帯びてしどに潤

み、何かを期待するが如くとろんとしていた。男でなくとも思わず見惚れてしまつほど際どい、神がかつた惱殺フォームである。

ここまでの要素が揃えば、恋人的ワンシーンが一秒で出来上がるの、誰が相手でも確実であった。それこそ小学生にだつて分かる。

再三にわたり飛影の名誉のために言つておぐが、フェイトはともかくとして、彼にはまったくそのつもりも氣もなかつた。余裕がなかつたためか見た目はすごいが、彼の性格をよく知る藏馬などなら、まずそちらの方面から考えたであらう。

次の瞬間には分かりながらも要らぬ氣を利かせただらうが。

だが傍目からすれば、無抵抗な女性と氣の逸つた男性の構図にしか見えないのもまた事実だつた。重要なのは周りがどう思つか、これに及ぶる。

しかも、それを見たのが同じく飛影に想いを寄せる者であれば、この後の展開は考えるまでもない。俯いたまま視線を上げず、感情がすべて欠落したような声色でなのはは問いかけた。

「何を・・・してゐるのかな?・・・飛影くん・・・」

「ハアハア・・・何を、だと・・・?そんなもの、見ればすぐに・・・」

「そりだよね。私でもそれぐらいは分かるよ?でも・・・」

何だか会話が噛み合つていないような気がした。場の空気が変化したことに、怪訝そうな顔をしてフェイトから視線を外す。そのま

ま文句でも言つてやるつかと思ひ、なのはへと視線を延ばした飛影は・・・息を呑んだ。

何にとは言わない。田の前の少女にある。

「でもね・・・・・人見てるつていうのに・・・私が目の前にいるつていうのに・・・・かまわずに続けるなんて・・・・隨分といいで胸だね・・・・!？」

飛影が目を向けた先には、全身を波打つように戦慄かせた魔王が降臨していた。背後から黒々としたオーラを迸らせ、相棒のレイジングハートを起動状態にして佇んでいる。そのデバイスからも怯えた様子が伝わってくるのは、きっと氣のせいではないだろう。

あまりにもぶつ飛んだその気迫は、飛影は一步下がらせぬほどものであった。熱が引いていなはずの背中に走るのは寒気だ。S級の上位妖怪と対峙したときにすら、ここまで恐ろしさは感じたことがない。

(い、一体ヤツは何者なんだ・・・・!?)

知らず冷や汗が流れ、飛影はそのことを真剣に考え始める。だが、どれほど考察を重ねようとも明確な答えはでなかつた。

朴念仁もここまで来ると、もはや鈍感では済まされない。そんな乙女の嫉妬がかくも恐ろしいものだといつことを飛影が知るのは、まだまだ随分と先の話である。

「ひ、飛影・・・・」

そんななか、今まで黙っていたフォイトが飛影の名前を呼んだ。緩んだ拘束から手を抜け出させ、彼のコートをはつしと掴む。

飛影は彼女に打開の光を見出そうとするが、その様子は少しおかしい。何だか雲行きも怪しい動きを見せていた。そして、背筋に言いようのない不安を感じると、彼女が薄く口を開いたのはほぼ同時。

フォイトは潤んだ目で飛影を見上げ、

「お、お願、い・・・少しだけで・・・・・最初だけで・・・・・いい、から・・・・・や、優しく、して・・・・・?」

この場で最大級の爆弾を投下した。

ブチイツ！――！

何かが盛大にキレた音が聞こえた。全身に戦慄が走る中、なのは無言でレイジングハートを掲げる。建物全体が揺れるほどの魔力が彼女の周りを荒れ狂っていた。

そして、初めてその顔を上げる。

「飛影くんの・・・」

彼女は幼子のように「ふにゃ」と表情を崩す。そして唇を硬く引き結び、鼻はすんすんをせ、目に涙を一杯溜めて、

「浮氣者おおおおッ……うわあああああん……」

収束した魔力を思い切りぶちました。盛大に溢れる彼女の涙と共に桃色の奔流が一人を飲み込み、視界が真っ白に染まる。爆発音がありとあらゆるもの引き連れて轟き、部屋そのものを盛大に吹き飛ばしていった。

病人は劳わりましょ。あと、理不尽すぎる言いがかりとハッ当たりはやめましょ。うね、なのはさん。

そんなこんなでも、飛影の受難はまだ続きます。お話は後編へ！

・次回予告・

作者「台本は渡つたが、では、はじめるとする。3、2、1…スタート…！」

なのは「フハイトちゃんと共に吹き飛ばされた飛影くんは、痛む体に鞭打つて再び行動を開始します」

スバル「戦場で培つた気力だけを頼りに進む飛影さん…。とか、吹き飛ばしたのはなのはさんじゃ…。「ジャキンッ」な、なんでもないですっ！」

フロイト「しかし……あれ……「フロイトさん、ここです、この」あ、ありがとうティアナ。えっと……彼を待ち受けるのは女難といづ名の試練だった……って、ええつ……まだあるの……？」

リイン?「鬱々銃娘に能天氣突撃娘、そして妄想逞しい伏兵まで現れて、六課はもう大混乱!」

ヴィータ「せらこは飛影に襲い掛かる貞操の危機……って、なんだよ!」れ!?」「

キヤロ「そして、体がだんだん動かなくなるお兄ちゃん……」

エリオ「一体兄さんはどうなつてしまつのか……兄さんの救世主はどうなつるのか!」?

ティアナ「そして事件の黒幕とは!?」

飛影「……次回、『外伝 邪眼師はお熱!』良薬は体に酷し(後編)』を……!」

全員『んづ』期待!……』

なのは「飛影くんは……飛影くんは私が看病するの!」

飛影「戯言の前に薬を探せ!……』

シグナム「おい、私達の出番はないのか?」

桑原「出張中だろ。次の機会じゃね?」

シグナム「ううう……ぐ 悔しくなんかない！ ないつたらないん
だあつ！」

藏馬「……とこつ感じでお願いしますね」

はやて「お楽しみやでークシシのシ」

外伝前編でした。

いやー、自分でもやりすぎな感じはしたんですが、改めてみても今回はとことんカオスですねえ。というか、早くもフェイトがすごいことに……（汗）、これホントに大丈夫なんでしょうか？

飛影にとって今だ嘗てないほどの災難が降り注ぐお話となってしましましたが、偶にはこんなのもいいのかな？なんだか、負けず嫌いの子供を見ている感じですね。なのは達にとつてはまたとないチャンスなんでしょうが（笑）。

ではここで今回初出となるオリジナルアイテムの説明をば。

-邪快丸-

正式名称を『療紅玉』とする、魔界に存在する薬草から藏馬が製造した丸薬の一つ。飲むと風邪に似た症状を引き起こし、一日一日ほど寝込むほどの高熱が出るが、それを過ぎると身体の傷から体力まですべてが完全回復する。一応解除薬はあるものの、使えば効果はなくなる。とはいって、現段階では負担が大きすぎで人間のけが人などには耐えられないため、正式に処方するためには改良が必要不可欠。

さて、一体これからどうなるのか……この続きは書き途中でまだ二割ほどなので、すぐに掲載は出来ないと思います。お待たせして申し訳ありませんが、気長にお待ちいただければと思います。

それではまた次回でお会いできることを願つて。

再見！
ツアイイツエン

やっと完成いたしました、外伝シリーズ第一段の後編です！

本当にお待たせです。それほど時間はかかるないとか書いといて、ホントにすみません！ 小説を書く時間があまりとれず、また急遽入ってきたメッセージの要望に答えるために頑張つていたらいつの間にかこんな時間に……重ね重ね申し訳ありませんでした。

飛影がとんでもない日に遭つた前回ですが、今回も波乱の予感です
よ～！

それでは、張り切つて行つてみましょ～！～！

「ぐつ・・・・・・なのはのヤツめ・・・治つたら覚えていろ・・・！」

なのはによる恐ろしい砲撃から数分後の廊下。怨嗟の言葉を口に吐出して支えにしながら、飛影は壁伝いに練り歩いていた。

風邪の症状は酷くなる一方であるが、それを気合で押さえつけ、引き続き隊舎の中で解毒剤を探して回る。先ほどの一撃で気絶したフェイトは、中庭の辺りのベンチに捨て置いていた。

入る部屋を全てチェックしているのだが、目標はまだ見つかっていない。さらに、動きすぎたせいか熱が上がってきていた。もうあまり時間は掛けられない。

「・・・・・あれば・・・・・」

と、一階のロビーでティアナとスバルが寛いでいるのが見えた。おそらく休憩中なのだろう、笑顔を浮かべながら談笑に花を咲かせている。飛影が近寄っていくと二人とも此方に気づいたようだ。

「あー、飛影さんだ！ ここにちはーー！」

「えつ・・・あ・・・ひ、飛影さん！？」

スバルは手をブンブン振り、ティアナがぎくりとして此方を向く。が、しばらくしてその様子が少しおかしいことに気がついたのか、二人は首を傾げながら駆け寄ってきた。

だが、それを悠長に待つ余裕などない。もはや一刻の猶予も無いのだ。前置きを全てすつ飛ばし、飛影は単刀直入に切り出した。

「スバル・・・ランスター・・・・・この辺りで・・・青い丸薬が入った・・・ケースを、見なかつたか・・・・!?

「青い丸薬入りのケース、ですか・・・?」

「うーん・・・私は見てませんけど」

首を捻る二人に疲労が加速する。飛影は「・・そつか」と言つて重い息を吐いた。イラつきは着実に積み上げられていくが、ここで彼女達に当たつても仕方ない。

「・・・手間を・・取らせた、な・・もし・・見かけた、ら、オレに・・ぐ・・うあつ!?

時間もないのに、飛影は踵を返そうとする。しかし、ここまで無理と先ほどのダメージが祟つたのだろう。足がもつれ、前のめりに倒れこんでしまつた。が、ぽにゅんという感触と共に、倒れかけていた体が止まる。

「は、はひやいつ!? ひ、ひひひ飛影さん!?

そこまではよかつたのだが、立ち位置が悪かつた。飛影の顔面が着地したのは、なんとティアナの胸元であったのである。フェイト

やシグナムほどではないが彼女もかなり大きく、倒れこんだ飛影の頭をその衝撃吸収力でもって見事に受け止めていた。無論のこと何がとは言わないが。

自分に向かつて唐突に飛び込まれた彼女は、顔をボツと朱色に染めつつも、倒れかけた飛影をあわあわと抱え上げる。いきなりのことにテンパツて呂律が回つていなかの、その声は何だか妙な感じに聞こえた。

「は、はふつ・・・飛影さ・・ひんつ！？ む、胸に息が、かかつてえ・・んう・・・！」

歳の割に弾力豊かな感触に受け止められ、飛影は熱を吐き出すようには呼吸を繰り返す。至近から感じる、弱ついていても力強い身体の感触に、ティアナはぶるつと身を震わせた。同時に吹き付けられた息によつて、背中から何かが這い上がつてくるような感覚を覚えさせられる。

「ぐ、そ・・・もう、体が・・・思、うように・・・」

熱がかなり進行してきているのか、飛影の意識は朦朧としはじめていた。平衡感覚が薄れ、グラグラと地面が脈動しているようになら感じる。と、そこで今まで機能停止していたスバルが、親友に抱きつく飛影の姿を見て、ようやくの再起動を果たした。

「テ、ティ、ティ、ティアツ！ 飛影さんにいきなり何してんのっ！」

「わ、私じゃないわよ！ で、でも、どうしたんですか・・・なんか顔も赤いみたいですけど・・・」

ティアナの胸元に顔を半分ほど埋めたままの飛影に、二人は心配そうに声を掛けた。今だ体勢が体勢、相手が相手なだけに、周りにいる男達の妬みと羨ましさが殺氣を帯びた視線に乗つて漂つてくる。

しかし、そんな中でもティアナやスバルに怒りの色はなく、ただただ胸元が接していることの恥ずかしさと、飛影の様子に困惑うばかりだった。スバルなど、「替わってよ、ティアあーー！」と横で喚いているぐらいである。

普段の態度がいかに重要なかということが、実によくわかるシーンであった。もしこれがヴァイスとかだったら、問答無用で吹き飛ばされていたこと請け合いだ。

だが、心配されながらも飛影はようようと起き上がり、重くなつた自分の体を離そうとしていた。普通なら意識を失うほどの症状だというのに、凄まじい氣力の為せる業である。荒い息は隠せないが、彼自身もこれ以上の醜態は御免であった。

「・・・よろけた、だけだ・・・し、心配など・・・要ら、ん・・・」

「よろけただけって・・・とてもそんな風には つて、えつ！
す、すごい熱つ！？」

「それに、よく見たら服もボロボロじゃないですか！ 一体何がどうしたつて言うんです！？」

飛影の体に帯びた熱と、その傷ついた出で立ちにスバル達は目を剥いた。だが、飛影にはもはや詳細を答えていた余裕などない。力を振り絞り、彼女から体を振り切つた。

「何でも……な、いつ……オレ、は……もう、行く……から、
な……」

言葉と共に飛影は駆け出す。あらゆる痛みが体を苛み、足はもつ
れて倒れこみそうになりながらも、それを気力で押さえつけて飛影
はひた走った。後ろから声や足音が響くが、今は構っている時間が
ない。

丁字路となつた廊下の突き当たり、少し大きめの扉が付けられた
部屋へ飛び込む。そして、その中にいた白い後姿に向かって飛影は
駆けた。同時にその人物が振り向く。

「あ、飛影さん。ここには薬はなかつたんですが、そりはびつ・
ふむぐつ！？」

声を発そうとした白衣の人物の背後を取り、一瞬にして口を塞ぐ。
またもや見た目的にヤバイが、四の五の言つていられる状況ではな
かつた。

「むーつ！？ むーつ！？ むつ！？ んう・・・・・」

上がつた抗議の声を、鬼気迫つた一睨みで黙らせる。そのまま静
かにしていると二人分の足音が近づいてきたが、しばらくして今度
は逆に遠ざかっていくのが聞こえ、やがて消える。飛影はそのこと
を確認すると、安堵の息を吐きながらその手を離した。

「ふはつ・・・・・ひ、飛影さん・・・・・大胆です・・・・・」

そこに至つて、『彼女』はようやく解放されたようだ。顔を赤く

しながら息を吐くのは、六課の健康管理責任者、シャマルであった。

「ぐ・・・この・・・寝言、は・・・寝て、から・・・言え・・・
ハア・・・ハア・・・・」

医務室の白い壁に背を預けながら、途切れ途切れに悪態を突く飛影。だがその様子にいつもの自信は欠片もなく、とにかく苦しそうだ。浅い呼吸を繰り返す飛影に、シャマルはおずおずと進言した。

「あの・・・少しお休みになつたらいかがですか？ お疲れのよう
ですし・・・ここは私が見ていますから」

「なん・・・だと・・・？ こん、な・・・ときこ・・・ふせけ・・
てる・・・場合、か・・・！」

「こんなときだからです。それに、そんな状態じや見つかるものも
見つかりませんよ？ 大丈夫です、Closeにしましたから誰も
入つてはこないでしようし、体を休めて次に備えるのも立派な方策
です」

飛影の凄まじい形相にも動じず、安心させるような笑みを浮かべたシャマルが優しく言つた。助けたいという純な心が向けられているのがわかる。さすがは医療官と言つたところだ。

尚も何か言いたそうにしていた飛影だが、彼女の言つことが正論だということにも薄々気づいていたのだろう。苦い顔をしながら言つた。

「く・・・仕方・・・ある、まい・・・悪いが・・・そつさせて貰う
と、しよう・・・ただし・・・何かあれば、すぐに・・・知らせ、る。

いい、な・・・ハア・・・・

いかな彼とて、背に腹は変えられない。言つが早いか、飛影はベッドの上にじろんと寝転がつた。既にと、いうかどうに限界だったのであろう、息を落ち着かせようと深い呼吸を繰り返している。

シャマルは冷水に浸したタオルを、その額へと乗せた。表情はまだまだ辛そうだが、幾分楽になつたようにも見える。

それを確認して僅かに微笑む。病人には安静が一番だ。安堵の息を吐き、カルテでも書き込もうと背を向けようとして、シャマルははたと思い当たつた。

今この部屋には彼と自分しかいない。辛そうな彼を世話することと医務官としての職務モードですっかり忘れていたが、これは凄まじくおいしい状況ではないか？

（わ、私つたら、何を考えてるのかしら！？）

シャマルは一人ぼつと顔を赤くした。だが搔き消そうと思つても、一度思い浮かべてしまつた邪念は簡単には消えない。むしろ時間と共に肥大化し、エスカレートしていく。

一人きり・・・しかも自らの思い人と同じ部屋でと、夢で見るような絶好のシチュエーション。誰でなくとも、気が昂ぶるのは当然である。

しかも、その標的は虫の息（？）だ。熱が苦しいのか、額を腕で覆つようにしながら息を荒くしている。それを見て、シャマルはごくじと喉を鳴らした。

完全なるまな板の上の鯉。今の彼の関する『奪権は、すべて自分の手の中にあると言つて良い。しかも先ほどからの飛影の様子に、シャマルは持ち前の母性本能をひびくべくぐらっていた。

「ウフフ・・・いいチャンスじゃない。モノにするなら今ね」

脳内に悪魔シャマルが現れた！

怪しい笑みを浮かべながら、試すよつに此方を見ていくる（脳内ビジョンです）。いきなり来た平常心を揺さぶるよつな発言に、シャマル（本体）は動搖してしまつた。

（モ、モモモ、モノにするつて・・・私に何をやせらる氣！？）

「クスッ、分かってるくせに。ホントは恥ずかしがりなのに、自分に懲々言わせるなんて、我ながらかなりマニアックな趣味してるわね。まあいいわ、まさか今の状況を理解できないほどお子ちゃまじやないんでしょう？ なら、手つ取り早くここで作つておけば、後々なにかと有利だと思わない？」

（つ、作るつて、何を・・・？）

脳内に悪魔の声が反響する。そして大いになにか企んでます、といつよつな意地の悪い笑みを見せて誘つよつに告げた。

「フフ・・・あ・せ・い・じ・じ・つ」

「はへうーー？」

自分の（脳内）発言にて、シャマルは顔を真っ赤にして鼻を押された。頭の中ではいえ自分で言っておいて照れるとは実に世話ない、といふか傍から見てもかなりどうかと思つ光景である。

しかし、即座に天使シャマル（脳内理性）が登場。鉄の意志力と貞操観念を誇示しながら、甘美な誘いへの対抗呪文を連ねはじめた。

「ダ、ダメよつ、そんなの絶対ダメ！ シャマル、よくお考え下さい。貴方は管理局の医務官よ？ この六課の旨を守るべき存在なのよ？ そんな人を労わるべき立場の人間が、無抵抗の人を相手に、い、一体ナニをしようとしているの！ そ、そういうのはもつとう、お互いに尊重し合つて、ゆつくり進めるべきでしょうー？」

「フフフ・・・そんなこと、後からいくらでも出来るわ。それより、このまたとないチャンスに、覆せない切り札をしつかりと作つておぐべきじやなくて？」

顔を真っ赤にする天使シャマル対し、妖艶な笑みを浮かべた悪魔シャマルが、先ほどと似たような甘つたるい口調で告げる。シャマルは脳内で争う一人におずおずと声を掛けた。

（で、でも、私も自分からは・・・んと、け、経験ないし・・・）

「そうね。たしかに、歴代の書のマスターのなかには無理矢理迫つてきたのもいたけど、自分からは一度としてなかつた。けどだからこそ、この事態は貴女にとって喜ばしいことだわ。それに、今はプログラムの再編で『傷モノ』じゃなくなつていてるから、なにも問題はないじゃない」

我ながら明け透けすぎる物言いに、天使シャマルとシャマル（本

体（は顔から湯気を噴いた。脳内ビジョンでは、それを見て愉快そうに笑っているシャマル（闇仕様）がいる。

シャマル・・・君は一重、いや二重人格か？

「いうか、女の子の裏の顔は『うつ黒くでうつ氣が強いのがデフォルトなのだろうか。世に蔓延る永遠の神秘である。

「気持ちは分かるわ。でも、このまま手を拱いていいのかしら。おでこだつたけれど、キスはすずかちゃんと先を越されてしまつているのよ？ それに彼の性格からしても、この先こんな機会なんてもう一度と無いでしょうな」

悪魔の囁きがシャマルの心を揺さぶる。「う、と気圧された彼女に対して、顔を赤くした天使がわたわだと手を振りながら言った。

「け、けど、常識的に考えてもこれは反則よ！ それに、皆に対してもフェアじゃないわ！」

「まったく、我ながら理性が強いわねえ。年長者なのに、肝心な時になると急に乙女になっちゃつて・・・尻込みするのも悪い癖よ、だからフツた男に行き遅れとか陰口叩かれるんぢゃない」

「余計なお世話よ！ 気にしているんだから言わないで！ そ、それにもし貴女が言つようなことをしたら・・・ふあ、ふへへ・・・はつ！？ ダメよ、ダメダメッ！ そんなふしだらなこといけないわ！」

押し切られそうになる理性を抱えた天使シャマルが、焦りを混ざった声色で叫ぶよつに諭しにかかる。だが、悪魔は余裕の表情を崩

さなかつた。

□元に手をやる仕草を見せながら、（脳内で）艶やかな表情のまま笑いかける。そして、真っ赤になつてあわあわするシャマル（本体）に、悪魔はさりに置み掛けるように言葉を紡いでいった。

「誰かを好きになつてしまつた時点で、女は覚悟を決めるべきではないの？男女の関係は結局そこに行き着くんだし、特に競争率が高い相手は実際早い者勝ちじゃない。端から若い子にはアドバンテージ持つていかれてるんだから、お姉さんキャラとして通せばこれぐらい規定内でしょ？」

甘美な眼差しと声を称えて、悪魔シャマルが抜け道を提示しながら危機感を煽るよつに続ける。天使がぐつと息を飲み込んだ。

「ま、負けないで！ 負けちゃダメよシャマル！ あなたはそんな弱い子じゃないでしょうーー？」

（うう・・・そ、そうね・・・そつだわ、負けちゃいけない！ ここは心を鬼にしなくちゃー！）

天使の必死の叫びに、流されそうになつていたシャマルは拳を握りこんだ。まだ迷いを帶びながらも、キツと視線を強くして奮起する。しかしそんな健気な反応に対し、悪魔シャマルは撫で上げるようこくすつと笑い、切り札を切つた。

「まったく私も頑固ねえ・・・」うこうことに負けも何もないわ。むしろ他の女性に奪われるつて事のほうが問題よ？ それに・・・あなたも本当は欲しいんでしょ、シャマル。気持ちが決まつていのなら、年上としてしつかりリードしてあげなきゃ。彼の『は・

じ・め・て』をね』

銳角から乙女心へと切り込む刃ツ！ ダメージ甚大！！

（むつはあああああ つー？）

鬼は死んだ。

「」に理性軍は完全崩壊を喫する。消えた天使の後には、フフと笑いながら飛影を指差す悪魔のみ（脳内ビジョンです）だった。

〔ああ・・・決めたのなら、行動あるのみよ～〕

「ええ・・・」

流れは怒涛の勢いをもつて、彼女の全身と理性を支配していく。悪魔の声になされるがままにふらふらとベッドへと近づき、朦朧とする視界で意識半分に自分を見る飛影に覆いかぶさる。金属骨格のベッドが波打ち、ギシッと軋みを上げた。

「安心してくださいね、飛影さん。私が責任をもつて鎮めて・・・冷ましてあげますから・・・」

シャマルの只ならぬ気配を感じ取ったのか、飛影が何かを言おうとしている。だが、喉が掠れて声になつていない。シャマルはそんな彼に更なる愛しさを募らせながら、熱い息を吐いた。

「」みな形で「」めんなさい、飛影さん・・・でも、無理なんです。私・・・私は、もうつー」

謝罪の言葉と共に、シャマルはそのまま飛影にぐっと近づいていく。そして、そのまま彼の体へとダイブしようと息を吸い込んで、

「もう・・・何なの、シャマル？」

絶対零度よりも冷え切った声に、出掛けた動きを強制的に止められた。背中から一瞬にして汗が吹き出る。それは運動後の気持ちのいいものでなく、緊張感に晒されたときのそれだ。

「へえ~~~~~・・・・・シャマルさんたら、人畜無害な顔してるのに意外だね~・・・・・」『ういうことする人だつたんだあ~・・・・・』
「シャ、シャマル、お前・・・・・」

声が聞こえたほうに恐る恐る振り向く。そこにはフェイトを筆頭にして各々、様々な様相を呈した少女達が勢ぞろいしていた。しかしその表情に差異はあれど、目は一人たりとも笑っていない。

「ひつ！？ フエ、フェイトちゃんになのはちゃん！？ それにヴィータちゃんまで！」

「わ、私達もいます！」

「！」で伏兵なんて・・・くつ、見通しが甘かつた！』

隊長陣に続き、いつの間にやらスターズ隊の一人も参戦している。

しかも、それだけでは終わらない。扉の外からも声が聞こえてきていた。

「お兄ちゃん！ 風邪つて聞いたけど、大丈「はい、キャロちゃんはこっちですよ。飛影のことは心配しなくていいですからね」え？ あ、あの、蔵馬さん？」

「兄さんつ、熱が出たつて本当に「子供^{おまえ}にはまだ早い！」わあつ、ザフィーラつ、何するんですか！？」

ここに至つて人口密度が急激に増してきた。怒りのオーラを解き放つ三人の後ろから、出るわ出るわ。隊長から機動六課の新人までより取り見取りの大集合、集合写真を取れそうな勢いである。

シグナムと桑原が出張中の不幸中の幸いだつたと言えよう。いたらさらに手が付けられない。

「シャ、シャマルツ！ 隨分と大人しくしてると思つたら、オメーこれを狙つてやがつたな！？ ドサクサに紛れて何抜け駆けしようとしてんだコノヤロー！」

赤毛の少女がグラーフアイゼンをぶんぶん振り回しながら、沸騰した表情で怒髪天を突く。浮かべた涙と朱色に染まつた頬がなんと可愛らしい。

「どうかヴィータちゃん。興奮していてほとんど分かつてないとは思いますが、アナタのもかなりの大胆発言デスよ？」

とはいえる、状況は結構切迫していた。明らかにヤバイ空気に恐れをなし、シャマルが青い顔で言い訳を開始する。

「ご、誤解よヴィータちゃんつ！ なのはちゃん達も落ち着いて！
これは・・・そう、医療的！ あくまで医療的な処置なの！ そ
れが偶然こんな格好になつてるだけで、他意は何も「ディバインバ
スター／サンダースマッシュヤー！！」 キヤああああつ！？」

ワンアクションで結果は決まった。警告も威嚇もない、情け無用の殲滅射撃。白衣（悪意）の天使は一瞬にして外へと吹き飛び、部屋から姿を消した。アーメン。

「あつはつは、シヤマルもご愁傷様やな」

「アーティストのためのアーティスト」(著者) 2011年1月刊

と、其処に新たな人員が出現する。全員が首を傾げる中、はやはは含み笑顔をしながら視線を動かす。そして、それがベッドの上に仰向けになる飛影に向けられた。

「いやー、蔵馬さんが喋つとつたのを偶然聞いてちよつと試してみたんやけど・・・飛影くんを動けなくせんつて、『うつうつえらい効き田やなあ。流石蔵馬さん謹製のアイテムや』

その台詞に何人かがハツとする。その表情は、何かを企んだ者の
そだ。裏を取るため、なのはは恐る恐る彼女に尋ねた。

「も、もしかして、紅茶に丸薬を入れたのは・・・」

「うん。私もや」

それはもう樂しかったみたいだつたぬき。あゝけらかんと云ふ放つ部隊

長に、全員開いた口が塞がらない。はやはカラカラと笑いながら、種明かしをするように告げた。

「ホントはな、みんなの為を思つてやつたんやで？ なのはちゃんもフロイトちゃんも、有給溜めるばつかで全然休まへんからな。実験がてり、一日ぐらい休んで欲しいと思つただけやつたんや」

この上なく優しい表情で、集まつた全員を見据えるはやで。単詞だけ聞けば、なんて部下を思いやる上司なのだろうかと感動しちつ内容であった。実験といつも葉が酷く気になるが。

「けど、まさかなのはちゃん達やのうで、飛影くんにあたつてしまつなんて思わんかったなあ・・・そのことは悪いと思つどるけど・・・でも、いい機会ができたやんか。今日はこのまま療養してもいいんちやうつ。」

「や、貴様・・・」

顔を真つ赤にしながら、飛影が唸る。まだ熱が抜けきつていないためいつも彼のような迫力はないが、後々を考えると随分と一度胸であった。しかし、そんな時でも彼を放つておかないのが、彼女たちである。

「は、はやて・・・それはこへうなんでも・・・」

「うん。飛影くんが可哀相だよ・・・」

「はやての言つとも分かるし、私たちを思つての行動だつていうのは分かるけど、飛影がこいつちやつたのは事故みたいなものなんだよ？ 一日経てば治るつて言つても、これじや辛いよ・・・お

願い、解除薬を使ってあげて

熱で自由の利かない飛影を不憫に思つたのか、次々と援軍が現れる。非難するような目付きはないが、さすがにやりすぎだと思つて、いるようだ。

「ふう～ん・・・みんな優しいなあ・・・」

僅かに眉を寄せつつはやては唸る。だが、その顔からは余裕が消えていない。これ以上何をするつもりなのだろうか。

こいつになくな自信満々なはやての態度に訝しむ一回。全員分の視線を全身で受けつつ、はやてはもつたいたいぶるような口調で告げた。

「けど良いんかなあ・・・これはチャンスやで？ それも今後は絶対ありえへんよつな、これ以上なごぐらごとびつきのヤシッや」

『チャンス？』

意味深な笑みと台詞を吐く部隊長、なのは達は思わず聞き返した。ニヤニヤ笑顔を隠さうともしてこない。そのまま、はやてはゆつぐりと言葉を紡いでいく。

「考へてもみい。飛影くんは今自力で動くことも出来へんのやで？ せやから、何をするにも助けが必要になる。もちろん食事、睡眠、その他諸々多岐に渡つての付きつ切りでや。なのはちゃんとかシャマルは、一度ぐらこはコレ考へたやろ？」

はやての視線の先で、なのはとこつの中にか戻つてきていたシャマルがギクッと身体を震わせた。フロイト達は虚を突かれたように

ハツとし、抜け駆けをしようとしていた一人を睨む。はやは「ん」と考え込むような姿勢をとった後、全員に視線を流した。

「それに病気の時つて妙に優しくして欲しいもんやからなー···人肌も恋しくなるし、普通にはありえないことも起きるかもしけんで? なにより、今の状況は特別イベントや。なら、普段よりも得られる好感ポイント高いんと違つか?」

空気が変わった。ざわりとした一瞬の気配の後、静寂が訪れる。そして、勢いよく乗りを上げる者が一人。

「な、なら私が看病するつ!」

「あつ、ずりいぞなのは! 飛影の世話はあたしがやるんだつ!」

しゅたつと手を挙げたなはに、ヴィータの鋭いツツコツ兼願望が飛ぶ。それを皮切りに、いたるところから声が上がった。

「だ、駄目ですつ、私にやらせて下さこ···」いつ見ても、お父さんのお世話とか得意でしたから···

「こつとも世話されてる側が何言つてんのよ··· あ、いや···べ、別に私が看病したいとかそういうんじやないわよ! ? や、その···・アンタに任せといたらおこ··· 飛影さんが可哀相だから···」

「わ、私は飛影のお世話なら何でもするよ···? 食事であーんとか、汗を拭くとかもちゃんと出来るから··· や、寂しいなら、添い寝だつて抱き枕役だつてするじつ···」

「や、やるわねフロイトちゃん··· でも私も負けられないわ!」

アマチュアには届かない医務官の底力、見せてあげますっ！」

解除薬発言は一体何処にいつてしまつたのか、当事者の飛影そつちのけで言い合いを開始する少女達。狭い上に大穴が空いた医務室で、實に言いたい放題である。收拾がつかないとはこのことだつた。

「あーあー、ほらほら喧嘩せんと。いつこいつとはもつと樂しくやらなあかんよ。仲良きことは美しきかな、しつかりと話し合いで決めるんや。形式は自由！ 一人に決めて、全員で世話すんのもより取り見取りやで！ ただし平和が第一やけどなあ・・フツシッシー！」

「 そうだな。平穏にはそれなりの犠牲が付き物だ・・・・

「そうそう。もつと落ち着いて、平和的に決めるんが民主主義の・・・つて・・・へ？」

狸モードを全開にしていたはやでが、場の空気がいつの間にか変わつていてことに首をかしげた。それまでのほほんとしていた部屋の雰囲気が、一気に張り詰めているような気がする。こめかみから一筋の汗を流しながら、ブリキ人形もかくやという動きではやては後ろを振り向いた。

「だ、大丈夫ですか、飛影さん？」

「ああ・・・生き返った氣分だぜ・・・・」

そこには心配そうな顔でふよふよ浮かぶリインフォース？と、上半身を起き上げて、顔は俯かせたまま瞼み締めるように息を吐いている飛影がいた。その声には安堵の他に、言葉にできないほどの感

情が入り混じつている。一方のはやはては、予想だにしなかつた事態と、それによる恐怖と混乱でかなりテンパリ気味になつていた。

「な、なんでやー!? 解除薬は、私の机の上に・・・はつー?」

その視線が浮かんだリインへ、正確にはその手元と延びる。彼女の右手には、小さめで透明なビニール袋が携えられていた。そしてその中には、どこかで見たような色と対になる青色の珠が数個入つていたのである。

「今回ばかりは礼を言つておく。一つ借りだ、白チビ助」

「リ、リインはチビじゅつ・・・ありますけど・・・でも、もつと感謝してください! そもそも、飛影さんはもう少し労わりの気持ちといふものをですね」

悪態をつきながらも礼を口にする飛影に、リインは膨れつ面でお説教をしている。だがその表情には、飛影が元の戻つたことへの安堵感が多分に含まれていた。はやはては身体を戦慄かせながら、自らのコニゾンデバイスを呆然と見つめる。

「ま、まさかリイン・・・私を裏切つたんか! ? 生みの親でもあり、まいすたでもあるこの私を! ?」

「! ? ごめんなさいです、はやてちゃん。けど、大丈夫だと分かってても私、見ていられなかつたのです・・・苦しんでる飛影さんを、リインは放つてなんておけなかつたのです!」

由をウルウルさせながら一生懸命に叫ぶリイン?。一点の曇りもない純粋な優しさが全員の良心を酷く苛み、なのは達は気圧された

みづ一歩後ずさつた。

「の場にいる誰もが、小さいながらも至高の輝きを放つ彼女に眩しさを感じる。その優しさに救われた飛影と、逆に追い詰められてしまつたはやての表情の対照さが印象的であった。

「な、なんてことや・・・祝福の風が逆に吹いてしもつた・・・」
なつたら、三十六計逃げるに如かずや！――」

「さうが早いが、脱兎の如くスタートダッシュを決めるはやで。いつも彼女からは考えられないような素早い動きだ。フェイトですらも止める間もない、見事な逃亡アクションで一日散になのは達の間を駆け抜けっていく。

まるで風になつたかのような動きで彼女は出口こひた走つた。そして、空け通しなつて医務室のドアをくぐり、
して、空け通しなつて医務室のドアをくぐり、

「まあ待て」

視認できぬほどの速度で近寄つて待ち構えていた飛影に、制服の襟首をむんづと掴まれていた。全速力の勢いを無理矢理殺され、はやては足を軽く宙に投げ出したままどすんと尻餅を付かされる。

「まさか・・・」今までやつておいて逃げ出せるなどと・・・そんな愚かしいを考えていたわけではあるまいな？」

背後から想像を絶するほどの怒氣が迸つた。地獄の底から響いてくるような声に、身体が知らず震えだす。何が何でも逃げたいが、捕まつてしまつた以上、もはや彼女には逃げ場などなかつた。下手をすればチビりそうになるほどの悪寒に耐えながら、はやては恐る

恐る顔を上げる。と、そこには、

「覚悟はできているのだろう？・・・まあそれ以前に、まさか部隊長ともあろう人間が、ここまで来て無様な醜態を晒すはずがないか・・・殊勝な心がけだ。見直したぞ、ハ神・・・」

怒りを通り越したように感情の見えない瞳と、こめかみにいくつもの青筋を浮き上がらせた処刑人が口元を吊り上げて笑っていた。

「祈りは済んだか・・・そろそろ懺悔の時間だ」

飛影の声が部屋の中に響き渡る。今いる場所ははやてがいつも勤務している執務室だ。無情にも下された処刑宣告に、はやは引き攣った顔で叫びを上げた。

「ま、待つてーな！ 私だつて悪う思つとるんやから、流石にこれはやりすぎちやうー？」

えらく愉悦に満ちた顔で刑の執行を告げる飛影に、はやは慌てながら待つたを掛ける。流石に顔は青くなり、まずいと思つていううで半泣きあつた。思つていなかつたらよほどのKYOUか大物だが。

被告人、ハ神はやて他一名。その風体は先ほどと同じ通常の制服姿だ。だがそれ以外と、取つている体勢は明らかに異常であつた。

体は拘束具で雁字搦めにされ、両足首に括り付けられた縄で天井から逆さ吊りされている。具体的なことは割愛するが、きつく巻かれた縄はヴァイス秘蔵の本に載つていた縛り方をなのはが実践した。

結果、二二にはちょっと文章的に載せられない様相を呈してゐる。

申し訳程度にプランプランと揺れる姿は、部下には絶対に見せられない。これぞ『吊るされた女』であった。『憐れ狹の末路』とい換えてよい。

「酷いわ飛影くん！ 女の子を無理矢理ロープで縛つて苛めるなんて、男としてサイテーやで！ 確かに逆さ吊りなんて古典的なトコとか、ちょっとマニアックな嗜好は飛影くんらし……あ、嘘や嘘！ だから、はよ下ろしてって、なんで笑ってるん！？ あ、マズつ、頭がぼうつと……つて、キヤアア！ スカート、スカートが捲れる！ 中が見えてまうひひひひ……！」

宙吊りにされたまま、騒ぐ騒ぐ。きやーきやーわーわーと、部屋の総デシベル上昇に一役も一役もかつていた。あまりの騒がしさに飛影のこめかみにビシッと青筋が走つたが、二二は我慢だ。これからもっと騒がしくなるのだから。

飛影が煩わしさを押さえ込みながら後ろを振り向くと、そこには一人の隊長と小さな副隊長、新人の少女一人が横一列に佇んでいた。

一人残らずきちつと整列する様はまるで軍隊であるが、軍隊のような正義じみた思想は皆無だ。彼女らを動かすのは怨念である。しかも、その全員が直立不動、視線は一点へ固定した状態だった。

客観的に見てもかなり怖い。飛影は口角を吊り上げると、彼女たちに向けて心底楽しげな口調で言い放つた。

「二二が今回の黒幕だ。如何様に痛めつけても一向にかまわん。サンドバックのように殴りつけるなり、紙切れのよう引き裂くな

り、魔法の的にするなり好きにするがいい。何をしようともオレが許可する。クツクツク・・・・

「不許可や つー」

「な、なんで私までー！？」

はやての横から非難が上がる。そこには主人と同じような格好をしたシャマルが、半泣きで体をブンブン振っていた。私は悪くないのに、という風に無罪を全身でアピールしている。

が、世界とこりの時は時に恐ろしいほど非情なのだ。

「元はといえば、シャマルさんが藏馬さんから預かった薬の管理義務を怠つたせいだしね」

「うん。それに犯罪の末遂もあつたのは、さすがに見逃せないよ」

なのはとフエイトの親友コンビが、何だか感情の灯らない声で告げた。いや、感情がないというより、暴発しないように抑え付けているように見える。飛影が一人と意見を同じくするように言った。

「そういうことだ。分かったのなら、元凶の片棒を担いだ分際で喰くんじやない。どう足搔こうが、貴様も同罪だ」

「で、でも・・あふんつー？ な、何かしら」の甘い痺れは・・・

飛影が縄を引っ張つた拍子に、シャマルがぴくんと体を揺らす。頬が少し赤いのは何故であろうか。飛影は不穏なものを感じ、少し引き気味になつて後ずさつた。

「何を喜んでいるんだコイツは・・・・・」

「変態だな」

ヴォルケンリッターの母親的存在が晒す醜態に、付き合いの長いヴィータも引き気味だ。そして、若干シャマルから距離をとりながら、飛影が無言で突き出した親指を真下に向けた。

それが開始の合図だつたのだろう、GOサインを出されたなのは達は、幽鬼のような足取りで吊るされた生贋へと近づいていく。尋常じゃなくヤバイ雰囲気を放つ彼女達に、はやてヒシャマルが一際強く身体を揺らして叫んだ。

「イヤや ッ！ 私はリアクション芸人やないんや、まだ死にとおない！ なのはちゃんとフェイトちゃん、お願いや！ 同郷のよしみで助けてえな！ な？ な！？ ヴィータもスバル達も、ここは部隊長のお茶目つてことで一つお願いできへんか！？」

「私達も反省してるのー！ほら、このとーり！だ、だから・・・笑つて許してほし・・・つて、何でデバイスを起動させてるの！？ひつ！？う、薄く笑うのはダメ！？ああ、お願ひよ！後生だから、謝るから許して、ねつ！？今回は、今回だけは見逃し・・・」

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」

鶏の首を絞めたような、切なげな悲鳴が隊舎に響き渡る。悪は滅びた・・・何かに目覚めるような声も響いたが、気のせいだということにしておこう。それが、円滑な人間関係を作るうえでは重要なポイントである。

飛影はフンと鼻を鳴らすと部屋を後にした。彼女たちの悪戯のせいでとんだ一田になってしまったが、これで少しほのめりだらう。反省するかどうかは別として、だが。

「あ、飛影さん！」

部屋を出てしばらく歩いていると、廊下の突き当たりからリンガ空を飛んで近づいてきた。宙に漂いながら、立ち止まつた飛影の前で停止する。

「あの、はやてちやんとシャマルは・・・」

「ああ。あのバカ共なら、今のはやフュイトの『説教』を受けている頃だ。何、しばらくすれば少しほのめりだらう

「お説教、ですか・・・? 私には何だかドカッつていう殴打音とか、バキッていう感じの破碎音が聞こえてくるのですが・・・それに、少し建物が揺れているような気も・・・」

「錯覚だ。深く考えるな

一切の迷いなく断言を口にする飛影に、リインは屈託のない表情で「そうですか」と納得した。こちらに向けられるのは、人を疑うことを探るような笑顔だ。たまに悪ノリすることはあれど、基

本的に純粋だからであらう。

(八神の相方としては適任かもしれんな)

と、そんなふうに考えていた飛影は、田の前のリインが少しおかしいことに気づいた。何だかモジモジと落ちつかない様子である。訝し気に田を向けると、慌てたように視線を泳がせるがそれも一瞬であつた。彼女は大きく息を吸い、意を決したように口を開く。

「あ、あの飛影さん、お願ひがあるのですが・・・」

その田は真剣だ。いつもほわほわとしている表情も、若干緊張で強張っている。飛影は、向けられた眼差しを皮肉ることもなくそのまま受け止めた。

「　　言つてみる」

「そ、そんなこと言わずに、聞くだけ聞いてほし・・・ほへ?」

「聞こえなかつたのか?言えと言つたんだ」

あまりにも予想外の返答に、リインは言葉を失つてしまつ。人が想像もしていなかつた事態に遭遇したときの反応は間々あるが、大抵は田の前の現実を疑うものだ。

そして、素直なリインもその例に洩れなかつたようである。心の底から驚いたというような顔で、彼女は探るような田を此方に向け、何故かファイティングポーズを決めた。

「ど、どうしたのですか飛影さん・・・いつもなら、言い終わる前

に『断る』つてバツサツ言ひの……はつ、も、もしゃーセモノさんですかー?』

「……君と同じ運命を辿りたいか?」

凄みが増した飛影に、彼女は瞬時に首を左右に振る。言つていた意味はあまり理解できなかつたが、よくないことだと口の直感が告げていた。というか、理解したときは最期のような気がする。

そんな、混乱しながらも一生懸命頭を捻るリインを見ていた飛影だつたが、あまりにも進展しない状況に痺れを切らしたと見える。不機嫌そうに眉を寄せながらその『理由』を口にした。

「……八神の暴走だとはい、助けられたのは事実だ。今の貴様には借りがあるからな、不本意だが、一つだけなら言い分を聞いてやる……わつわと言へ」

それだけ告げると、飛影は顔を背ける。つまりは、借りを作りっぱなしにしたくないということだ。聞かされたときには驚いたが、よくよく考えれば実に彼らしい考え方である。

もつとも、リインにとつて好都合には違いない。そのことに少し戸惑いながらも、彼女は先ほど口にしかけていた言葉を漸く吐き出した。

「それなら……それなら私のことを、これから『リイン』つて呼んでくださいませんでしょうか? 皆さんそう呼んで下さりますし、私も飛影さんにはその名前で呼んでほしいです。それに飛影さんは機動六課の一員で、私にとつても大切な……な、仲間なんですか

ら……

恥ずかしげに頬を染めながらも、自らの内を真つ直ぐに口にするリイン。飛影は彼女の台詞に僅かに目を見開いたが、すぐさま皮肉げな表情をその顔に貼り付かせる。そしてそのまま息を吐くと、飛影は意地が悪そうな笑みを見せた。

「フッ、その程度の事か……もつと有意義な命令にすればよかつたと、すぐに後悔するだろうが……まあいいだろ？。これより先、八神が何か不穏な動きをしたときは、すぐさまオレに言つことだ。分かつたな、リイン」

「は、はいっ、了解ですっ！ でも、きっと後悔はしないと思いますですよ？ だって、これが私にとつて一番有意義なことですから！」

「・・・フン」

本心からそう告げる彼女に、飛影は鼻を鳴らして背を向けた。ふよふよと周りを飛び回るリインは、念願が叶つたかのように嬉しそうな顔をしている。それは、飛影が先ほどの彼女の言葉を否定しなかつたからかもしれない。

どちらにしても、今の彼女は今日一番の笑顔であった。

「えへへ・・・名前を呼ばれちゃいました・・・あと、いつか私とユーズンもして下さいね」

「調子に乗るな」

「はひやうつ！？ い、痛いですよ飛影さん！？」

小生意気な妖精に一撃くれ、飛影はさつさと歩き出した。その後ろを殴られたりインが涙目で追いかけて来て、身体にまとわりつきながら回りくるくると飛び回っている。延々と説教を垂れてくる彼女の言葉を聞き流しながら、飛影は足を速めた。

今日もまた騒がしい一日が終わる。東より日が昇り、西へと日が沈む。日々とはこれの繰り返しだ。

いつもと変わらない日常。いつもと変わらない機動六課。

だが、変わるものも有る。それは不機嫌そうにしながらも口元に僅かな笑顔を浮かべた飛影と、その後ろを笑顔で飛ぶ小さな少女が物語ついていた。

「おまけ」帰つてきた二人

「桑原・・・これは一体何がどうしたんだろつか？」

「さあなア・・・」

少し前に六課へと帰還した桑原とシグナムは、人気のまばらな廊下を歩いていた。いい時間なのにもかかわらず時折響き渡る轟音と

揺れる隊舎に、不思議そつに首を傾げている。

今日の報告をしよつとはやての部隊長室へ行つた時も、『取り込み中、開けるべからず』とか『Sound on/off』とか『ただいま猛省しています。エサをあげないで下さい』なんてわけの分からぬ張り紙がしてあつたので、とりあえずは引き返してきたというわけだ。

「 ん？ ああ、桑原くんにシグナムさん。今お帰りですか？」

と、横の廊下から優しげな声と共に蔵馬が現れた。劳うような雰囲気を見せる彼に、桑原が手を挙げて応じる。すると、また隊舎がビリビリと揺れたような気がした。シグナムが人差し指を天井に向けながら、蔵馬に尋ねる。

「 おい蔵馬。 今日の夜は随分と騒がしいようだが、何かあつたのか？」

「 ああ、これですか？ 隅間にちょっとした一騒動あつて、その続きみたいなものだよ。心配はしないほうがいい」

蔵馬が僅かに苦笑を零し、肩を竦めながら告げる。シグナムは少し怪訝そうな顔をするものの、別段大したことはないということを態度から感じ取り口を噤んだ。桑原も旧来の友の言葉を疑う様子はない。見上げるようにしていた視線を水平に戻した。

「 ふーん、でもま、別に騒がしいのはいつものことか。それにみんな楽しそうだ、とりあえず俺達は早くメシ食つて来よつぜ。蔵馬もどうだ？」

「いいね。俺もまだだつたし、せつかぐだから」J相伴にあずからうかな。いいかい、シグナムさん？」

「ああ、かまわん。食事は大勢で食べた方が美味しいからな。それにしても今日は本当に忙しかっただ。結局昼も食べ損ねているし、挨拶回りやらなんやらで休憩も碌にとつていない。随分と遅くなってしまったが、正直私も空腹だった」

ふつと息を吐いてシグナムは肩の力を抜く。タフさがうりの彼女も、正式な場で様々な人と会うのはさすがに疲れるようだ。それを今まで億尾に出さないあたりは流石と言えるが。

一方の桑原は、やれやれといった風に両手を挙げていた。大方予想出来ていたことだつたのだろう、シグナムの言葉に褒めているような呆れているような笑みを見せぬ。

何気に気遣い上手な彼らしい微笑だ。兄貴スマイルと命名しておこう。

「何だよ、やつぱり腹減つてたんじゃねえか。痩せ我慢しねえで、お偉いさんになつ言やあよかつたのによ。シグナムの腹が鳴つた時、奴さん笑つてたぞ？」

「くえ。そんなことが・・・」

「ヤーヤ笑う桑原に便乗し、藏馬からも笑みが零れる。シグナムはそんな一人の反応にさつと頬を染めると、少し慌て氣味に怒鳴つた。

「う、うるさい！ 生きているんだだから当たり前だろ？ それに、騎士には意地を張らねばならないときもあるのだ！ ほ、せう、ぶつぶつ言つていな」でさつと行くやー。」

「そりだな。あー腹減つた！」

一人は談笑しながら食堂の方へと歩き出した。書類仕事が苦手なシグナムは藏馬や桑原に頼ることが多く、こうやってペアで仕事をすることが多い。デスクワーク関連などでは一人から教えられることも多く、報告書の内容も格段によくなつた。逆に彼女の達筆な字には、藏馬でさえも驚かされている。

尤も、パソコン関係の技能は全く進展していない。相変わらず我らが騎士シグナムはかな打ちしか出来ず、機械系との相性は最悪でいつもフリーズさせてしまう。その度に桑原に爆笑され、真っ赤な顔で怒鳴つてしたりする」とが多いが。閑話休題。

藏馬は歩き出した二つの背中に声をかけた。

「俺はもう少ししたら行くよ。それまでは一人で食べていってくれ

「やうか、では先に行つているぞ」

「席取つとくからな、早く来いよー。」

振り返つた二人は軽い調子で藏馬に応じる。その姿が廊下の端に消えると、藏馬は反対側に歩き出した。

「ああ、わかったよ。・・・さて、そろそろ夜も遅くなつてきたし、はやてちやんとシャマルさんを助けてあげに行かないとな」

さすがにフォローを入れてあげないと、明日の業務に差し障りが出る。一人をどうやってサルベージするか考えながら、蔵馬は上階への階段を上り始めた。

外伝を書いていて、思ったことがあります。それはオチをつけるのがとても難しいということです。

今回は綺麗にスッパリとまとめようとと思っていたのですが、書いているとなかなか終わらせられず、何とこの小説はじまって以来の記録、約一万八千字という大作となってしまいました。内容もかなり力オスな感じになってしまい、作者は頭を抱えるばかりです。

ここで一つお知らせなのですが、このたび小説の文章における間を一行から二行へと変更し、その作業を最近やつておりました。理由は携帯からだと二行空きは非常に見にくく、改善してくれないだろうかという要望があつたためです。

そこまで気が回らなかつたこと、そして作業によって更新が遅れ致しましたことをこの場で謝罪いたします。本当にすみませんでした。

と、後書きをしきものを書き綴つたわけですが、いかがでしたか？

まだまだ文章や構成も甘いかと思いますが、よろしければこれより先もお付き合い頂きたく思います。

それでは再見！

第十一話 嫉妬ヒート～風の嵐の轟き～（前書き）

よ、ようやく十一話の完成です・・・

お待たせしてしまって申し訳ありません・・・今回は少しオリジナルが混じった展開となります。

一週間以上空にしてしまいましたが、どうぞご覧あれ～～

（拝啓 飛影様）

この手紙を用にしてくれてることを本当に嬉しく思います。お久しぶりです、地球でお会いした月村すずかです。

一ヶ月ほど前に会つたつきりですが、少し思い立つてこの手紙を書かせていただくことにしました。

最近はだんだんと暑さが増してきて、汗も滲むようになつてきました。この時期、飛影さんはいかがお過いじでしょつか？

私はアリサちゃんと一緒に大学生活を楽しんでいますよ。アリサちゃんたら、今度会つたときは飛影さんをぎやふんと言わせてやるなんて言いながら、なんだか身体を鍛えたり勉強したりします。また来たときはお相手してあげてくださいね。

それはそれとして、今回このお手紙を書かせていただいた理由がもう一つあります。それは私が飛影さんへ贈つたスカーフの件で、少し手違ひをしてしまつていたからなんです。

私つたらつかりしていくて、この前は冬用のを渡してしまつていたので、この手紙を書くのにちょいどいと思い、これから季節で蒸れて熱くならないよう、同じ規格で夏用の涼しいタイプのを贈らせいただきました。

あ、もちろん飛影さんがあ^{ハシ}に足をなければ如何様にしてくださいとも構いません。けど、もし少しでも気に入ったのなら着けてくれると嬉しいです。感想とか要望があつたら、いつでも^{ハシ}連絡下さい。その通りにしますから。

長々と失礼いたしましたが、最後まで読んでくださいて本当にありがとうございます。機会があればまた遊びに来て下さい。いつも歓迎いたします。

そのときは丹村家とアリサちゃんで盛大に御もてなしをさせていただきますから、覚悟しておいてくださいね？

それでは、またお会いできるのことを願っています。

すずかより

「　　アイツは仕立て屋か？　オレにこんなものを渡しても何の得にもならんだろう、一体どうこうつもりだ・・・」

ファンシーな模様柄の手紙を^{ハシ}スクに置くと、飛影はシステムチエアに浅く腰掛けて机に足を放り出す。身体に押されてギシギシと鳴る背もたれを感じながら、飛影は紫がかつた髪を持つ彼女を思い浮かべていた。

横にある窓へと目をやり、さらに下へと視線を落とす。その先、机の隅におかれている上品な手触りのシルクの布が視界に舞い込ん

できた。どことなく自分の『い』とに似た雰囲気を持つあの少女、すすかの幻影が頭によぎる。

同時にあの時のことも思い出される。別れ際、不意打ち気味にまでこくと押し付けられた、彼女の

「ツー、イライラする……」

飛影は額へと伸ばしかけた手を引っ込めて頭を搔き鳴る。あんなことをされたのは初めてだつた。予想外すぎて、気が付いたときはなのは達に詰め寄られ、その後ゆっくりと考える時間もなかつた。

とはいへ、いくら考へても人間の感情の機微など分かりようもない。そこで答へに窮した飛影が後に藏馬に聞いたところ、

『ああ・・・正直わかりませんね。親愛の印ともとれますし、地域によつては普通に挨拶表現の一種、他にもいくつか意味はあります。ですがどれにおいても、親しくするつもりのない相手には行わないとは思ひますよ?』

などと意味深な笑みを浮かべながら曖昧な答へを返してきたので、飛影は舌打ちしてその場を去つてしまつた。あまりにも回りくどい言い方に嫌気が差したためだ。絶対に分かつてゐるだらうに、悪趣味にも程がある。

となれば自分で考へるしかない。飛影は考察の末、家族以外で自分と同じような『存在』に近さを感じてゐるのかもしれないと、当たりを付けていた。妖怪の混血ゆえに人間として生きる傍ら、妖怪の仲間も欲しいのだろう、と。

(いい迷惑だ・・・・・)

飛影はすずかの幻影を頭の隅へと追いやるために内心毒づく。初めて会つたとはいえ近い存在に親しくしたいという気持ちは分からぬでもないが、動機が不純だろうと彼は勝手に結論を出していた。

しかし、たすがは乙女心を解さない飛影である。着眼点は『近さ』という点では悪くないが、捉えている本質が全く違うところが彼の性質を存分に物語ついていた。そのために、すずかが何故藏馬でなく自分へと近づこうとしているのか、という疑問には到達していない。

一世一代のアクションを起こした乙女にとっては、かなり可哀相な事態だった。

自分が盛大な勘違いをしているとも知らず、飛影は溜息を吐く。一段と重い雰囲気を自ら放出し始め、ストレスだけが募つていけばかりである。だがそのとき、シコツという機械的な音と共に部屋の自動ドアが開いた。

「飛影、ここにい『部屋に入るなとは言わんが、ノックはしりと言つたはずだ!』ひやつ!? 『ごめん飛影・・・』

飛影の怒声に女性はびくつとしながら数歩下がつた。部屋に入ってきたのは、流れるような金の長髪に美しい相貌と深紅の瞳、そして最高レベルのプラスストーバディの持ち主。六課が誇る三大美少女の一角、フェイト・T・ハラオウンである。

思い切り怒鳴られたフェイトは、すゞと扉の向こうへと消えた。『丁寧にも一度部屋を出てちゃんとノックをしてから、改めて飛影の部屋へと足を踏み入れる。そのままスススッとそばに寄ると、

彼のベッドに腰掛けた。近頃容認されつつあるフェイトの「定置」である。

飛影は改めて彼女の方を見やつた。なにやら雰囲気が違うと思つたら、彼女は珍しく私服だ。薄く化粧もしているようで、少し大人びた表情となつてゐる。だが、その辺りに疎い飛影はまったく気づかず、その容姿に対して何の言及もしない。

はやて辺りが見たら、「ちつたあ空氣読まんかい！」とシシコミを入れそうな反応だつた。

「え、えっと……」

フェイトはベッドに座つたまま、もじもじと身体を揺らした。しばらくそんなふうに落ち着かない様子であつたが、何かを決めたようにはぐくと飛影を正面に見据える。そのまま、僅かな真剣さを含んだ表情で口を開いた。

「あ、あのね飛影。「断る」今日は私もオフだから、もし用事がなかつたら一緒に・・・って、まだ何も言つてないよー?」

用件も言つ終わらぬうちにぱつぱつと切られたフェイトは、出鼻を挫かれ思わずノリツツコミを入れた。ボケが主流の彼女には随分と珍しいシーンだ。ついでに、先ほどまで漂つっていた微シリアル空気が一秒でぶち壊しである。

しかし、フェイトはめげなかつた。十秒ほどで気持ちを立て直すと、もう一度飛影を捉え、今度はかなりの距離まで接近する。意外と強情であるようだ。

「飛影、この世界に来てから一度も街に出てないでしょ？ それに、今日は教導もティアナの靈氣、だつて？ ……その訓練もお休みなんだし、一度自分の目で見てみる方がいろいろ発見が「邪眼で視えている。必要ない」あつう・・・」

再び撃沈した。取り付く島もない。

確かにフェイトが言うとおり飛影は暇だつた。何かにつけて一緒にいたがる六課のメンバーも今日は仕事や遊びで席を外しており、飛影はどうやって時間を潰そうか考えていたぐらいだ。しかし、それは自分の時間を割いていいという理由にはならない。詰まるところ、天邪鬼なのであるからして。

蛇足だが、先のフェイトの言葉にあつた通り、ティアナはある日から靈氣の修行を始めていた。第一段階へと進んだ魔法の訓練もあるので進みは芳しくないが、それでも暇を見つけては新しい力を伸ばすために努力している。いつもは藏馬や桑原、たまに自分などが見ているのだが、今日の午後はそれもお休みだつた。閑話休題。

話を戻すことにしよう。飛影はフェイトの誘いも一顧だにせず、つーんとした態度を張り続けている。だが、ツンデレの面目躍如のごとく顔を背ける飛影にフェイトが掛けかけた時、彼女の目に机に置かれた白いスカーフが飛び込んできた。

僅かだが、いつもの飛影のものとは違うよつに感じる。その横には可愛らしい便箋も見えた。

「ねえ飛影・・・そのスカーフつて・・・」

「ん？ ああ、いつか地球で会つた月村とかいう女が、手紙付きで

送つてきた。夏用などと言つて、この前に加えてわざわざ新しいものをな。おまけにまた会いたいなどと……わけがわからん、一体なんのつもり

「

言いながらフェイトを見た飛影の声が、言葉の途中で止まつた。
いや、止められたと言つべきか。

「飛影……すずかから貰つたんだ……プレゼント……」

いつの間にか至近に来ていたフェイトが、俯き加減で言葉を紡いでいた。まるで地獄の底からやつてきたような負のオーラを放出す彼女に、飛影は言いよつのない何かを感じてたじろいだ。何故かは知らないが、唐突に幽助の女のことを思い出す。

だが、そういひしているうちフェイトはさらに接近していった。そして座つていた飛影に無言で近づき、女性的な魅力豊かな自分が胸に彼の右腕をぐわしと抱え込む。

いつもの彼女からは考えられない力強さだった。振りほどこうとした飛影だが、それだと何が良くない結末が待つていて予感がして、らしくもないたらを踏む。長い前髪により表情は計り知れないが、何だか見てはいけないような気がした。

「私達も行くよ、飛影……」

「何？ 一体ど」「行くつたら行くのー 早くー」「お、おこフェイト、貴様何を勝手に……」

見たこともないほどの氣迫を滲ませる金髪少女に、飛影は腕をがつちりとホールドされたままドナドナよろしく運行されていく。そ

の後六課を出るまで数人に見られ、飛影は答えを求めるよう目をやつたが、二人（鬼気迫つた顔のフェイト）に声を掛ける勇者はいない。

じつして、飛影は凄まじい何かを宿したフェイトに引き摺られ、半強制的に街まで連れ出されてしまうのだった。

- Side change -

ビルが各所に聳え立つクラナガンの街は、この世界でもかなりの規模を誇る大都市である。都市の供給を支えるために様々な人々が行き交い、物が集まつてくる。

そしてそれらの一つ、揃わないものはないというキャッチコピーを掲げたショッピングストリートの一角。洒落たカフェテラスにその姿はあつた。

「さて、言い分があるなら聞かせてもらおう」

「え、えっと、その……ごめんなさい……」

パラソルで覆われた丸テーブルで、互いに向かい合つようにして二人の男女が座っている。一人はいつもの黒いコートではなく、白いTシャツに黒い短めのベストと同色のジーンズを着こなし、ついでに服に付いてきた銀色のブレスレットをつけた六課における民間協力者、飛影。服は近くの洋服店でフェイトが見立てて調達し、元

の服は足元の袋に入れてある。

そしてもう一人は、白いブラウスに袖が一の腕ぐらいまでの黒ジャケット、さらに装飾用のチェーンのついた黒ミニのブリーツスカートとそれに合わせたローヒールを履いた、若き時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウン。お互い黒を基調とした服を着た二人が、テーブルを挟んで向き合っていた。

その上には一人分のフレッシュジュースとアイスコーヒーが乗っかっている。それぞれフェイトと飛影が頬んだものだが、お互いにまだ一口もつけていない。五分ほど前にこれを持ってきたウェイトレスも、その雰囲気を感じ取ったのか早々に引っ込んでいた。

「お、怒ってる……よね……？」

「やつでないよつに見えるのか？」

剣呑さしかない言葉に、さらに小さくなるフェイト。その様子を見た周囲の男性陣から、凄まじい殺気が飛影に向けられた。

だが、その悉くを一睨みで難ぎ払う。一気に氷点下まで冷え込んだ空氣に恐れをなし、店から飛び出していく者も何人かいた。そのことに、フェイトは遠目にする店員にペコペコ頭を下げる。

彼女はこの世界を牛耳る管理局においても、トップクラスの美貌を持つ少女だ。ファンが巨大な派閥を作る三大美少女（非公式）の一角に数えられ、フリーではあるが、周囲から高嶺の花として認識されている。ちなみにその構成員は彼女とのは、はやての三人だ。規模は小さいが、他にはヴォルケンリッターの女性陣もある。

ファンクラブの人数は他の一人とほぼ同数だ。そしてフェイトに關して言えば、その信奉者の大半が掲げる彼女のチャームポイントは、すばりギャップであった。

世間的な方面から見て、フェイトは隙のない美人とされている。少なくともテレビや雑誌など、およそ一般的な情報媒体で紹介される限りではそうだ。

さらには、常軌を逸した彼女のダイナマイトバディも理由の一つであった。爆発したことはないが、爆発すれば大惨事だ。エリオが心配になる。主に嗅覚部の出血的な意味で。

以上の理由から、民衆が想像する方向が偏っているという事実が存在する。つまりは、超完璧なキャリアウーマンを地でいつているような見方をされることが多いのだ。

だが、実際は全くといつていよいほど違う。何もないところで唐突にコケたり、ナチュラルに局内で迷子になつてオロオロしてしたり、クールビューティーだと思つていたら書類の受け渡しなどで真っ直ぐに微笑まれたりと、その差異は大きい。いや、大きすぎる。

とまあ挙げていけばキリが無いが、要は元々の彼女の外面から発生するイメージと本質との間にある、計り知れない溝が原因である。そしてその反転作用が、そのケのある男性陣の精神的急所にクリティカルヒットするというわけだ。

即ち『雲の上にいるような絶世の美女』から、『守つてあげたい女の子』へとクラスチェンジを遂げるわけである。あとは彼女の天然な性格も拍車を掛けているが、今は置いておこう。

そして、その立ち位置もまた極端と言えた。フェイト自身は他の二名より無自覚で、男に対して無防備もいいところであるが、周囲のガードが別格なのだ。

お近づきになりたいと思いつつも、彼女の身内兼提督で彼女を何かと気にかけているクロノ・ハラオウンや管理局の総務統括官で義母のリンディ・ハラオウンなどを恐れて、ほとんどが人知れず涙を呑むしかない。

だが、彼女自らのお誘いとくれば、これ以上ないほどの大義名分が出来上がるのだ。そんなものを目の前にぶら下げられれば、九割九分の男は一も二もなく首を縦に振ること間違いなしといえよう。ただ残念なことに、彼女が誘いたいと思つている相手は残りの一分にあたるのであるが。

足と腕を組んだ状態で、飛影はフェイトを睨んだ。フェイトはその視線にさらに体を縮ませる。男女が一組、だが明らかにデート特有の甘い雰囲気とは懸け離れていた。

例えるなら、取り調べ室で向かい合つ刑事と被疑者のよつな空気に近い。置かれているのがカツ丼かドリンクかの違いだ。

「オレは必要ないと言つたはずだ。何故連れてきた

飛影は不機嫌を隠すこともせず、ストレートに言つた。返答に困つてしまい、フェイトは今朝のことを思い出す。

朝、フェイトは完成させた書類を手に出勤した。この仕事の期限はまだ先だったが、早く済ませたほうがいいと思い、オフの日に前倒しして終わらせたのである。

フェイト自身はよかれと思つてやつたことだつた。だが、それを聞いたはやはては肩を震わせ、

『フェイトちゃん。私な、一つ言いたいことがあんねん・・・い加減、働きすぎやあ！休みを何だと思つてるんかあ！』

狸が吠えた。彼女の反応に、惑つフェイトを無視し、はやはては部隊長権限で強制的に休みを取らせたのである。

無論フェイトは納得しなかつた。眞面目な性格だ、はやはての態度が取り付く島もなかつたとはい、自分だけ休むなんて気が引けたからだろ。少し魅力的に感じながらも、簡単には引かなかつた。

だがはじめは渋い顔をしていたフェイトも、しばらくしてこれがチャンスだとはやてに言い含められ、気づけばその提案を呑んでいた。「楽な誘導尋問やつた」とははやはての弁である。なのはとの協定はこの時点で頭からtronでいるが、今は横へ置いておくとしよう。

そして飛影を街に誘うため、彼の部屋に行つたのである。気合を入れ、それなりのおめかしもして。

ここで一つ知つておいてもらいたいのだが、彼女とて最初からそのつもりだつたわけではない。フェイトとしては、飛影の参加は『できれば』であり、断られればもうろん引き下がるつもりだつた。彼女の性格的にも妥当な線だ。

だが、飛影のテーブルに乗つていたスカーフを見てすずかの話を聞いた途端、頭がカツと熱くなり、気づけば彼を乗せた車をぶつとばして街に来ていたのである。

そして服屋巡りに始まり、ウイングウショッピングからボウリン
グ、装飾品観賞までフェイトはそれこそ引っ張り回すがごとく、そ
こら中に飛影を連れまわしていた。

だが、休憩がてら入ったカフェでようやく頭が冷えたのか、突如
としてオロオロし出した拳句にこの始末、といふわけである。

穴があつたら是が非でも入りたいだろ？。といふか、今にも自分で掘りはじめそうだ。

そんなどんよりオーラを放出していたフェイトだが、流石に
このままではいけないと思つたらしい。窺うような視線を向けた後、
俯き気味のまま口を開いた。

「『めん・・・自分でもよく分からんんだ。はじめは誘えたらい
いなつて思つてただけだったのに、飛影の話を聞いてたらなんだか
絶対に連れて行くんだって考えちゃつて・・・それで飛影の都合も
考えないで好き勝手やって・・・本当に『めんなさい。でも、どう
しても飛影と一緒に来たかったから・・・』

必死に伝えようとする声がだんだんと小さくなる。フェイト自身
も自分の行動に戸惑つていいのか、その口調や言い分は曖昧だ。

飛影はしばらくそんな彼女を眺めていたが、何かを諦めたかのよ
うに短く息を吐いた。半眼になりながらフェイトを見据える。

「身勝手この上ないな」

「うつー」

「強制連行とは、執務官とやらは隨分と強引な手を使つらじい」

「まつりー？」

「おまけにガキの理屈か。キャロやエリオの方がよっぽど利口だ

「つぐうつー？・・・ひ、ひどいよ飛影・・・」

飛影の嫌味がトスロードとフロイトの胸に刺さる。自分で思つてはいえストレーント言われるのは堪えたのか、フロイトはテーブルにぐてーっと突つ伏した。飛影はそれを見ると、少し気が晴れたよつに息を吐き、口を開く。

「だが、退屈はせんで済んだ。人間の街とやらは邪眼で見て知つていたが、やはりオレ達の世界とは違うようだからな。それに、お前の慌てる様はいい暇つぶしだつたぜ」

クツクツと飛影が笑う。フロイトは顔を起こし、恨みがましい表情で拗ねたように呟いた。

「・・・うーつ。今日の飛影意地悪だ。満足してゐんなら、私に当たらなくともよかつたはずだよ・・・」

「フン、オレは別に容認したわけじやない。不満を持つてゐたのは事実なんだ、勝手に連れてきたお前の責任を押し付けるな。これでもかなり譲歩している。オレを振り回した割には幸運だと思え」

そう言い、飛影はよつやくコーヒーに口をつけた。フロイトも少し慌てながらそれにならう。ジュースは氷が半分ほど溶けて味が薄

まっていた。何の変哲もない、どこにでもありそうな味。だが、フェイトには今まで一番おいしく感じた。

対面の彼は優雅にコーヒーを啜つている。この周囲にいる人たちも、誰も彼が妖怪だなんて思わないだろう。だから、

「ねえ、飛影……人って何なのかな？」

その問いを。自分にとつての根幹を成す重要な問いを彼にかけていた。飛影は飲んでいたコーヒーから口を離し、切れ長の瞳でフェイトを見つめる。

「問答に興味はない。今度は何だ」

いきなり何を言い出すかと思えば、とでも言いたそうな眼差しを飛影はフェイトに向けて放る。フェイトは少し寂しげな笑顔を見せた後、一呼吸を置きながら言った。

「……例えばだよ？人によって作られた人間は人間じゃないのかな。他人の複製で、他人の記憶を持つ人は一体誰なのかな……コピーとかでしかないその人の替わり……基として作られたのにその本人じゃない人間は……本当に必要なのかな……？」

搾り出すように告げるフェイトを、飛影は黙つて見据える。フェイトの声はだんだんと小さくなり、最後は呟くようなものに変わっていた。

言葉を紡ぎ終えると、フェイトは何かを堪えるように俯いて黙ってしまう。飛影の反応に意識を集中し、一見すれば怖がっている感じにも見える。そんな彼女に向け、飛影はあからさまな呆れ声で息

を吐いた。

「人間の定義なぞオレは知らん。知つていたところで何の興味もない。お前の言いたい事はオレには分かりかねるが、白黒はつきりつけたいなら、そんなものは自分で勝手に決める」

「自分、で・・・？」

思いもよらぬ飛影の言葉に、フェイトは思わず鸚鵡返しに聞き返した。ポケットに手を突っ込んだまま、淡々とした声で彼は述べる。「見ず知らずの奴から好き勝手に言われる筋合いはない。どうあろうが、人として生きるならそいつは人間だ。そもそも、人間を複製すれば人間になるのは当たり前だろうが。少しばかり特殊だろうと、魂を売らん限りは人は人であり続ける。それとも生きるのかどうか、必要かどうかなどを決めるのに、一々他人の指図を受けるのかお前は」

フェイトはそれに対して首を振った。確かにかつては記憶媒体でしかなかつたこの身体も、今は自分の意志で全てを決めている。その意を伝えると、飛影は一度フェイトを見据え、何かを考えるように腕を組んで再び目を閉じた。

「ならそんな些事など放つておけ。さつきお前は作られた人間がどうとか言つたが、人だろうがそうでなかろうが、コピーだろうがなんだろうが、オレにとつてはどれも同じだ。そいつを認めるか、気に入らんかの違いでしかない。分かつたらこれ以上くだらんことに頭を使わせるな。時間の無駄だ」

言葉終わりに、飛影はコーヒーで舌を濡らす。彼は氣にも留めて

いないようだが、フェイトは胸に抱えていた重石がすっと消えていくのを感じていた。

（・・・やつぱり飛影はすゞよ・・・こんなに簡単に、私を救つてくれるんだから・・・）

高鳴るように鼓動する胸にそっと手を置く。トクントクンという音が、フェイトの頬を朱色に染めた。

飛影はいつでも厳しい。自分にも、そして他人にも、一切の妥協や甘えを許さない。故にだらうが、岐路に立たされたとき、彼は常に厳しさに満ちた道ばかりを選ぶのだ。まるで自分を痛めつけるが如きその人生は、常人などからすれば悲鳴を上げそうな生き方である。

だから、飛影は優しい言葉など決して掛けたりはしない。紡がれる声色は冷たく、何も飾ることのない辛辣な台詞ばかりだ。初見でいい印象を持つ者のほうが多いといえる。

だが彼のことを考え続け、そして見つめ続けてきたフェイトには、ぶつきらぼうながらも相手を気遣う慈愛に溢れているのがわかつた。飛影が本当にどうでもいいと思っているのならば、こうやって自分の意見を言つたりなどしない。気の置けない相手であるならば、何も言わず無視するのが彼であるからだ。

すゞいと思う。フェイトをはじめ、仲間のみんなのことを真剣に考えているからこそ、彼は怒つたりするし、厳しいこともはつきりと言つてくれる。単に優しいのではなく、苛烈極まる厳しさを以つて全員が道を誤らぬように諭してくれる。

それが、彼の『優しさ』なのだ。好かれるために優しくするのではなく、嫌われてもいいから相手のことを思い、言葉と行動を以つてその先を示す。思つてもなかなか出来る」とではない。

だからだろうか。心が芯から温かくなるような、本物の気持ちを彼の言葉から感じるのだ。突き放すような、しかしどこか遠くから見守つてくれるような、不思議な安らぎを私にくれる。この八年の間も、そんな彼のことをいつも心のどこかで気にしている私がない。

出会いの時の印象がすぐ強くて。

言葉と声と、何よりもその瞳が忘れられなくて。

傍にはいなかつたのに、いつの間にかだんだん惹かれていつて・。
・。
・。

(好きに・・・なつちやつたんだりつな)

と、今は絶対に言えない言葉を浮かべ、フヨイトは苦笑した。この気持ちを伝えるだけの勇気はまだ自分にはない。なはせめて、今はまだ口にできない言葉の代わりに、自らの精一杯を言葉に託そう。

何も飾り気が無くても。捻くれた彼の言葉の中にあるものと同じ、どこまでも真つ直ぐな気持ちを。

「 ありがとう、飛影」

「感謝されるよくな」と言つた覚えはない

「ふふ、そうだね。でもこれは言つべき……つづん、私が言いたかったことなの。だから言わせて……飛影、本当にありがとうございます」

「……フン。可笑しなヤツだ」

鼻を鳴らすと、再び飛影はそっぽを向いてしまつた。だが、フェイトは幸せそうな表情を零す。

彼の声をもっと聞きたい。彼の横顔をもっと眺めていたい。もっと彼の近くにいきたい。フェイトはこのまま時間が止まればいいと考え思つた。

だが、そんな淡い思いを碎くように唐突な電子音が鳴り響いた。慌てて回線を開くと、全体通信がバルティッシュを介して伝えられる。そしてその通信はキャロの声で、

『…ヒヤリヒヤリヒヤリ…緊急事態につき現場状況を報告します…』

穏やかな時間が終わつたことを告げた。

第一二三話 嫉妬ピート～風の前の静けさ（後書き）

しょ、小説を書く時間が取れない・・・

いつもの田課である皆さんの小説を拝見するまではいいんですよ。問題はその後なんです。まあ書こうこうと思つて、その時に限つて母や父からちょっと手伝つて一いつ呼ばれて（強制連行されて）しまつんですもの！

しかもそのまま一～三時間近く拘束されたりするので明らかにちゅうとじやないし！ 終わったときには文章書く気力が削がれてるし！ 鳴呼、なんだこの悪循環の無限ループは！

さて、今回は題名通り、飛影が初デート（半分拉致）を致しました。しかし、嫉妬とか思いつめた女の子つて怖いですよね。。。ヤンデレとかひぐ〇しどか然り。鉈持つてだらりと腕下げられた口にや、間違いなく絶叫もんですよ・・・

ああ、なのはさんか心配だ！ 砲撃魔法はパンチングゲームじやないんですから、嫉妬とかストレス解消目的で撃つちゃいけませんよね。

なのは「撃たせてるのは・・・誰なのかな・・・？」

うわああああ！？ なのはさん！ しかも『スナノハ』形態！？ い、いや、沸いて出たのならすみません！ ホントのことでも書いていいこと悪いことがありました！ ホントにすいません！

なのは「謝る内容まで」く腹立たしいけど・・・許してあげな

くもない。その代わり一つお願ひなの……」

何なりと…

なのは「もつと出番と、飛影くんとの絡みが欲しいの。物理的なもの含めて」

あ、それはムリですね。極めて纖細かつ、大人の事情なので。キャラには超えられない壁があるので。

なのは「フフフ……なら滅殺、なの……！」

うおお、仕方のないことなのに!! そもそも管理局員がそんなことしていいと思つて……、きにゃあああああああ!!

リイン「と、いづわけで作者さんが氣絶してしまつたので、今回はこれで終わりということらしいです。それではまた読んでくださいですう、再見です!!」

第一十四話　「いつの田舎ごと　～　田舎光と慈しみの物（前書き）

遅くなりました。一十四話です。

今回はなんと新キャラが登場です！　なんとなくタイトルからわかるやも知れませんが、じく確認はひとつも以下の文章で！

それとあとがきで重要なお知らせがありますので、じく覧頂きたく思います。あまりいっしょ知らせではないのですが・・・
では、スタートです！

第一十四話　「いつの田舎ごと　旧き光と慈しみの雪

- Side Teiana & Subaru -

「うーん、やっぱりこのアイスはおいしいなー！」

「せりせりほれてるわよ、つたく・・・」

田をハートにしながら、まだれを垂らすスバルに呆れた声が響いた。声の主は言つまでもなく、ティアナ。今日は教導がお休みなため、二人してクラナガンに来ている。

五段重ねにしたアイスを大口を開けて頬張るスバルの横で、ティアナがハンカチを取り出してその口元を拭いていた。アイスを目にするとこの娘は田の色を変える。それはもう壮絶にだ。

自分がついていなければ、久しぶりのアイスに今頃服をベタベタにしているだろ？。食べ方が女の子していない、というか軽く幼児化しているところも頭が痛い。

「はふはふ・・・むぐつ・・・ねえティア、蔵馬さんとかカズ兄との訓練の成果出でる？」

スバルがアイスを口一杯で頬張りながら尋ねてくる。ちなみに力

ズ兄とは桑原のことと、スバルは彼と馬が合い、いつしかそう呼ぶようになった。本物の兄妹のような二人だが、六課の全員が似たもの同士だと思っている。

ビニが似ているかは覚えて言わない。スバルの名誉に関わるので。

「ふ？ む・・・」じくん、まあほちほちね。浦飯さんの夢が終わってから、藏馬さんとかにも協力してもらつていろいろやつてるけど、時間もあまりとれてないし、とれたとしても魔法とおんなじでそうすぐに結果は出ないわよ。和真さんはこれでも相当筋がいって言つてたけど、お世辞かも」

そう言つと、ティアナは右手をアイスから離して広げた。人差し指と中指の先に青い光が灯る。スバルはおぼろげに光るティアナの指先を興味深そうな表情で見つめた。

「靈氣の弾丸、『靈丸』だつけ？ 記憶だつて言つてたけど、浦飯さんの靈丸はすごかつたなー。ティアもあればできれば、ソラランクオーバーの砲撃魔導師だつて夢じやないよ？」

「簡単に言つてくれるわね・・・でも靈丸には弱点があるわ。浦飯さんも一日四発しか撃てなかつたらしいし、私はまだ一発しか撃てない。連射は止めろつて言われてる上に、射撃魔法みたく数頼みにできないのも痛いところね」

ティアナはそう言つて苦笑いを見せた。

そう。センターガードの仕事は状況を的確に分析、かつリアルタイムで判断を下しながら、射撃系なら弾幕や迎撃を、砲撃系ならでかいのを一発撃つて周りを支援するポジション。つまりは火力が全

てなのである。

確かにデバイスがなくとも使用でき、瞬時に十全の力を発揮できる靈丸は奇襲や不意打ちには最適であるが、弾数が著しく限られ、連射もきかないというデメリットはあまりにも大きい。

それにティアナのそれは、決定打にするにはまだまだ威力不足もいいところなのだ。だが、その表情に卑屈な色はもはやない。ふつと息を吐きながら手を振つて光を消すと、アイスをがつつく相方に向かつて笑みを浮かべた。

「ま、でも自分のペースでやるわよ。飛影さんとのはさんに教えられたこともあるし、やつと見つけた『自分の力』だから」

「ティア……うん。私も応援するよ！ 一緒に頑張ろ！」

スバルがガツツポーズを決めながら人懐っこい笑みを見せた。お互いに先を見据え、二人は頷いて微笑み合う。だが、そんな二人に水を差すように影が落ちた。

「ねえねえ君ら、ちょっといい？」

見上げると三人組の男がいた。ラフな格好をして、なんだか軽そうな印象を受ける。

「ん？ 私達？」

きょとんとした表情で自分を指差すスバルに男達が頷いた。ティアナは嫌な予感がしたが、まだ兆候なのでそのまま静観する

「そ。君ら一人だけでしょ？ よかつたら俺たちと遊ばない？ 結構いいとこ知つてんだ」

「そうそう。一人とも可愛いから〜、女の子だけで遊ぶなんて勿体ないよ〜」

「なんならメシも奢るし。ね、ちょっとだけ！」

必要もないほど明らかナンパだった。絶滅したと思つていたが、こういった者達が消えることはないようだ。スバルもようやく自分の立場が分かつたのか、なんだか苦笑に変わつていて。

「あの〜、私達そういうことは・・・」

「ええ。興味ないわね」

「え〜、そんなこと言わな〜でさあ。ホント、ちょっとだけでいいんだよ」

明らかに拒絶にも関わらずしつこく食い下がる二人。この手の男はどう振り払おうとも引き下がるところを知らない。

スバルも「どうしよう？」といった感じで、横にいるティアナを見つめている。そんななかどう断りを入れようかと、ティアナが思案していたその時だった。

「やれやれ。今時、身の程知らずつて言葉をわざわざ実践してるやつがいるとはねえ・・・」

「 「 「 ああ? 」 」

響いてきたしわがれ声に、男達だけでなくティアナ達もその方を見る。

そこにいたのは一人の老婆だった。色あせた桃色の髪に作務衣のようなカーキ色の上下服。背丈は低く、背筋は伸びていて、ティアナ達の首ほどまでしかない。手を後ろで組むようにして、三人の背後からこちらと相対していた。

その視線がティアナを捉え、老婆はふつと笑う。彼女とは初対面であるはずだ。だが、ティアナの脳裏に何かがよぎった。

「 んだよ、婆さんか。何か用かよ? 僕たち忙しいんだけど? 」

「 忙しいのはその頭の中だけさ。この一人がお前らなんぞ眼中にないと言つてるのが分からぬのかい? 悪いのは見てくれだけじゃないようだね」

「 な、何だと! ? 」

喧嘩腰の彼女に、男の一人がさうそく声を荒げる。だが、それを制してリーダー格の男が前に出た。顔立ちはそれなりだが、目の中に見える濁りは隠し切れない。

「 婆さんよ、俺はAランク魔導師だぜ? 機嫌を損ねない内に俺び入れてさつさと消えな。じゃねえと少し痛い目見ても

「ひつひつになる」

「ははは！ 今なら財布だけで勘弁してやるからよ」

下卑た笑い声を上げながらもう一人の男が同調して笑う。管理局員だという男にスバル達は嫌悪を感じた。ホントかどうかは分からぬが、力を盾にするなんて人の風上にも置けない。

流石に見ていられなくなつた一人が割つて入るうとする。だが、彼女は男達を素通りしてスバル達の前まで歩いてきた。

「アンタ達、少し案内と人探しを頼むよ。ここらはまだ不慣れで、連れと別れて困つてたところだったのさ」

「む、無視すんじゃねえよ！」

完全にスルーされた男が激昂して声を上げる。彼女は心底煩わしさうに耳をかつぼじつていた。

「耳元でピーチク喧しいねえ、小便垂れどもが。体裁よく帰つてもらおうつていう人の厚意を無にするのかい？」

「なつ、このババア・・・！」

溜息を吐くのもバカらしいといった感じで、彼女は男達を下から見据える。怒氣を露にする男たちを目にしても、彼女は一片のたじろぎすら見せない。

呆れたような表情をして彼女が肩を竦める。口を突いたその言葉には、もはや侮蔑しか含まれていなかつた。

「A級魔導師だって？ オバQの親戚みたいなチンピラ芸人が笑わせるんじゃないよ。わざと帰ってきてクソして寝な！」

「て、テメエ……！」

「ぶ、ぶつ殺してやるー！」

「！」のクソババアがあ ッ！」

低すぎる沸点を超えた男達が一斉に飛び掛ってきた。彼女の挑発も要因の一つだが、それに慌てたのはベンチに座った一人である。

（ま、まざいよティアー！）

（わかつてゐわよー 構えて、スバル！）

スバル達が待機状態にある各自のデバイスをひそかに構える。そして、男達に牽制魔法を使おうと口を開きかけ、

「喝 ッ！」

「「「ああああああー！？」」「

「うわわわー？」

「 きやあつー？」

彼女の凄まじい声と気迫が、駆逐目標をすつ飛ばしていた。一人は公園脇にあつたダンボール山に突つ込み、残る一人は十メートル以上離れた海の中へとぶちこまれる。あまりの気迫に、スバル達は浮き上げかけた腰をベンチへと落としていた。

「 やれやれ。大勢で囮まなけりやなーんにも出来ないガキ共が、見え透いたハツタリをかますんじやないよ。けど、あたしの靈波動も鈍つたもんだ、気合入れなきゃあんなボンクラさえ追い払えなくなつたか。ふう、歳は取りたかないねえ」

彼女は呆れたあと、自嘲するように溜息を吐く。

スバルとティアナはデバイスを待機状態で構えたまま、その光景に啞然としてしまった。だが、唐突に両方デバイスから流れてきた通信の効果音に、一人は我に返る。慌てて確認すると、相手は先ほど会話をかわしたキヤロによる全体通信だった。

「 こちらライトニング4、緊急事態につき現場状況を報告します！ レリックと思しきケースと、それを持っていた女の子を二人の民間人と共に発見。指示をお願いします！」

- Side out -

- Side change

Erio & Kyar

クラナガン市街の昼下がり。強くなり始めた日差しの中、二人組の少年少女がストリートを歩いていた。手こそ繋いでいるものの、ただそこにいるだけで仲のよさが伝わってくる二人である。

「えーと、次はウインドウショッピングの予定だよ」

「わかった。行く、エリオくん！」

ストラーダに表示されたスケジュールを見ながら、エリオは隣を歩くキヤロに今後を説明する。キヤロは本日フェイトよりエスコートを仰せつかつたエリオに笑いかけて歩き出した。

今日は一日フリー。そのため、シャーリーが気を利かせて（お節介ともいう）デートコースと計画をセッティングしたのであるが、幼い二人はそれをノルマのようにこなしていた。先ほどそのことについてスバル達と話したとき、彼女らが苦い笑いを零していたこともきよとんとする始末である。

と、そんなことをしているうちに服や雑貨などのエリアに入ったようだ。そこかしこにウインドウや物が並び、密寄せの声が聞こえてくる。

「わあ 見て見てエリオ君っ、あれフリードにそっくりー！」

キヤロが店の上部に吊るさがつていた龍のぬいぐるみを見つけ、そばに駆け寄つていく。流石は女の子だ、可愛いものには目がない

らじこ。Hリオは微笑ましい様子に顔を綻ばせた。

「キャロ、あんまり走ると危な ・・・？」

「 ？ どひしたのHリオくん？」

はしゃぐ彼女に注意しようとしたとき、Hリオの耳の中で何か重いモノが反響した。それが音だと認識するまで、数秒を有するほどに小さなもの。

気になつてキャロに尋ねてみだが、彼女は首を振る。ビハヤヒハ
づいてはいなかつたようだ。

だが音は断続的に耳に響いてくる。もはや気のせいではない。H
リオは先を行くキャロに追いつくため足を速めた。

「たぶんそここの路地からだと思つ

「 ひひち？ こつちは・・・痛つ！？」

『えつ？』

Hリオの言葉に耳を傾けていたせいだろう。余所見をしていたキ
ヤロが路地に入った途端、何かにぶつかつて尻餅をついた。エリオ
が慌てて駆け寄るが、どひやら怪我はなによつである。

「あつ、『めんなさい。私つたら氣付かなくて・・・・・お怪我
はないですか？』

キャロを慮る声が、尻餅をついた彼女の上からかかった。二人は

反射的にそちらへと視線を向ける。

そこにいたのは穏やかな雰囲気をまとう女性だった。キャロがぶつかったのは、どうやらこの人であるらしい。エリオに引っ張られて立ち上がったキャロは、まじまじと彼女を見つめた。

腰元がキュッとくびれた水色のワンピースに手に持った可愛らしいポシェット、そして白色で低めのハイヒールを控えめがちに履いている。身長は低いものの体つきはそれほど貧相ではなく、寧ろ美しいラインを描く整ったボディが服ごしでもはっきりと分かるほどだ。

顔立ちは端正であるがクールといつより温かい雰囲気を放ち、とても優しげな笑みが浮かんでいた。背の中ほどから腰ぐらいまで伸びる長く青みがかつたライトグリーンの髪が、首の後ろ辺りで赤い絹紐に纏められている。瞳には深紅の光。どこかで見たような眼差しが、一人を見下ろしていた。

「は、はい、私は何とも。ありがとうございます」

キャロがしどろもどろに言うと、女性は「そうですか、よかつた」と暖かな表情を浮かべた。何の装飾もない、しかしただただ安らげるような温かさを感じる。

「ほわあ・・・」

鈴を転がしたような声と春の口差しのような彼女の笑みに、キャロが感銘を受けたように息を吐いた。エリオも穏やかな顔をしていることからして、同じ気持ちでいるらしい。

あるときの時、もう一つの声が上がった。

「どうしたのお母さん……お姉ちゃん達、誰？」

その時、彼女の後ろから一人の女の子が姿を現した。ひょいといつ擬音でも聞こえそうな出方をした彼女は頭だけを此方に出し、女性のワンピースをはつしと掴んでいる。

見た目からして、年齢が五、六歳ぐらいの可愛らしい少女だった。女性と同じ深紅の瞳とボニー・テールで纏めた薄緑髪が、親譲りの端正な顔立ちをさらに引き立てている。

その胸元には、青い光の中に不思議な虹色の輝きを放つ宝石が、紐で結ばれて光っていた。大きさは待機状態のレイジングハートを一回り小さくしたぐらいだろうか。何か見覚えがあるように感じるものの、思い出すことができない。

しかし口にしたセリフから、この女性の子供であることは容易に想像できた。母親より少し強気な雰囲気だが。

「あ、私はキャロ。キャロ・ル・ルシエットの

「エリオ・モンティアルです。えっと……」

「私は真雪。^{まゆき}こつちは私のお母さん。よろしくね、エリオお兄ちゃんにキャロお姉ちゃん！」

真雪は自己紹介をすると、その顔一杯に子供らしい笑みを浮かべた。笑った顔はやはり母親に似ている。母親の方は見た目からしてフェイトなどと同じぐらいに見えたが、これほどの子供がいるとな

ると年上かもしれない。

エリオ達は姉と兄と呼ばれたことこそ少し照れつつも、同じよう元気ひょうこ笑い返した。

しかし、真雪に続いてその母親が名前を告げようとしたとき、横にあつたマンホールの蓋がゴトンといつ音を立てて持ち上がる。ぎょっとする一同を尻目に、その中から出でてきたのは真雪と同じぐらいの金髪の少女だった。身体にいくつか傷も見える。

彼女は穴から這い出たと同時に倒れこんで気を失った。慌てて駆け寄つた四人が少女を介抱していると、腕に鎖で繋がれたケースを見止め、エリオ達が目を見開いた。

「これレリックケースじゃ……!? キヤロ、連絡お願い!」

「う、うん。全体通信にして、フロイトさん達にも伝えるね!」

ケリュケイオンを起動させ、キヤロは全体回線を開く。と、真雪の母親である女性が少女の脇に屈み、手を翳した。すると淡い光が少女を覆い、その傷が塞がっていくではないか。驚きに包まれる二人に女性は視線を向ける。

そして表情を魅力的な微笑みで染めながら、

「申し遅れましたね。私、桑原雪菜と申します」

その名を告げた。

おまけ　～　前話で飛影が連れ出されてから数分後の六課

なのは「飛影ぐーん・・・って、あれ? いないや」

リイン? 「あ、なのはさん。飛影さん知りませんか? ちょっとお聞きしたいことがあつたのですが」

なのは「あ、リインも探してるの? うーん、どこ行つたんだろ? ・・・はやてちゃんに聞いてみれば分か「ああ、なのはさん。ここにいたんですか」ヴァイスくん?」

リイン「どうしたのですか、ヴァイス陸曹?」

ヴァイス「おお、リイン曹長も一緒にかい。ここはヘリの点検と微調整終わつたんで、その報告と確認申請ツスよ。そこで、なのはさんを探してたんですが、いないと思つてたからラッキーでしたぜ」

リイン「ほく? なのはさんが今日外に出る予定はないですよ?」

なのは「どうして私がいなにつて思つたの?」

ヴァイス「え? どうしてつて? 一人とも、フロイトさんが休みを取つたのは知つてるツスよね。それで、さつきそのフロイトさんが飛影の旦那を連れて街に出たらしいんですよ。はやてさんも承諾してたみたいですし、てつきりなのはさんも行つたもんだとばかり」

それ、本当? うおわっ! どうしたん

スか！？ 何か尋常じやない気配がするんですけれど…？ 「

なのは「…………」 フェイトちゃん、抜け駆けはダメって言ったのに…………はやてちゃんも、私に内緒でフェイトちゃんを焼きつけて…………一人とも、後で『おはなし』だね…………

リイン？ 「な、なのはさんが怖いですよう…………（でも、そういう） ば私も飛影さんと一人でお話ししたことありませんでした。元の世界とか飛影さん自身のお話とか、一度ゆっくりお聞きしたいです…………」

第一一十四話　一つの由来　～　旧き光と慈しみの書（後書き）

第一一十四話の終了です。

新たに登場した一人、お気づきになられた方が大半かと思います。どうか、一人は名前も出しているし、もう片方はわからぬいほつが不思議なほどメジャーなキャラだと思しますので。

さて、まえがきで書いていたお知らせです。

何度も書いていたのでお分かりの方もいらっしゃるかもしませんが、11月末に迫った行事の準備などのため、小説を書く時間を取ることがかなり困難となってしましました。

時間の合間を縫つて書こうにも、両親にはあまりパソコンに向かうな！と怒鳴られ、お説教される始末。私にとつても両親にとつても一生に一度の、かなり大事な部類に入る催しなので当然といえばそうなのですが。

しかもまとまった時間が取れないと、文章に日々のバラつきが出てきてしまふことや、私自身の負担も考え、まだ未練はありましたが考え抜いた末に決断をいたしました。

このたび、私の小説『炎殺の邪眼師』は、一ヶ月、あるいは+半月ほど、更新をお休み致します。（+半月は、行事よりも忙しい、後処理やら何やらをしなければならない可能性が出てきましたので）

楽しみにしてくださっている皆さんや、せつかく登場した新キャラ

に水を差す結果となつてしまつ」とを考えると本当に心苦しこのですが、どうかご了承のほどをお願い致します。もしかしたら、どうかで一回くらいは更新するかもしません。

その代わりですが、もつ一つの方の小説のストックがいくつもあるので、それを不定期に更新していくつもり思います。

独断で決めてしまつたこと、改めて謝罪いたします。また戻つてくると思うので、そのときにもまだ覚えていらっしゃつしゃつるのであれば、再びのお付き合いでしてくださると幸いです。

それでは、また一ヶ月（あることは一ヶ月半）後にこのままである」とを願つております。

再見!
ソーライション

第一十五話　　Hンカウント　～　新たなる仲間（前書き）

じんぐるべ～る、じんぐるべ～る。

どうも、初めての方は初めまして。それ以外の人はお久しぶりです。

かなり遅れてしましましたが、私からのクリスマスプレゼントとして何とか書き上げたこのお話を贈りたいと思います。

プレゼントにしては全然気が利いてませんが・・・とりあえず、久々の炎殺の邪眼師をどうぞ！

「うん、バイタルは安定してる。危険な反応もないし、心配ないわ」

「はいっ」

「よかつたあ～」

金髪の少女を見ていたシャマルが笑みを見せる。六課の主治医である彼女の言葉を聞いて、キャロとスバルが安堵の息を吐いた。

現在この場には、発見者のエリオとキャロに合流した同じお出かけ組のスバルとティアナ、連絡を受けて駆けつけた隊長のなのはとフェイト、それにメディカルケア担当のシャマルがいた。

桑原やフェイトと共にいた飛影も来ているのだが、現在はヘリの方で蔵馬と連絡を取り合っている。

ともかく、保護した少女の容態を聞いた全員はほっと息を吐いた。キャロなどはあからさまに安堵の息を吐いている。ティアナ達が合流したのはシャマル達より先だったが、診察は専門外なのでとりあえず安静にしておくしかなかつたのだ。

そんななか、偶然居合わせた『彼女たち』が少女の様子を診てくれたのである。そのお陰か、シャマルが到着するまでの間に応急処置は済まされている。また、エリオとキャロしか知りえぬことだが、

少女の傷は居合わせた親子のうち、母親に当たる女性の不思議な力によってすべて治療されていた。おかげで体や顔に怪我は見当たらぬ。

シャマルが一通りの診察を終わらせて立ち上がる。少し離れてその様子を見ていたキヤロが、同じく一部始終を眺めていたティアナと顔を見合させて笑つた。

「よかつたです。傷はさつきこの人に治してもらいましたから消えますけど、それを聞いて改めてほっとしました」

「ホント、よかつたわよ。そこのおばあちゃん達が診て大丈夫って言つても、ちゃんとした確証は欲しかったからね」

「え・・・・・治したって、そこにいる人達が診察してくれたの？」

診察中、傷がないことに不思議そうにしていたシャマルがスバル達の後ろに立つ三人を見据えて言つた。老人、成人、子供と年代はバラバラだが、全員が女性だ。

「貴方がこの子を診てくれていたんですか？　ご協力に感謝します。本当にありがとうございました」

なのはとフェイトは、彼女たちに近寄ると頭を下げる。まっすぐな感謝の体現に老婆はふっと息を吐き、後ろの二人は笑みに顔を綻ばせた。子供は母親らしき女性の横で笑つていた。

「礼には及ばないよ。あたしゃ最低限のことをして、あとはただ横で見てただけだ。ここに来たのも連れの一人がいたからだからね」

「私も偶然居合わせただけですか。まさかはぐれた相手に合流で
きるなんて思つてもみませんでしたし、この世界のことはまだよく
知らないので、違つたらいけないと思つて少し不安だつたんです。
この子が無事で本当によかつた」

「やつなんですか、でも問題もなくて助かりま・・・ん？ あれ、
今『Jの世界』つて・・・」

再びお礼を述べようとした矢先、女性の口にした台詞の中に違和
感を感じたフロイトが首をかしげる。ヒリオとキヤロが「あつ」と
声を発した。そして何かを言おうとして、後ろから聞こえた二つの
声に遮られる。

「やれやれ、相変わらず騒々しい奴らだ

「おー、やつてんなおめえ」

声の主は飛影と桑原だった。飛影はポケットに手を入れながら、
桑原は片手を上げて歩いてくる。連絡は終わつたらしく、どうやら
これから参加するようだ。飛影は乗り気ではないようだが。

「けが人はもうちゃんとしたみてえだし、はやてちゃんから次の仕
事が来てるぜ。そういうや民間人がいるって話だが、一体何処に「お
・・・」
ん？」

だが、彼の報告に声が割り込んだ。全員が首を巡らすと、その発
信源は先ほどの女性の横にいた。まず間違いなく女性の子供である
うその子は一瞬肩を震わせ、大きめの田をやらやらとせている。

対する桑原の方はとこうと、これまで驚きに固まつていた。口を

あんぐり開けながら、その子供と女性を凝視している。驚いたことに横にいる飛影も田を見開き、その二人を見つめていた。

全員が成り行きを見つめる中、女の子が突如として駆け出す。そしてそのままの加速で地を蹴り、

「お父さああああん！」

桑原の胸へと力いっぱい飛び込んでいた。そのままぐるんぐるんと回転しながら彼の腕にぶら下がる。

今度は周りがあんぐりと口を開けた。まともなのは、後ろのほうで溜息を吐いている老婆に、年少組のエリオとキャラぐらうだ。そして、事態はまだ終わらない。

「ま、真雪い！？ な、なんでお前が 「和真さんッ！」 へつ？・
・・・・つおわあつ！？」

さらに重量感が募る。見ると、先ほどの女性が真正面から桑原に抱きついていた。何の迷いもない、強い想いに満ちた抱擁である。

当の桑原はといつと、動揺を隠すこともできずにいた。混乱の極みといつもの体言しながら、片腕と正面にはつしつしがみつくりと田をやつている。普段から喜怒哀楽が激しい彼だが、ここまで驚いた顔を見るのはおそらく初めてではないだろうか。

「 ゆ、雪菜さんまで！？ ふ、一人とも、じつじつ……？」

？」

「 あたしが連れてきたんだよ。正確には、ほんちに来ようとしてたあたりに付いてきた、だけだね」

「 いいつー？ ばーさんもいんのかよー？」

桑原が三度田の驚愕の声を上げた。すると、それまで抱きついたまま黙つていた雪菜と呼ばれた女性が、押し付けていた顔をゆっくりと離す。長い睫毛はしどどに濡れ、整つた唇から響く鈴のような高く清らかな声を震わせながら、彼女は桑原を見上げた。

「 …… 幻海師範からお話は聞きました。和真さん、酷いじゃないですか……何も言わずに行つてしまつたから、ずっと心配だつたんですよ……？ また、前の戦いみたいな危険なことをしてるんじゃないから、私……わたし……」

「 もへ、お父さん！ 何かあるときはちゃんと話してつて言つたでしょー。お母さんを宥めるの、ホント大変だつたんだからねー！？」

雪菜は桑原にぎゅうと抱きついたまま離れない。真雪も飛びついた状態で、ぶつと頬を膨らませる。なのはやフエイト達は呆然としてその様子を見ていた。

「 ……『お父さん』……『お母さん』……？」

「 えつと……なんとなく、あの人……お父さんだつて……のはわかつてた、けど……？」

「どうやら状況についていけないらしい。聞き捨てならない言葉を聞いたシャマルが、全員を代表するように声を震わせた。

「い、今、雪菜って言つたわよね……ま、まさか……？」

その名前には聞き覚えがあった。以前、地球上に下りたときの会話が彼女らの脳裏を過ぎる。あの時は軽く流していたのだが、『どう』う状況に直面したとなると話は変わつてくるものだ。

「……」やく彼女達の視線に気づいたのか、雪菜は「あつ」と声を上げて桑原から離れる。そして、全員に向け丁寧に頭を下げた。

「す、すみませんっ……私、たゞ、挨拶もしないで……初めてまして皆さん。私は桑原雪菜、こちらは娘の真雪です。それで私は、ここにいる和真さんの……その……つ、つ……妻に、なります……」

恥ずかしさで頬を赤く染めつつも、しつかりはつきり言つ雪菜。その周囲に何故か一瞬冷たい風が吹いた。桑原がだらしない顔で頬を赤くしながら、後頭部を搔いてくる。

しかし、六課のメンバーはそれどころではなかつた。彼女の言葉に受けたダメージから全員が一瞬にしてフリーズしている。だが、いつもの数倍以上の時間を掛け、彼女らは大きく息を吸い込むと、

「…………」

「…………」

凍つた自分を自ら吹き飛ばすように、今世紀最大のリアクションを爆発させた。

絶叫（心の叫び）が天を割らんばかりに轟く。先ほど名前を聞いたとき、もしやと思って尋ねていたエリオとキヤロ以外は、デッサンが崩れた凄まじい劇画タッチになっていた。そのまま映像で残したら、きっとコアなファンが付くに違いない。

「い、この人が・・・カ、カズ兄の奥さん！？」

「綺麗すぎですぅ・・・」

比較的軽症だったスバルが、目の前の雪菜に対して溜息を零しながら驚きを口にした。リインが彼女を見つめる目は、既に憧れ模様となっている。お褒めの言葉に恥ずかしそうに身をよじつた雪菜に、横にいた高齢の女性が溜息を吐いた。

「やれやれ、またこれかい・・・初対面の相手に会つ度に見てきたからもう飽きてるけど、ちゃんと現実だから納得しな。気持ちは大いに分かるけどね」

さりげなく失礼な言動をかましながら、それまで後ろにいた老婆が前に出た。そして、いまだ硬直するなのは達へと向き直り、ふつと笑う。

「そりいや、まだ言ってなかつたね。あたしの名は幻海。聞いてのとおり、この世界の人間じやないよ。あたしはアンタ達が前会つた浦飯幽助、アレに戦いを教えた師匠さ。あのバカ弟子に少し頼まれ事をしてね、つこさつきこつちの世界に来たトコだ」

「え、ええつー？あ、あああああ浦飯さんのお師匠様！？」

一週間ほど前に出会った、というかティアナに憑依して邂逅した魔界の王を思い浮かべ、硬直から戻ったスバル達は一様に驚きを露にする。幻海がそれに苦笑するように笑みを零した。

「ま、それは追つて説明することにしようかね。それより、今のお前さん達にはやることがあるんじゃないのかい？」

「……へ？ あ、はい。皆、悪いけどお休みは一時中断。皆はこつちで現場調査ね」

「……はいっー。」「」

なのはからの号令の元、スバル達が走り出す。先ほどまでショックで硬直していた面々も、お仕事モードに切り替えたようだ。受けた衝撃は少なくないだろうに大したものである。

フロイトはさっそくモニターを開いて、はやてと作戦について話し合っている。なのはもFW陣に支持を出しながら、思案に耽っていた。若くして執務官やエースの名を連ねるのも決して伊達ではない、ということだらけ。

真雪がくつついて離れない桑原の代わりに、飛影が女の子をへりへと運ぶ。腕に抱えた少女を、飛影は目を細めて見下ろした。

(このガキ、普通の人間ではないな……とつもない力が人工的に付与されている……感じる力の波長は確かに魔力だが、どこか異質だ。それに……いや、気のせいだ)

飛影が少女を見ながら思考を続ける。実際、この少女からはえも言われぬ何かを感じるのだ。なのは達などから幾度となく感じとつた力のはずだが、どこか引っ掛かる。強大な魔力を植えつけられていふことからしても、何か特別な能力を持っているのかもしれない。

飛影はヘリのストラッチャーに少女を寝かせると、そのまま外へ出た。太陽の眩しさを数秒で慣らす。タラップを踏んだ飛影と入れ替わるよう、幻海と雪菜がハッチを登ってきた。

「あたしと雪菜たちはヘリに乗つてくことにするよ」

「皆さん、頑張つてくださいね」

「頑張つてね～、お父さんとお姉ちゃん達！」

外に待機する桑原やなのは達にお礼を言いながら、雪菜と真雪が歩いてきた。なのは達は暖かい声援に手を振つて応える。その時、雪菜がハッチから出た飛影を見つけ、その顔に優しい笑みを浮かべながら近寄つた。

「あ・・・飛影さん、お久しぶりです。お変わりないようすで、少しほつとしました」

いつかと同じように、自然に声をかけてくる雪菜。飛影はそれを横目で一瞥し、顔を背けた。

「フン。お前も変わらないようだがな」

「はい。ふふ・・・じゃあ、また後で。いろいろお話をしたいこと

もありますし……あの、いいですか……？」

「……ああ、後でな」

それだけ言つて両者はすれ違つた。一言二言言葉を交わし、再び離れていく。だが、そこには言葉にできない何かが内包されているような気がした。

普通ならば気づかない、ほんの僅かな優しさを含んだ空氣。駆けていく風を追い風にして、飛影はタラップを下つていつた。しかし、それとは逆に怪訝な表情をする者が三人。

「……ねえ、何か飛影くん変じやない？」

「あ、なのはもそつ思つ？」

ヘリの中でもう取りを見ていたのはヒュイトが、一人を交互に見ながら眉を寄せた。一緒に乗つた幻海は含み笑いを零し、雪菜の方はきょとんとしている。

「一人も感じたの？ 私も、何だか飛影さんの雰囲気が違つてたような気がするのよね……」

シャマルが補足するように言つ。リインはよく分かつていよいよだが、「ふむう？」と首をかしげているところを見ると、違和感は感じているようだ。

飛影は淀みない足取りですたと歩いていく。おそらく地下にレリックを探しに行つたスバルたちと合流するつもりなのだろう。だが、どこかその後姿が嬉しそうに見えたのは気のせいなのだろう

か。

飛影の姿が通路の先に消える。それを見て、全員の頭に浮かんだのはただ一つ。

（（（（帰つたら、絶対に問いたださなくちゃ（です）・・・）））

彼にとつては至極理不尽な、乙女特有の追及意識だった。

第一一十五話　　Hンカウント　～　新たなる仲間（後書き）

小説の休載報告をして・・・な、なんと一ヶ月近くー?　一ヶ月半だと書いていたのに、長いお休みすることになってしまった。ところの、このいろ色々とやることが出来てしまつて・・・言い訳になつてしまつのですが。

行事は無事に終了を迎え、後片付けの方も何とか一段落しました。それに関してはもうほとんど問題ありません。

ですが、最近祖父の親戚の方が亡くなるということがあつたり、自分自身スランプに陥つて書けなくなつてしまつたりと散々なことが続いてしまいました。

来年の就職に関する準備も慌しくなつてきており、現在進行形で続いてます。

なので、前のような執筆速度は望めませんが、細々と、一応完結するまでは書いていくつもりですの、ながら、いつで見てやつてくださいとあります。ホント、このサイトが無くなるまでに書けるかな・・・

次回の更新は、私が手がけるもう一つの小説、『魔法少女リリカルなのはACE』を挟んでからになると思います。こつちはスランプの程度も軽く、すりすら書けそうな気がしていますので、お気に召すようでしたら、どうぞ拝読いただけると嬉しいです。

それでは、皆様の素敵なクリスマスと良いお年をお祈りいたしてお

ります。

再見！
ジアイイジエン

第一十六話 戦いの唄～相対する者達（前書き）

初見の方ははじめまして。お久しぶりの方は本当にお久しぶりであります。

初つ端から言い訳になつてしまつのですが、リアルとの兼ね合いがかなり厳しくなつてきていて小説に割く時間がとれず、かなり遅れてしましました。

さらに最近はパソコンの調子も悪く、なんだがなあ・・・といった感じです。まあ、私自身がかなりのスランプに陥つていたといつこともありますが・・・。

久しぶりの炎殺の邪眼師であります。文章量は少ないですが、頑張つて書いたのでどうかご拝読下さると嬉しいです。

それではどうぞー！

第一十六話 戦いの唄～相対する者達

- in the under ground -

ミッドチルダの首都、クラナガンの地下には、水路という役割を持つた広域の水流制御空間が存在する。街の随所から集まつたり、多方面へと枝分かれしていく数多の水路。それらが都市の大きさに比例して放射状に張り巡らされているのである。

と、ここまで簡単に述べてみたが、要は地下水路は地上の都市以上に巨大かつ広大な面積を持つのだ。現在は老朽化などで廃棄された場所も多いが、仮にも裏でクラナガンを支えていた場所だつだけに、かなりの規模を誇っている。

その中に五つの影があつた。狭い場所に集まり、顔を突き合わせているようだつた。そのうちの四つは言つまでもなくスバル達の四人、そして最期の一人は、

「作戦は以上。いいわね、皆」

「「「了解です」」」

「分かったよ、ギン姉！」

スバルのシユーテイングアーツの師匠にして最愛の姉、ギンガ・ナカジマであった。別件の任務の折、この事態に遭遇して六課の捜査活動に加わつたのである。

「地下水路は老朽化してるとこもあるから、注意が必要ね」

「それに、レリックを狙ったガジェットが出てくる」ともありえます。早めに済ませてしまつたほうがいいでしょう」

「 フン。もう騒ぎ付けられているだらうがな」

ティアナとエリオの言葉に、暗がりより鋭く声が走つた。背筋が伸びるような感覚を受け、全員がそちらを向く。彼女たちの後ろ側、闇の中から染み出るよつに見慣れたコートが姿を現した。

「 「飛影さん！？」」

「 「お兄ちゃん／兄さん…」」

思わぬ助つ人の登場に、ティアナとスバルは目を見開く。キャロとエリオは飛影を見て親しみを込めた声を上げた。ギンガは飛影に対して警戒するような仕草を見せていたが、スバル達の様子を見るとその空気をすぐに霧散させる。

「 飛影さん、き、来てくれたんですか・・・？」

ティアナがそちらへ駆け寄りながら、おずおずと尋ね返す。飛影は彼女の視線を受け止めるに、面白くなれりにそっぽを向いた。

「 勘違いするな。別に加勢しに来てやつたわけじゃない。上にいるヒカルやリーンが何かと喧しいのでな、不本意だがここにいるとい

うわけだ。貴様らは貴様らで勝手にやれ。オレも氣はすすまんし、いらん世話など焼かれたくはないだろ？からな」

「そ、そんなことないです！　おに　　、ひ、飛影さんがいてくれるなら、私も安心ですから・・・」

ティアナが少し声高に返す。その頬は少し赤く、なんだかそわそわした様子だ。飛影は彼女の態度に怪訝そうに眉を寄せたが、彼自身それほど興味も無かつたのだろう。エリオ達に呼ばれて今ある情報について話し始めていた。

スバルが目を半眼にしながら、親友をじりりと一瞥する。

「ティア・・・・・・やつぱり・・・・

「や、やつぱりって何よ！　飛影さんがいてくれたほうが頬もしいのはアンタも同じでしょ！？　ホ、ホラッ、ぶつくさ言つてないでとつとと動きなさい！」

赤い顔でわたわたしながら、ティアナは必要以上に声を張る。スバルはなおもジトツとした視線を宿すが、作戦中なのでそれ以上は自重したようだ。妹とその親友のやりとりを見て呆けていた姉のギンガだったが、はつとした様子で飛影に近寄り、敬礼をとる。

「も、申し遅れました。時空管理局地上108部隊所属、ギンガ・ナカジマ陸曹です。噂はかねがね、妹がお世話になつてます」

「妹・・・・成る程な。その姓と内　　・・・いや、顔立ちから察するに、貴様はスバルの姉か」

「は、はい。よろしくお願ひします、飛影さん」

若干緊張を含んだ声色でギンガが返答する。飛影は彼女を数秒かけて観察すると、後ろにいるスバルと見比べて息を吐いた。

「フツ、確かに面影がある・・・が、性格はまったく違うようだな。この突撃木馬とは似ても似つかん」

「ひ、ひどい！？ いくらなんでもあんまりですよ、飛影さん！ 私だつて、ちゃんと考えてから突撃してるんですからー。」

「あ、あのスバルさん。それじゃあどうにしちゃ変わらないような気が・・・」

ヒリオがもつともすきるシッ！」を提示した。全員からスバルへと憐れみの混じった視線が届けられる。ギンガは涙目で親友に縋りつく妹に頭痛を覚えながら、じほんと可愛らしく咳をした。

「・・・いろいろお話をお聞きしたいところですが、今は任務が先決です。まずは、この地下水路のどこかにあるレリックの確保を急ぎましょ。まずは大まかな方向からサーチしたいので、誰か探査魔法を「その必要はない」へ？」

仕切り直しを兼ねた声に待つたを掛けられ、ギンガは間の抜けた声を上げる。振り向くと、相変わらず仮面の飛影が周りをゆっくりと見渡していた。

言葉を遮られる結果となつたため、少し不満げな表情をするギンガ。しかし誰も口を挟まない様子から、表情を僅かにむつとする程度にとどめ、その黒い背中をじつと見つめる。

時間にして数秒。様々な方角に動かしていた飛影の視線が、ある一方角を向いて止まった。明らかに変わったその動きに、全員が注目する。その際、彼の額を覆った巻き布が一瞬赤く光った気がしたが、次に聞こえてきた彼の声でそんな疑問は一瞬で吹き飛ばされた。

「…………ここから六百メートルほど北西に進むと、それまでよりも大きくひらけた治水空間があるはずだ。そこいやや北寄りの一角、等間隔に別れた治水路の奥から十六番目の水路にケースが引っ掛かっている。おそらくそれで間違いないだろう」「うう

「わ、分かるんですか！？」

「まるで見えているみたい……まさかそんな力も……？」

「さっすが飛影さん！」

ギンガは当然として、ティアナやスバルまでもがすごい勢いで飛影を見た。瞬時に場所を特定したといつ彼の言葉と、えらく具体的な証言に相当驚いた様子である。尤も、彼の『眼』には実際に『視えている』のだから当然ではあるが。

「ふわあ……私のケリュケイオンのサーチャーだつて、そんな正確には分からぬのに……」

『Yes · It, s amazing(はい、驚きです)』

「兄さん、やつぱりす」……

キャロが自らのバイクと会話しながら感嘆の息を漏らした。エリオは相変わらず、彼を憧れに満ちた眼差しで見上げている。飛影はそんな彼女達の反応に鼻を鳴らしていた。

「フン。邪眼の力をナメるなよ」

「じゃが……？」

「あ、あー！ その話はまた今度するよ、ギン姉！」

スバルが姉の前でわたわたと手を振った。そのことに怪訝そうな表情をするギンガだが、突如キャロのケリュケイオンから響いた警告音に一瞬で気を引き締める。空間に映し出されたマップを見ると、赤い点として表示されたガジェットが群れを成して此方に近づいてくるのが映っていた。

「レリック狙いのガジェットがさっそく来たみたいだね……それじゃ、いつちょ迎撃と……って、え？ ひ、飛影さん、何処行くんですか！？」

「気合を入れるが如く腕をぐるぐる回していたスバルが、一人歩き出した飛影の背中に少し大きめに声をかけた。ティアナ達も驚いているが、ギンガ以外のメンバーはどこか予想できていたような顔つきだ。飛影は気だるそうな表情で僅かに振り向くと、淡々とした声を響かせながら言った。

「オレがこの先に行く。お前達はギンガ・ナカジマとランスターを中心に戻り立てる、レリックとやらの確保に向かえ」

「え……そ、そんな無茶なつ……ガジェットの反応は少な

くとも四十、その内十数機は大型の反応が出ているんですよ！？
一人で対処するのは危険すぎます！ 全員で行くべきです！」

ギンガが飛影の提案に慌てて横槍を入れた。それは管理局員として適切な対処だ。スバルやティアナなどから様々な武勇伝を聞いてるといえ、飛影の力を直接目にしたことがない彼女からすれば、彼の行動は自殺行為に他ならないからだ。事実、そのような単独行動や独断先行が原因で命を落とした魔導師も数多くいる。

だが、それを侮辱と取ったのだろうか、それとも他の要因か。ギンガの台詞に飛影は不機嫌そうに目を細める。ギンガに向けて視線を放ると、語氣を強めて言つた。

「オレに指図するんじゃない。足手纏いはいらんと言つているのが分からんのか？ 一度も言わせるな」

あんまりな物言いにギンガは言葉を失つた。そのなかで硬直した彼女に一睨みをくれ、飛影は通路から伸びる闇へと消えていく。その姿はすぐに闇に紛れて見えなくなつた。

「コートを纏つた後姿が消えると同時に、ギンガはハッと氣を取り戻す。そして、口元を真一文字に引き結ぶと、腕を組みながら眉を寄せた。

「もう一つ・・・何なのあの人、感じ悪いじゃない」

配慮の心遣いを思い切り突つ返され、ギンガが不満そうに唸つた。怒つてているというか、拗ねている様子は妹であるスバルと本当にそつくりである。その子供のような仕草については言及を避けつつ、ティアナ達は苦笑しながら彼女を見つめた。

「あはは、怒らないでギン姉。少し冷たいような感じもするけど、あれが飛影さんなりの優しさだから。私達が未熟なのは確かだし、付いていったらきっと余計な気を遣わせちゃう。飛影さんもそれがわかつてたから、ギン姉も含めて危険が及ばないようにしてくれたんだよ」

スバルが膨れつ面の姉の肩を叩きながら言った。飛影のあの態度は今に始まつたことではないし、あれが彼の持ち味だということはもはや日常となつてるので、他のメンバーも何も言わない。尤も真意はどうあれ、山ほどの大軍だらうと飛影がガジェット程度に討ち取られるとは微塵も思つていなかつてもあるが。

ギンガは全員に確認の視線を向け、最後にスバルを見やる。そして、一分の不安もない表情で笑う妹を見ていたが、これ以上こうしていても仕方がないと思つたらしい。含みがあることをありありと示すような息を吐いて、自らの拳を握り締めた。

「ふーん、随分と信頼してるのね・・・・・わかつたわ。スバルがそこまで言つんならそういうことにしどく。私たちは私たちで先を急ぎましょ」

そういうつてギンガは先頭に立つた。あからさまな否定はないが、「私、納得していなゐわよ?」という雰囲気を言葉の端々から醸し出しつつ、既に通路に背を向けている。ティアナ達は彼女に昔の自分達を重ねてふふつと笑いながら、再びレリック確保に向けて動き出した。

道を塞ぐガジェットを、残骸に変えながら五人と一匹は地下水路を進行する。数はそれなりにいるものの、飛影がその大部分を引き

受けてくれているためか、かなり軽快なペースで進んでいた。

そして、しばらく道なりに走り通し、目的の場所に到着する。そこは数百メートル四方にわたって柱がいくつも点在する、大きく開けた空間だった。スバル達は、飛影から教えてもらった辺りを中心にして、手分けしてレリックの探索を開始する。

そして数分後、

「ケースがありました！」

レリックケースは至極あつさりと見つかった。場所は集水路の奥。浅くなっている水路の一部に引っ掛けられて止まっていたのだ。

「ほ、本当にあつたわね・・・それも、彼が言つたような所と寸分違わない場所じゃない・・・」

ギンガの呆然とした声が水路に響く。そこは飛影が提示した条件がすべて重なっている場所だった。さらにケースの状態に至つても、言及した内容との相違は見受けられない。スバルが驚く姉に向かって、えつへんと胸を張つた。

「ね？ 飛影さんつてすごいでしょ、ギン姉つ！」

「なんでアンタが威張るのよ・・・」

鼻高々にするスバルに、半眼のティアナがいつもの如くツツ「ミを入れる。エリオはみつかったケースを数秒ほど見つめ、「僕も頑張らなくちゃ！」と気合を掛けていた。そして、このケースを持って撤収作業に移ろうとした、その時だった。

「 つ！ キヤロ、伏せなさい！」

突如の叫びを上げたのはティアナだつた。全員が驚いたように彼女の方を向き、キヤロはきょとんとしたまま動かない。ギリッと歯を噛み締めた彼女は、自分の言葉も言い終わらぬ間にクロスマリージュのカートリッジをローデし、何も無い中空に向かつて魔力弾を撃ち放つた。

放たれた弾丸の行方を全員が追う。そして、弾は空中で不自然な形に変形し、そのまま弾けた。何も無い場所で、『何か』にぶつかったかのように。

「 キヤ あつー？」

「 つぐ！ キヤロ、しつかり！」

爆風で飛ばされたキヤロをエリオが受け止める。同時に響く足音にギンガとスバルがはつとして気配を探るが、如何せん姿が見えないため、焦つたように周りを見やる。だがそんな中でも、クロスマリージュの銃口はブレることなく一点に向けられていた。

そして、怒声と共にその引鉄^{トリガー}は引かれる。

「 それで・・・隠れたつもりー？」

キヤロから十歩ほどの距離へと弾丸が吸い込まれていく。だが、真つ直ぐ飛んでいた魔法の光は突然弾かれるようにして軌道を変え、柱にぶつかって轟音を上げる。風が頬と髪を薙いだ。

「あつ！」

爆発でレリックケースが滑走した。キャロはそれを追う様に、手から投げ出されていったケースの元へと走る。だが、彼女の目の前でそれは何者かに拾われ、

「 邪魔

「う、ぐう・・・きやあああ！」

「キャロ、うわあああーー？」

正面から強烈な魔力砲撃を浴びせられた。相手はキャロやエリオと同い年ぐらいの少女だ。咄嗟にプロテクションを張るが、耐え切れず貫かれたキャロは吹き飛ばされ、彼女を受け止めようとしたエリオも、勢いを殺しきれず二人一緒に壁に打ち付けられる。

すると、空間の一角がぶれたように波打つた。熱を浴びたかのごとく景色が揺らめいた後、見計らっていたかのように消えていた『何か』が姿を現す。

現れたのは異形の者であった。黒い鎧を全身に纏い、直立不動で此方を見る人型の何か。だが、おそらく人ではない。体の横から僅かに見えた紫色の六枚の羽がそれを物語つていた。

スバルが駆け出し、声を上げる。

「うひ、その女の子！ それ危険なものなんだよ。触っちゃダメ、こつちに渡して！」

キャロからレリックケースを奪つた少女は、呼びかけに僅かに振

り返るも再び歩き出した。気にも留めない様子だ。だが、そのまま行かせるわけがない。

「・・・っー?」

「ごめんね、乱暴で。でもね、これホントに危ないものなのよ?」

幻術魔法で消えていたティアナが、ダガーモードの魔力刃を少女の喉元に突きつけた。少女は一瞬眉を顰めるが、すぐに真顔に戻つて目を閉じる。スバルはほつとしたように此方を見据えていた。

ティアナはそれを見ながら、ふうと溜息を吐く。

(スバル、みんな。今から私が言うことをよく聞いて。すぐ実行に移せる準備も忘れないように)

だが、聞こえてきたのは労わりの言葉ではなく、実に厳しい声色であった。予想外な態度であつたが、冗談で流せない雰囲気からスバル達一同は戸惑いながらも頷く。それを確認したティアナは彼女から銃を離し、

(目を瞑つて耳塞いで!)

目を閉じたまま上に向かつて引鉄を引いた。全員が言われるまにした瞬間、上方から光が進る。そして四半秒後、走つた光とティアナの魔力弾が正面から激突した。

爆風と凄まじい光の渦が空中で弾ける。衝撃に備えていなかつたスバル達は蹲るが、ティアナはそれに耐えた。どこからかぽとりといふ何かが落ちる音が聞こえる。そして、風と光が収まるのを待つ

てゆっくりと目を開けた。

「ここに至り、ティアナはようやく少し調子を軽くして肩の力を抜く。そのままよく通る声で一言付け加えた。

「さつきの続きをよ。これは飛影さんや蔵馬さんが言つてたことだけど、ついでに覚えておいて。『戦場にいる限りは、一瞬たりとも気を抜くな』つてことをね」

銃で黒い影を威嚇しつつ、視線を落としていく。そこには、驚愕に目を見開いた少女の傍に悲鳴を上げながら地面をのた打ち回る小さな人影が新たに降臨していた。

第一十六話 戦いの唄～相対する者達（後書き）

第一十六話でした。

よつやく原作とのクロスらしく、ティアナが才覚を發揮し始める所を書くことが出来たのでよかったです。これから彼女はどうなつていくのが、それは神（私です、ふははー）のみぞ知るところです。

すみません、調子に乗りました・・・久しぶりの更新だというのに、文章が少なくてすみません。

さて私の近況ですが、就職の準備も慌しくなり田の回のよつな忙しさです。おかしい・・・行事が終わつたんだからちよつとびりこ楽になつたつていいはずなのに・・・！

研修会ではいろいろなことを言われ、正月に会つた親戚のおじさんなんかも仕事上のアドバイスを語つてくれました。曰く、

『会社つていうのは入つて二、三年は研修期間みたいなもので、そこで使えるかどうかを判断する。そこで使えるやつは出世、使えないやつは遠くに左遷あるいはクビになる』

『それから、会社は煮え切らない態度とかこの仕事をやつておきますって言つておいて出来ませんでしたつていうのが一番困るから、請けた以上は何が何でもこなすこと。自分の能力では絶対出来ないと思うなら初めから請けるな。ただし、努力次第でできるようなら積極的にやれ。あと、仕事をこなすために必要なスキルや知識の習得は仕事をしてくる事にはならない。常日頃から努力して自分のも

『とにかくいつもの仕事を同時に請け負つたり見栄を張つて無理はしないこと。使えるものや人は何でも使って、自分で調べてもわからなかつたりこまつたことがあつたら疑問点を残さず上司や同僚に質問しろ。そうやって仕事を覚えていくんだ』

とのことでした。それで最近の若者は自分のことを優先したかつたりちょっと大変だつたりするとできませんつて平氣で言つからな、努力で出来る範囲なら仕事優先にしないとすぐクビにされる。会社に勤める以上趣味やよほどでなければ自分の都合など一の次、二の次だとも言つっていました。

お、鬼だ・・・とも思いましたね。けど、社会人ならそれが普通なんでしょう。そして分かれ道なんだと思います。仕事つていうのは思つた以上に大変なんだなあ・・・と世間の厳しさを知つたコーンマでありました。

ではではこのへんで。次はエースの方の小説更新が先になると思します。

それでは再見!
ツアイイツン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0197m/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 炎殺の邪眼師

2011年9月21日06時40分発行